三七全傳
第二編 占夢南柯後記 卷之五 〔後帙第一〕

東都 曲亭馬琴編次

附言

およそこの物がたりは。天文十九年に起て。同二十一年に盡。前後僅に三年を經たり。蓋前帙四卷に說と ころ。天文十九年冬十月六日。赤根半之進。父子夫婦。蟻松曾太郎等。浪速の法善寺に。考妣の菩提を弔ひ し事。敗鐵全介が義母晩稻が夢の事。孝子全介千日墓に施米を獲て。はじめて父の仇人を知る事。敗鐵四五六。 暗に全介をたすくること。蟻松曾太郎面を犯して。順勝を諫る事。赤根半之進君命を受て。米谷山へ赴く事。櫟 本の林原に。全介赤根半之進を埋伏する事。晩稻自殺して。はじめて素性を物がたる事。赤根半之進更に主君の 小刀を獲たる事。四五六全介夜米谷山なる木精塚を發事。順勝怒て半之進を欺らんとする事。半之進蟄居の 事。順勝曾太郎に命て。半七を池の中島へ謫す事。辨天堂に半七初花にあふこと。玉枕御前陽法を正して。陰に 半七初花を助る事。すべて十回。（池の中島の段を上下とせり 前帙四卷こゝに盡。）この編は笠松平作が事に起て。をさ〳〵半七 お花が顚末を說たり。今藏て二帙とするものは。例の書肆が所爲にこそ。

秋雨の笠松上

半七初花が事。その曉に曾太郎より消息して。密に半之進に告にければ。赤根が闔宅。更に一層の憂苦をませ

し。半之進が憤は。さらにもいはず。三勝はいとゞしく。苦しきうへに胸を苦しめ。わが子のことをおもひやるに。 玉枕御前慈悲深くおはしませば。半七初花は。密に命を助られ。池の小舟にうち乘られて。水門より脫れ出たりとか 聞けば。せめてものことにおぼえて。又慰るよしあるに似たれど。さし詰るは良人のうへなり。限らせ給ふ日數も。 きのふにて果たり。けふはいかなる仰やあらん。と問かたもなき物思ひに。眉根をひらく隙のなければ。置むとすれ ど。私卒炊女なんどのはや知りて。彼處に集會。こゝに團居て。主の陰事いふもうたてく。もたれ柱に身を倚かけ て。痞を楚と押てをり。浩處に。腰元に使はるゝ。女の子遽しく走り來て。園花さま夏山さまの。詣求給ひぬ。 と告にければ。三勝忽地頭を擡。こはこゝろ得ぬ。やうこそあらめ。まづ客房へ誘引てよ。といそがしたつれば。 應もあへず走り去程に。三勝は。笄取て。鬢搔拊て。帶を結びそへなどして。緣頰傳ひに客房の。障子引開つゝ 裏に入れば。園花は。八丈絹を京染にしたる袿衣に。白無垢の衣。二ツばかり下襲にして。いろ〳〵と摺箔したる襠 衣に。練の帽子を戴き。夏山は。おなじ絹の色異なるに。仁田山紬の緋裏衣したる袿衣に。白無垢の衣。二ツ歟三ツ 歟襲て。しゞらの練貫に。緋裏なる襠衣の下に。僅に三歲兒の平太郎が。熟睡せしを。搔抱けるが。共に帽子は素か り。從者ほ。後門の裏に憩をるとおぼしくて。庭の築垣に。あなたより立かけたる。挾箱の油單。垣より上に些し見 えたり。當下三勝は。園花夏山等に對ひて。迭に秋の冷やかなる安否を訊問。恙なきを祝しつゝ。さていふやう。家 公曩に殿の勘氣を。蒙らせ給ひてより畏みをれば。親族たりとも。訪ひ訪るゝ事をえせず。百日あまり中絕たるに。け ふはいかなることのありて。新婦御さへ伴ふて。俄頃にかくは訪せ給ふ。物詣のかへさにや。いと綺羅々々しき打扮 にて。來給ひけり。と憂事を。憂とはいはで。外々しく。詰る底意を推量る。園花は心にかゝれど。面りにはいひ も答ず。數ならねども家公の側室。平作が母に侍れば。かばかりの衣着たらんとて。驕れりとは誰かはいはん。もろ 共に籠居ぬ。世の務は疎しけれど。それも良人の志に。悖らじとての髮化粧。心苦しさを推し給ひね。特にけふは

限りある。日數も他に果たれど。寶刀の往方はしれざるにや。加旃昨夜の事。半七がこよなき悞しいだしたり。と藩中の風聞。人の口には戸も立られねど。開るよしなき良人の閉門。このうへに又いかなる。祟やあらんとうち歎けど。歎くのみなる女子のかひなさ。兒子平作は。いぬる月より瘧病にて。今に差ず。寒熱する病着には。何商議ん暇もなし。只夏山とさし對ひ。とやらんかくやと思ひつゝ。思ひかねたる物詣。かゝる時には殊更に。憑むは神德佛力と。春日の社へ月詣。させる驗はなけれども。家公なりおん身なり。恙なく坐する事。これも春日の擁護ならめ。來よとの使は給はらねど。半七が事聞ばなほ。君所の沙汰も心もとなく。賽を幸に。夏山侶て推懸客。物思はしき折なるに。心なしとな。挾し給ひそ。うち籠て坐する故か。顏の色も常ならず。半七はいかになりけん。辛く命を助りしは。玉枕御前の賜にて。哀のうちの歡び。と人もこそいへ姉御前の。靴を隔て癬を搔く。御こゝろの中推量れば。いと痛し。と半いはせず。三勝は眉根を顰め。喃園花どの。半七々々と名の隅の。圓くなるほど宣へど。彼も又良人の肉身。おん身が生ぬものなりとて。さのみ憎げに宣ふな。勿論半七が不義不孝。こはいはでもの事ながら。その水元はおん身が姪御。初花どのゝ淫奔に引こまれたるわか氣の愚さ。智者も勇者も色には迷ふ。狐が落ねばなかなかに。舊の人には得もならじ。いひ出しても給ふなと。些の事も氣にかけて。日來に似げなく角芽だつ。茨の刺を柳の糸に。無理を通してうち微笑み。姉さまの何宣ふやらん。吾儕はおん身の妹ならずや。しからば姪の半七を。生ぬものとて憎むべき。恨がありや。聞まほし。いな恨がある歟なきかはしらねど。妹にもせよ園花どの。おん身が兄公は二代の執柄。氏といひ祿といひ。大和に聞えし名家の末。吾儕はおん身が姉なりとも。父は盲目。この身は舞妓。賤しい母が氣を稟たる半七が淫奔を。笑ふとならば初花は。爹々に似ての淫奔か。叔母御に似ての淫奔か。おん身が心に問て見給へ。異父の姉妹でも。生涯まかする夫はひとつ。衰めに祟とやらん。日來の妬さを匿あへず。新嫁御前倡て被飾らせ。半七が事いひに來て。吾儕を夫に疎せて。おん身が母屋へ居らんとは。憑しい妹君。かゝる時には

殊更に。吾儕も心よう侍り。有べきは只妹にこそ。とあざみ笑ひつむかひ火を。燒つけられて園花も。忍ぶにえたへず面赧やかなる。襠衣の衣紋かきあはし。こゝろ得ぬ事宣ふかな。夫ほしさの僻事せば。少かりし時五六年。思ひほそりて病はせぬ。花あるときだに穢びたる。心は絕てなきものを。諺にいふ證文を。出し後れて四十あまり。齡も既に小動の。いそぎ近きに恥しげなく。夫娟執て何かはせん。兒孫の見るめも羞給はずや。姉なればとて理なきかずかず。妹にはいふもの歟。應いはでは。と膝立なほせば。園花も思はずに。小膝すゝむる傍いたさに。夏山は後方より。しば〳〵密と引母の袂も。只まろかれと思ふかひなく。揮放されて又携禁。母さまこれは怪からずや。腹たゝしき事ありとも。閉籠られて坐します。母屋へ來まして聲高に。諍ひ給ふは大人氣なし。儔罕なる胞姉妹の。賢女貞婦と譽られし。松の操を今さらに。易て迭に仂なく。顏に楓を見せ給はゞ。血で血を洗ふ世の譏り。影護と後に只。悔しくおぼす事もあらん。外伯母さまはいとゞしく。氣さへ心も結れ給へば。憎からぬ人を恨唧て。生常にはあらぬ物いひざまも。有べき事と聞ながし。慰てこそ邂逅に。訪せ給ひしかひもあれ。喃外伯母さま。眞の胞姉妹におはせばこそ。いふまじき事をも聞え。回答まじきよしをも回答て。うち腹たゝし給ふものから。それも隔ぬ誠は齊一。世にいふ親の泣聚。と思ひかへして許させ給へ。と勸解る健氣さ怜悧さを。こゝろに譽る園花と。背あはせの三勝は。見向もやらず冷笑ひ。母御ひとりではいひ負んかとて。加勢に來ませし新婦御寮。口狀はいと爽なり。吾儕も舌を卷てぞ侍る。半七と云號し。初花はおん身の姉御前。彼淫奔に似給はゞ。平作ひとりを得も守らじ。はゝう子もちになり給ひて。心憂こそ在らめ。と取も著れず嘲弄せられて。夏山は忽地に。貌に夕陽の映ながら。袖は涙の雨催ひ。又いふよしもなかりけり。論は無益と園花は。副帶引締立あがり。夏山何も宣ふな。いへばいふのみ狂女と問答。家公にあはで歸る。遺憾さは限りなけれど。とても報次ものはなし。瘧病する平作に。留守さしたれば心もとなし。誘たち給へ。といそがせど。なほ立かぬるをあらやかに。引ば忽地搖覺されて。よゝと嘆る平太郎を。袖に抱

締敲つけても。泣止ぬ子にせんすべなく。やうやくに身を起す。夏山よりも園花は。こゝろ母屋に遺れども。留りかぬし孫廂。縁頰の障子引開て。出んとすれば外面に。走りちがふ人音して。君所よりおん使さむらふ。と呼門ば。吐嗟とばかり三人が胸に。犇と答へ立止る。園花は今更に。歸るにもえかへられねば。夏山を見かへりつ。おん使ありと呼門聲を。聞てはいかで歸らるべき。今一時が家公の。生死定におはするぞ。此方へ來ませ。と豫より。案内したる夫の宿所。先へ立つゝ縁頰より。出居の形戸露ふかき。袖うち合す胸の中あくるもいとゞ侘しらに。納戸のかたへ身を避たり。

秋雨の笠松下

思ひ定めしことながら。三勝はいとゞしく。心も心なゝめなる。床の懸物引なほし。物いそがはしくとり納れば。半之進は衣裳を整。障子左右へ開かして。式臺まで出迎へ。今か〳〵。と待程に。庭門陜しと從者等が。舁入るゝ轎子を。敷筵の半まで。横さまにさし著れば。半之進夫婦禮儀正しく。轎子の戸を引あけつゝ。と見れば使者は別人ならず。赤根が二男平作なり。享年こゝに二十一。齡稚木の二代の笠松。身長高く相貌秀。色いと白く又蒼く。病中なれば月額は。熊毛のごとく。黒ければ。眼睛さへいかめしく。茶褐の肩衣長袴。轎子より先さし出す。刀を縁に。突立て揺ぎ出。彼首是首を佶と見て。うち絶候家尊大人。外母公も恙なくや坐する。親子の恩義はこれ私。瘧病にて籠居れども。君命脱るゝに所なく。おん使を奉て。笠松平作發向せり。やよ從者等。汝おの〳〵退て。門外に且くまて。とく〳〵といそがし立し。誘赤根ぬし。役命なれば上坐を。許し給へ。と刀引提。床間を背になして。居長高く無手と坐す。扇つかひも重くれし。殊なる氣色に三勝は。呆れ果てうち瞻り。君所よりおん使。といかめしく呼門を。何人ならんと思ひしに。此方の二郎の笠松どの。よしや君命なればとて。親を親とも思ひなしせぬ。虚物饒

は。麿病の。熱にや浮され給ひけん。といふを見かへる半之進。無禮なせそ。と推默らせて。恭々しく頭を低。けふの御使は豫より。心まちいたすといへども。閉居の折なれば設もせず。ありの隨なる管待も。乃守へ諢る質素。仰の趣うけ給はらん。とおそる〳〵席をすゝむれば。笠松扇を膝に衝たて。赤根半之進謹て承れ。汝いぬる二月十七日。米谷なる木精塚を發。風流士の大刀を。とり出すべきよしの。おん使をまうし請ながら。大刀は失たりと僞りて。これを進せず。前後二百日に近き光陰を。いたづらに送りしは。偏に主君を侮るに似たり。それのみならず。長男半七は。配所を脱出て。淫樂を事とせり。これ人たるものゝ所行ならんや。よりて件の白徒をば。柴浸の刑に行れ訖ぬ。併その罪父子の間にあり。此彼犯すところ輕きにあらねど。格外の慈愛をもて。今日切腹せしむる條。仰の趣件のごとしと。述もあへぬに三勝は。聞にも得堪ずはふり落る。涙にかすむ目を拭ひ。いと恨しげに平作を。つくづくと見て哽かへり。親の危窮を身にかへても。まうし宥るは子たるの道。さまで孝心あらずとも。父が頸刎おん使は。推辭とも推辭るべきに。撰擇まれしを身の幅に。病を推て親の宅を。踏荒しに來る氣剛もの。現逆さまの世なるかな。妹は姉を恥しめに。新婦と孫とを將てぞ來る。子は又親の死を促す。使に立て天をもおそれず。幼稚ときにはかくまでに。鬼々しとは思はざりしに。園花のみか。その子まで。心神天魔に奪れけん。使に立する君も君。形なき身は惜からねど。昔には似ぬ當家の成敗。伍子胥死して吳王滅び。苑增去て楚國傾く。世の常言も今更に。思ひやられて哀しや。と世を恨み。又身を墓なみ。一聲高く泣沈めば。平作はうち仰ぎて。呵々と冷笑ひ。あな口說たり故事來歷。直躬が身を代んとて。親を救ふて名を取りしは。廼魯聖の取ざる所。遠き漢土はとまれかくまれ。近く本朝保元の。むかしをいへば左典廐義朝々臣。父爲義を誅したる。勅命なれば是非に及ばず。賞は臣の求る所。罰は君の行ふ所。豈私をもて論ぜんや。この故に男子たるもの。家に在ては親に事。仕出ては祿に死す。忠孝兩ながら全くしがたし。よしなき怨言傍痛と。飽までに挾すれば。半之進莞爾と笑み。保元の順逆は。先哲既にこれを論

ず。上は兄弟牆に鬩ぎ。下は親子仇をなす。三綱紊れて人道立ず。わが君も又如此なり。使者の人體こゝろえがたし。全く主君のおん僻事。といはせもあへず眼を睜り。臣として君を挾せば。これを忠義といふべき歟。さる馬鹿もの〻主としらば。縛頸刎れぬ前に。袖を拂てなどて去ざる。言承せぬは命を惜むや。いな爭命を惜むべき。しからば仰を推辭るゝや。いな爭仰を推辭まうさん。推辭ずは切腹の。用意々々。といそがせば。半之進座を占て。泣沈みたる女房を。佶と見やりてやよ三勝。豫て覺期の上なるに。とり亂すは武士の妻に似ず。緣高の折敷肚斷刀。とくとくもて。と焦燥にぞ。是非もなみだをかき拭ひ。かき拂ひても沸かへる。引提の水も湯となれど。さむるに早き夢の世と。思へども又思ひかねて。やうやくに身を起し。國遠ければ有斯とも。お通陶五郎はいかでしるべき。せめて半七が宅にをらば。ちから草ともならましものを。たま〳〵後房に妹はをれど。良人の末期を外にして。面出しせぬは鬼歟蛇歟。わが腹貧さねど只ひとり。こゝらにをれども赤根どの〻。子といふのみなる讐敵。とてもかくても吾儕のみ。墓なく物をおもへとて。出雲の神や結びけん。今にはじめぬ惡緣の。糸の紊をいかにせん。と潸然として納戸のかたへ。去んとするを遣りも過さず。平作やつと聲をかけ。內室且く留り給へ。肚斷刀はこゝにあり。といひつゝ腰なる扇を取て。半之進に投與るを。膝へも落さず右手に受。扇を用て刀とは。と問ば平作膝すり寄せ。式作法によつて自殺を許さるゝは。眞の武士にあるべき事。縛頸刎たるべき。罪犯なれども當家の冢。廼一等を降されて。古例に任する扇腹。介錯は親子の好身。平作につかまつれ。と亦是君の命なりと。說示せば半之進は。扇をとりなほして嘆息し。その罪にあらずといへども。志を述るときは。君の非を諫るに似たり。實に諫言容られざるをしる故に。米谷山にて肚かき切り。君に曉らせ奉らん。と思ひしことも鶚の觜。齟齬ては今こゝに。死て益なき身の薄命。これまでなり。ともろ袒ぎ。扇を取て戴ば。するりと引拔く平作が。刄の光りに三勝は。覺期しつゝも忍れず。走りよれば笠松は。妨すな。と長袴の。裙蹴かへして寄つけねど。左手へ纏り。右手に攜るを。半之進見るに得堪ず。妻

の帶際引戾し。膝に押へて動せず。いざ介錯。と合掌すれば。健氣なり觀念あれ。と平作は。父が脊後に刀尖を。肩より閃りと突出し。又閃して引く刄を。とり直しつゝわが肚帶の。結目のあたりを弗と斷れば。はらりと釋る帶とともに。鮮血さつと濆り。大腸小腸長やかに。はふり出れば笠松は。しばしも得堪ず刄を捨て。臀居に撞と倒るゝ音に。佶と見かへる半之進は。なか〳〵にうちも騷がず。孩兒かふくも謀りしよ。汝こゝへ來つるはじめより。血色の常ならざる。ものいふ毎に呼吸繁きは。深痍負ぬとしりながら。そのせんやうを見つるなり。父に代て死んと思ふは。子の志なるべけれど。汝等は。笠松氏を冒せしかば。わが子にしてわが子にあらず。實父に孝を盡すとも。養家を斷は義にあらず。よしなきことをしてけり。と聰く察する言の葉も。今ぞ散ゆく子の爲に。愚愛の涙落かゝる。膝も放めば三勝は。慌忙き身を起し。平作を見て吐嗟とばかり。氣づよういひしも折易き。玳瑁の笄の落てこゝろも紊れ髮。長き別れになりける歟。と哽かへりつゝやうやくに。抱き起せば平作は。眼を睜て息を吻。爹々公外母御前假初ながら。心にあらぬ惡言を。さこそ憎しとおぼしけめ。なき身と豫て思へども。はじめより明白に。主君の內意はつげがたくて。親を罵り死を促せしは。實事ならねど五百生。口なきものに生れやせん。平作がけふの自殺は。全く養家を斷にあらず。只是君父の爲なりと。いふ毎に流れ出る。鮮血の上へうつ俯に。仆れんとするを三勝は。背より抱き留め。やよ平作どの。焦燥給はゞ危からん。いふことあらば聞もせん。且く心を鎭め給へ。虛言なりとはしらずして。鳥獸に比へつゝ。いひ罵りたる女子の淺はか。家公の子なるもの。かばかりの志なからんや。さがなかりけるわが口の。今はなか〳〵恥し。妹は何處にをることぞ。夏山御前はまだしらずや。親子夫婦一生の別れともなるべきに。といへば平作頭を擡。母にも妻にも豫より。覺期さして候に。今亦こゝに泣まつはれては。おのが黃泉の障となられん。只うち捨て置給へ。抑。此度父兄の厄難。いかにもして救ひ進らせん。と千々に心を苦めても。才淺ければ謀略なく。けふと暮し。翌とあかせば。はや限ある日數も盡たる。その夜兄公は濡衣の。なき名を立しも親をお

もふ。誠よりして皇天の。憐給へば辛くして。命に恙なしといへども。これも又父の罪をやまさん。所詮平作が命を捨て。父兄の罪を贖ん。と思へどもわが君に。見參かなはぬ麿病。とさまかうさま思ひかねて。母と妻とに趣意を告。親の歎と吾妹子が。涙を硯に揚流し。只ほつ〳〵と遺簡に。通宵筆を染たるが。八聲の鷄も亂れ啼。曉方に思ひもかけず。奉翰到來火急の召狀。病を忍びてそがまゝに。とく〳〵參れ。と仰の趣。こゝろ得がたく取るものを。取もあへず出仕せしに。君邊近く召よせられ。汝を呼事別義ならず。是より直に。半之進が宿所にいゆきて。父に迫腹切らせなば。笠松の家は恙なけん。否とまうさば汝も脫れず。罪の次第は此如々々。と仰うけ給はつて驚き入り。こゝにて死なば萬に一ツ。父を救ふに至るべし。と思ひ決て些とも騷ず。主命には候へども。上天子より庶人まで。孝をもて國を治め。家をとゝのへ身を修るに。親に詰腹切せよ。と子に仰するはこゝろ得ず。且半之進元來罪なし。忠臣を不忠として。その子に討し給はんには。續井家の斷絶は。更に踵をめぐらすべからず。只願くは平作が。命をめされて父と兄が。罪なき罪を許させ給へ。君のほとりを穢し奉らんは憚あれど。事急なればかへり見せず。まうさんよしは只これのみに候。と回答も果す。懷劔を引拔て。左手の肚へ突立ればう。いぬる頃。われ米谷の妖氣を見て。武をもて是を鎭んと思ひしかば。風流士の大刀をとり出すべきよしを。老臣どもに說示せば。曾太郎はいたく諫め。半之進は諫めず。わが血を犯せし刀を乞て。米谷へ赴きしは。彼もの彼處に自殺して。主を諫んと思へるよし。曩に半之進が悞て。とり遣したる一封の。遺書によつてはじめて知覺し。風流士の事は思ひ絕たれども。故なくして半之進を許すときは。家法これより紊れやせん。かくいへば順勝が。身の非を飾るに似たれども。臣として拜に勝を。いかで赤根が本意とせん。且くこれを推籠おさて。又せんすべもあるべきに。と思ひしが。わが底意をばしらずして。半之進は世を憤り。もし自害することもや。と思ひ過して半七を。池の中

島へ捕おきしは。恩愛の絆を被て。半之進が自殺を禁ん。爲なりけるに思ひきや。半七は又親を。思ふあまりに法を犯せば。罪科脫れがたしといへども。玉枕がかひ〳〵しくて。彼等夫婦を延したり。しかるに限れる日數も果。新に半七がぬれ衣の。なき名さへ立たれば。今更に半之進を。免すには免されず。さればとていつまでか。罪なきものを屈おくべき。病着に臥たりとは聞しかど。赤根が二男。平作を竊に召て。わが思ふ旨をその父に。告させばやとて俄頃に召よせ。言を設て試たるに。親の危窮とこゝろ得て。わが面りに肚かき切る。孝心勇敢儔少し。惜むに堪たる壯佼なれども。その涙痍では助りかたけん。しかはあれど。早りて狗死すと思ふな。汝父に代て死するをもて。一旦いひつるわが意も達。半之進半七が罪免すべき道を得たり。せめてそのまゝ苦痛を忍びて。實父の宿所へすぐさに赴き。潛やかにわが意を傳へ。親子夫婦一生の辭別をもせよかし。と叮嚀に仰下されて。几帳に被られたる練を。みづから取て平作が。痍口を結せ給ひ。感涙數行に及び給へば。君恩忽地身に溢れて。まうすべき言葉もなく。只伏拜み。伏拜み。涙にかきくれやうやくに。遠侍まですべり出。病ひ再發と披露して。心利たる私卒某甲を招よし。竊に事の趣を母と妻とに告させつ。病中の使者なれば。轎て轎子を許れて。親の家には來にけれど。主君の恩命を他人に。しらせじと思ふが故に。明白には演も傳へず。親に對ひて法外なる。擧動をはや曉りて。君命を重んじ給ひし。寔に父は父なりけり。往方しれざる兄半七。周防なる姉弟へ。便もあらば平作が。今果の一句傳へてたべ。とりわき憑み進らするは。母のうへ妻の事。僅に三歲なる平太郎を。外母御前孫と爲して。生有後に笠松の。家をつがして給はれ。といふよしもはや秋蟬の。聲かはりゆく歎きの森に。三勝は應ん。と思へど胸の裂るが如く。轉つ輾つ泣叫べば。奧にもよゝと聲立て。泣園花に夏山が。抱る兒も友音して。親子三人輾び出。左に右に携れども。禁あへぬは無常の風。消なんとするわが子の貌を。見果も得せず園花は。身を浮ぬべき袖の雨。笠ほしげなる笠松を。萬歲とまで言祝て。育て今玆は廿一。初孫はやく擧ても。まだ一幅の附紐も。まはり合せがわろければ。結句短き親子

の縁。自殺のよしをしらせしより。新婦も吾儕も諸共に。生たる心持せざれども。只臨終にあはゞやと。思ふ心を鬼にして。孫携て來ては來ても。端なく出なといひこしたれば。亮隔一重を生死の境。もの苦しげに宣ふを。聞て居る母女房は。共に双に腸を。斷るゝよりなほ苦しさの。やるかたいかで侍るべき。姉君には三人の子あり。吾儕過世のよからねばや。只ひとりなる男兒の。武藝文道孝心まで。人なみに勝れても。亦人なみに勝れたる。夭折しては何かはせん。その身一世の孝行を。けふ一日に盡すか。と返らぬことをかへすがへす。口說つゝ咳入れば。背捺らんと思へども。ちからだになき夏山は。母も痛しわが身はつらし。姉さまには先だちて。はやく夫に見えても。四年限りの片鶉。翌は手向の草の原。露おく袖と喞んより。共に死して給はれと。良人のほとりにおとしたる。双をとらんとしたりしかば。三勝園花傍より。抱き禁つゝ引退て。死んと思ふは理りなれど。乳だに離れぬ平太郎。せめて母親あらんには。成長までいかばかり。身の幅廣く思ふべし。死ぬるのみ貞女といはんや。絶なんとする夫の。臨終正念ずゝめつゝ。後の世弔ふこそ貞女なれ。といひは諭せど母も外母も。涙にわかぬ歎きの數々。喃園花どの。襁にはいとも口さがなく。いひ罵りしに腹もたちけん。かくあるべしとしらぬ身の。とても脫れぬ良人の運命。しからばわらはも共に自殺して。赤根の家はけふより絶なん。妹は側室といひながら。笠松の家にをれば。平作夫婦この兒まで。緣坐の尤あらせじと。思ふてこれまで爭はぬ。妹といへど義理ある人へ。無理をならべし惡言は。しばしもこゝに置とも なさ。かうなるとしるならば。よし歸らんと宣ふとも。引も留ておくべきに。夏山どのもいといたう。腹たゝしくぞ ありつらん。さても面なし許してよ。と勸解る姉より。勸解らるゝ妹と姪はなほ面ぶせ。物體なきこと宣ふな。妹に隔意のあるべき歟。はじめよりかう〳〵と。告まゐらすべきことながら。主君の內意平作が。忠孝を他にせじと。思ひしのみの買詞。心になかけ給ひそ。といひ慰つ慰られても。慰かねし哀別離苦。三歲兒も蚓がしらせてや。母の膝より退下りて。只片息なる父の顏を。さし覗ては爹と呼び。又覗ては發阿、といふ。是はや親と子の齟齬。あは

せ了としりてかと。おの〳〵目と目注しつゝ。わつと哭ばわつと泣く。平太郎が聲に平作は。色やゝ變る眼を開き。母御はさらなり夏山も。武士の女兒に似げなき愁傷。昨夜通宵泣あかしても。なほ泣足らずや聞くもうたてし。やよ家尊大人。今日より閉居開門の赦免狀。頂戴あれ。と刀の下緒に。結び著しを差出す。半之進はこのときまで。手を攴き眼を閉。默然として居たりしが。免狀と聞て形を改め。双の手に押戴きつゝ。うち開きて讀くだち。微臣が孤忠空しからず。主君傲慢の御こゝろをひるがへし給へば。災害消滅續井家は。ます〳〵繁昌し給はん歟。これ併平作が。忠孝の致す所。わが子ながら竹帛に。とゞめて永く功を賞せん。適奇特と押開き。あふぐ扇も言葉の要。それうけ給はつて安堵たり。これまでなり。と取あぐる。双に携る母女房。三勝も諸共に。竭る露命は是非もなし。われから親に先だつとて。何かはいそぐ事のあるべき。哺園花どの。同胞四人遠離をれば。半七がうへはさらなり。お通陶五郎等が後に聞ば。さぞな遺憾からめ。現宣はする事なりかし。半七はきのふ出て。いまだ遠くもゆかざめれど。召かへさんには往方しれず。周防といへば西稍盡處。百里とやらん二百里とやらん。ありとし聞けば飛鳥の。翅借りても速の間に。ふみもかよはで思ひやる。西の天こそ戀しけれ。周防戀しや。山口へ。音耗したや。築山の。御所より人の來よかしと。とゞかぬ末も遥かなる。天も歎の霧雨に。簑笠したる大男子。折戸口より走り來つ。半之進を佶と見て。注進ざふ。と呼はる聲と。共に簑笠搔擲捨れば。下には腹卷篠小手髓當。緣頰ちかく身をよせつゝ頻に喘て吻とつく。息は肩より搖出す。長途の勞れと見てければ。半之進は忙しく。淨手鉢なる柄杓を取て。溫湯にしばし咽喉を澤させ。めづらしきかな。槐姬に册きて。周防山口へ赴しより。はや四五年に及べども。面會するによしなかりし。炊粟邯太郎。注進とは心もとなし。火急の大事歟。いかに〳〵。と緣より小膝すゝむれば。さん候〳〵。言一朝には盡ずといへども。その本末を告申さん。抑陶權頭晴賢は。大內の權柄なるに。その威をさ〳〵主君を凌ぐ。されば老臣。杉。石田。鷲津。坂良目。宮。三吉。杉原。日高に至るまで。その威におそれて比周せり。しかるにい

ぬる二月のすゑ。築山の御所に於て。寶劍を拾るものあり。義隆これを 臠 するに。續井殿より贈られし風流女の大刀に似たり。是なん豫て聞及ぶ。風流士の大刀にはあらぬ歟。大和より飛び來つて。わが家寶とならんには。未曾有の吉事なりとて。曩に晴賢に給はりし。風流女の一刀を。召進べし。と仰するに。晴賢つや〳〵從はず。却件の寶劍をも賜るべし。と乞しかば。義隆大きに怒らせ給ひて。陶を誅せんとおぼせども。冷泉治部が諫によつて。且く猶豫し給ひしが。なほ憤に堪給はず。いかにもして晴賢に。自滅させんと謀らせ給ひて。尼子退治の大將に。卽陶をさし向られ。心腹の近臣たる。江良丹後を後陣として。中に挾て討とれとて。謀を授らる。しかるに江良はいひがひなく。心かはりて晴賢に。如此々々なりと告しかば。晴賢大きに驚き怒り。その義ならば立地に。思ひしらしまゐらせんとて。富田の稚山に屯しつ。軍兵を聚れば。時を移さず安穩彌五郎。大宰小貳千壽丸。赤月三角をはじめとして。同意の軍勢三千餘騎。忽地に著到せり。頃は八月廿八日。義隆かくとはしろし召さず。茸狩さして慰まんとて。瀧の法泉寺に。三日三夜御座を移され。遊山の興を催さる。浩處に晴賢は。わが軍兵等が出立を。義隆に見せまゐらする。と披露して。廿九日の曉方に。法泉寺へ推よせて。鬨を咄とつくりつゝ。總門よりぞ亂れ入る。義隆主從五十餘人。思ひかけざることなれば。脫れぬ所と殺て出。込入る寄手の賊兵を。或は射落し。突伏薙伏。瞬間に。三十餘人を擊とれども。敵大勢なれば物ともせず。雁野彈正。鷲津入道。新手を入かへ息をも繼せず。四方より火を放て。嚱叫で攻入たり。されば宿直の近習には。冷泉隆豐。天野德內。三浦。戶井田。仁保。石田。命を際と禦と射盡。引組では刺ちがへ。おもひ〳〵に討死す。その際に義隆朝臣は。廣緣に走り出。半弓とつて敵を拄。矢種も既に盡しかば。小薙刀もてかけ散し。自身に防戰時をうつして。今はかうとおぼせしかば。客殿に走り入て。心しづかに腹かき切り。

みよや立。けふりも雲も。なかそらに。さそひし風の。跡も殘らず（日記には冷泉隆豐が歌は宮町殿）

と詠じつゝ。猛火の中に飛入て。荼毘の煙となり給ひぬ。と語もあへず。聞も果ず。こは〳〵いかに。と三勝園花。目と目を注する夏山も。平作も耳を傾け。おの〳〵齊く驚けば。半之進膝立直し。陶が反逆是非に及ず。義甚朝臣と槐姬は。恙なくや坐す。いかに。と問れて炊粟。いと面なげに額を拊。されば中將義基朝臣は。築山の御所におはせしかば。晴賢やがて御所へ推よせ。迫腹切らせ奉る。痛しきかな姬の御養父。持明院の一忍軒も。陶阿波に擊れ給ひつ。凡防長豐筑の四箇國。みな晴賢に屬したがへば。天地反覆時節到來。しかれども槐姬は貴殿の息女お通どのと。仙野呂東二に冊れ。後門より落給ひし。と慥に聞けど往方をしらず。主の先途にえあはぬ某。何を面目にか存命べき。單身なりとも。賊軍の中に走り入り。きり死に死ばや。と思ひしが。縱賊兵二騎三騎。擊とつて死するとも。九牛が一毛なり。大和へ注進なさばや。と思ひかへして百四十里を。僅五日に走のぼり。いふべき事はいひ果たり。身の懈のまうし譯には。かくのごとし。と腰の刀を。肚へつき立て引繞らし。庭の井筒へ跳入り。やがて空しくなりしかば。半之進は今更に。これを憐み彼をおもふに。聞捨られぬ主家の大事。天うち仰ぎて歎息し。いぬる如月米谷なる。木精塚鳴動して。一條の妖火。西を投て飛去りしと。獵夫等が告訴たる。いと〳〵心にかゝりしが。原來彼風流士の大刀。周防山口へ飛來て。大內家の仇となれる歟。大和にあるべき禍の。遂に彼處へ移轉りしも。時なるかな命なるかな。こゝにます〳〵親實が。卜筮神の如きをしる。奇なり。奇なり。と嘆賞すれば。三勝塞る胸かき拊。女流ながら雄々しきお通。姬君のおん供して。一旦城を延るとも。往さきはみな敵ならん。加旃陶五郎が父にや屬けん。主にや屬けん。緯の容子を聞まほし。といとゞ子ゆゑに苦しき胸を。園花さこそと推量り。せめて半七が彼處に在歟。しからずは厚倉ぬしの。けふまでも存命給はじ。かゝる紛紊の 緡 を。釋よしも又あるべき物を。と悔ば悔しき夏山は。思ふにおもひ絕がたき。わが所夫のみか時も齊しく。兄弟四人もろ共に。一世の厄難生死の際。此身につみて親と親の。御こゝろおもひやらるゝと。喞がましき女子どち。身の程ほどに歎くにぞ。半之進突と

身を起し。益なき言に時な移しそ。主君の勘氣免たれば。直に君所へ出仕して。事の趣告申さん。三勝は衣服をもて來よ。物共やある供だての。用意せよ。と呼はる折から。注進ざふ。と呼門て。走來るものはこれも又。槐姫に傳られたる。仙野呂東二道德なり。半之進これを見て。陶が反逆。義隆御父子に事あるよしは。炊粟が注進によりてはや聞ぬ。槐姫のうへ心もとなし。とく述給へ。といそがせば。呂東二息を吻とつき。官爵高き鶴の峯。大内殿の榮花の夢も。老臣陶が謀反に覺て。築山の御所。灰燼となりしかば。一忍軒の入道まで。はや擊れ給へども。槐姫をばお通どのと。某これを册きまゐらせ。一方の圍みを伐ひらき。辛くして。小俣の鄕のあなたなる。澤川のほとり迄。延し進らせたりけるに。賊軍隙なく追蒐來て。搦捕んと競ひて懸。こゝに某かへしあはして。且く防ぎ戰ふ程に。遂に姫君の往方をしらず。こは淺ましと周章し。もし大和路をこゝろさし給ふこともや。と思ひしかば。漫におん迹を慕ひつゝ。來るともしらず一晝夜に。二三十里宛走のぼりて。今故鄕へ來にけれど。なほおん往方をしるよしなし。顧ふに姫は囚れ給ふか。然なくば擊れ給ひけん。いづれの時を期せんとて。面なき浮世に存命べき。ゆるし給へ。といひも果ず。やがて刄を拔かけて。自殺せんとしたりしかば。半之進急に推禁め。嚮に炊粟邯太郎が。言下に命を隕たる。潔きに似たれども。眞忠臣の所行にあらず。恥を忍び。身を保。こゝより直に引かへして。播磨美作。前後備州。姫の先途を見究て。後日の忠義肝要ならんと。說諭せば呂東二は。今東死ぬるにえ死なれず。とおもひかへして刄を收め。いざさらば引かへして。再て安否を告申さん。爾とばかりいひかけて。走去るを半之進は。且くと呼びとゞめ。事急なるに貴殿の腰間。路費の用意心もとなし。餞別せん。と床間なる。鎧櫃の蓋うち開きて。投興たる包銀。厚志謝するに堪たり。と推戴つゝ呂東二は。背をも不見て禹步に。折戸を出てはや失たり。今果なりける平作は。絆の容子に氣を激し。わが父出仕し給ふとも。弟陶五郎は逆臣たる。晴賢が養子なれば。わが君心をおき給はん歟。不覺に出仕は危からん。といへば赤眼はうち點頭。故が異見その理あり。しかれども陶五郎は。養父が

野心を識ぞしりぬ。君を弑する親には與せじ。かゝる大事を人傳に。申さんは不忠なり。とく〳〵出仕の供立せよ。と焦燥ば。涙を禁て三勝が。背より被する肩衣も。晴れぬ思ひの晴小袖。見立る園花夏山は。痍負の爲に經帷子。父は君所へ。子は死出の旅。迷はじものを三勝は。歎いやます周防なる。女兒と季子を呼子鳥。おぼつかなくも出てゆく。主人を送る奧と門。從者ならぶ鎗挾箱。奴隷がなほす中拔襷の。草履穿だに遽しく。續け。〳〵。といふ聲を。ひく潮どきか平作が。撲地と沒る死骸の上に。身を投ふして園花と。夏山がわつと泣く。これやわが子の終焉ならん。と思へども亦見かへるに遑なげきを背後にして半之進は喘々。君所を投て走去ぬ。

三七全傳第二編 占夢南柯後記 卷之五 終

三七全傳
第三編 占夢南柯後記 卷之六 〔後帙第二〕

東都 曲亭馬琴編次

羈旅の新關

半七初花はその夜さり。玉枕御前のおん慈みによりて。辛く命を助られ。水門より脫出たれども。親の事のみいといたう。心にはかゝるものから。主君の采地に潛りをらんは。守を恐れ奉らざるに似たり。直に大和を立退てこそ。ともかくもせめと思ひて。城外には留らず。軈て初花を扶掖つゝ。浪速を投て。通宵走る程に。次の日の熏昏に。彼津にいゆきて旅宿をもとめ。こゝに五七日逗留して。平城の爲體を聞定むるに。弟笠松平作が自殺して。父の罪を勸解まうせしかば。半之進はやうやくに。主の勘當を免されたるよし。仄には聞えにけれど。平作が今果につげたる。主君順勝の內意をば。人のしるよしもあらねば。半七もいかで。これをば傳聞べき。されど父が閉居慰免の沙汰は一定なれば。これのみ歡ぶに堪たりといへども。只悼べきは。平作が枉死なり。彼にはいはけなき子さへあれば。母御のなげきいふもさらなり。夏山がこゝろの中いかにあるらん。と思ひやるに。半七夫婦は今更に。わが身の秋は物かは。と更に歎の數そひて。慰かねしゆく末も。まだ頃日の旅ながら。故鄕のそらなつかしく。夫婦額をつきあはし。この事彼事うち相譚つゝ。さて半七がいふやう。限ある路費をもて。限なき旅寢せば。終に飢渴に苦みて。市人の袖につき。縣居の門にたち。主親の名さへ汚す事もありなん。われは平作が兄ながら。志いたく劣たれば。身を殺して親の罪を。贖ふ事を得せず。さればとて。浮たる水の月に愛。仇なる宿の花は拈ねど。運命の係る所。

歟。われから色情の奴となりて。八海の御池に浮名をながし。阿容々々と存命るを。二親傳も聞給はゞ。憎でも憎からず。いひがひなしと思ひ給はん。しかりとも玉枕御前の。叮嚀に諭させ給ひし事もあれば。故なくて捐る命にあらず。只身を碎き骨を粉にしても。風流士の寶刀を索出し。これを主君にたてまつりて。身の悞を勸解まうさば。この世ながらに主親の。笑顏見奉る時もあるべし。われおもふに。いぬる如月米谷なる。木精塚の崩たるころ。有一夕一條の妖火。西を投て飛失たり。と風聲ありき。こは全く彼寶刀の。塚より出て西國へ飛去たるにやあらんずらん。むかし吳王の寶劒。おのずから飛去て。楚國へいゆきしとか。漢土の書には見えたり。西としいへば果もなけれど。陰の大刀風流女は。いま見に。大內家の老臣。陶晴賢が家にあれば。飛去たるが一定ならば。風流士は。かならず彼地に赴きたるなるべし。きのふ街に出て賣卜に問せしに。わが思ふ所に違はず。こゝより直に周防に赴き。密々に彼寶刀を索なん。とは思へども。陶は弟が養父なり。又大內殿は主君の緣者にておはしますに。いまこのざまにて。明白には參りがたく。外には憑む樹下もなし。おん身は何と思ひ給ふ。と問ば。初花且く尋思して。わらはが爹々の宣はせしこと侍り。昔年風流士の寶刀を拭とて。悞て刄を毀。こよなき面目を失ひて。遂に華洛を逐電せし。刀冶同樹といふものゝ妻は。わらはが爹々の實母の爲には。親族にて侍りしとぞ。かくて同樹は。周防國に赴きて。何がしの鄕にあり。と聞たることの侍りしが。こなたよりも。彼處よりも。音耗したることは侍らず。かゝれば今なほ存命て。ありやなきやはしらねども。たづね行て名告をせば。舊き好を他にして。いかで强面もてなすべき。思ひたち給へかし。と回答すれば。半七聞てふかく歡び。こは微妙も心つかせ給ふものかな。われも彼同樹が事は聞つ。彼が華洛にありし日は。われも御身も。いまだ生れざるころなるべければ。世にありなしは覺つかなけれど。當時外祖父典膳ぬしに。再生の恩を禀たるものなり。と聞ば。よしやその子。その孫の世なり共。無下にしらずとはいふべからず。今風流士の寶刀を索んに。刀冶に身を倚なば。おのづから便宜を得なん。誘給へ。一ト日もはやく彼地へ赴くべしと

て。夫婦しめやかに商議つゝ。次の日浪華の客店を出て。和泉の境までゆく程に。往返人。みな足を空にして走る形勢。現事ありと見えしかば。半七初花は。道次なる。市店に立よりて。そのやうを問つ。この日はじめて。陶が弑逆の事を聞くに。義隆御父子はさらなり。持明院入道一忍軒をはじめ奉り。忠義の志あるものは。悉陶晴賢が爲に擊れ。防長豐筑の四ケ國ははや陶が横領しつるよし。風聞かくれなかりしかば。半七夫婦大きに驚き。義隆義基擊れ給はゞ。槐姫も。いかで安泰に坐すべき。よしや婦人の事なりとて。賊手を脫れ給ふとも。路頭に沈落し給ふならん。姉御はいかになり給ひし。弟陶五郎は。養父に與して。君を弑するものなり。とは思はねど。これも又心もとなし。さらば夜を日に繼ても。彼地へ走くだり。槐姫の先途を救ひ奉らずば。いづれの日にか忠義を竭さん。と。く走給へとて。半七は只管に。初花を扶掖て。心ばかりは焦燥ども。途遙なる旅なれば。女子の歩のかひなくて。十月の上旬。辛くして備後の安藝の封境なる。三原の鄕に來にけり。こゝよりゆく前は。みな陶が猛威に屬從とか聞えて。沼多の本鄕に新關を居。貴賤をいはず。凡男子たるもの。陶が郎黨より遞おく。關防牌面なくては。山口の采地へ入ることを許されず。僅に尼法師は。その沙汰を脫れ。女子の五十以上のものは。入るを許して。出るを許さず。こゝより周防の山口へ。五日路に足らねども。半七夫婦は。關のこなたに抑留せられて。いかにともせんすべなし。女子はさる木契なくとも。容易關を越らるゝといへど。三里か五里の程ならぬに。ひとり初花を先たゝして。山口へ遣し。在や亡やも定かならぬ。刀冶同樹を訪せがたければ。半七は心にもあらで。沼多の本鄕に旅寢をかさね。たゞ關の戸の開をのみ。今か〳〵。とまつ程に。今茲はこゝにむなしく暮して。天文二十一年になりつ。世は春ながら旅にしあれば。憂を慰かたもなく。こゝろます〳〵焦燥ながら。後へ立かへりても。何國へゆくべき。さりともと思かへして。こゝにあること六ケ月に及びて。春も彌生の中旬になりつ。はじめより。よろず費を省たればこそ。玉枕御前の賜したる。十枚の白銀をもて路費とし。けふまで一よさも露宿をせず。一チ日も餓たる事はなけれ

ど。これすら殘りすくなになりぬ。今十日もかくてあらば。乞食する外にすべあらじ。と思へば。心ほそさいふばかりなし。あまりに思ひかねて。有一日半七は。初花を伴ひつゝ街頭へ出。この關いづれの日にか開べき。と人毎に問ば。この月の下旬にはひらかるべしといふもあり。或は何の日とか定むべき。今茲はかくてありなんといふ。浩處に。寢疱の痕かとおぼしくて。その顏いたく爛れあざれたる女僧。劵緣の爲に乞食するにやあらん。背には網代の笈を負ひ。口には彌陀の御名を唱。頻に錫杖をつき鳴らしつゝ。三原のかたより來にけり。そが後方に。これもおなじさまなる女僧の。顏は前なるよりなほ醜くなりたる。いかなる過世にて。かくは疱瘡神に憎れたらんと怪くて。生憎に人も見かへる可なるが。笈の上には三歲か四歲ばかりなる雅兒をかき乘せつゝ。共に念佛して。關のかたへゆく程に。しば〳〵半七夫婦を見かへりて。前なる女僧に走りつき。何事やらん私語めり。半七は今この兩人の女僧を見て。初花にいふやう。去年の秋。浪速に旅寢したるころ。法善寺なる千日墓へ詣て。祖父へ手向をもすべく。弟平作が菩提を修んと思ひつゝ。只管に。心いそがはしき折なりしかば。やがてこゝまで來たれども。佛の道にはなほ疎かり。今はおほかた路費も竭て。物がましき好事こそえならね。彼尼達を呼びかへして。布施せばやゝ。といへば初花答て。わらはもしかおもひ侍り。とく追留め給へかしといふに。半七は遽しく。二反ばかり走り出て。こや〳〵と招かへし。腰に着たる錢一緡を。件の女僧に取らし。去年の九月三日に身まかりたるものあり。それが爲に。回向してたべといへば。兩人の女僧心得て。もろともに錫揮鳴らしつゝ。彌陀經一篇を誦訖り。さて半七夫婦にいふやう。見奉れば。いとわかきに。はやく菩提の道に志給ふ事。いとありがたく侍れ。こゝらの人とは見え給はぬに。何處にか坐すると問。半七聞て。現宣する如く。去年の九月速浪より。俄頃に思ひたつことありて。周防の山口へ赴くものなるが。こゝの新關に抑留せられて。いたづらに春を迎へ。路費も今は竭んとすれども。ゆくべきかたへ得もゆかず。おもふに尼御前たちは。常にこの關を越給ふなるべし。倘關防版面なんどいふ物を齎し給はずや。錢に代て給はらば。

夫婦が薄き旅衣を。沽却ても買取るべし。人を救へば卽佛。慈悲は菩提の本なるに。と初花もろとも掌を合して。理なく憑む樹の下に。涙の雨はまづ漏りて。外の點滴に墨染の。そでぬらしつゝ兩人の女僧は。うち點頭のみ應せず。且して先道の女僧目を拭ひ。寔に長き旅のそらにて。路費の竭たるばかり。すべなきものはあらじ。特に婦女子を携給へば。一トしほ痛しく思ひ侍るかし。しかれども。人に貸べき牌兒はもたず。この關四月のはじめに至らば。必定開とこそ聞て侍るに。今しばし待せ給へかし。と信やかに慰れば。夫婦はいよ〳〵望を失ひ。又いふよしもなかりしが。半七惱める額を拊。宣ふ所さることながら。女子を携て。かく旅路に呻吟へば。仇なる色に跡を埋め。遠く走るものならん。と思はれんは心にず。これなる女子はわが妻なるが。主の爲親の爲に。物を索てはる〳〵と。周防へ赴んとするに。彼地の擾亂に便なくも。百七八十日を空しく暮せば。こゝにあること一千日たりとも。千とせの秋を經るが如し。明白には告がたき。心苦しさを猜し給ひて。善巧方便有ならば。かなはぬまでもこの關を。うちも越さして給はれ。と只管憑聞ゆれば。先達の女僧且く沈吟し。よすがなく在するよし。精う聞ばいよゝ痛し。貸べき牌兒はなけれども。こゝに一條の方便侍り。見らるゝごとく。この同宿が負たるは男兒なれば。幼稚けれども その員にて。村長に申し請たる。關防牌面一枚あり。うち歎るゝが默止がたければ。をさなきものをば。笈の中に躲し入れ。ともかくもこしらへて。此關をば越さすべけれ。おん身も關だに越給はゞ。關防牌面を返し給ひね。やよ坊よ。人を救ふは出家の行狀。おん身こゝろ苦しくとも。且く笈の中に入れて。關のあなたへ過るまで。泣もすな。音をもたてな。よくこゝろ得よ。と敎諭して。軈て稚兒を抱きおろしつゝ。おのが笈の中へ躲し。さて頭陀囊より一枚の牌兒を出して。これを半七に遞與し。吾儕は沼多川の東村に。かすけき草庵を締て。毎日に三原吉浦の縣へ出て。乞食し侍るものなり。沼多村の南なる。拈華庵と索給はゞ。かくれあらじといふに。半七初花は感涙を拭ひあへず。寔にけふの慈悲菩根は。なき身の後もいかで忘れん。關だに過り候はゞ。牌兒を返し進らすべけれと。夫婦篤と

ろこびを。述天へも升る心持して。欣悅面に見たり。先達の女僧これを見て。もろ共にうち微笑み。擲には周防の山口へとか聞え給ひしが。山口とのみ索ては。廣き城下なるに。容易はしれがたけん。いかなる人をか訪せ給ふ。いとおぼつかなくこそ。といへば半七答て外祖が。由緣のものなれど。二十餘年中絕たれば。吾儕は只名を聞たるのみ。精き事はしるよしも候はず。舊好をこゝろ當にゆく方は。刀冶同樹といふものに候。といらへすれば。女僧聞てうち點頭。件の同樹といふ人は。去年の冬遷化し給ひし。わが拈華庵の先住の爲に。舊緣ある人なれば。吾儕も粗これを聞り。それは山口には在らず。天神山のあなた。氷上の鄕とたづね給へ。彼人齡七十にあまれども。なほ健なるよしは。慥に聞て侍るかし。日もはや暮なんとすれば退るべし。關の鎖おろしたてられぬ前に。とく〳〵越給へ。といひかけて。撓げに笈を脊負あげ。同宿の女僧もろ共に。遽しく走り去しかば。半七も初花も。黃泉に佛にあへるが如く。しばし背影をふし拜み。軈て旅宿に走りかへりて。物よくとり聚め。主人に別を告て。又忙しく走り出つゝ。件の牌兒をもて。障ることもなく關を過りしかば。はじめて吻と息をつき。直に沼多川の上下を。彼首此首と索ぬるに。拈華といふ庵は絕てなし。日も既に暮にければ。せんすべなくて思ひ絕。その夜亥中の頃及に。四日市といふ驛路までいゆきて宿を求め。夫婦彼女僧が事をうち相語つゝ。半七がいふやう。初花は幼稚より。玉枕御前に給事て。宅にある日のなかりしかば。侄の平太郎が面影は認ぬなるべし。けふの尼法師が負たる稚兒は。平太郎によく似たるなり。こはおのが心の迷ひかはしらねど。慥に誨られたる草莽を。索あてざるも不思議ならずや。といへば初花聞て。宣ふ所さもありなん。彼尼刀禰達は。顏こそいとおどろ〳〵しけれ。聲ざまは何とやらん。聞熟たる人の如し。思ふにこれは。日來念じ奉る。辨財天女の化現して。關をば越させ給ひけん。いと尊も有がたき。利益にこそ。と稱贊すれば。半七有理と忽地曉て。遂に再び女僧の菴を索ず。宿をかさぬること五昔にして。周防國佐波郡山口鷲峯の城下より。遙こなたなる。氷上の鄕にいゆきつゝ。刀冶同樹が宿所を訪て。舊緣の緡を。再びこゝに

とき明し。夫婦がうへを告にければ。同樹は心よく承引て。貧家に舍藏けり。

暑の夏の花の上

刀冶同樹が事は。第二の卷。多田の晩稻と題せし條下。全介が養母晩稻が昔物がたりにて。粗その名は聞えたれども。いまだその本末を詳にせず。原この同樹といふものは。近江の觀音寺の城下なる。刀拭が家に年來つかへて。大かたその業をよくしたり。しかるに京の刀拭同樹といふもの身まかりて。いはけなき女兒ひとりありけり。同樹が後家は。年齡三十ばかりのころなりしかば。媒妁ありて。今の同樹を入夫としつ。さて刀冶の名蹟を立たれども。このころ室町家の武威やうやくに衰て。京も田舍も。年毎に荒まさり。四民おの〳〵活業のたつきを失ふこと多かり。これによりて。今の同樹が時世に至りては。產業衰微して。よろづ昔に似るべくもあらねど。華洛に舊き刀拭なれば。僅にその餘波とて。闔宅五七口を餬に足れり。こゝをもて女兒增穗には。白拍子の男舞なんど習して。笠屋小夏といふ。綽號さへ呼したりける。こはその母の情愿にはあらず。繼父同樹は生才さかしく。いと慾ふかきものなればば。女兒增穗に遊藝を習し。すべて花奢に生育して。果は華洛の縉紳に給事さし。妾側室ともなして。おのが生涯を安樂にすぐさん。と校計程に。增穗は大和續井殿の近臣。今市全八といふ壯佼と。假初のそひ臥せしより。忽地に有身て。男兒を產にけれど。此ころ全八は。犯せる科ありて大和を追放せられしかば。世に爹なし兒とかいふうき名を立られ。增穗はこれを憂ことに思ひほそりつゝ。竟にむなしくなりつ。されど同樹が妻小田井が爲には。骨肉の初孫なれば。いとゞしく不便のものに思ひて。浪速より乳母を召養ひ。とかくして孚む程に。同樹は續井殿に召れて。平城へ赴き。風流阿阯の寶刀を拭せられたるに。悞て砥に打當。阯の大刀の刄を毀にき。こは輕からざる越度なれば。重き科被るべかりしに。續井の執柄。職松典膳が前妻と。同樹が妻と從弟女なり。この由緣をもて。邇賣の沙汰に及れず。恙なく京へ歸ることを得たれども。さるゑせものなれば。年來世帶を操て。脫れがたき債多かり。元來恥をしるものならねど。夥に借錢を返すにすべなければ。平城にてこよなき面目を失ひたるに。阿容々々と京にて活業はしがたしとて。おのが不幸をいひふらし。孫を棄妻を携。やがて華洛を逐電しつ。此ころ大內家繁昌して。山口鶴峯の城下を九條にひらかし。その熱鬧。遙に京には立まされるよし。同樹豫て傳へ聞ば。周防の山口へ赴きにけれど。させる本錢もなければ。物いとかゞやかしき。鶴峯の城下には住宅をもとめがたくやありけん。山口へ遠からぬ。氷上といふ鄕に。見るよしもなき店を修造ひ。こゝにて焦たる刄。錆たる鍔なんどを。賣もし買もして。世を渡るに。その性究て腹きたなきものなれば。利慾に走りて人を欺き。焦たる刄をよく拭こしらへて。價貴く賣ことしばしばなれば。妻の小田井は。これを傍痛きことに思ひて。言葉を竭し諫にけれど。同樹は京にある時こそ。入夫にして。その身その家を續ば。十ヲに二ツは。妻にも物をいはしたれ。今既に。遠く周防の氷上へ來て。更に世の經營を。すなれば。よろづおのがまゝに擧動て。絕て一言も。小田井が諫を聽ず。とかくして又十年あまりを經る程に。同樹はます〳〵貪婪のこゝろふかく。わろき所行のみ事とせしかば。小田井は身を形なく思ふにも。世の務に羈れて。心にもあらぬ夫をかさねたればこそ。家を失ひ孫を棄て。しらぬ里に呻吟來たれ。只ひとりなる女兒を先だて。只ひとりなる孫を棄。心つよき夫の僻事を諫かねて。歎の中に身まからば。後の世いとゞ罪ふかし。佛の道に入らんには。と一トすぢに思ひ決て。良人同樹に身の暇を乞受。忽地に女僧となりて。安藝國高宮郡。沼田川の上に草菴を締びつゝ。十年あまり行ひすまして。去稔天文二十年。冬十二月十五日に。往生の素懷を遂たり。此ころ行脚の女僧兩人。拈華と號し。微笑と呼るゝが。小田井比丘尼の草菴に同宿してありしかば。廼菴主の遺言にまかし。拈華比丘尼舊草に住持して。更に拈華菴と號し。先住の女僧が形見の遺物をば。みな悉。周防の氷上へ遣して。舊夫なれば。これを同樹にとらしたり。今玆同樹は七十餘歲に及べども。筋骨逞くして。壯年に異ならず。一

身の皮をば。すべて。慾にて張つめたれば。舊妻が物故よしを聞といへども。涙一滴落さず。種々の形見を獲て。俄頃に得つきたり。と歡びつゝ。日來嗜る酒に代て。いく程もなく喫竭し。年もくれて長閑なる春にはあへど。錢のなければ。なほうち籠りてありけるに。思ひもかけず。三月廿一日の黒昏に。大和國續井家の退糧人。赤根半七といふ壯佼。その妻を將て索來つ。精く彼夫婦がうへを問に。半七が妻初花は。むかし同樹がこよなき恩を受たる。蟻松典膳が孫女にて。半七も又血絡にこそあらね。典膳が孫なるよし。そのいふ所紛ふべうもあらず。舊緣といひ。舊恩といひ。脫るゝに道はなけれど。同樹は元來信に仗。義に勇むものにあらねば。これらの故を懸念せねど。只初花が容止。なみ〳〵に優れて。いと艶妖なるを見て。肚裏竊に較計事あれば。一議にも及ばず。信やかに欵待て。この日より件の夫婦を止めつゝ。慇懃に勤り慰めけり。しかれども半七等。かゝる貧家の食客となりて。なすこともなく月日を送らんは。心つきなき所爲なりとて。夫は刀を拭ことをならひ。或は同樹に代りて。村長縣正の第宅をうちめぐり。妻は火を打。水を汲み。或は人の爲に。ふりたる衣をとき洗ひなどせしかば。同樹は結句身ひとつなりし時より。世を安く思ひながら。這奴等は。わが肚裏をばしらで。松苗の棟になるまで。こゝにをらんとてや。汗水を流しつゝ掙了こそ。究たる白徒なれ。給銀といふもの取らぬ。よき小則と炊妾を養得たりけり。と竊にあざみ笑ふとは。半七夫婦はいかでしるべき。同樹が憑しげなるに安堵て。春と暮し。夏と送りて。雷鳴月の炎暑堪がたきをも物とせず。ます〳〵活業に身をゆだねしかば。刀を拭ことこそ。僅四五个月の手練なれば。同樹にいたく劣りもすれ。四方の花主をうち巡りて。刀劍を匠作。このみの注文をうけ給はることは。その性怜悧壯佼なれば。同樹には勝れりとて。人みなこれを稱美して。半七々々とぞ呼びける。かゝりし程に半七は。日來は同樹が心ざまを疑ひて。こゝに來れる緣由を告ざりしが。彼がいよ〳〵信やかに欵待を見て。いつまでか匿むべき。今は同樹に相語て。風流士の寶刀を索ばや。とおもひて。有一日竊に同樹に對ひて。この身夫婦の來歷。風流士の大刀のこと。一五一十を物がたり。

もし聞給ふこともあらば。もろ共に力を戮して。彼寶刀を索出し。某夫婦を忠孝の。人となして給はれかし。おのれふたゝび發跡日もあらば。厚く報いて生涯を安らかに過さし進らせんとて。叮嚀に相語しかば。同樹聞て。こはよきことこそあれ。とこゝろにふかく歡びながら。耳を側てつゝ。眉を顰め。原來和殿は忠孝の人なり。妻女は貞操の婦なり。われけふまで。浮たる情のやるかたなくて。後くらくももろ共に呻吟つゝ。このわたりまで迷ひ來給ひぬ。とのみ思ひしは。人をしらざる僻目なりき。いまだ聞給はずや。大内殿のあへなくも擊れ給ひしは。彼風流士より事起れり。去歳の如月にやありけん。鶴峯の御所侍。一口の大刀を拾ひつ。これを大内殿に獻りしに。しる人ありて。これなん續井家の重寶たる。風流士の大刀なり。とまうせしかば。義隆ふかく歡び給ひて。曩に陶殿に賜たる。風流女の大刀を返し進せよ。陰陽一對として秘藏し給はん。と仰せしに。陶殿は。年來の威勢をたのみてうけ引ず。その風流士をも。こなたへ賜は。陰陽一對として秘藏つかまつらんといふ。これより主從不和になりて。大内殿滅亡し給ひ。防長豐筑四个國の中なるもの。有像無像。猫も杓子も。莚の上の野牙までも。みな陶殿の物となれば。件の大刀をば殊更に。晴賢秘藏し給ふよし。この里人等もをさ〳〵いふめり。かゝれば彼寶刀を。いかに欲とおもふとも。七世の玄孫にあふまで。取も得がたき所行ながら。つら〳〵物を案ずるに。又よすがなきにしもあらず。故いかになれば。陶殿の郎君は。おん身が弟なり。今既に親胞兄弟。東西に引わかれて。讐敵の思ひをなすとも。肉緣の情。いかでその中にこもらざらん。これ一ツ。又おのれこの鄕に。二十餘年の春秋を經たれば。鶴峯の御所ざまには。しる人いと多かり。これ彼の便宜につきて。まづ陶殿の御内にて。某甲某乙と聞えたる方ざまへ。和殿を立入らせ。ともかくもこしらへて試ん。と思ふかし。それにつきて。今の形勢にては事をなしがたし。假に同樹が養子と披露し。刀治の家名を相續さして。さて鶴峯へ將てゆくべし。このこといかに。うけ引給はんや。と信たちて說示せば。半七夫婦は。坐に感涙を拭ひあへず。弟陶五郎は殘忍の養父に與して。浮雲の富貴を樂ふ。いとおそろしきものなれば

憑しげなし。只わがうへをばふかく匿て。物よくこしらへて給ひね。何にまれ宜ふよしは。固辭候はじ。と應ずれば。同樹は聞あへず。大きに歡び。本月十六日は。嘉祥日とて良晨なり。この日まづ養子成の披露さすべけれとて。豫てより用意しつ。さて本日になりしかば。莊役某甲を相譚て。鄉導とし。牛七には袴を穿せ。羽織を被せ。朝よりはやく出たゝして。鄉の戸々。殘りなくうち巡らせけり。これによりて初花も。その名あまりに物々しとて。同樹僅に初の字を除て。お花と呼ばし。これをば十五日の甲夜の間に。彼莊役が女房を鄉導として。近所合壁へ。相識の爲に遣したり。かゝりしかば。お花は本日。鎭守の神社へ參詣して。行末の事祈らんとて。午より宅を出たるに。これさへいまだ歸らざりけり。

暑の夏の花の下

かくて同樹は獨をる。宿は殊更口さみしきに。賀びをまうさんとて。詣來る近邊の甲乙を。いく度か迎へつゝ。おなじ挨拶する程に。夏の暑もやゝおとろへて。午時の炎暑はとりかへせど。困じ果たる勞は失せず。今は訪來る人あらじ。いでや持藥に氣つけして。獨樂せん。とひとりごち。棚より陶器とりおろせば。忽地。芬と酒の香するに。眼を細し。涎を流し。蚊やり火鉢に炭ふき起して。陶の尻を灰に掘埋。小頸を傾け指を僂。ひとり笑して點頭折から。ふりたる貲布の袱包を。脊負たる市人が。侶なる倭子の後れて來るを。いく度か見かへりつゝ。同樹が門なる障子に手を掛。瓦落々々と。引開れば。同樹はいたく駭きて。倒んとする背へ手を突。やうやくに膝立なほし。誰ならんと思ひしに。敗鐵の四五六よな。呼門もせで老たるものを。うち驚すことやはある。障子の骨をば。鐵ては編ぬ。開闔にこゝろせよ。やうやく脚色し一趣向を。障子の音で開なくされたり。忌々しき和郎にてありけり。と呟ば四五六は。負たる包ときおろして。項より流るゝ汗を拭き。けふの炎暑に門さして。おん身が物を思ふとしらば。龜

やかに障子を開んや。全體こゝの敷居鴨居は。坤へゆがみくねりて。脾擂肚では開られぬ。とうち笑へばうち笑ひ。四五六が亦しても。來るとやがて人の家の。荒を見出していはふでがな。銀だに貸せば造作するに。といへばほとほとうち點頭。正月の三ツある年。足なしに借給へ。とはいへ何國の浦にても。ないものは金。あるものは借錢。去年の二月大和から。物を追ふて思はずも。こゝへ來て一ト思案。西の都といひもてはやす。大内家の城下なれば。世わたる便著もよからん。とそれなりけりに足を駐め。些馴染も出來るや。出來ずに。射つ欲つの大合戰。やうやく世間長閑くなりても。一升瓢子はいつでも一升。けふの興敗これ見給へ。五百が本錢で鉛刀光三口。まだ此ころの後家鞘は。亭主の好なる赤鰯。夜食の菜にもなり難る。荒布に似たる敗下緒。望はなしか。と袱より。ひとつ〳〵にとり出せば。同樹は頭を左右へ掉。竈木より麁牙の多い敗鞘。鐵橋には劣たる。焦刄を五百穴が興敗。といふては齒莖はたちがたし。猫に見られて竊れな。とあざみ笑へば四五六は。亦袱へ押つゝみ。しからばこれをば納めもせんが。納らぬは。全介が事。吾儕が浪速に在し日より。心くまなき友だちなれば。彼も又もろともに。この地方へ來ても本錢はなくて。果敢々々しき活業はえせず。とかくする程に氷上の鄉に。刀冶同樹といふ人の。あるよしを傳聞。それは吾儕が外祖父にておはするなるべし。養母の遺言此彼もつて。孝順に養ふて。寄年を心易く。送らし欲。と彼が情愿。當今の壯佼には。珍しひ奇特もの。おん身も歡び給はん。と思ふて曩に將て來たれば。思ひの外に强面て。爾後よせもつけられず。下物夥計で六齋の。市には春より中絶ず。面をあはする四五六が。面に愛て全介と。祖孫の名告し給ひね。といはせもあへず頭を掉。肉緣はなけれども。むかしをいへば孫でもあらんが。彼は元來爹なし子。生れぬ前から祖父祖母に。恥をかゝせし出來損ひ。仇人の末と思ひ絶て。襁褓の中に棄たるに。今更名告をしても用なし。特に渠奴が面魂は。彼猿樂の狂言の。太郎冠者めきて何處やらが。一節駑拔て三文の。働きはありとも見えず。生涯篤實律義者とて。人に佛といはれては。この辛い世は撰らず。さるによつてこの同樹。齡七十にあまる

まで。仁義五常といふことを。算盤には絶てのせず。孫養ふより狗の五器。冷飯一碗食しても。減のたつことしらずか。と煙管で敲く敗席焉。埃まじりにいぶされても。四五六騒ぐ氣色なく。その義ならば宣ふな。一體彼全介は。生得たる奸雄者。老實に見せて油斷さし。馬市に出る日は。よく生馬の目をも拔き。又寺參りするときは。佛の箔をも容易剝す。老功の外祖さまにも。律義ものと見せたるは。迺術に妙ある所。さりとては至らぬ。といへば同樹は果れ果。さ聞ば棄られず。今一度見なほすべし。翌伴ふて來給へ。といひも果ぬに四五六は。衝と立て外面へ。走り出つゝさし招けば。前より門邊に立在たる。全介は肩に被たる。手拭取て腰に夾み。禹歩に内に入て。同樹が向ひに膝折そろへ。外祖さまの見立ちがへて。けふまでよせつけ給はぬは。燒がまはりし老の僻眼。旅に在ては護摩の灰。市に出ては畫鳶。盗賊にこそ得ならね。一トたび足を揚るときは。踵で巾著をも切つべく。人に酒を買するときは。尻を砍こと本事なり。狗には勝る孫がひに。おん身が骨をば全介に。拾はして給はれ。と俄頃に作る悪棍風俗。頻に髯をかき撫れば。同樹ほと〳〵感嘆し。臂近なる澁團を。かい取てあふぎ立。かくてこそわが孫なれ。さりながら。半七夫婦こゝにをれば。わが宿には留めがたし。所要あらばこなたより。折を見て招ん。といへば四五六小膝をすゝめ。いかなる由緣あるかはしらねど。現在孫のありながら。半七に刀治を。續せ給ふはこゝろ得ず。と詰れば同樹はうちほう笑み。彼はわが故妻。小田井に遠き緣ありとて。この春たづねて來たりしかば。信しやかに欵待して。夫婦養子の披露するも。同樹が胸に物ある故なり。それを實事とすることかは。とほこりがに說諭せば。全介握れる拳を捺り。彼半七は續井の家隷。わが實父の仇人たる。半之進が子なるよし。四五六がいふにてしりぬ。養母の遺言默止がたくて。今に半之進を擊ずといへども。彼も又仇人の半體。仇人の杪は根を斷て。葉を枯さんも只この時。時は再び得んことの。かたな屋と名告るとも。祖父だに許し給はゞ。立地に怨を復さん。あな歡し。と思はずも。もてる煙管をずと折。怒の面色さもこそ。と同樹は小膝を敲と拍。仇人の子なれば半七を。擊んと思ふは現有理。その譯ならば

いふよしあり。四五六は同腹中。今更匿むべうもあらず。半七お花が歸りなば。われ如此々々の事ありとて。這奴等を旨く詐欺るべし。そのとき四五六全介は。小俣の縣正より。潛やかにお花を迎へとらし給ふ。と僞りて。便輿乘物舁して來よ。しかれども半七は。おのが日來欲しと思ふ。風流士の大刀を取らずば。お花を阿容々々とは。えも遽與さじ。倘彼大刀は。と問ことあらば。四五六は豫て一封の證文を懷中して。これを半七に握らせ。汝今宵。小俣の鄕なる。縣正が宿所まで。その證文を持參せば。所望の大刀を給はるべし。と說賺して。やがてお花を竹輿に乘して山口なる撞木町の。女衒が宅へ將てゆきね。われ豫お花が事を。よく相譚すましたれば。年こそ廿一といふとも。六あきにして二十兩詰。二五百金が物はあり。さて日も暮て初夜過て。われ半七を侶ふて小俣に縣正が宿所へ赴き。件の大刀を受とらんといはんには。渠必從ふべし。里遠離る天神山。夜は麓も人跡絶て。面に川あり背に藪あり。全介こゝに埋伏して。親の仇人と名告かけ。只一刀に砍殺せよ。半七既に死するときは。縱お花を程遠からぬ。花街へ售とも後腹痛ず。四五六もこゝろ得たりや。早りて氣色に曉られな。と孔明顏に說諜す。膝にもたせし澁團。羽扇と見せて破れたり。全介はつくゞと。これを聞てます〳〵歡び。仇人の妻を詐謁て。河竹の瀨に立するも。怨を復すこれその一ツ。しからばゆくをやりも過さず。天神川の藪疊。寢刄あはして待んず。と勢猛く應たり。四五六はじめより。只點頭のみ可とはいはず。同樹どのには金を獲させ。全介は仇人を擊。現談合は旨けれども。吾儕が腹へは絶て溜らず。辛苦錢から定價して。ともかくもすべけれど。もしその沙汰に及ずは。暇まうしてすぐさに訴へ。氣の毒ながら老人に。索を被てひかすべし。といふに同樹は目鼻をよせ。こや〳〵四五六。四五六どの。吾儕に如才あるべき歟。これ斯々とさし寄て。手を握りあふ袖の中。四五六莞爾とうち笑て。けふの相場は賤けれども。乘かゝつたる船なれば。お花が迎の走卒に。打扮は究竟なる。興敗物の鉢刀光三腰。まづ談合はとゝなふたり。祝ひ給へ。と直足られて。同樹は弗と心つき。遽しく火鉢より。陶器を引出し。熱々。と指に耳を挾せ。あまり談說に實を入れ

て。缺代のなき小半合を。煎酒にしたるぞや。さはれ四五六は下戸なりし。物こそあれ。と身を起し。家廟の障子推ひらきて。彌陀の御まへの夏桃子三四枝。折敷に載てもをし氣なく。兩人がほとりへさし出せば。四五六は冷笑ひ。百金の前祝に。毛桃三枚とは朝三暮四。吾儕はこれをくは狙なり。と推返しつゝ項を伸して。家廟の裏をさし覗き。全介彼を見給ひね。進命婦をおもひ病せし。清水寺の老法師が。草莽に異ならで。持佛に代たる美人の畫像。彼はいかに。と指せば。全介も又呆れ果。色欲と無常の浮世といへど。これは又めづらかなり。宗旨は何ぞ。と低語ば。同樹煙管を笏にとり。さればとよ。この畫像には緣起あり。汝達も聞つらん。去歳の秋大内殿。俄頃に擊れ給ひしころ。華基の北の臺。槐姫の往方定かならず。或は猛火の中に入て。死給ふとも聞え。或はお通とかいふ女房が册きて。辛く脫れ去給ふともいふ。さるによつて陶殿安からず思食てや。姫の肖像を夥畫せて。縣田居中。殘る隈なく觸知らし。もしこの畫像に似たる女子あらば。搦捕て進らせよ。賞錢は乞によるべしとて。こゝらわたりへも戸毎に。彼畫像を給はせしは。去歳の冬のはじめなりし。しかるに彼半七夫婦がこゝへ來て。姫の畫像を見て涙を落し。主の姫君におはするとて。皺引延して表裝し。物々しく家廟へ懸て。且夕に額を著。餅果なんどを供るを。傍痛く思へども。此方にふかき校計あれば。そが隨にして詰りも問ず。この桃子も半七が。彼首の畫幅へ供物。全介もよう聞て。彼畫像に似たる女子を。槐姫と見るならば。引捕へて物にせよ。掙了ば損のゆかぬ世間。緣起あらまし件の如し。と說示せば全介は。四五六を見かへりて。彼もこれも金の蔓。けふより心を改めて。祖翁さまを見習はゞ。濡手で粟餅とる如く。よき夢をがな見もやせん。といへば四五六うち點頭。人はわろかれわれよかれ。死でも命のあるものならば。那里か一度は寶の山。手を空して語らんより。戲房入りして半七お花が。歸りしころに再び來ん。さはとて傍の紙包の。端かいとりて脊負つゝ。全介もろとも立あがれば。同樹は外面うち仰ぎて。門の棟に日影が落れば。申時には程もなし。われこそ市の六齋錄に。四五六と出會ども。かけちがふて半七も。お花もいまだ四五六と。全介

を認らねど。わろく物して曉られな。全介もようせよ。といひつゝやうやく身を起す。裾に陶器を反倒せば。口より酒を吐ながら。滾々と轉ゆくを。慌忙き引起して。ひとり腹立眼を睜り。あなわれながら忌々しき裾の。蔽よりして間冷を。席薦の野郎に飲したり。物體なや。と呟きて。溢れし酒を指へ染。禿たる天窗へ塗つくれば。四五六は全介と。目を注して冷笑ひ。熟柿に似たる禿天窗へ。酒を沃がば澁もや拔けん。供饗の桃子は啖ずとも、翌は酬柿を賞翫せん。いざ給へとて先にたち。跨ぐ閾は三尺口。貳尺五寸の錆刀。負たるまゝに身をひねる。人啖馬も七首や。さすが同樹が孫なれば。小じりからげて全介も。いそがはしげに歸りけり。浩處に半七は。墓なき蟬の薄羽織。土用なかばにあき人の。よき衣着るにあらねども。隣き戸々うちめぐりて。かへさは妻も一トすぢ道。二すぢ立の縞浴衣。まだ町なれぬ背帶。繻子のぬめりに風はしる。夕くれ毎に露ふかき。お花もろ共かへり來つ。半七只今さふらふ。と呼門つゝ內に入れば。同樹見かへりて囉やかにうち笑み。半七歟。はやかりし。お花も共に歸りしな。宿に居だに堪がたきに。暑もさこそと思ひやらる。半七は羽織も帷子も。脫捨て涼み給へ。お花も浴衣に脫更よ。と信やかに慰れば。いな。宿に居とは格別にて。途に出ては風に吹れて。思ひの外に凌ぎ易し。喃お花。實わが夫の宣ふごとく。片道は蔭もいで來て。笠も荷になる風の涼しさ。前の月より雨氣はなけれど。塵埃のたゝぬは田舍の一得。鎭守の社の賽。天神山のこなたにて。折もよく。半七どのにゆきあふて。もろともにかへりしかば。日は沒かゝれど心つよくて。却歩は果敢ゆかず。さぞ徒然におはしけん。といへば同樹はうちほう笑み。わかい夫婦のうちつれ立て。世の務やら保養やら。たま〳〵の事なれば。歩はかゆかぬ該ぞかし。湯を沸して歸るとやがて。汗流せんと思ひしが。思ひしのみにて年老の。折屈にかひなければ。留守した。のみ猫には劣る。それのみならず歡しさと。また哀しさを搗雜て。そらうち瞻仰て待わびし。といひつゝ眉を顰れば。半七これを聞もあへず。そは何事の候て。心苦しくおはするぞ。親と憑み奉る。老人の物思ひを。しらずがほする半七ならず。假染ながら刀治の。屋號を冒すも

不思議の縁し。匿ずに只斯々と。告もしらして給ひね。と盡す信は。妻もろとも。商人のうへは疎にて。物の要には たゝずもあらんに。舊き由縁を忘れ給はで。良人の索る彼品を。とり復んとての物思ひ歟。さらずは脱れぬ負債やあ る。よしやいかばかりの借錢ありとも。半七どのにうち任して。さのみ劬勞なし給ひそ。と夫婦右より左より。いひ 慰れば嘆息し。年弱にはたちまさる。親切に絆されて。胸苦しさも又一倍。何か匿ん聞給へ。おん身夫婦が心を盡 す。風流士の寶刀の事。いぬる日はじめて聞しより。さま〳〵に尋思せしに。小俣の縣正は。陶殿に由縁ありて。不 便のものにせらるれば。富田へも鸛峯へも。常に參りて心くまなく。まうし承るものなるに。われ又彼人の蔭を蒙 ることおほかり。もしこの條の顚末を。縣正に密に語りて歎きなば。汲引せらるゝこともや。と思ひしかば。いまだ 和殿等には告ねども。をり〳〵彼處へ赴きて。さま〳〵にこしらへたり。しかるに陶殿は。既に四个國の主になりて 不足はなけれど。内室近ごろなくなり給ひつ。側室嬖妾多かるものから。是をと心に稱はせ給ふものもなし。汝が養 子半七が妻花とやらんは。儔稀なる美人なり。と聞傳ふ。もし彼お花を進らせなば。萬に一ツ半七が望を遂る事もあ るべし。この外には陶殿に。まうしよらんすべをしらず。と縣正の宣はするに。あるべき事とは思はねど。いなとい へば彌勤の世まで。風流士の大刀は返らず。應といへば思ひおもはれし。夫婦の中を裂ては成らず。事變易んはいと易し。半七お花がこゝろはしらねど。うけ引にしくことあらじ。とわが胸ひとつに思ひ決て。仰うけ給はり候ひぬ。 主ある女子に候へども。これがうへには。亦二ツなき僥倖なり。お花がことはともかくもして進らすべし。只彼寶刀 を障ることなく。まうし賜り候へ。と應して歸りしは。一晩の日の事なりしに。鸛に縣正どのより。猛に使給はり て。とく〳〵參れといそがさる。和殿夫婦は家に在らねば。留守憑むべきよしもなけれど。物もたぬ身の後易さは。門 の戸鎖して彼使者に。うちつれたちて小俣へ參れば。軈て閑室に招よせられ。縣正どのゝ宣ふやう。汝が歎きまうす よしを。陶殿に聞えあげしに。件の大刀は。陰陽二口の名物にて。殊更に秘藏すなれば。いかに乞まうすとも。給は

るべきものにあらねど。美人をもて換んとまうせば。これも又默止がたし。われ深窓の御達をよろこばず。只市中風流 の少女を愛す。汝がまうす所の女子は。その趣よくわが意に稱へり。しからば潛に。彼花とやらんを進らせよ。大 刀は引かへて賜ふべし。と仰たりき。よりて花をばわが女兒にして。御所ざまへまゐらせんに。その准備をせよ。 この夕ぐれに密やかに。私卒兩人ばかりさし添て。竹輿もて迎とらすべし。このことといはん爲に汝を召つ。この旨こ ころ得よかし。と宣はするに。一トたびは歡び。一トたびは哀み。言うけして立歸り。和殿夫婦を待てをり。忽卒に 諾し。と叱らるゝかはしらねども。彼寶刀だにとり復さば。亦せんすべもなからずやは。寔に哀樂のやるかたな さ。一ツを得ぬれば一ツを失ふ。夫婦がこゝろを推量れば。只涙のみ先だつと。いひつゝ背向に伏沈み。圓なる目を 揚赤て。心苦しきおもゝちすれば。半七お花は目を注し。塞る胸と開く眉。いづれをよしと決かねて。又いふことも なかりしが。お花は袖に涙を拭ひ。操を破り恥を忍び。かの方ざまへ參らずば。いつかは寶刀をとりも獲ん。わらは は覺期して侍り。といひつゝも又目を拭へば。半七頻に嘆息し。よしや獲がたき寶刀を獲て。故郷へ歸る日はありと も。反逆の首領たる。陶晴賢が婢妾に。妻を賣てはおん身が爹々。曾太郎殿に廑未來。絶て面をあはせがたし。義理を 辨へ恥辱をおもひ。人たる人になりてこそ。こゝろを盡すかひもあれ。このことのみはうけ引がたし。といふをお花 は喜しとも。いはれぬまでに形なき。身のゆくすゑはかくばかり。落れば落る谷水も。堰とめかねし袖の雨。今ぞ賣 る身の迎の竹輿も。翌はこの世になき玉の輿。死んと思ひ決めつゝ。涙を禁て莞爾とうち笑み。いひがひなきこと 宣ふな。身を汚してこそ恥にもならめ。一旦彼處へ參るとも。病ひに假托ほとりへ寄らず。われから飽れて歸らん に。なでふ事の侍るべき。槐姫はけふまでも。おん往方定かならねば。世の風聞の虚言ならで。鸛峯にて猛火に燒 れ。むなしくこそなり給ひけめ。しかるに獲がたき寶刀さへ。取らずば生涯埋木の。世に出る瀨にあひがたし。女々 しく物を思ひがほして。後に悔とも及びがたけん。たゆたひ給ふことかは。と夫おもへば身を捨て。いとかひ〳〵し

く激せば。半七ます〳〵嘆息し。しらぬ里へ賣りも遣らば。かくまでに物を思はじ。陶は弟が養父なるに。半七が身の貧しさに。妻を貨に換たる歟。と陶五郎に思はれんは。いと朽をしき所爲ながら。おん身だにしかいふを。われ又推辭べきにあらず。浮世は苦界八海の。池の築島の配所より。こゝに到りてけふまでも。劬勞に劬勞をかさねさし。果は仇人の側女となす。過世いかなる惡業ならん。賠話よしなき身の幸なさ。みなわれ故の活地獄。ゆるし給へ。といひかけて。襟に顋さし入るゝ。涙に隙はなか〳〵に。お花はよゝと泣沈み。胸に痞を押入の。柱にそふて起も得ず。かくてはいかで果べきとて。同樹はやをら頭を擡。哀しきは理ながら。別といふもしばしの程。彼寶刀だにとり復さば。ともかくもこしらへて。身を脱るゝはいと易し。はや暮たれば迎の竹輿を。齎して人や來ん。やよお花。亂れし鬢をつけ給へ。これは又痛い蚊ぞ。物いふ毎に目口をわかず。蚊々と走り込む。まづ行燈を。と身を起すを。半七やがて推とゞめ。脚もとの薄くらきに。老給へばいと浮雲し。いで吾儕が。と遽しく。發燈にうつす燈火の。花にお花は屈々と。思ひくしたる櫛疊紙。涙もて解白粉も。泣がほかくす薄化粧。憂とはつげの毛筋立。今ぞ流れてゆく水櫛に。鬢のおくれ毛かき拊ても。亂れて物を思ふめり。折しも隣れる小屋の二階に。誰手すさみの三絃も。外の哀れをしのびごま。生憎妙に唄ふを聞ば。

「すつる身を。何たしなみの髮化粧。わかれの櫛のはかなくも。通り過たる夏の雨。くもるはかゞみの咎ならで。胸の煙を蚊遣り草。この間おはながひとりごつことあるべし見る人すいせよ

同樹は緣に偏袒ぎて。あふぐ火鉢の燃たつを。敲けばやがて滅易き。人の命は翌しらなくに。

「ゆふべのまゝの黛も。薄き緣しと尺長に。むすぶのかみの難面憎くや。この間お花がひとりごつことばあるべし

「にくやわれからねに癖つけて。やるかたぞなき油手を。拭ふちからもなよ竹の。指さへ細るうき身かな。

浩處に四五六は。全介ともろ共に。麻の袴の裙高く。とり繕ひて兩刀を。いかめしく挾み。後方に竹輿を扛しつゝ。刀冶が門をさし覗き。あるじは在宿せられしか。縣正どのゝ仰を稟。お花女郎を迎とる。竹輿をこゝに齎たり。と密やかに呼門ば。同樹は緣より飛をりて。恭しく額を著。短夜といひ。遠路のところ。各位を勞し奉る。させ設はつかまつらねど。まづ盃をたてまつらん。といひつゝ立を呼びとゞめ。頃日の夜の短さ。しかも女子を伴ふに。更闌てはいと便なし。縣正の待わび給はん。そがまゝにて出されよ。衣裳調度は彼處にて。はや調て待給へり。とく〳〵といそがせば。お花は良人にうち對ひ。墓なきものは人の命。今宵が一世の別れとならば。憑むは未來二世の緣。彼一品だに手に入らば。それを故鄕へ面目に。浮名を雪めて主親へ。見參して忠孝の。名を揚家を嗣給へ。いひ遺すことはかず〳〵なれども。胸のみ痛くてえもいはず。小俣の人のいそがし給ふに。參り侍らん。といひかけて。解たる帶を結びそゆれば。半七も目を拭ひ。苦しき浮世をわたるとも。夫婦もろ共に在てこそ。又慰るよすがとなれ。身を汚すとも心を汚さず。破る貞操が眞の貞操。よしや堪がたきことありとも。身を愛し命を保。再會の期を待給へ。短氣に逼て此うへに。歎きをまさせ給ふな。といひ諭せば。涙に回答て點頭のみ。やうやくに緣に出て。同樹に對ひ恭しく。叮嚀に別を告。良人のうへをいひ遺す。言葉のすゑはかき曇れど。月の隈なき夏の夜の。喞がましき蟲の音に。慰かねつ半七も。端近く見送れば。同樹はやがてお花を扶て。件の竹輿に乘せしかば。半七やがて庭に出て。四五六全介等を對ひ。疑ひ奉るには候はねど。既にこの女子をば進しつ。又某が乞まうせし。寶刀を今宵は給はらずや。と問ば全介うち點頭。そのことは心易かれ。乃縣正どのより證文を給はりぬ。彼見給へ。と指せば。四五六は懷中より。證文をとり出して。月光に押ひらき。一刀同同樹同半七等が乞まうす。風流士の大刀の事。右權頭殿より下し給はる所實也。依て某これを預り訖。この一紙を携來ば。件の大刀を遞與べき者なり。天文二十一年六月十六日。縣正小俣莊司判。と高やかに讀了て。やがて半七にとらせしかば。同樹も頭を傾つゝ。

聞果てうち點頭。かゝる證據を給はれば。件の寶刀は半七が。手にあるとこれおなじ。お花も歡び給へかし。といふ間にはや擡あぐる。竹輿にかはれし夜の鶴。子ゆゑにあらぬ夫の顏を。今一トたび見かへれば。おろす簾もまよひの雲。一聲啼し杜鵑。血を吐おもひと半七は。仇に折らるゝ宿の花。ちるとは見えてとゞめあへず。人のなげきをわが歡びに。しあはしよし。と四五六全介。只管竹輿をいそがしつゝ。足うらかへして走去けり。

三七全傳第三編　占夢南柯後記　卷之六　終

三七全傳第三編　占夢南柯後記　卷之七　〔後帙第三〕

東都　曲亭馬琴編次

天神川の淤

こゝも又天神山の名にし負ひて。科なき科を釀すかな。されば刀冶半七は。風流士の大刀を取らんとて。その夜さり同樹と共に。忙しく宿所を出しは。戌の初更にやありけん。元來伎倆ることなれば。同樹は半七を誘引て。小俣へとて出にけれど。縣正の第宅へは得もゆかず。こゝによるべき所あり。彼處は阪の多て。老の足には術なしなんどいひこしらへて。途にて思ふまゝに時を移し。天神山の麓まで來にけり。この地方右手は高山嵯峨として。一條の谷川。その裾を繞り。左手は萇竹猗々として。百仞の蟠龍路徑を遮る。夜風袖に入て夏なきがごとく。明月峯をはなれて白晝に似たり。里遠離る小篠原。裳濡らしてわけゆく程に。半七とかくこゝろ得ねば。しば〳〵同樹を呼とゞめ。是は何處へゆき給ふぞ。小俣の鄕へまゐらんには。弦を捨て弓を取なり。かくては路の便宜にあらず。夜もはやいたく深たるに。猶途に滯つゝ小俣へ赴き。熟寢せし人の門を。敲かば心なきに似たり。曩に宿所を出しより。何とやらん宜はする。言葉の本末おぼつかなし。もし野狐に憑れ給ふ歟。さらずばあまりにこゝろを屈して。老耄やし給ひけん。けしうはあらずさむらはゞ。吾儕に鄕導さし給へ。といひつゝ先へ立んとするを。同樹は疾視つけて冷笑ひ。齡七十にあまれども。物ひとつ忘たることはなし。かゝる夜行は常にすなれど。錢百脫して狐狸に。鼻毛數るゝ同樹にはあらず。汝がゆく方へ得ゆかぬとて。親をば嘲哢するもの歟。人の齡の傾くばかり。世に朽をしき物はなし。

はつかなる由縁を由縁にせられて。百日近く夫婦を養ひ。家を續し。名を續し。さま〳〵に劬勞せし。擧句の果は嘲哢せられて。腹たゝしい事ばかり。さるおそろしい心としらば。腰もえたゝぬ借錢負ひつゝ。味噌鹽に追れはせじ。和主小俣へゆかんとならば。獨ゆきね。といらへもあへず。踵を回らし今來し路へ。立歸らんとしたりしかば。半七慌忙つゝ。やうやく袂を引とゞめ。よろづに心つきなくて。假初の言の葉より。腹たゝし奉る。みなこれおのが誤なり。殊さらに夜も深たるに。半七ひとり參りては。いかで寶刀を遞さるべき。わろき事をばこゝろくまなく。いひ懲らし給はるは。半七が身にとりて。歡しくこそ思ひ候へ。枉て小俣へ侶ひ給へ。と勸解れば同樹は頭を掉。ゆくことはじめより。ゆくとて宅を出たれば。ゆかんとは思へども。いたく更たれば今夜はゆかれず。其處放さずや。と焦燥て。振とる袂を亦引とめ。よしや今宵は深たりとも。大刀はお花と引かへの。約束に候はずや。しからば今宵は延されず。物は油斷に寸善尺魔。只いく度も半七が。わろき事あらば許し給ひて。小俣へ伴ひ給はれ。と賠話るを聞かぬおもゝちして。足ふみ鳴らし臀を打。さて苛い長脚蚊かな。かゝる處に立在ば。手も足もふくれあがる。血の氣の薄い老人が。血を吸れてたまる物かは。やよ半七。よしや小俣へ參るとも。縣正より賜りし。證文をもてゆかずば。容易大刀を遞與給はじ。さて忘れたりわすれたり。と呟けば半七は。懷なる疊紙をかい探り。いな證文は某が。懷中に候。といひつゝ軈てとり出せは。それを見せよと搔取はやく。披きも果ず寸々に。引裂捨れば半七は。吐嗟とばかりうち驚ぎ。正しく。大刀と引かへよとて。縣正より給はりし。證の書を引裂給ふは。醉狂歟。亂心歟。こは何とせん。とばかりに。呆れて臀居に撲地と坐し。遺恨の涙にかき眩たり。同樹はさこそと齒莖をあらはし。足拍子をとりながら。呵々とうち笑ひ。やよ白物。この證文が何になるべき。あまり念ひがおそろしさに。一件をいふて聞せん。縣正の汲引をもて。お花を陶殿に進らせて。その代に風流士の大刀を賜るなんどいひしは。みな悉虛言にて。お花を花衢へ沾却なし。その身價を引とつて。九十餘日食したる。飯米の證候を。塚あくる同樹が敏

計。見る影もなき浮浪人の。半七が食ひ荒せし。お花を疏へ進らしたりとて。寶刀を和郎に賜らんや。よく物を思ふて見よ。主の大內殿でさへ。彼大刀ゆゑに滅亡せらる。況や和主が分際で。件の大刀を取らんと思ふは。平城の大佛堂の梁を。蟻がひかんとするに似たり。かばかりしれたることわりを。しらで實事とおもひなす。是を名づけて白物とも。虛氣人ともいふなりかし。注文かくの如くなれば。反故には劣る一簡を。目今引裂捨たるは。和主に思ひ絕せん文爲。彼證文の虛實。これにてはじめて讀たる歟。とわが奸邪を奸邪と。あかして罵る大膽無敵に。はかられけり。と半七は。突たる膝を立なほし。拳を握り齒を切りて。向上る眼に涙を浮め。一旦受たる恩あれば。かゝる僻事し給はずとも。はじめよりうち明て。かう〳〵と宣はゞ。またせんすべもあるべきものを。百日足らず半七等を。養ひ給ひしその費は。いかばかりとはしらねども。詐欺てお花を賣ては。世にいふ虎落稔帙に等し。といはせもあへず眼を瞪らし。虎落とは誰をかいふ。老たる親をば子が養ふ。こは世の間の常なれど。われは却子を養ふて。借錢の淵に沈ば。それを見るめのいぶせさに。女房賣ても親の貧苦を。救ふといふべき該。けふは女房を賣らんといふ歟。翌はいふか。とこゝろにまてど心つよく。しらず貌するが腹たゝしさに。風流士の大刀を囮にして。お花を賣らして半七を。孝行ものといはするは。乃これも親の慈悲。しかるをなぞや目に角立て。親を白眼ば比目魚にならん。湯出海老を見るごとく。面をあかめて疾視ばにらめ。不孝もの奴。と立ながら。裳を褰て礙と蹴る。蹌を楚と拿り。身の幸なさに遠く來て。親ならぬ人を親と憑むも。風流士の大刀を引提て。一トたび故鄕へ歸ん爲。この故にこそ女房お花も。仇としりつゝ給事。それさへふかく詐欺られ。恥辱に恥辱を累たる。半七が一期の薄命。お花が恨思ひやる。舊の武士にてあらんには。匹夫下郎の泥濡に。父母の遺體を汚されんや。いと。嗚呼なりと衝放せば。倭僧ながら踏こたへ。原は武士でも諸侯でも。大臣攝家の嫡正でも。今見る所は素浪人。けふより同樹が子となれば。泥濡を戴するを。過分とおもふて百拜せよ。刀の鞆に手をかけて。和郎は親を何とする。親を殺せば竹鋸。この頸の根

を挽るゝぞ。と足もて肩を揺動し。親といふ稱を岌に着て。罵つ哢みつ。蹴つ踏つ。打惱さるゝ半七が。單の衣も破れ口。堪忍袋の緒も締あへず。頭髻も共に弗と斷て。髪も心も亂れつゝ。ふたゝび打んとふり揚る。同樹が拳の下かい潜り。腕を取て身を起し。假にも親子の義を結べば。いふべきよしをえもいはで。思ひのまゝなる拳は受たり。且く彼處へ休ひ給へ。といひもあへず。捉たる腕を脊へ揉向。ちからにまかして衝飛せば。十歩あまり走りつゝ。川邊に掛たる稻塚に。忽地磯と衝あたれば。裏より晃りと閃く刄に。同樹は腸砍著られ。苦と叫て倭僧を。倒しも果ず稻塚より。素やかなる手を伸て。右手なる川へ水入と突入れ。やがて稻塚かき披き。まづ半身をあらはして。刄の鮮血を拭ひつゝ。腰なる鞘に納る形勢。こはこゝろ得ず。と半七は月光にと見かう見れば。嬋娟たる婦人なり。ます〳〵疑ひ惑ひつゝ。樹立の下に身を倚して。且くこれを窺へば。件の婦人は徐やかに。歩出て袖うち拂ひ。つく〴〵と立在にぞ。やうありけり。と半七は。樹蔭を出て跡に跟。そは何人ぞ。と呼かくる。聲に忽地見かへる顔を。つく〴〵と見て亦おどろき。こは姉御前にをはさずや。と問せもあへず手を抗て。あな音高し。と推禁め。立ながら耳語つ。又手を抗てさし招けば。痛しきかな槐姫は。露に宿り風に梳り。途の疲勞にたと〳〵しく。掛蘿のあなたより。歩み出給ひしかば。お通は軈て勦り册き。幼少おはせし時より。華洛へのぼり給ひしかば。いまだ知召ざるべし。これはわらはが弟なる。半七に侍り。とまうせば。槐姫欝して。波風しゝめる世のたゞずまひに。をかしからぬ身を存命て。不思議に面を見らるゝよ。と宜へば半七は。おん前に畏り。故ありてこの春より。本州にさそらへば。しのび〳〵におん往方を。彼此と索奉りしかひありて。はからずも半七が。今宵の危窮を姉に救はれ。姫君の恙なき。尊顔を拜し奉る。これわが武運の竭ざる所。歡びこれにますものなし。直に宿所へ侶ひまゐらせ。憂來しかたは緩やかに。訊慰まうすべし。いざ給へとて身を起ば。お通は姫を扶披て。主從三人月を燭に。氷上のかたへゆかんとすれば。いうの間にか左手右手。一反ばかり引はなれて。事を窺ふ四五六全介。屈うちかけたる松が根に。煙草の殼を

丁とはたきて。落人やらじ。と四五六が。高やかに呼びかくる。靡もひかせず半七は。腰なる刀子披出して。はつしと打ば。身を引て。拂ひ落せし煙管の小大刀。程もあらせず後方より。實父外祖の讐敵。やは脫さじ。と全介は。下駄脫捨て松蔭より。走り出んとする處を。お通は吐嗟。と見かへりつゝ。銃劍に打斧を。丁と受たる桐の下駄。ひとはや落ん夜の風。秋を隣に夏の霜。隈なき月に主從は。潜んとすれど潜びあへず。いとゞ術なく見えにけり。

過去の菴主

刀冶半七はその夜さり。天神川のほとりにて。おもひもかけず姉お通が。同樹を川へ砍流して。危窮をば救れたれど。一旦親と憑しもの。縱殘忍のこゝろもて。われに飽まで難とも。眼前に殺せし事。却心に快からず。後日の祟も胸くるしけれど。既に槐姫に環會奉れば。この日來の本意は遂たり。主を思へばなか〳〵に。身の殃危は見もかへらで。全介四五六が虎口を脫かれ。やがて姫と姉とを誘引つゝ。跡を埋めて間道より。氷上の郷へ立歸れば。丑三のころになりつ。些ば心おちゐしかば。門の鎖を固くして。行燈の燈口を掩ひ。敷居のこなたにかゞまりゐてまうすやう。半七が今此ざまにて。遠くさそらひ候を。姉はさらなり姫君も。さこそ怪しうおぼすらめ。そは後にこそまうさめ。さても陶晴賢が逆亂によりて。義隆義甚擊れ給ひ。金を積玉を敷たる。築山の御所灰燼となりにければ。姫君とても恙なく。脫れ出給はんとはおもはねど。御最後のやうをも聞ばやとて。女房お花もろ共に。周防を投て旅だちしは。去年の秋にて候ひしが。沼多の新關に抑留せられて。心にもあらぬ月日を他に過し。やうやくこの春。斗藪の女僧が好意にて。辛くも沼多の關を越。この地に年來住居する。刀冶同樹といふものは。お花が由緣あるにつきて。夫婦こゝに身をよしつゝ。商賈にさへなりさがりしも。姫君のおん往方をしらまほしく。且風流士の寶刀を索て。身の悞を贖ん。と思ふにかひなき夫婦が薄命。これより同樹に詐欺れて。今宵に逼る一瀨の浮沈を。祐る神の名にし

負ふ。天神川のほとりにて。環會奉りし。幸これに何かはまさん。去歳より何處にか坐したる。又何の故ありて。危きを忘れ給ひて。このわたりには呻吟給ひし。心もとなく候。と身の憂よしを搗ませて。訊奉れば槐姫は。落る涙を袖もて拭ひ。定めなき世のたゞすまひ。老僕家人に國を奪れ。わが舅君養父君。所夫さへ墓なくなり給へば。存命べくは思はねど。通がわりなく禁るから。形なき世を忍びてをり。女僧にならんと思へども。これすら大和に在ます。父母に今一トたび。見えてこそ。と諫られ。双の上をわたりつゝ。住ひし方へかへり來る。心苦しさ推してもしれ。わが身ひとつの故をもて。半七夫婦にいくばくの。艱苦を被るは不便なり。と宣ひつゝ。ふたゝびおん目を拭ひ給へば。半七は只額を著。涙に面を得もあげず。お通もさこそと推量る。主と弟が歎きのかず〳〵。憂にはもれぬ袖の雨。おなじ簷下に晴間まつ。心持はすれど氣を激して。弟が方を佶と見やり。やよ半七。和殿夫婦が伶俐て。この里へ來たるよしは。故ありてはやしれども。音耗聞えんよしなくて。思ふには似ず默止たり。さても去歳の八月廿九日。館には義隆をあへなくも。大寧寺にて自殺ましく〳〵て。麻の如くに紊れぬる。人の心に忠なければ。逆賊等が鋒鋭く。鸛峯さへおとされて。姫君に册くものは。吾儕と仙野呂東二のみ。辛く圍を砍ぬけて。澤川のほとりまで。延しまゐらしたりける折。敵透間もなく追蒐來つれば。呂東二嬢て取て還して。且く敵を拄る間に。龍顕は脱れにけれど。これより主從只ふたり。晝は躲ひ夜は走り。東を投て赴く程に。うき身の秋や安藝國。沼多の本郷に關を居られ。進退こゝに究りぬ。せんすべなさに川上なる。草莽に身を寄て。姫のうへを說しらし。ともかくもしばし進らし。さていふやう。白雲流水は。人間生前の逆旅にして。飛花落葉は。貴賤老幼の榮枯に齊し。かゝる亂れにあひ給はずば。いかでか女僧が柴門へ。金枝玉葉に比へたる。姫刀禰たちの來さんや。今更にわがうへを。隱匿奉るべうもあらず。老尼は昔太刺にて。風流士の賤刀を試獵して。黑鐵なるべかりしを。鞘間に欺かれたる。刀法間違ひ。

房。小田井といふものに侍り。さる楔しいだしたる。夫は京に住ずなりて。いはけなき孫を業。周防の氷上に赴きて。幽なる世をわたるものから。僻事のみいやませば。世間いよゝ形なく。とにかく夫を諫難たる。これを菩提の種にして。明白に暇を乞ひ。十年以前に離別して。些ばかり所縁につき。こゝに菴を締ては。なか〳〵に身も安く。忘れて年を經たりしに。今はからずも由縁ありし。蟻松ぬしの主なりける。續井家の姫君の。先途を救ひまゐらするは。これぞ離別の夫に代りて。舊恩を報ふにこそ。御こゝろ安く思召とて。信やかに語らひ慰め。おのが女兒の事孫の事を。涙と共に物がたれば。憑しくも又哀れにおぼえて。主從袂を濡らしたり。かゝりし程に。秋も暮れ。無雷月の上浣より。菴主の女僧勞ることありて。病の床に臥したるが。老たるうへの病著なればや。一チ日こゝちよく見ゆれば。次の日は首もあがらず。元來彼處は街道より。東へ入り南へ繞る。浮世に遠き山ふところにて。そのほとりなるものならでは。尋わぶる草の門なれば。潜ぶに便よけれども。菴主の爲に醫師なんどを。招くべきよすがもなく。しのび〳〵に看病も。吾儕の手ひとつなる折から。面こよなう醜くなりし。行脚の女僧ふたり來て。この夜の宿を乞にけれど。こはもし怨敵の間者歟。と疑ひ思へば得も許さず。頃日菴主は如此々々にて。重き病に臥たれば。おん宿はかなはじと。いとも難顔推辭しかば。行脚の女僧つく〳〵と。聲を聞裡を見入れて。さいふものはお通ならずや。われは平作が母園花なり。わらはゝ夏山に侍るかし。といふ聲はその人なれども。面影はその人ならず。後方なる女僧が脊に。負れたる雛兒は。平太郎にやあらんずらんと。思へども思ひ難て。應もえせずまもりてをり。常下女僧は遽しく。笈をかきおろしつゝ。竹縁に尻をかけ。かく面影の變しかば。名告つゝもなほ疑るゝ。現さもあるべき事なりかし。おん身がこゝに潜びて在れば。槐姫も恙なく。をはしますとは猜したり。わがうへつばらに告んと思へど。こゝはあまりに端居なり。許し給へ。といひながら。後方なる女僧もろともに。網代笠をかい取て。草鞋を脱ときに。やうやくその人なりとはしりて。あな淺まし。何の故にか面を燒。頭をば剃給ひし。こは〳〵いかに。と

うち騒ぐ。胸苦さは父のうへ。弟のうへに事ありて。かゝる姿になり給ひし歟。と問まほしさも端近し。先こなたへと誘引て。菴主へ縁由を告。その枕方に圓居して。まづ事のやうを問ば。園花の尼答て。米谷山なる木精塚の事。風流士の寶刀のこと。家尊の大人閉居の本末。おん身夫婦が孝心より。却過を釀せし事。弟平作が。親の爲に命を隕したる心操。仙野炊粟が早打して。周防の逆亂を告たる事。一五一十を說しらしつゝ鼻うちかみ。只ひとり子なる平作は。身を殺して親を救んと思ひたる。覺悟のうへの落命を。悔しとは思はねど。含の花なる夏山が。後の歎きも痛ましく。わつかに三歲なる平太郎が。今こそあれ人とならば。父の顏だに認らぬを。遺憾思ひもせめ。彼も痛しこれも又。痛しと思ひやる。わが身ひとつの秋ならねど。世はやかうと觀ずれば。わかゝりしとき思はずも。妹夫の緣を八重締して。姉御前を苦めたる。因果忽地廻り來て。かゝる歎きにあふにやあらん。この世だにかくの如し。罪障いまだ滅せずば。後世の艱苦をいかで脫れん。さればこの身の暇を乞て。女僧にならばや。と思ふにぞ。夏山も又もろともに。菩提の道へ入らんといふ。これも又理りなれど。廿歲になるやならぬ身の。すゑおぼつかなき出家を遂なば。世の胡盧となることあらん。賢き人のいへることあり。出家は只出家の後の。出家を堅固に遂よとなん。一旦の憂に堪ず。哀みあまりて世を捨るとも。老くだちぬる身にしあらねば。人も許さずわれも又。志の移るに易し。愁容を變ずとも。只平太郎を孚むを。身の勤となし給へ。吾儕は齡も傾きぬ。且半之進どのには。わが姉こそ正嫡なれ。しかれば良人に暇を乞て。今はや出家したればとて。笑れもせじ。譽もせじ。思ひとゞまり給ひね。と叮嚀にいひ諭せしかば。夏山貌を改めて。こは母公の宣ふ事とも覺侍らず。年弱しとて捨る世の。何かは難き事の侍らん。母御前には良人あり。齡五十に近けれども。元來人にすぐれたる。縹致にてましませば。四十のうへはまだ超ぬ。女房とこそ人も見め。わらはゝ既に良人なし。貞女兩夫に見えずと。幼稚き時に父母の。いひ敎給ひたるを。今更に忘んや。しかれば母御はかくても在はせ。夏山こそ出家すべきものに侍り。と回答ひゝ。さて諭始もろ共に。嘲と良人

にこれを告。身の暇を給はれ。としば〳〵こひも願へ共。親も曾太郎良人も半之進許し給はず。かくて平作が初月忌の逮夜に當りつ。此夕わが宿所に。親族おの〳〵集會たる。その席上にて夏山は。父と外父とにまうすやう。出家の事を日來より。願ひ奉れども許し給はず。こはわらはが年わかければ。ゆく末心もとなしとて。許されぬにやあらんずらん。心は貌によるものならねど。又そのよしなきに侍らず。しかりとも。ふかくも思ひ定めしを。いたづらにやは止べき。これもて疑念をはれたまへ。といひもあへず。爐の火の中へさしくべたる。火取の柄をしかと取り。

花は根に。かへらばかへれ。生ながら。つひの薪と。身をはなしにき。

と詠じつゝ。烈火のごとくに燒たりける。火取を顏へ推あつれば。けふり忽地發と立て。一聲苦と叫もあへず。仰さまに倒れたり。吾儕この形勢を見て。われも又。かゝる志はありながら。夏山に先せられしは。生涯の不覺なれ。後れはせじと。火取をかいとり。

櫻木を。くだけば後の。花もなし。死出の山かぜ。いざふかはふけ。

と詠しも果ず。火取を顏へ推當て。もろともに倒れたり。さる程に親族いたく驚き騷ぎて。さま〳〵に介抱せられしかば。やゝ人ごこちつきたるに。佛芹の冥助やありけん。夏山なり吾儕なり。顏はこよなう爛れにけれど。つゆばかりも痛みを覺ず。當下わが所夫は。わが兄を見かへりて。蟻松ぬし見給へりや。彼等身を捨て出家を願ふ。勇猛堅固の志。賞するにあまりあり。陶晴賢が逆亂以來。三十日に及べども。槐姬の生死存亡。今にこれをしるよしなければ。わが君御夫婦いといたう。心苦くおぼすめり。さるからに。間誤者を遣して。彼地の爲體を撈り問するに。安藝の沼多に關を居て。周防のかたへ入るを許さず。しかれども尼法師は。その沙汰を脫れて。往還自在なりと聞り。幸なるかな園花夏山。面を燒て尼とならば。よしや敵地へ赴きて。姬の在所を索るとも。誰かはこれを認るべき。良人に代り子に代り。彼等大功を立ん事。この時ならで何日をか期せん。園花が出家の事。今ぞ望に任すれば。夏山

が身の願も。諾ひたまへ。といはれしかば。わが兄莞爾と打笑て。いふにや及ぶ女兒が出家を。立地に許すべし。彼等面を燒といへども。痛なきは頗奇なり。とく〳〵出家を遂よとて。この夜延請したりける。老僧を導師として。戒を受髮を剃。吾儕は拈華。夏山は。微笑と法名給はりて。宿志を果すのみならず。かゝる大事のおん使を。うけ給はるこそ今更に。哀の中の歡びなれ。不幸の中なる幸かな。とわれも思ひ。人にもいはれて。猛に行の裝を整へ。次の日は。はや道途せんとするほどに。わが姉は昨夕より。只管泣ておはせしが。このときいよ〳〵堪がたくてや。落る涙を拭ひもあへず。恥しや姉がひに。年來夫とひとつにをれど。憂はいやますわが子のうへ。こゝにてとやらんかくやらんと。思ひやりつゝ歎く苦さ。われにはまして園花どの。はやくも塵の世を遁。身を雲水に任ずるこそ。羨しく侍るなれ。せめてこの平太郎を。吾儕が手親乎みてん。後やすく起行給へ。名殘をしや。といひかけて。また潸然と泣給へば。わが兄も又宣ふやう。汝等縱世を捨るとも。生ある程は艱苦を奈何。熟れぬ行脚に嬰兒を。携んは便なき所行なり。そは三勝どのにうち任せよ。われ又よきに勸るべし。と叮嚀に諭し給へば。夏山の尼頭を掉り。父と外母御前の淺からず。敎給ふを推辭にあらねど。凡殿の御内の。黨。忠あるも忠なきも。敵地へ赴く事かなはず。しかるに吾儕幸に。彼地へいゆきて功を立。君父の勸賞給はるとも。捨果し世に何かはせん。男子は關を許されずとも。わつかに三歳なる平太郎は。ともかくもして超さば踰てん。親の爲には孝ありとも。させる忠義は聞えざりし。亡者の名代に。この子を携ゆきてこそ。草の原にて平作どのも。さそな喜しと思ひ給はん。枉てこれをばゆるし給へ。と只管に願ひしかば。姉御前はいふもさらなり。わが兄ふかく感嘆し。わが女兒の情愿。いと理りにおぼゆるかし。三歳兒なりとも武士の胤。父に代りて母もろ共。敵地へ赴き功を立よ。心ありて面を燒。心なくして忠に晉む。彼豫讓が灰を呑。身に漆をさしたるは物かは。と稱贊して。いと喜しげに見たて給へば。わが所夫も只管に。夏山を可として。密やかに宣ふやう。仙野呂兼三郎して遂して。姫のおん仕方を惡といへども。關に宿られなば。これも又憑みがたし。汝達いかにもして。槐姫に環會奉り。關の鎖の開くまで。ふかく潛せまゐらせよ。安藝國高宮郡。多治比の郷の地頭職。大江太郎乙就は。僅に三百貫の主なれども。彼人名家の後として。勇敢武畧當時に秀。只その身祿少く。勢の微なる故に。晴賢に隨從し。逆賊與黨の志を見すといへども。裡には大内家の舊好を忘れず。不意に起て晴賢を。滅さんものはこの人なるべし。われ又殿に聞えあげて。竊に大江家に諜じあはし。槐姫の御爲に。逆賊を討滅して。大内殿の怨を復さん。このことふかく心に秘て。緣をもとめて大江家へ。便らば後に冀を得なん。ようせよ。と說示し。送るもゆくも袖に露。はらひもあへぬ浮世の塵に。まじる道者は親子三人。もしこと成らずはこれぞこの。一生の別れよ。と思へば足もすゝまねど。志を激して。只管に歩を急ぎ。いく宿りしてやうやくに。けふしも彼處の關も超。西條のかたへとて赴くに。忽地に途に惑つ。浮世に遠き柴門に。宿を乞ば思ひきや。姫の隱舍ならんとは。是は親子が誠心を。神と佛の憐みて。導き給ふものなり。と首尾を演給へば。夏山比丘尼も涙の隙に。平作が最期の光景。物かたりてはうち歎く。おなじ宿りの袖しぐれ。晴るゝよしなき一家の艱。彼世この世の弟が事。外母從弟女の變れる面影。見るにつけ聞につけ。胸のみいたく塞りて。又慰んよしぞなき。緣の趣を竊聞給ふ。槐姫は忙しく。屛風の背より走り出。園花夏山兩女僧。さても雄々しき心操。感ずればなほあまりあり。故郷を出。海山凌ぎ。飛錫行脚の難行苦行も。みなわれ故と聞くときは。けふの對面いと恥し。愁に生殘りて。身を苦しめ又人を苦め。いくその罪を造らんより。只速に自殺して。冥土にましますわが所夫に。心操をしらし侍らん。よしこれとても大和なる。親のゆるしを得受ねば。事かなはじとて許されずば。拈華。微笑が弟子となして。けふよりぞ入る御佛の。法のみちびきしてたべ。とかき口說つゝ泣給へば。園花の尼勸り慰め。御こゝろの中推量れば。痛しきこと限りなけれども。御出家の事はいまだ遲からず。女僧等がこゝへ來る途にて。人の密き語を聞くに。去歳の九月二かの日。大内殿の郎君は。築山の御所において自害まし〳〵。猛火の中へ入給ふ。と世には

をさ〳〵いふめれど。竊に助け奉る人ありて。義基今に恙なく。ふかく潜て在ます。といへり。この事もし實事ならば。御出家は率爾に侍らん。陶五郎が擧動。養父晴賢が惡虐を。たすくるに似たれ共。その底意はいかにあるらん。善惡いまだしるべからず。いそがい給ふことかは。とさま〳〵に慰めゐらすれば。菴主の老尼はいと重き。病苦を忍びて身を起し。原來行脚の尼御前たちは。蟻松ぬしの息女なり。孫女にておはするよ。寔に不思議の緣ありて。去歳の秋より。槐姫主從を舍藏まゐらす。吾儕は刀冶同樹が妻なり。首尾は箇樣々々と。昔を今に繰かへして。わがうへを說しらし。われも夫はありながら。はやくも菩提の道に入りし。事の容は似たれども。飽もあかれもせぬ夫に。わかれて子ゆゑの道に入る。尼御前たちの心操は。いと有がたく侍るかし。尼が老病身に逼れば。終焉も遠からじ。しかるときはこの菴。忽地に無住となりて。槐姫主從の。身を寄給ふに便よからず。是のみ心苦しかりしに。今はからずもこの菴を。守るべき人を獲たれば。世の疑ひを避るに堪たり。尼もし往生の素懷を遂なば。拈華尼は後住となりて。明白に修行し給へ。この地の人氣は如此々々なり。箇樣々々とおちもなく。信やかに說示せば。拈華比丘尼大きに歡び。さては父が前妻の。從弟女なりしと聞えたる。刀冶同樹の女房にて。おはせし歟。舊緣こゝに竭ずして。新尼等が師と仰ぐ。實に不思議の對面なりとて。その夜は通宵話りあかしつ。かくて二人の新尼は。同宿と稱して。笈を脊負ひ。錫を突鳴らしつゝ。日毎に三原尾道へ出て券緣し。ある時は。甲立多治比のかたに赴きて。大江家の虛實を探り索めなどする程に。其としの暮に及びて。菴主。小田井尼遷化したり。豫の遺言に任して。拈華比丘尼後住となりて。更に拈華菴と號し。微笑比丘尼もろ共に。日に市へ出て券緣すれば。近き里人等も。これを疑はす。よき後住を得て。小田井の道場を相續せしといひあへり。さる程に春立かへりて。彌生の中旬。有一夕ふたりの新尼は。例の如く券緣して歸りつゝ。吾儕に對て。けふなん牛七夫婦に逢ひぬ。彼等去歳の秋。和泉の堺にて。陽が逆亂を傳へ聞。日をかぞへて遂をいそぎ。明防を殺て赴く程に。沼多の新關に留られて。六ケ月の宿りをか

さね。路費竭て術なしといふ。しかれどもわれも夏山も。面影いたく變りければ。外母なりとも妹なりとも。名告らねばいかでしるべき。只牛七のみ。平太郎を訝しげにうち見たるが。彼等心中に憂ひを抱けば。これさへ怪とは思はざりけん。しらねばしらぬ隨にして。外々しくその故を問ば。如此々々のことによりて。周防の山口へ赴き。刀冶同樹といふものを尋るといへり。おもふに彼等は。槐姫の先途を見まゐらせ。又風流士の寶刀を索出して。犯せし過を免されん。と願ふなるべし。しかれ共彼寶刀の事は。館勝既に後悔し給ひて。思ひ捨給ふものなれば。今更これを求め出すとも。勞するのみにてその功なし。名告て事の趣きを告しらせ。葬へ將て來ばや。と思ひしが。彼等は元來。その罪にあらずといへども。いまだ君より赦免を得ず。加旃。廣もあらぬ草莽に。わかき夫婦を引入れなば。これより里人に疑れて。槐姫のうへに。又いかなる禍。のいで來なん。これも又影護し。その行かたは既に聞つ。けふは名告らで立わかれ。姫のうへに。事あらんとき。牛七に功を立さして。身の幅廣くするにはしかじ。と深念して。なほ外かましくこれをもてなし。わが柴門すら定かに告ず。只懷なる關防牌面をとらしたり。と物がたり給ひしかば。われもはじめて。おん身夫婦が。うき旅に。年を越たるよしをしるから。心もとなさいやましたれど。忠義の爲に思ひかへて。只一トたびの音耗もえせず。しかるにいぬる月。沼多の關の戶開たるころ。拈華菴主ゆくりなく。仙野呂東二が。姫の往方を索まゐらするに逢ひにければ。豫て受たる計策を告しらし。大江家の形勢を見て來たまへとて。これをば多治比の鄕へ遣し。彼人の歸り來ば。一圓姫君のおん俱して。大和へ赴んとて待程に。呂東二は歸來ず。何事やらん。沼多の近鄕。いと惡劇なりにければ。姫君こゝに在するよしを。人にやしられたりけん。しからば呂東二の歸り來るを待かたし。備前備中までも。延しまゐらせん。と思ひて。主從が形を變し。新尼たちを前に立して。拈華莽を出たるに。ゆくこといまだいくばくならず。野伏忽地四下に起りて。新尼たちは隔られ。三原のかたへゆくことかなはず。かくてはゆくさきこゝろもとなし。却山口の方へ走らば。野伏の害を脫れ給はん。見牛七は。

氷上の郷にありと聞けば。かゝる時にこそ。弟に功を立させん。と思ふてやうやくに虎口を殺脱。主從ふたり。たどるたどるも。晝は人なき樹蔭に躱れ。夜のみ道を走りつゝ。天神川のほとりまで來たる折。おん身は人に拳懲さるゝ。ことの容を竊聞に。いたくおん身を拳ものは。刀冶同樹にこそあんなれ。這奴はよからぬものなるよし。前の菴主が物がたりにてしりぬ。うたてやな半七は。風流士の寶刀を索ん爲に。彼と親子の義を結て。今この呵責を受るにこそ。槐姫を舍藏まゐらしたる。尼には舊の夫なりとも。這奴を在せば半七も。志を舒がたく。姫君のうへ。いと危し。今忽地に不意に出て。禍を斷にはしかじ。と思ふ心を鬼にして。さてぞ同樹を砍流しぬ。と一五一十を物かたれは。半七しば〳〵歎息し。外母園花どのはさらなり。平作といひ。夏山といひ。世には稀なる孝烈の。弟。弟婦を持ながら。半七はいひがひなく。只管寶刀を索ねん爲に。刀冶同樹にはかられて。彼が子となるのみならず。女房お花を賣られたる。爲體は箇樣々々と。夫婦が薄命を告しらし。さるにても。惡棍の。同樹が妻にも又かゝる。眞實の比丘尼あり。只遺憾かるはは。某夫婦眼ありながら。縱面影は變るとも。外母と妹をそれともしらず。抖擻の女僧とのみ思ひて。外々しく立わかれ。後に葬を索ねたれ共。沼多川の東村には。さる柴門のなかりしかば。原來は信ずる辨財天の化現して。關をば超さし給ひけん。と愚にも推量りて。再びは尋ざりし。身の怠こそ面目なけれ。しかれども半七が。武運いまだこゝに竭ずして。姫の先途にあひ奉り。死をもて恩に報はんこと。これ平生の願ひなり。と回答つゝ。或は歎び。或は歎き。義心面に見れしかば。槐姫は今更に。憑しき心持しつ。お通諸共半七お花が。薄命を憐み給ふ。會話に夏の夜の。墓なく明て門にさす。旭は高く昇けり。當下半七は。窓の扇引あけて大きに驚き。長物かたりに時を移して。思ひの外に天は明たり。わが姉同樹を殺し給ふ折。二人の癖者左右に立て。事の爲體を强たり。一旦は迹を埋て。この處へ伴奉るといへ共。這奴等かならず縣正へ訴べし。しかれば虛々と。主從ここに泊らんことは。斷の上に巢を營む。燕に異ならず。天の明ぬ間にこそ。姫君の御供して。脫れ去べき思ひし

に。日も出たれはいと便なし。さればとて此處は。久戀の家にあらず。まづ姫君に湯漬を進らし。主從物よくとゝのへて。間道より走るべし。さはとて眉に火のつく如く慌忙つゝ。支度やうやくとゝのふ程に路次の人目をしのぶ搨。お花がきのふ脫捨たる。ふるき布の單衣をお通に被せ。お通が單衣をば。槐姫に被せまゐらせ。半七は長やかなる。刀を取て脇夾み。杖よ笠よといそがす程に。外面に跫然と。人の走り來る音して。門の扇を打敲き。刀冶どのはまだ覺ずや。朝寢するには程もありなん。寢惚れずによく聞給へ。これは村長より御使うけ給はつたる。十个村の步牌場太郎なり。何かはしらねど。尋給ふよしあるに。半七を將て參れ。と宣はすれば。とくもろともに參り給へ。といかめしく呼かけたり。半七はこれを聞て。すはわがうへよ。と思へども。なか〳〵にうちも騷ず。まづ姫君を奥へ潛し。さてお通に密語やう。絆既にこゝにおよべば。このまゝには脫れ果べうもあらず。某は步牌とゝもに。村長許赴きて。ともかくもいひこしらへて。軈てぞ歸りまゐるべきに。姉御前は。門と脊門をよく鎖て。半七が歸るを待給へ。暑堪がたく坐すべけれど。彼方ざまをば納戸なる。押入の上戸棚へ。潛し給へ。といふ間に。又門の扇をうち敲き。刀冶どのはまだ起ずや。いつまでか待し給ふぞ。村長どのゝ待わび給はん。とく〳〵ゆきね。といそがせば。半七はなほ騷ず。をい。と應て壁際なる。竿にかけたる麻袴。前紐取て穿ほどに。お通が當る腰板や。胸さへいたや。生死の際。いひ脫れてもかへさずは。只殺脫て歸らんものを。と思ひ定めて脇挾の。鞠濕して門の扇を。瓦落離とあけて。脊さまに。礇と建たる半七を。先へ立する場太郎は。婆蓼羅々々々と敗草履に。蹶かへす塵埃をたゝしつ。なほいそがして將てゆきぬ。

槐樹の手斧

却說お通は住つかぬ。家におちゐぬ胸を拊。今更脫れかたなやの。劒の上をわたるより。なほ危きは姫のうへ。弟

がうへも心もとなし。半七はとく歸れかし。往も還るも敵の中。廣き世界を陝布の。胸あひがたき借被の單も。君が爲には掩ふべき。袖こそなけれしかすがに。濡るゝはおなじ袂なる。八しほにあまる物思ひ。わびつゝ待ばいと長き。夏の日影もやうやくに。西へ傾くひつじの時。屠處の歩み歟音もせず。只門の扇をほと〳〵と。敲くは當に半七なるべし。恙なく歸りしよ。待わびにき。とひとりごち。やをら門の扇引あけて。と見れは彼は半七ならず。吐嗟とばかりうち騷ぐ。氣色を見せじと思へども。疵もつ脚におのづから。膝はわな〳〵慄つゝ。何處より來ましたる。半七は宿に在らず。翌又來ませ。と門の扇を。引たてんとする手を楚と捕り。さのみいぶせくし給ふな。わが宿にわがて。且く顏をうちまもり。わらははあるじ半七が。眞實の姉に侍り。この刀冶は半七が。名蹟相續せしと聞に。わが宿とはなめげなり。留主するものを女子と侮り。なき事をいひかけて。折もよくは物を取りて。走らんとての底意歟。出でゆきね。と言葉雄々しく。弱氣を見せねど。とにかくに。心にかゝる納戸なる。姫にぞ胸をいためたる。いふ事いはして冷笑ひ。半七は刀冶の。名蹟とならばなれ。同樹どのとは根これ他人。われは敗鐵の全介とて。刀冶の孫息子。京にて生れ浪華にて。人となりて平城西國。跨にかけたる氣剛もの。勿論養母の世にありし日は。孝行といふ事を。些ばかりは眞似ても見たれど。持歩で辛い世は渡られず。近來祖翁にしこまれて。わるい事には熟易く。律義篤實さらりと止て。濡手に泡なろ𠮟取り。本錢容れず圈ると。いふ事ならば何時でも半口。されば馬には騎て見よ。人には添といふことあり。半七には。まだ面識にあらね共。姉御といへば鰯烹たる。鍋にはいやます臭い中。表液なりとも吸してたべ。といひつゝ直と抱きつくを。衝除て走り退。あななめげなる白物かな。みだりかはしく手を出さば。辛きめを見て後悔せん。とく〳〵去ね。と威しても。聞かぬ態してにじり寄。いな姉御。さのみ雜面宜ふな。歸れ出さと謀たとも。こゝより外に宿はなし。半七が被御ならば。面識にもなるべきものを。恙憑おん身は何處

から。何日又こゝへは來ませし。と問れて忽地さし詰り。應かぬれば冷笑ひ。そはいはれまじ。いはぬきていはさでやは。といへば言葉に角がたつ。いはぬにはいふにますは色情。一目看しより。命にかけて大誓文。男風流は二の町なれども。第一によく拵了で。小遣錢に事缺せず。第二には朝起して。飯炊おろして家々を起す。第三には水を汲み。洗濯衣の手傳する。夫にすれば得要向。色ある返辭を聞してたべ。と又引袖も倘事の。敗にやなるべきと。思へば今更もて煩ふ。胸くるしさを笑に紛らし。色は思案の外とかいへど。よく思ふても見給へかし。おん身はこゝの孫の刀禰。と宣ふに僞なくは。同樹どのゝ子になりし。半七はおん身が爲に。假初ながら親ならずや。その半七が姉なれば。わらはゝ即おん身が伯母。その伯母を犯さんとて。不義いひかゝるは是畜生。人はよろづの靈なるものと。かしこき人のいひおきし。五常の道をしらずもあれ。畜生に異ならぬ。行ひざまはあまりなり。と恥しむればうち笑ひ。さて物々しき服忌令。禁忌繰て窘ても。いひは逃さぬ互の誓言。わが夫にせん。妻にせんとて。正しく贈りし壻引出を。はや忘し歟。と抱留れは。やうやくに搔遣りつ。こゝろ得ぬ事いはるゝよ。けふあふてけふはじめて。物いふ人に何をか贈らん。醉に紛れて歟。さま〳〵なる。根なし言聞くいとまはなし。といひつゝも又走り退くを。遣りも過さず帶引留。正しき證據あるものを。今更に嫌れては。一分たゝぬ男子の意持。これ見てもなほ諍ふや。といひも果ずに遽しく。懷よりとり出す。隻足の桐の下駄の眞中。打こみし笄は。胸におぼえのあるよしを。いはでも色にあらはれて。それは。とばかり口隱れは。ふたゝび目前に衝著て。いかにこれをよくも見よ。神を誓ひの天神川。夾と砍こむ水浴せは。壻を祝ぐ昔風流。亦逢ふ迄の像見ぞと。打かけて贈る笄を。受たる下駄は今宵の島臺。思ひあふたる嫦夫の道を。踏たがへじとて來しものを。難面君にてありけり。と下駄に寄たる戀ならで。今ぞ讀たる身の仇に。お通は結句うちも騷がず。その笄の引出物。いはるゝ如くおぼえあり。見放してだに給はらば。嫦夫の緣しを結びもせんが。木を伐ものは斧をもてし。娶るものは。媒による。迭に浮氣の轉寐は。袷蒲團

の薄情。二枕の間より。秋風たちて末遂ず。半七が歸りて後に。彼にも緣由を告。さて媒妁を雇ふて。と半いはさず頭を掉。いな半晌も延されず。勿論夫婦の婚義には。媒妁もあるべき筈。處を畧すも世に往々あり。なくて稱ぬは待女郎。これには奥なる槐姫。引搨出して目に物見せん。と裳裳て立あがれば。お通は吐嗟と携留。原來昨夕の形勢を。一から十までよく見果て。しかへしに來たる敗鐵全介。半七はわが實父全八どの丶仇人の一隻。汝は又祖父の讐。彼も是も放されず。累る怨に眼前。槐姫が首を刎て。陶殿へ進らする。妨すな。と丁と蹤る。足を抱きて些も放さず。さ聞ては彼處の敷居を一歩なりとも。踰させし。女子にこそあれ主に冊く。赤根半之進が長女。通が命のあらん限りは。姫君をやは擊せじ。とまつはる力も女子のかひなさ。踏轉されて。聲斷離。髮も心も亂燒なる。懷劍晃りと引拔て。突かくれば身を反り。戯すな。と把たる下駄に。刄を戛哩と打おとし。怯む腕を背へ揉揚。壁に掛たる細紐を。かいとりはやく搦著て。柱へ楚と繫ぎ留れば。お通は頻りに蹉跎して。柳の眉を引たてつ丶。眼を睜り齒を切り。朽をしや。もし半七が宿に在らば。かくまでには手ごめにならじ。去歳より敵の刄の下を。いく遍歟脫れ〳〵て。けふ思はずも。殘忍無賴の惡棍に。あへなくも擊れ給はん。姫君の御運の杪。歎くにもあまりあり。庶幾莫生ながら。靈となりて著まつはり。姫君を救はでやは。この半七はなどて遲き。風まつ程なる燈の。花よりもなほ危き。姫君のおん命を。助る人はなき世か。とかき口説つ丶身を起し。走らんとすれば縛の。索に牽る丶意馬心猿。狂ふもいとゞ哀れなる。その隙に全介は。綬びし帶を結びそえて。裳を引折り刄を引提て。ふた丶びお通に立對ひ。やよ。赤根が長女。汝は祖父同樹どの丶仇人なれば。第一に首引拔て。手向べき奴なれども。今しばし活しおきて。槐姫が首を見せ。飽まで物をおもはせん。いでや姫を。と踵を廻らし。納戸へ走り入らんとする。背に隙る門の扇の。音に佶と見かへりて。歸りしものは半七よな。と問せも果ずこの形勢に。奮然と走り入り。われを半七とする汝か。お花が迯か碎拏なりとて歸り來りし。[illegible]

縛るとも。われ今こゝに歸り來ずれば。物とらんとする畫高奴。さそな較計違ひけん。と罵れは眼を瞪らし。盜賊とは過言なり。われを誰とか思ふらん。相合橋のほとりにて。汝が父に擊れたる。今市全八郎が落胤。同苗全介なるをしらずや。親ならぬ親に孚れて。浪速にて人となりしかば。近ころはじめてわが實父の。仇人を赤根と傳聞て。更に大和へ住宅を轉じ。櫟本の松原にて。半之進を狙擊といへども。微運にして素意を果さず。友たちにそゝのかされ。風流士の大刀を追ふて。この處へ來て思はずも。亡母の繼父たる。刀冶同樹に環會。汝がこゝに在るをしれり。しかれば今の半七も。わが爲には仇人の一隻。まづこれを擊とつて。聊亡父の孝養に。供んものを。と思ひしかば。更闌て俟天神川の。水逆さまに流れてや。却汝等に謀られて。あへなく祖父を擊したる。怨をこゝに復さん爲に。汝が姉に辛きめ見せ。汝等が主と仰ぐ。槐姫の首を刎て。汝が歸るを待んとせしに。招ずも寄る夏虫の。火虫に似たる靑蠅ども。押並べて擊殺さん。觀念せよ。と勢ひ猛く。罵かへせば半七は。輾然とうち笑ひ。原來汝はその昔。不忠非義の聞えありて。わが父に擊れたる。全八が子なりし歟。天罰脫れず落命せしは。汝が親の自業自得。とは思ひかけずして。復讐なんどと人がましく。罵るは傍痛し。主と親とに寇をなす。汝をいかで放すべき。双を受よ。といきまきつ丶。袴の左右を結あげて。紐の間へ挾めは。全介ます〳〵大きに怒り。無益の戯言吐んより。念佛まうせ。と跳かゝつて。砍らんとすれば半七も。拔あはして丁々發矢と。烈しく打あふ鍔音は。鍛冶が鏨に異ならず。刀尖より火を出し。一上一下手煉の太刀風。あふり立。卷かへし。受つ流しつ戰へは。お通は傍に帖さの。見る目いぶせく立つ居つ。弟に力をそへんとは。思ふものから縛の索に引れて輾轉。又身を起して走りよるを。妨すな。と全介が。足を飛して殿と蹴る。灸所を撲れて苦と叫び。撞と倒れて起も得ず浩處に外面より。士卒百人あまり將て。いかめしく先を追しつ丶。手親首桶かき抱き。刀冶が門ちかく。いで來るものは別人ならず。これ陶五郎隆春なり。今茲廿歳の角前髮に。身岌高く人品秀。大和錦の陣羽織に。金作の太刀を佩。正平革の身甲に。鹿皮の行騰し

て。十王頭の髑髏に。路踏しむる意氣揚々。凜然として門邊に立在。とく打入れ。と下知すれば。先鋒なる兵二三十人。はら／＼と走り懸て。打あふ双を割て入。陶殿の嚴命なり。鎭れやつ。と推隔て。半七と全介を。左右へ引わき押取卷ば。全介は齒を切り。半七は今さらに。胷うち騷けど網裏の魚。且く息を吻てをり。當下陶五郎は。悠然として上坐に。床几を立さし尻をかけ。刀冶半七うけ給はれ。汝槐姫を舍藏よし。訴人あつて慥にしれり。さるによつて。曩に村長許召よして。事の容を尋さするに。言を飾て首伏せず。一旦放かへせしは。その不意に出ん爲なり。身の仇なれども故主の息女。人傳には。心もとなく思ふゆゑに。隆春みづから向ふたり。槐姫をとく出せ。といそがせは半七は。怒れる眼に淚を含。推參なり陶五郎。おなじ父母の骨肉なれども。汝晴賢に養れてより。心ざま父兄に似ず。頻に養父が逆謀を翼て。相傳の主君を害せば。天と人と共に容れず。誰か生ながら。その宍を食はんことを願はざらん。しかるになほ憚らず。こゝに來て槐姫を。害し奉らんと謀るとも。姫君こゝにはましまさず。とく／＼歸れ。といはせも果ず。眦かへして佶とにらまへ。過言なり半七。むかしは兄弟。今は怨敵。身の中の腐るゝをは。はやく鏃除ざれは。その腐除がたし。と古人もいへり。君臣を見ること。塵芥の如くせられしかば。臣又君を讐となす。父子兄弟もこれにおなじ。大内殿の滅亡は。みづから招し孽なるに。わが父を逆賊と。罵るは惑ひならずや。そはとまれかくもあれ。槐姫はこゝにあらず。と陳ずればとて實事として。立歸る隆春ならず。論より正しき證人あり。厚倉隼人とく出よ。と呼入られて外面より。阿と應ていで來たる。敗鐵の四五六が。はじめには似ぬ勇々しき打扮。飾磨紺の四天に篠肱當さして。朱鞘の兩刀いかめしく。禹步に步み入るを。全介はつくづくと。これを見て且呆れ。四五六えらき出世かな。といふをば絶て見もかへらで。半七にうち對ひ。槐姫に册きて。父と共に華洛に赴き。それより直さにこの地へ來たれば。汝はわれを見忘れけん。父二郎大夫が身まかりし後。不覺に逆酒に身をもち崩じて。闇夜が逐電し。淚華へいゆきて敗鐵の。四五六となりさがりたれども。去歲の秋。又

こゝへ立歸り。今陶殿に荷擔して。むかしの武士に立歸る。厚倉隼人友善が。奉公の手はじめに。槐姫の訴人せし。證據はこれぞ。とさし出すは。夜べ打かけたる半七が。刀に附たる小刀子なり。半七はこれを見て。拳を握齒を切り。原來汝は二郎大夫の一子隼人なりけるよ。汝が大和に在し日は。われ總角のころなれば。その面影をよくも認らず。曩にはこれなる全介と示あはして。小俣よりの使と僞り。女房お花を奪ひ去り。今亦槐姫のおん在所を。敵へ告てその死を促す。揃ひに揃ひし犬自物。半七が刀の目釘の。つゞかん程は殺死せん。そこな退そ。と罵て。立あがらんとすれば陶五郎。這奴打すゑよ。と下知するにぞ。推取卷たる兵等が。揚る笞に半七は。背肩腰亂打に。打惱されて倒れけり。厚倉隼人これを見て。呵々とうち笑ひ。案內知たる納戸のうち。いで姫君のおん頸を給はんといひかけて。やがて奧へ走り入り。且くして聲をかけ。丁と打つたる大刀音に。半七は只氣も半亂。お通もやうやく身を起せど。縛の索と數ケ處の撲傷に。脚腰たゝぬ矢傷の鳥。共音になくぞ理なる。かゝりし程に厚倉隼人は。鮮血下乘槐姫の。頭を引提て走り出。豫て納戸に舍藏たるを。某曩に脊門より張ひ。その巢をばよくしりつ。殿いざ實檢し給へと。いとほこりかにさし出す。姫の首級を陶五郎は。と見かう見て莞爾とうち笑み。女流なれ共義基の北の臺。續井順勝の女兒なれば。生おかば後日の禍胎。わが父頻に心を勞し給ひたるに。御邊の忠訴によつて。忽地に頭を獲たり。されば此度の勸賞に。父二郎太夫が舊領を。返し與る所也。富田の和歌山に在住して。なほ忠勤を勵るべし。と說示し。携たる首桶へ。姫の首級をとり納れば。厚倉隼人額をつき。なほ向後も郎君の。吹擧を願ひ奉る。と媚る言葉の尾につきて。全介は貌を改め。某も又願ひあり。嗚呼がましくはおぼさんが。この半七には舊怨あり。某が實父全八郎は。二十四ケ年前に。赤根半之進に擊れ。又祖父同樹は。昨夕お通に擊れたり。曩には養母の遺言によつて。いまだ宿志を果さずといへども。彼も又仇人の一隻なれば。まづ半七を擊とつて。聊亡父の孝養に。供んとする折から。高貴の來臨便なくて。思ひの外に抑留せらる。あはれ君。既に兄弟の義を絶給はゞ。

半七お通を某に。給はれかし。といはせも果ず。陶五郎は眼を睜り聲をふり立。この白徒胡亂なり。復讐には。式作法もあるべきに。當の敵を擊ずして。その子を擊事やはある。おもふに這奴は。野伏山客なんどなれども。四ケ國の主改代の時を窺ひ。復讐なりなんどといひこしらへ。名を取り祿を貪んと謀る。癖者にてぞあらんずらん。這奴縛よ。といきまけば。全介直と呆れつゝ。頻に隼人を見かへるにぞ。厚倉は傍痛く。おそる〳〵小膝をすゝめて。陶五郎に對ひ。いな。郎君。彼は某浪速にて。他事なくも交參たる。敗鐵全介といふものなり。時と物とを辨へず。かろ〳〵しく復讐の事を願ひまうせしは。こよなき越度に似たれども。別にさせる佞倆にあらず。只友善が面に覩て。全介を許し給へかし。と言葉を竭して勸解しかば。隆春やうやく面を柔げ。しからはこの全介をば。隼人御邊に預くべし。いかに半七彼處に縛られたるはお通なるよ。汝等も主の相伴に。首刎べき奴なれども。肉緣の好み。一旦は見放すぞ。志を改めて。わが父に降參せば。隆春よきに汲引して。世間廣くなしてとらせん。物ども續。と徐やかに。首桶を抱きつゝ。床几をはなれて立かへれは。前駈後從の猛卒力士。敬ひ册く威儀堂々。心ならずも全介は。厚倉に伴れ。ゆくを目送る半七が。腸を斷遺恨の涙。おなじ恨みは姉お通。暴虐非道の弟隆春。虎に詔る厚倉隼人。彼此共に主の仇。何處まで遺べきぞ。いで追續て擊留ん。と刀を杖に半七が。心ばかりは早れども。節々痛む魚屋の雞。姉は綱手に狂ふ猫の。花壇にあらぬ浮世の嵐。蝴蝶の夢歟幻の。身はうつゝなき同胞が。外面しばし睨つ。納戸のかたを見かへりつ。胸を打てぞ歎きける。

夜川の野航

東都 曲亭馬琴編次

看々主の頸を遞せし。半七お通が恨。喩るに物なしといへども。大厦の將に倒んとするときは。一木のよく拄べきにあらず。只臍を噬み。腸を斷のみ。又せん術もなかりけり。かくてあるべきにあらねば。半七は忙しく。お通が索を釋捨て。面なげに跪き。國亂れて忠臣見れ。家貧して孝子出。半七不肖の身を以。君家の難に命を惜ず。偏に孤忠を盡さんと欲すれども。虎狼途に横りて。事既にこゝに及べり。姉御前は。ともかくもして大和へ赴き。君と父とに。事の趣を告給へ。某は速に。槐姫に追著奉りて。冥土のお供つかまつらん。といひも果ず。刄を肚へ突たてんとする處を。お通は急に推留て。潸然と涙を落し。死んと思ふは理に似たれど。死して忠義になるものならば。われこそ先へ死べき身なれ。死して益なきことよしは。いはでもしるき姫の怨敵。陶五郎なり隼人なり。一刀怨みてその後に。肚かき切て死ぬるこそ。眞の武士とはいふべけれ。心つきなく狼狽て。世の胡慮になり給ふな。と諫れば半七は。有理と曉りて刄を納め。姉御前の異見道理に稱へり。今堪がたき恨を堪。忍びがたき羞を忍び。灰を呑み身に漆さしても。陶と厚倉を狙擊。しかして後に殉死とも。實にこれ遲きにあらず。しかれども某こゝに留らば。寃家も又油斷すべからず。一圓隣國へ身を避て。しのび〳〵に寃ふべし。姉御前は。直さに大和へ赴て。これらのことを告給へ。同胞もろ共にをらん事。謀なきに似たり。といへばお通はうち點頭。吾儕もしか思ふなり。

曇に沼多の菴を出しとき。野伏等に推隔られて。拈華微笑尼に得逢ずなりぬ。かゝれば彼尼刀禰たちの。さそな胸くるしく坐らめ。今宵は槐姫の亡骸を。煙となし奉り。灰を掻き骨を收め。これを携て沼多へ赴き。彼尼刀禰たちに。縁由を告しらして。彼處へ葬奉らばや。と思ふかし。おん身もまづ安藝國まで退きて。尼刀禰たちに對面し。又お花が往方をも索たまへ。彼剛敵を擊んこと。一朝には謀りがたし。早りて失し給ふな。と叮嚀にいひ諭せば。半七これに隨ひて。志を激しつゝ。撲たる身の疼痛を忍びて。お通もろ共納戸より。姫の亡骸を扛出すに。被まゐらしたる單衣の。いたく鮮血に塗れしかば。その色としも身えわかず。頭顱なければ在りし世の。ぬしとも定め難るまでに。淺ましきことゝふべうもあらず。涙のみ只はふり落て。何せんすべもなつの日の。暮るゝを待て亡骸を。密やかに野外に出して。遂に一片の煙となし。遺骨をば壺に納めて。これをばお通が項に懸。やがて同胞うち連だちて。安藝の沼多へとてゆく程に。その夜通宵走りしかば。福川のあなたなる。八千川のほとりまで來にけり。十七日の月もやゝ傾て。はや曉るに近かり。こゝにて夜をあかしてこそ。彼川をば渡さめとて。同胞もろ共に。夏草を折布て。小霎時憩んとしたる折。途より跡を跟てや來けん。引剝奴とおぼしくて。月額の跡長く延せし。身丈高き暴雄等。二三人。樹蔭より走り出。まだ年わかき男女の。夜をこめて路を奔るは。仇なる色情に跡を闇し。鞆の便船をこゝろ當に。大坂へとてゆくにやあらん。疲勞たらば竹輿なりとも。馬なりとも貸べきに。酒價をだせ。と散動つゝ。前に進みし大倭子。衝と寄て半七が。胸前を無手と捉り。右の拳を懷へ。さし入れんとする處を。拂ひ退つゝ身を起し。引被て撞と投れば。後なる兩人の惡棍ども。大きに怒て聲をもかけず。双を拔て砍んとするを。半七得たりと身を反り。右を拄。左に當り。いとも烈しく戰ふ程に。投られたる大倭子。やうやくに身を起して。三人が中に押取卷。多勢を憑に砍たつれば。お通は傍に見るも陷く。弟に失あらせじとて。懷劍を引拔つゝ。惡棍等が後方より。一撞撞て驚りしかば。奴子なれども傳りがたく。惡棍等は。鋭に背に敵を受て。大刀さゝ忽地倒れにければ。半七勢ひ十

倍して。踏込て擊刀に。中なる賊が。脚を。三寸あまり丁と切り。かへす双に左手なる。大倭子が右の腕を砍ておとせば。仰さまに倒るゝを。お通はやがて取て押へ。懷劍を取なほして。胸前ぐさと刺徹せば。二人の惡棍ます〳〵瞻て。双を引て逃走るを。半七は脫さじと。喘々ぞ追てゆく。その間に。お通は双の血を拭て。やをら室へ納めつゝ立あがり。やよ半七。ながおひなし給ひそ。やよ半七。と呼かけて。跡を慕つこれも又。まだ明やらぬ水の隈。河原に近き二枝路。おぼつかなくも追蒐たり。さる程に半七は。二人の惡棍を逐ふこと五六町にして。やうやくに擊留しかば。更に奮の處へ走り歸るに。姉お通は何處へかゆきけん。しば〳〵呼べども應せず。もし惡棍が支黨の。この處に躱れ居て。姉を掠てや去けん。とおもふに。心もとなさいふ可なし。あまりに索わびて。川の上に赴くに。向には岸に繫る船の。二艘ありしとおもひつるに。今見れば只一艘あり。原來わが姉は。川を渡給ひけんとて。遽しく水際に立て。船へ閃りと乘飛れば。船桁に。いたく縛られたる人あり。夜川の水煙にて。顏は定かに見えわかねど。女子なり。猿鑣といふものを被られて。手さへ背へ繫れたる。こはわが姉にて在しけり。と思へば更に問諦るに及ばず。軈て縛の索を解捨。猿鑣を外しつゝ。はじめてその顏を見れば。あな淺ましし。姉にはあらでおもひがけなき。妻のお花にてありしかば。こは〳〵いかに。とます〳〵驚き。まづこれを勦り。且その故を問に。お花はよゝとうち泣て。夫の袂を顏におし當。應だに得せざりけり。且して涙を拭ひ。主の爲夫の爲に。一トたび捨たる身にしあれば。飽で別れゆく水の。環りあふ瀨は憑まれず。とうち歎きたるに思ひきや。夜川の船ともろ共に。繫ぎとめたる孀夫の緣。竭ずこゝにて逢んとは。さても一昨の黄昏に。小俣の縣正の使者なりとて來つる惡棍等。わらはを彼處へ將てゆかで。あやしき小屋へ舁入たり。その爲體こはまたく。花街へ賣にやあらんずらん。と推量れば心もおちゐず。彼寶刀に身を代て。陶が妾となるだにも。生て歸らんとはおもはざりしに。況や遊女とならんには。恥のうへなる恥にこそ。只速に自害して。身を潔くせんものを。となか〳〵に思ひ定めてしが。わがうへかくもなりゆけば。風流士の寶刀

のことも。虚言なりとは推てしらる。われはともなれかくもなれ。良人のうへいと心もとなし。かなはぬまでも脱れ出て。これらのことを良人に告。その後に死なば死てん。しかなり〳〵。と忽地に思ひかへしつゝきのふの曛昏に。物に紛れて潜び出。間道より走る程に。不覺に路に惑ひつゝ。氷上の方へは得もかへらで。其處ともしらぬ山路に入りて。物問んにも人には逢ず。さて山路にて夜をあかし。又山路にて日を暮し。辛して里へ出。やゝこの處へ來たりしに。いとおどろ〳〵しき倭子ども。二三人走り出て。矢庭にわらはに猿轡を銜つゝ。この船の中に繫ぎ置。跡よりも又一人。よき鳥のいで來るぞ。それには男の侶もあり。侮りて走らすとな。一人がいへばこゝろ得貌に。みな點頭て待てをり。かくておん身が。彼悪棍等と戰ひ給ふを。こなたより見るといへども。問遠ければ。何人なるをしらず。物いはれねば。呼かけて。救ひを求んよしもなく。うきを見るめの水と陸。藻に住蟲のわれからと。音にのみなきて侍りし。といひかけて又よゝと泣ば。半七頻に嘆息して。やをら背をかい捺り。別れしは一昨なれども。おん身が往方心もとなく。たづね逢まく思ふものから。又一層の禍ありて。安藝の沼多へと夜をこめて。赴く途にては。からずも。おん身が先途を救ふこと。哀の中の歡びなり。まづ何よりか語るべき。彼件の事どもは。彼悪棍等が詐詭の計にてありしかば。風流士の寶刀をとりも復さず。剩その夜。天神川のほとりまで。彼老翁に誑引出され。綽既に難儀に及びし折。思ひもかけず姉に救れ。槐姫に環會奉りて。やがて宿所へ誘引奉る程に。はや訴人ありて。あへなく姫を擊れたり。かゝれば一チ日たりとも。存命べき身にあらず。肚かき切て姫君の。冥土の鄕導せん物を。と思ひしが。是すら姉に諫られて。更に仇人を擊ん爲に。且く彼地を退て。姉もろ共に。沼多の拈華庵へとて赴くなり。はじめをいへば箇樣々々。とお通が同樹を天神川へ欣流せし事。敗鐵全介がこと。陶五郎がこと。厚倉隼人が姫のおん頸を刎たること。拈華庵の爾比丘尼は。外母園花と。お花が妹の夏山なりしこと。此彼おちもなく物語れば。お花はつく〳〵とこれを聞て。或は驚き。或は哀み。或は怒り。或は怨み。或は悲み。或は涙を洗ふ如く。在明の月もこれ

が爲に。更に光をとゞむるに似たり。且して半七は。忽地陸のかたを見かへり。今既にお花に環會といへども。鄕に草賊等を追ふときに。姉の往方を失ふたり。お花はこゝにて。彼爲體を見たるらめ。女子の川を渡すをば見ざりしや。と問ばお花はうち點頭。現宣する如く。鄕におん身が悪棍等を追蒐て。西のかたへ走去給ひし時。跡に殘りたる婦女子。頻に聲をふり立て。長追なし給ひそ。としはゞ〳〵呼かけて立在たるが。遂に左手に繫ぎたる。野船にうち乘つゝ。みづから棹を操りて。向の岸へのぼりにき。原來姉御前にをはしけり。といふを半七聞も果ず。しかるときは心安し。われも向へ船を著て。とく姉御前に逐著んとて。遽しく纜を解捨て。船を河中へ漕出しけり。浩處に一人の癖者。雉荻の中より顯れ出。引提たる種島の。鳥銃をとりなほし。河中なる船を望て。火蓋を切て撞と發すに。半七はやく棹を抱て。舷に伏にければ。丸は頂の上を過て。ぬしは身に恙なし。癖者はこの形勢に心慌て。又遽しく丸を籠。再び狙擊んとするとき。船は忽地向へ著て。間遙に遠離れば。癖者大きに焦燥て。鳥銃を憂離と投捨。續て向へ渡さんとて。船を索て河流へ。足ばやに走りゆく。傍の蘆荻をさら〳〵と推わきて。顯れ出るはこれも又。癖者とおぼしくて。手拭に面を裏み。肩に受たる金瘡を。布もて卷て項に懸。手痍に屈せぬ面魂。河原を走る癖者を。つく〳〵と透見て。全介等。と呼び留る。聲もろ共に明烏。森をはなるゝ朝風に。夏いと寒き八千川の。水よりしらむかはたれ時。はや旅客のいで來る歟。と左右を見かへりつゝ。立よるをなほ招きよして。此彼しばし密語なるべし。

合歡の花桶

（一頭註。是より下結局に至て前帙四卷の脚色解然と氷の如く天文二十一年。夏六月廿かの日。安藝國高宮郡。沼多の鄕のほとりなる。彼此人。隊をなし講を結び。拈華比丘尼が草菴に。嚴島の辨財天を勸請して。三日三夜の法莚を開ことありけり。その故をたづぬれば。今茲は五月のは一段の佳境に入る凡披閲の婦幼再三意をとめて味ふべし。）

じめより。絶て一滴も雨ふらず。草木は枯槁。金石は流鑠。行人途を去りあへず。民の歎き大かたならねば。雨乞の祈禱をせんとて。彼此の里人等。女僧が菴に天女を祀らし。或は五色の幟を建。或は笛を吹鼓を鳴らし。けふなん三日の結願なりとて。參詣の老弱男女。咸菴室に集會程に。隊の長。講の頭等は。手織木綿の縞浴衣へ。麻上下を着たるもあり。犢鼻褌のみなる裸體へ。葛の袴穿たるもあり。囉齋青道心等は。白栲の單衣に。腰衣したるもありて。いと囂しく奔走し。堂崎高洲の講衆は。六疊の房へ集合給へ。よし浦三原の二隊は。客殿へ團居し給へ。西條の新講衆をば。柿の水引に隔て居らせ。備後なるかんなべ衆へは。まだ酒を飲さぬにや。布施は大人小兒をいはず。百文づつ。膳牌と卽引がへ。平皿は茄子に油揚の豆腐〻雜混々々汁。猪口は葉胡蘿蔔のひたし物。香の物は。胡瓜の輪切。さて飯は食放題。僅鐵錢百文の布施物で。かくの如くの齋につき。如是の法會に逢ひ。獲がたき甘雨を獲たらんには。かばかり廉きものはなし。本道場は手狹なれば。奥は殊さらいく房もあらねど。各位行儀第一に。神妙に團繞し給へ。百味の供物神酒なんどは。讀經果て割賦すべし。履物へ牌著て。置所を忘れ給ふな。預物はいたさぬぞ。よな。懷中物の用心し給へ。奥へ〳〵と。聲ふり立て。嚔けば目口へ流れ入る。汗もほと〳〵拭ひあへず。施主も道者もつれ立て。客殿狹しと籠入りけり。その日も午の貝吹て。參詣やうやく度絶しかば。紛れ入たる道俗二人。奥のかたより潜び出。目と目を注して點頭つゝ。端ちかく寄りて緣に立在。わが祖翁。奥の爲體にこゝろをつけて見給へりや。正しくこの途へ來たらん。と思ひし半七が。影だになきは不審。といへば同樹は手を抗て。やよ全介音高し。と推禁て奥を見かへり。額をあはして聲をほそめ。われもさは思へども。足弱を伴ふたれば。半七は後れやしけん。道すがらもいひつる如く。いぬる十六日小夜更て。われ彼半七を。天神川のほとりへ誑引出し。さま〳〵に罵りて。飽まで這奴に腹をたゝし。言葉質をとりて撲つ跟つ。竊に汝が來るを待しに。暗號ちがふて思ひもかけぬ。女の子に腦を砍割れて。河水に滾落しかば。山川は早瀨に推流されて。浮かぬ沈ぬ辛くして。澤川崖へ漂れ出。彼處の里人等に助けあ

げられたるが。そのときは死やしけん。物ひとつおぼえねど。流石に命運竭ざれば。忽地に甦生て。氣力はじめに異ならず。やがて醫師に瘡口を縫し。僅に一チ日保養して。十八日の亭午。氷上へ立歸りて。半七が事を問ばば。しるものあり。這奴はその夜さり。槐姬を宿所へ伴ひたるに。事忽地に發覺て。姬をば四五六の隼人に擊れ。世を形なくや思ひけん。姉のお通もろ共に。華洛のかたへ赴くとて。この曉に起行せしといへり。さて全介はと問ひしに。彼は陶殿に疑れ。隼人に關られたりといふ。聞事毎に本意遂ず。腹のたつ事のみなれば。やがて半七が跡を追つゝ捷徑を通宵走りて。這奴等より先へ拔出。八千川のほとりなる。鮠介。鮎太。石伏藏とか呼ろゝ。三人の野ぶせりを相譚て。半七お通を待ほどに。鮠介等はいひがひなく。三人齊しく。半七に擊れたれば。われも底氣味わろくなりつ。稚荻の中に躲ひて。始終面をも得出さず。這奴等が川を渡すを。阿容々々と眺め居たるに。汝も又半七も追蒐來て。船へ鳥銃を打かけたれど。間遠ければ當らず。かくまで間のわろき折に。毛を吹かば疵を求ん。這奴等が往方は定かにしりつ。一旦これを走らして。追擊にしくことあらじ。と思ひしかば。汝をば呼び留たりき。しかるにいとこゝろ得がたきは。侶なる女子を。お通とやらんなりと思ひしに。渠はわが。四五六に密語て。撞木町へ將てゆけとて誘引出したるお花なり。彼衒妻は。いかにして脫出たりけん。汝はこれらの趣を。しらずやとひそめき問ば。全介聞て眉根をよせ。その夜さりお花が事をば。四五六に任したれば。吾儕は絶てこれをしらず。天神川のほとりにて。おん身は擊れ給ひぬ。と思ひしかば。次の日氷上の宿所へいゆきて。半七お通を擊取らんとしたる折。陶五郎の來ませしかば。擊べき仇人を得も擊ず。われは却陶殿に詰られて。四五六の隼人に關られ。富田の稚山へ伴るゝ。途より竊に取てかへし。半七等が華洛のかたへ。赴くよしを聞しかば。夜を日に繼て這奴等を追蒐。八千川の邊にて。その背影を見たれども。水一條を隔たれば。亦彼處にても擊漏し。慥にこゝへ來つらん。と思ひしに。跡跟らるゝ。とはやしりて。途をかへて逃たる歟。中途にて擊べきものを。あまりに深く慮りて。追失ひしは遺恨なれ。と後悔すれ

ばうち笑ひ。しか思ふは理りなれども。途をかへてもこの處へ。來るよしは西條にて。半七が里人に。沼多の拈華庵は何處ぞ。と問たるを。竊聞たることもあれば。十ヲに九ツはたがふべからず。彼お通奴は。いづ地へゆきけん。われは這奴が面を認らず。奥なる群集の中にや在る。全介汝はしらざる歟。と問ば額をさし合し。お通ははや來りけん。鵜に奥にて見たれども。這奴にあふては半七を。擊んずときの妨ならん。と思ふて群集に紛れ入り。そののちは奥へゆかず。只こゝろもとなきは。半七が往方にこそ。といひつゝ外面眺望れば。同樹も共に伸あがりて。忽地に指し示し。向ひへ來るは半七なり。後方なるはお花なり。衣の色こそ定かに見わかね。菅笠に認あり。といへば全介雀躍して。現々彼は半七なり。此度はいかで逃すべき。と拳を捻れば同樹は騒がず。逼ては事を失ものぞ。汝はまづ彼處なる。芭蕉の背に身を躲して。且く便宜を窺へかし。われは又。簀子の下に屈り居て。汝が半七を擊とき這出て。矢庭にお花を扛攫つゝ走りなん。扨るものゝあるならば。汝はこれらを殺散して。はやくお通を引攫ひ。われに續て走り去れ。よしや怨を復したりとも。玉を取らねば持にならず。と諜しあはする祖と孫。勇むはおなじ義と慾に。立わかれたる庭の隈。全介刀を引拔て。手來の竹を丁と切取り。杪筈かへす准備の竹鎗。りう〳〵とうち揮つゝ。一ト引しごきて挾み。しからば吾儕は芭蕉の蔭に。身を避て。這奴を待なん。とく〳〵潜び給へかし。といそがせどもなほ騒がず。早りてな失せそ。八千川にて鳥銃を。放かけられたることもあれば。半七も又油斷はせじ。いふ程の事いはし果て。只彼透を狙擊。逼な。〳〵。と見かへり見かへり。やがて這入る床の下。鼬の糞を手に踏て。あなや。と土へこすり著。耳にからまる蜘蛛網を。搔拂ひつゝ躲れけり。かゝりし程に半七夫婦は。身をさま〴〵にあへ物の。たづね當たるぬたの菴。遙に柴の戸をうち望て。こゝなりけり。と思ふにぞ。日影に病るお花を見かへり。この春おん身もろ共に。いく扁かたづねたれども。其處ともしれずそが儘に。訪はで過にし草菴。今さら思へば索わぶる。菴にはあらざるに。などて往にはしれざりし。加之面影の。いかばかり變ればとて。それとは思ひかけざりき。われ

ながら愚なり。これも夫婦が脱れ得ぬ。厄にあふべき祥なりけん。おん身はいたく疲勞たるめ。今ははや心安し。といひ慰れば。嘆息し絶て久しき叔母御前と。妹にあふは喜しけれど。袖はまだ乾ぬ濡衣の。なき名を雪るよすがもなく。彼此に身をおきかねて。詣來たる歟。と思はれん。と思へば面なく侍るかし。といふに夫も嘆息し。われはおん身に彌倍て。槐姫を寃家に擊れ。姉の往方を失へば。彼も此も面ぶせなり。とばかりにして止べきにあらず。外母の女僧に對面して。姉のゆくへを問定め。志を演て後に。この草の戸を死所。と覺期は豫てしたるにと。いひつゝも又嗟嘆すれば。お花は頻に酸鼻。心うきこめ宣ふな。擊擊るゝも時の運。おん身が忠義は皇天の。毎日に照らし給ふなる。とはいへ思ひ定めても。定がたきは哀別離苦。一度別れて又逢て。別れの後はいかならん。といひかけて口隱れば。半七聲を激して。無益の歎きは女子の愚癡。はや柴門に來たりしに。泣がほなほして入り給へ。と諫る夫も影護て。端なくは得も入らず。且く立在夫婦が後方に。忽地髻の人音するを。ゆくりなく見かへれば。折もこそあれ厚倉隼人。腹卷に野袴穿て。行裝いかめしき。赤銅造の兩刀を。長やかに夾ひけらし。手親花桶引提つゝ。從者を髻將て。三棹の唐櫃を扛擔し。柴門ちかく來るほどに。半七これを佶と見て。這奴は正しく隼人なり。姫君の讐敵。わが孤忠空しからず。この處にて擊とらば。姉と外母御へ手土産は。これにますものあるべからず。もし神明の冥助にあらずば。必姫の亡靈の。仇人を導き給ふにこそ。あな喜し。と笠搔とり。且く天地を禮拜して。刀の鞘を口潤せば。お花は袂に携著。こゝろばかりは猛くとも。彼臠せ仇人は多勢。牛角の勝負は心もとなし。しばし潜びて便宜を窺ひ。思ふ隨に擊てこそ。眞の勝とはいふべけれ。と諫ればうち點頭。おん身が異見その利あり。折戸の蔭に立躲ひ。從者等が退くとき。遣過して隼人を擊ん。さはとて夫婦立わかれ。推ば忽然はら〳〵と。零餘子こぼるゝ諸折戸の。蔭に隱れて寛ひけり。さる程に厚倉隼人は。庭門陜しと唐櫃を。拈華菴の緣前に扛入れさし。とく呼門と。いふに私卒二人。こゝろ得て聲をふり立。菴主の比丘尼に物まうさん。けふの法會の施主として。陶殿の御

内なる。厚倉隼人友善ぬし。みづから來臨し給へり。出迎給へ。と呼れども。奥は散動く人の聲。門はしゞるゝ蟬の音に。紛れてしばし應もせず。しば〳〵呼れて拈華尼は。微笑を將て忙しく。緣頰まで出迎。こは思ひもかけぬ。里人等が私の宿願にて。辨財天を勸請し。只假初に集會たるのみに侍るに。頭の殿の御内の刀禰原。請來給ふこそ幸なれ。いざこなたへ。と請ずれば。厚倉隼人は悠然と。上坐にうちあがり。やよ女僧たち。縱里人等が。私の祈禱にもせよ。衆人心を一致にして。開く法會は殊更に。天女も感應し給ふべし。われ一昨日富田にて。この事を傳聞て。嘆賞のあまり。法會の料を助ん爲に。直さにみづから發向せり。彼を見よ。三棹の唐櫃には。白米五百袋。青緡百貫文これを布施す。又手親携たる。一桶の活花は。今を盛の合歡の花。槐樹とな見たがへそ。これを天女に獻りて。陶殿の武運長久。わがうへにも幸あらせて。富貴延滿如意吉祥と。叮嚀に祈念あれと。ほこりがに說示せば。拈華尼聞てうち微笑。宣ふ趣こゝろ得侍り。現も盛の合歡木。花を眉掃と名づけたるを。田舍人は訛りて。ねぶたの花と喚做しつ。葉の狀は槐に似たれど。花は殊更愛らしや。天女には眉掃の。名も似つかはしく侍るかな。と他事なく美る二人の女僧。小頸傾けながむれば。厚倉隼人うち點頭。一瓶の花より。なほ涼しきこの菴。且くこゝにて汗を納れん。從者等は外面へ罷り出。樹蔭もとめてとく涼め。といそがしたつれば從者は。折戸を出て樹下蔭。おもおもひに憩ふ程に。兩女僧は客殿へ。設の席を修理んとて。やがて奥へぞ入にける。折こそよけれ。と半七は。折戸の蔭より顯れ出。刀の反をうちかへして。緣頰に走のぼり。五逆の罪人厚倉隼人。半七を認れりや。今こそ復す姫の讐。双を受よ。と罵りて。刀を拔て丁と砍るを。扇を以受とゞめ。やよ待しばしいふ事あり。といはせもあへず双を引て。透間もなく擊て懸る。壯士の大刀風いと烈しく。あしらへかねて厚倉は。花補取て受ながせば。内より落る女の頸。半七佶とこれを見て。こは〳〵いかに。と疑ひ惑ひて。思はず尻居に撲地と坐す。浩處に全介は。竹槍を引提て。芭蕉の蔭より突て出。一旦擊んと思ひ定めし。赤根が長男刀治半七。とても脫さぬ仇人の半隻。全介が手

料理の籤刺にしてくれんずと。競ひ懸らんとすれば折戸の蔭より。お花は吐嗟と走り出。身を盾にして全介を。遮り留れば物ともせず。見苦しき女子の助大刀。汝も夫の相伴させん。と竹槍を一揮繁拔てお花が胸前。背へかけてぐさと刺ば。槍は忽地發毀と折れ。お花が姿は煙のごとく。滅て跡なくなりしかば。さしもに猛き全介も。忙然として前後を失ひ。われにもあらでついゐたり。半七はこの形勢に。ま[illegible]〳〵奇異のおもひをなし。こゝろ得がたし厚倉隼人が。携たる花桶より。滾出たる女の首級は。お花が面影によく似たり。これのみならずしうねくも。半七を擊んとする。全介を遮り留めて。竹槍に縫れたる。お花が姿は消失て。全介も又放心せり。彼をおもひ此を見るに。八千川の野船にて。ゆくりなく環會。この處まで伴ひ來たる。吾妹子は世になき魂の。幻に顯れたる歟。これ歟。あらぬか。怪しやと。思はず小膝たてなほし。双を鞘に納ても。まだをさまらぬ胸の雲。疑念は更にはれざりけり。當下隼人は近く居寄りて。扇を笏にとりなほし。やよ赤根生。緣故をしらせねば。さそな隼人を憎しとも。反逆人とも思ひけめ。今こそ諦す機密の謀略。こゝろを定て聞給へ。抑某。父二郎太夫もろ共に。槐姫に册き奉り。周防山口へ赴きて。兩三年を送る程に。大内殿の驕奢。聞しにはいやましして。目を驚す事のみなるに。老臣たる陶晴賢は。黨を樹比周して。主を凌ぎ權を賣る。謀反の萌顯れたり。わが父友春。久しからずして晴賢が。叛んことをしる故に。ひとり心を勞せしかば。持病の積聚身を逼て。鍼灸藥餌もそのかひなく。今はかうと思ひてや。某を枕方に招きよし。陶が逆謀氣色に見はる。もし不虞の事あらば。槐姫のうへ極めて危し。しかれども。陶が阿黨の佞人。内外に充滿たれば。汝孤獨の身を以。明白にこれを禦がば。却陶に殺れなん。しかれば是姫君のおん爲ならず。悲しいかな。われ死なば。大内家は亂れん歟。汝は假に淫酒に耽りて。放蕩無頼と人におもはせ。この地をはやく逐電し。京攝の間に身を潛て。時々平城と周防の爲體を聞定め。晴賢謀反せりと聞かば。一番に走著て。姫君の先途を救ひ奉り。事いよいよ難儀に及ばは。密に陶五郎隆春に底意を告。彼人の力を借て。槐姫を救ひまゐらし。兼ては赤松蟻松の兩老

臣と示しあはして。續井家の援兵をまうし請。且大内家の舊好を忘れざる。西國の武士を相譚て。晴賢を討滅すべし。陶五郎隆春は。主命脱るゝに所なく。晴賢を父とすれども。その心ざま忠義ふかし。をさ〳〵實父半之進が。弱冠のときに似たり。竊に汝と力を戮して。姫を救ひ奉らんものは。彼壯佼のみ。これらの事を胸に秘て。わが遺言を忘るゝことなかれ。もし利に惑ひ勢につき。一點ばかりも不忠の志を挾ば。未來永劫親子にあらず。と密やかに說諭し。その夜空しくなりしかば。某失怙の哀に堪ずといへども。君父の爲に讖を思はず。いく程もなく淫酒の爲に。武具衣服を沽却。飽まで人に疎まして。遂に山口を逐電し。流浪して浪速へ赴き。身ひとつ棒手をふる鐵の。四五六と改名して。平城の晉耗西國の。形勢をしらん爲に。一處に宿を占ず。一昨年の冬浪速を去て。去年の春まで大和にあり。しかるに故主續井殿。御邊の父に命じ給ひて。米谷山なる木精塚を發し。風流士の寶刀をとり出させん。とし給ふよし。われ傳聞てつら〳〵思ふに。むかし陰陽師村上親實がいひつるよしは。父二郎太夫が物語にて聞きたることもあるものを。いかなれば續井殿。みづから武勇に誇給ふぞ。彼寶刀を出さし給はゞ禍主從のうへにや及ん。こはいかにせんとて。頻に憂ひおもふ折から。敗鐵の全介が。櫟本の松原にて。御邊の爺々を擊んとて。却養母の自殺せしを哀る。その處へゆきあはし。遂に全介をそゝのかして。木精塚を掘崩し。風流士の寶刀を他所に埋めて。續井殿主從の。身にかゝるべき禍を。禊除んと謀りしに。彼大刀忽地空中に閃き升り。西を投て飛去りしかば。ます〳〵心安からず。全介さへに誘引立て。やがて周防國へ赴き。しのび〳〵に。風流士の寶刀の往方を索れば。彼寶刀の故に事起りて。大内殿主從の間。快からず。晴賢俄頃に謀反して。義隆自殺し給ひぬ。これも又彼寶刀の祟にあらずば米谷なる。木精の餘怨をこゝに轉じて。その禍の移りや來けん。しからば槐姫のうへいとも危し。いかにもして姫君のおん往方を索まゐらし。亡父が孤忠を空せじ。と夙に思ひ夜に思へど。絕て姫君のおん在所をしらず。かゝりし程にいぬる十六日。刀治同樹が慾心にて。全介に說示し。天神川の上にて。御邊を擊せんとしつ。

剩。御邊の妻女をば。われと全介に詐詭取らし。撞木町へ將てゆけ。といひしかば。われ又陽にはこれに與して。全介にだも底意をしらせず。陰にお花を他所へ伴ひ。直さに天神川の上へ走りゆきつゝ。事の爲體を張へば。御邊の姉お通刀禰。同樹を川へ砍流して。御邊を救ひ。同胞こゝに再會して。槐姫を誘引まゐらし。氷上へ赴んとするよしを。竊聞するに。全介も又こゝに來たつて。矢庭に御邊を擊んとせしかば。われ又全介を助るおもゝちして。却てこれを遮留め。御邊はさらなり。槐姫を。故なく延しまゐらせたれど。この事はやくも風聞して。次の日はしるもの多かり。かゝれば姫のおん命。その危事風前の燈に似たり。もしこの時に。隆春の助を得ずば。いかで姫君を救ひまゐらすべき。とおもひしかば。やがて山口へ走りゆきて。窃に陶五郎隆春に對面して。心中の機密を告るに。隆春聞て眉を顰め。われもはやこの事を聞しかば。心苦しくおもふなり。しかれども。槐姫は。刀治が宿所に蟄びをはするよし。人有て。向に養父晴賢に告たれば。凡常の計策にて。救ひ奉らんこと難かるべし。しかれども。年來深窓の裏に。册かれ給ひたる。槐姫にましませば。男たるものは。わが養父といへども。面影定かにはこれを認らず。年榮骨相。姫君に似たる女子をもて。おん身代りになし奉り。御邊苦肉の計を行はゞ萬に一ツ姫君を。救ひ進らする事を得なん。彼姫君に代らする。女子はありや。と問れしかば。われ忽地におもふやう。鸞に同樹を欺きて。他所へ潛し居らしたる。半七が女房お花は。年榮といひ。面影といひ。かれを槐姫なりといひこしらゆるとも。誰かは疑ふべき。特に彼女子は。姉夫曾太郎の女兒にして。わが爲には外姪なり。夫半七は。元來忠孝の壯佼なり。事急なれば半七に告るに及ばず。如此々々に謀らんとて。遂に隆春に謀しあはし。走り歸りておもふよしを。お花女に告しかば。義を見て勇む郎女のなか〳〵にうちも騷がず。風流士の寶刀の故に。寃家の側室となるだにも。主と夫の爲には厭はず。しかるを況姫君の。先途に代り奉りて。良人の身の幅ひろくならば。これにます幸ひは侍らず。池の中島にてゆくりなく。罪被りしも愁に。夫を留めしわらはが失ち。いひときがたき濡衣の。乾よしもなかりしに。

物に托して玉枕御前の。おんいと惜みふかければ。助がたき命助けられし。恩に報ふはこの時なり。今一篇わが所夫の。面影見まくほしけれど。懋に見つ見られば。名殘もいとゞ惜かるべし。おもへばこの世は假の宿。永き冥土に孺夫の。契をたがへ給ふな。と言傳てたべ。といひかけて後いひ殘す隱口の。はかなき別れを思ひやれば。われも涙にかきくれながら。よはるこゝろを鬼にしつ。なほ十分に謀らん爲。御邊をば村長許呼よせさし。われは竊にお花を將て。背門口より潛び入り。槐姫をば何となく。納戸より出し奉りて。姫の衣裳をお花に被せ。お花が衣を姫に被せ。まづ姫君をば。准備の竹輿に扶乘し。さてお花をば納戸なる。押入の戸棚に躱はし。密やかに人をつけて。槐姫をば他所へ延し進らしたれば。陶五郎に呼れしとき。われ外面より走り來つ。やがて納戸へ跳入り。外姪女お花が頸を刎て。隆春に遞したり。かくまでふかく謀りしかば。好雄なる晴賢も。絶て友善を疑はず。又御邊同胞を追擊せず。されば辛くして槐姫の。おん命恙なかりしは。御邊の舍弟と妻女の功なり。われその誠心を感ずるのあまり。且この處は。園花夏山兩比丘尼の。草菴なるよし。槐姫の宣ふから。義女お花が首級を贈りて。有緣の道心に葬らせ。又姫君のうへを委ね。事の趣を告ん爲。法會の施主に假托て。夜を日に續て走來れば。こゝにて御邊にあふのみならず。愛惜の羈に牽れて。しばしその夫に賁緣。更に夫の危難を救ふ。烈女お花が身後の貞操。面前に見てます〳〵感佩。嗚呼奇なるかな。奇なるかな。と只管に歎賞し。一五一十を說明せば。奥に忽地よゝと泣。女子の聲は拈華微笑尼。姉のお通も恙なく。はやこゝに來給ひぬ。と思ふものから半七は。夢に夢見るこゝちして。或は歡び。或は哀み。原來お花は槐姫の。御命に代りけり。かくてこそ。半七が汚名を雪る貞操心烈。それとはしらず八千川より。伴ひたるは世になき魂の。まどひ出て孀夫の。別れ惜歟不便なり。天晴候厚倉ぬし。御邊もしなかりせば。姫君いかで恙なからん。さるにても。古人二郎太夫友春ぬし。未然を察せし忠義の。皆。凡慮の及ぶ所にあらず。才淺ければ思ひもかけず。御邊を姫の仇として。擊んとしたる半七は。愧をかさねたり。許し給へ。と綿を著。涙をかくす

壯夫が。見じと思へど今更に。生るがごとき妻の首に。哀傷さこそと厚倉は。件の首級をとりあげて。花桶の內にをさめ。天女を祀る法場に。髑髏の汚穢いと恐し。菴主の女僧に附屬して。法莚果て葬給へ。といひつゝ遞せば半七は。花桶を兩手に受。槐樹に似たる合歡の花。ねぶりて覺ぬ亡妻の。夜臺は則手向の花桶。鄉にこゝへ來つるとき。われを諫し言葉の端にも。定めがたきは哀別離苦。一度わかれて又あふて。わかれの後はいかならん。と心ほそげに喞るを。女子の愚癡とのみ思ひていひがひなしとて。叱りしを。心なしとや恨みけん。思へば不便の終焉かな。と又くりかへす孝環の。いとゞ哀はいやましつ。鼻うちかみて厚倉も。頻に嗟嘆したりけり。

柴樗の雨笠

厚倉隼人が物語を。夢のごとくに聞居たる。全介はやうやく覺て。勃然と身を起し。仇に與せる四五六の隼人友善。妨せば目にもの見せん。半七もろ共刄を受よ。と罵りつゝ。緣頰へ跳上りて。刀の鞘へ手を掛れば。貲布の幕をさと揭て。一人の武士走り出。全介を遮り留めて。右手に引提し小刀を。拔も放さで礮と打ば。全介鐺を搔𨻶て。佶とその顏をうち覩り。去年の春。櫟本のあなたまで。跡跟たれば正しく認る。汝は赤根半之進。實父の仇人脫さじ。と跳蒐て腰刀を。拔んとするを拔しも果ず。又丁々と打居れば。全介ます〳〵焦燥て。組んとする手を楚と取り。早り給ふな半之進が。まうし上べき密事あり。今この小刀をもて。打まゐらせしは私意ならず。乃おん父順勝朝臣の。後事を懲らし給ふ折檻。やがてぞ思ひあたり候はん。いと仇なく候と。いはれて全介こゝろを得ず。この期に及て命を惜歟。わが實父は今市全八。養父は敗鐵介四郎。これより外に親はなし。戲言食ずと立あがつて。勝負を決せよ。と敦圍ば。半之進莞爾とうち笑み。君の爲には一點ばかりも。命を惜ぬ半之進。何狼狽てか。僞をまうすべき。君は正しく續井の嫡男。今市なんどを實の父。と思召は物體なし。いざあなたへ。と恭しく。上坐へ推居れば。

厚倉隼人も席を下り。半七もその事の。顚末はしらねども。父の後方に居かはりて。各位等しく敬すれば。全介とにかく疑ひ惑ひて。手を叉きつゝ沈吟せり。當下半之進は膝行して席をすゝめ。緣故を知召ねば。疑惑し給ふは理なり。僂れば三十あまり一年にやはやなりぬべし。永正十二年といひし春の頃。わが君順勝朝臣。吉稚丸たりし時。積鬱を保養の爲。華洛へ潛てのぼり給ふ。おん供には今市全八。布施蝶九郎。かくまうす。半之進も候ひし。しかるに佞臣布施今市等。君に淫酒をすゝめ進らせ。華洛に名たゝる白拍子。歌妓舞姫を集合つゝ。長夜の飲その度に過たり。されば召るゝ舞姫の中に。笠屋小夏といふものあり。彼は華洛の刀拭。同樹といふものゝ女兒にて。實の名をば增穗といへり。笠屋夏に歌舞を習ひて。むかしの千手微妙ともいひつべき手弱女なれば。吾君不覺に御こゝろを移されて。有一夜小夏を御旅館へ止宿さし。よばひつゝかたらひ給ふに。小夏は元來吾君を。續井の郎君なりとしらず。その名を問ば吾君も。實の名をば告給はず。われば續井の近習の士。今市全八郎といふものなり。と詐欺て。二夜さ契りをかさね給ふよし。某に密語給ひしかば。こは物體なき御進止。あるべき事とも覺候はず。もし平城へ聞えなば。大殿の怒りつよく。おん身のうへに候はん。と面を犯して諫めまうせしかば。是より小夏を召れざれども。君も只某を。いぶせきものに思召。今市布施等時を得て。讒言その間なかりし程に。某はおん前を遠離られ。病と稱して下宿に籠居し。ひとり心を勞せしが。果して君のおん越度。平城へ聞えて。御父子の間に。事いで來なんとしたりしかば。厚倉二郎太夫これを歎き。竊に某が旅宿を訪て。計策を謀あはし。事咸某が身に負て。その夜三勝を奪ひ去りしかば。大殿のおん憤忽地解。橋梓和順なし給ひき。かくて六年の春秋たちて。某夫婦召かへされ。又いくばくの年を經れども。吾君のおん子には。槐姫のみいで來給ひて。男子は絕てましまさず。續井の血絡絕んかと。君も物憂おほし召ども。人力の及ぶべきにあらず。さる程に。一昨年の初冬六日。淚速なる千日墓にて。某一家。蠟松一族。施行の米を引たりしに。集合たる貧人乞丐多かる中に。年歲は廿八九なる壯佼の。いと厭やしく見えたるが。人の後方に立躪れ。施米を受て歸るを見れば。その面影何となく。吾君賴勝朝臣によく似たり。こゝろ得がたく思ひつゝ。ふかく意にもとめざりしに。去年の秋。櫟本の松原にて。某が轎子へ。鳥銃をうちかけられし時。養母の自殺に愁傷する壯佼あり。某そのとき。和邇の八幡宮よりかへさ。樹の蔭に立躪れて。事の容を張へば。それが養母は某が母。鑰篠が妹晩稻なり。又壯佼は。刀冶同樹が妻の孫。今市全八が實子なるよし。來しかたをかき口說を。つく〳〵と聞て闕窺るに。彼壯佼はいぬる年。千日墓にて施米を受たる貧人なり。見れば見るまゝ吾君の。面影によく肖たり。折しもあれ。曩に周防を逐電せし。厚倉隼人いで來りて。敗鐵の四五六と名告つゝ。彼壯佼を勦り慰め。晩稻の死髮を鎧櫃に。納めつゝ立歸る。彼隼人が爲體。實淫酒に家を忘れて。逐電すべきものにあらず。しかるに彼人身を窶し。彼壯佼を助る事。思ふ所あるにこそ。と推量り。その夜刀を打折れ。某が預たる。主君慰賜の小刀を拔あはし。彼壯佼が腸を。一大刀砍著あへなく擊れし。私卒丹三が死髮のほとりに遺したる。件の小刀を取て。挑燈の火に。つく〳〵とこれを見れば。はじめわが君順勝朝臣。米谷山の妖氣を見んとて。樓に登りつゝ。このおん佩刀を走らして。膝口を突傷り給ひしとき。この刀尖に凝著し。主君の鮮血と壯佼の。鮮血とひとつに聚りしは。現詐れぬ親子の證據。われながらこのおん佩刀を。いしくもまうし賜りて。丹三には預しよな。下郎なれども丹三が。彼君に傷て。一命を隕せし故に。わが君おん子を擧給ひつ。さるをわが叔母晩稻老女が。襁褓の中より人傳き居れば。郎君のうへ心安し。とその夜はそのまゝ追ひも留ず。木精塚を發きしも。君に禍あらせじとて。隼人が所爲とは猜しながら。こゝろに秘て人には告ず。閉居慰免の日を待て。このおん佩刀に聚合たる。御父子の鮮血を。吾君に見せ奉り。ありつる事どもまうしたるに。吾君御夫婦欣然と歡びたまひ。わかゝりし時の過失は。老ての今の幸福となりぬ。わが齡既に五十に及ぶものから。男兒なきをいといたう。心くるしくおもひしに。思はず實子を

獲たりしは。汝等が丹誠によれり。晩稻丹三が後の世を。叮嚀に弔ひ得させよ。隼人が事は後日に賞せん。しのびしのびにわが子の往方を索よ。と仰つゝ。又このおん佩刀を預下され候ひき。かくて大内家の擾亂によつて。某はやく間諜者を。多治比山口へ遣しつゝ。陶と大江の善惡虛實を窺せ。郎君は隼人とともに。氷上のほとりに在るよしを傳聞。更に主君の仰を稟。大江家と諜し合せて。晴賢を討んゑ爲。沼多の新關の閉たる比。某竊に當地に來たりて。昨今拈華菴を旅宿としつ。雨乞の法會に假托。後れて來ぬる軍兵を。この處へ集會たり。君は則晴賢征伐の大將軍。全介を改めて。けふより續井小太郎順啓と稱し奉るべき旨。大殿の嚴命なり。疑念を解ておん佩刀を。受收め給へかし。とおちもなく演說し。小刀を引拔て刀尖を見せ進らすれば。順啓は聚合たる。鮮血をうちかへし打かへし。と見かう見つゝ。鞘に納め。三扇戴きて腰に帶。大息吻て形を更め。面目なや赤根父子。諺にいふ氏より育。蓋母晩稻の物がたりにて。わが實父は。續井の退糧人。今市全八郎といふものなり。と聞しかば。却てわれには忠義ふかき。半之進親子を擊んとせし事。勸解にもあまりあり。隼人はわがうへしらざりし歟。しりなばなどてや告ざりし。と問せたまへば厚倉隼人。欣然としてすゝみ出。御不審はさる事ながら。某浪速にありしとき。おなじ敗鐵賣買し給ふ。君の影面を見奉るに。順勝朝臣に似給へり。大殿いとわかくをはせし時。華洛の歌妓舞姫なんどを召されし事は。亡父二郎太夫が物語に。聞たる事も候へば。もし續井家の落胤にはをはさずや。と思へば他事もなく交りて。浪速にては永樂錢三貫文を贈りて危窮を救ひ。そののち櫟本の松原にて。自殺をとゞめ。その父は續井の退糧人。今市全八郎なるよしを。はじめて聞ども面影は。續井殿に似給へば。故こそあらめ。と假初に。復讐の助大刀すべき。勢ひは示しながら。竊に赤根が盾となりて。周防まで伴ひまゐらせ。只續井殿の落胤なる。證據を見出すこともや。と年來意をつけたりしに。いひあはさねど半之進は。いちはやくこれをしれり。寔に燈臺根闇とは。隼人が事にて候。と回答まうせば順啓は。ます〳〵感心斜ならず。かゝるべき前象なりけん。われ近ごろ。夢にあやしき人來たつて。軍法鑑。

法弓馬を習し。讀書手蹟を敎る事。三四十夜に及しかは。年來は一文一字も。引ざりしわれなれど。學ずして忽地に。文武の道を諳じたり。いとも不思議の事ならずや。と宣へば半之進。それこそ御祖父順昭公より。當代に至るまで。數十年信仰し給ふ。志貴の毘沙門の。擁護にて候べし。現鄕に半之進を。擊んとしたまひたる擧動皆悉法に稱へり。いと憑しく候と。稱まうせば傍より。半七扇をさと披きて。郎君これは。とさし向れば。順啓一目に見くだちて。忠臣不事二君。貞女不見兩夫と。書たるな。これは齋王蠲が語にて。本是史記に出たるを。劉向說苑にも。又この語を載たり。と說示し給ふにぞ。赤根厚倉感佩し。この語は常に世人の。口遊候へども。何人の語なるよし。出處を定かにしるは稀なり。神明佛陀の守らせ給へば。龍に翼の名大將。合戰勝利疑ひなし。と祝しつゝ。厚倉隼人又いふやう。布施物に托て。槐姫をば。唐櫃の中に潛し奉りて。こゝに伴ひまゐらせしが。事に紛れて。いまだ出しまゐらせず。暑氣に堪ずぞ坐すべき。同胞對面なし給へとて。遽しく庭へ下り。唐櫃の蓋うち開きて。槐姫のおん手を披き。母屋へ誘引奉れば。順啓は席を讓りて。威儀正しく。われには年もはるかに劣れど。その母貴くをはすれば。妹なりとも姉に等し。さても晴賢が逆謀にて。百折の艱苦を經給ふこと。痛しくこそ候へ。と慰め給へば。槐姫涙を袖にうけをさめ。ゆくりなく兄公に。面を對する身の幸ひ。世に憑しく思ひ侍り。但哀れむべきは初花が。わらはに代りてあへなき橫死。とゞめんよしもなか〳〵に。けふの法會の折を得て。女僧ともなりて亡夫と。なき人々の菩提を弔ひなん。この事許さし給へかし。と心ほそげに宣へば。厚倉隼人小膝をすゝめ。姫君ふかくな歎き給ひそ。お花が橫死は彼が情願。義基朝臣はいぬる秋。築山の御所において。刀を肚へ突立給ひ。猛火の中へ飛入らんとし給ひしを。隆春竊に助まゐらせ。心腹の郎黨して。片山里へ潛しまゐらせ。療治をさをさ術を盡しつ。既に廢人となり給へども。おん命恙なし。遠からずして御夫婦の。再會をなし進らせん。と慰めまうせば槐姫。原來わが所夫は。なほこの世にこそ在しけれ。これぞ偏に陶五郎が。稀なる誠心のなす所。喜しや。と思はずも。掌を合しつゝ。

周防のかたを拜み給へば。厚倉隼人は懷中より。隆春が髮の毛と。短册をとり出し。扇に載て半之進が。ほとり近くこれを置。只痛しきは陶五郎。養父の逆心を諫かね。とくにも腹を切るべかりしに。義基朝臣を救ひ出し奉らん爲に得も死ず。三たび諫めて聽ざれば。號哭して親に從ふ。本來子たるの道なれば。今更に是非に及ばず。君命とはいひながら。反謀人を親としたる。隆春が一世の不幸。とてもかくても身のなる果は竹鋸。木の杪に首を梟られ。大和に在す親同胞へ。恥を遺ん朽をしさよ。御邊せめて隆春が。志を父母に告。なき後には一扁の。回向を憑。と髮の毛を押切て短册と。もろ共に遞されし。この世ながらの像見なり。これ見たまへと指示ば。半之進その短册を手にとりて。

黑髮の。亂れずもがな。あづさ弓。そらでまづいる。のりの道しば。

隆春

と二たび三たび吟じつゝ。半七と面をあはし。わが子どもらが心ざま。いづれも劣り勝りはせねど。陶五郎のみ不幸にして。反逆人の子となりし。これも過世の業因ならめ。といひつゝ滾す一滴しおなじ恨みに半七も。弟が心おもひやり。涙を禁あへざれば。順啓も槐姫も。これが爲に嘆息し。目をしばたゝき給ふにぞ。奥にもれ聞拈華微笑尼。お通も共に忍びあへず。聲ふり立てよゝと泣ば。半之進見かへりて。郎君の出陣に。不祥の哭聲奇怪なり。兩女僧は何處に在る。お通もろ共。わが齋したるおん被長を。順啓君に進らせよ。と呼たつれば。やうやくに涙を禁め。拈華微笑が二人して。扛いづる鎧櫃。お通はやがて蓋取て。武運を開く小櫻縅。五枚鍬の星兜。現故郷の名にし負ふ。大和錦の陣羽織。篠小手奴袴。大刀六具。三人手々に被まゐらすれば。順啓弓矢挾み。床几に尻をかけ給ふ。そのさま威有て猛からず。赤根厚倉左右に侍立し。暗號の笛を吹たつれば。奥に集會し參詣の。講衆は里人ならず。みな是續井の兵士ども。甲冑に身を固め。散動たつて走り出。廣庭陜しと隊伍せり。當下厚倉が從者等も。外面より走り來つ。二ツの纒をうち披き。鎧一宿する程に軍監左右に押立る。旗に書たる二天の名號。嚴島辨財天女。志貴毘沙門天。

王と。高やかに唱つゝ。諸軍齊一拜する折から。校計ちがふて出もやらず。事の趣おちもなく。聞果たる刀冶同樹は。こゝにはじめて慙愧して。簀子の下より這出つゝ。いと面なげに頭を低。七十餘歳のけふまでも。欲に固めし五體一心。佛とも法とも辨へず。造りし罪こそ悔しけれ。今思はずも忠臣孝子。義夫節婦。順孫の集て。世にも稀なる心操。說諦し給ふ淸談を。聞てはわが身が疎しく。又鈍しく恥しく。後悔今更その詮なけれど。貞婦を詐欺て賣らんとし。忠臣孝子を虐たる。惡報は今面り。この竹籤につらぬかれん。南無阿彌陀佛と唱つゝ。折たる竹槍搔取て。肚へつきたてんとしたりしかば。順啓は忙しく。彼禁めよ。と宣へば。半七やがて走下りて。竹槍に携とゞめ。五逆十惡の罪人たりとも。懺悔にはその罪滅す。假にも親と憑し人の惡念を轉して。善心に歸すること。歡しくこそ候へ。といひつゝ槍の穗を奪て。背さまに投捨れば順啓は半七して。同樹を近く招きよし。われは繦褓の中にして。孤となるのみならず。その父定かならざりしに。乳母して乎れしは。汝が妻の恩惠なり。汝が妻はわが外祖母なり。汝肉緣なしといへども。わが外祖父去年よりこゝに身を寄しも。汝が妻の恩惠なり。汝が妻はわが外祖母なり。汝肉緣なしといへども。わが外祖父なり。いかでかは死すべき。提婆が惡も釋迦の方便。汝が妻の舊菴にて。汝忽地道心を發すこと。これ又汝が妻の德なり。われ凱陣の時を得ば實母增穗。養母晩稻。祖母小田井。義女お花。孝子平作等が爲に。永年の法會を修し。拈華微笑の兩比丘尼をば。必大和へ伴ふべし。汝は今より。この草菴に住持して。お花等が菩提を修。五町八反の良田を。寄附して讀經の料となさせん。餘命をしづかに送れかし。と叮嚀に諭し給へば。同樹は感涙瀧の如く。順啓槐姫を伏拜み。又半七等を拜みけり。當下半七は。外母拈華尼。弟婦微笑等に。沼多の新關を越難たりし日。關防牌面を惠れしよろこびを述。顏のいたく變り給へば。それともしらで立別れし。いと愚にこそおぼしけんとて。身の懈を賠話る程に。お通も八千川の危難を脫れて。こゝへ來たりし事を物かたれば。夏山は平太郎を呼びて。半七等に逢しなどするに。時刻もうつりぬべし。半之進天うち仰て。けふもはや申の時には遠からじ。いぬる日多治比へ遣

したる。仙野呂東二はいまだ歸らず。大江家の消息いかにあるらん。心もとなく候と。いふ言葉いまだ訖らず。衝と走り來る呂東二道能。陣笠取て跪けば。半之進佶と見て。待わびたりし仙野呂東二。大江家の吉凶は。いかに〳〵。と小膝をすゝめて。問ば呂東二鎧の袖を。引あはして威儀を繕ひ。されば某多治比へ赴き。再三諜しあはすれば。大江太郎乙就朝臣。密に晴賢誅伐の謀をめぐらし給へど。その便宜を得ざりしに。時こそ來つれ陶晴賢は。嚴島へ詣るよし。風聞をさ〳〵かくれなし。このとき大江續井の軍船。不意に起て攻討ば。晴賢を虜にしつべし。さはれ久しく雨ふらねばや。宮島の邊干潟となりて。自在に船を進めがたし。願ふ所は只雨のみ。もし終日雨ふらば。乙就が晴賢を。饗應の夫役と僞り。間道より嚴島へ押よせ給へ。彼處にて對面し。軍配をいひあはさん。と宣はせし。返書はこれ。とさし出せば。半之進受取て。順啓に進らすれば。封皮推切て讀くだち。乙就の謀略。その圖に當れり。刀冶同樹懺悔して。善心に立かへれば。凡この件にありとあるもの。惡人は絶てなし。只憎むべきものは晴賢のみ。しかれども雨ふらずば。容易陶を討がたし。賴む所は天女の擁護。拈華微笑は讀經して。辨財天女を祈れかし。と宣へば。厚倉隼人すゝみ出。いにしへの小野小町は。歌を詠じて。雨を獲たり。今のお通も幼稚より。敷島の道にかしこく。秀歌をさ〳〵多しと聞けば。雨乞の歌を詠せ。辨財天女を祝らし給へ。といふに順啓うち點頭。隼人いしくもまうしたり。天地を動すも。元來和歌の德と聞けば。通はこの旨こゝろ得て。准備せよと仰すれば。お通は再三辭しまうせど。槐姫傍より。他事もなく諭すゝめて。姫君の料にとて。厚倉が齎たる。五衣緋袴。手親これを賜れば。お通は推辭に言葉なく。退て衣裳を更。拈華微笑もろともに。庭に出つゝ半涸たる。曲演のほとりに立ば。軍兵等こゝろを得て。轉手に運ぶ經机。料紙硯をとりそへて。準備既に整へば。いと晴がましく見えにけり。かくて拈華微笑尼は。念珠を押揉合掌し。能興摠持大智惠聚。大辨財天。神體は是安藝國。沼多郡宮島に。宮柱太しく建て祝れ給ふ。市杵島姫の神德神威空からずば。今立地に雨ふらして。續井大江の兩義兵に。力を戮したび給へ。とお通もう共

且く念じて。嚴島を遙拜し。兩女僧は恭しく。光明經の紐を解て。三遍戴き。廣宣流布乃至得聞是經當令是等悉得猛利不可思議大智慧聚不可量福德之報。と讀經の聲の澄わたり。いとも尊く聞えしかば。お通は小霎時うち案じて。墨揚ながし筆を染て。短册に詠歌を書載し。筆を閣き。

日を經つゝ。民の草葉の。かれゆくに。めぐみの雨を。いかでそゝがん。

かくは三遍吟じつゝ。目上に捧れば。天女感應したまひけん。庭の遣水浪たちて。一天俄頃に結陰。風颯とおとし來つ。彼短册を空中へ。まきのぼするとぞ見えたりし。雷雨俄頃にふりそゝぎ。草木も人も甦れば。順啓同胞赤根厚倉。天に歡び地に喜ぶ。同樹はさらなり。軍兵等は。濡るゝも厭はで。異口同音に。しばしは感じ止ざりけり。しかるにわきて不思議なりしは。この雨拈華微笑の面を打て。降流す程に。爛れたる火傷の跡。洗ふが如く愈消て。舊の如くになりしかば。兩女僧の誠心を。天女憐み給へばこそ。一トたび傷たる容止の。かくまでに愈たること。いとありがたき冥助なれとて。衆皆信心膽に徹して。末たのもしくおもひけり。順啓は殊更に。感悅頗氣色に見れ。拈華微笑が讀經の奇特は。能因が和歌に劣らず。お通が詠歌は小野小町が。請雨に異ならず。かゝれば能因の二字をわかちて。兩女僧が名に被け。能拈華。因微笑とこれを呼ん。またお通をば。小町に擬して。小野小通と唱ふべし。獲がたき雨をはや獲たれば。時を移さず。出陣せん。簑笠の准備せよ。と宣ふ折から。人馬共に直と濡て。馳來るものあり。是則蟻松曾太郎なり。柴門に馬乘捨て。衝と入りつゝ。順啓槐姫を見て跪き。郎君姫君へまうし候はん。さても大殿。いぬる寅の日夢の中に。毘沙門天影向して告たまひしことあるをもて。今日この處に郎君姫君の。集合給はんよしを知召れ。曾太郎を遣さるゝ所なり。郎君當家の大將軍として。晴賢を擊給ふに。無官にて在せば。敵これを侮らん歟。よりて室町殿へまうし請て。大和介に任ぜらる。かつ姫君は。拈華微笑お通等を將て。一圓平城へ歸館あるべし。おん迎の爲參上せり。と演說すれば順啓は。謹て父の命を承。且蟻松を勞ひたまふ。その隙に赤根親

子厚倉は。華やかに鎧つゝ。先陣後陣と立ならべば。微笑は涙さしくみつゝ。平太郎が手をとりて。半七が側に推やり。おもふ程なる忠義を竭さで。むなしくなりし父の代に。足手纏ひに侍るとも。此平太郎を伴給へ。といひかはてまたうち泣ば。半七有理と平太郎を。鎧の上に楚と負ひ。親に代て夭折せし。弟笠松平作が。再びこゝに存命て。忠義を演る四歳兒の初陣。伯父もろ共に分捕させん。これらの事は念とせで。故郷へ歸り給ひなば。家なる母とこゝに在す。蟻松翁へお花が事を。言告てたべ。とばかりに。鎧の袖を密と濡す。雨はます〳〵やみなく。篠をみだして降ながせば。順啓麾を取りなほし。時刻移らばいひがひなく。乙就に先せられなん。はや出陣。と促し給へば。馬取の雑兵が。緣頰ちかく牽居る。月毛の駒も西へ入る。佛の利益。神の加護。めでたく凱陣有ばせ。と送る姫君。女僧。お通は。修羅の巷を見捨つゝ。大和へとゆく起程。殘る同樹は八重葎。しげ篠の弓朱柄の槍の。赤根厚倉勇しく。主を守護して立出けり。

賴豪阿闍梨恠鼠傳

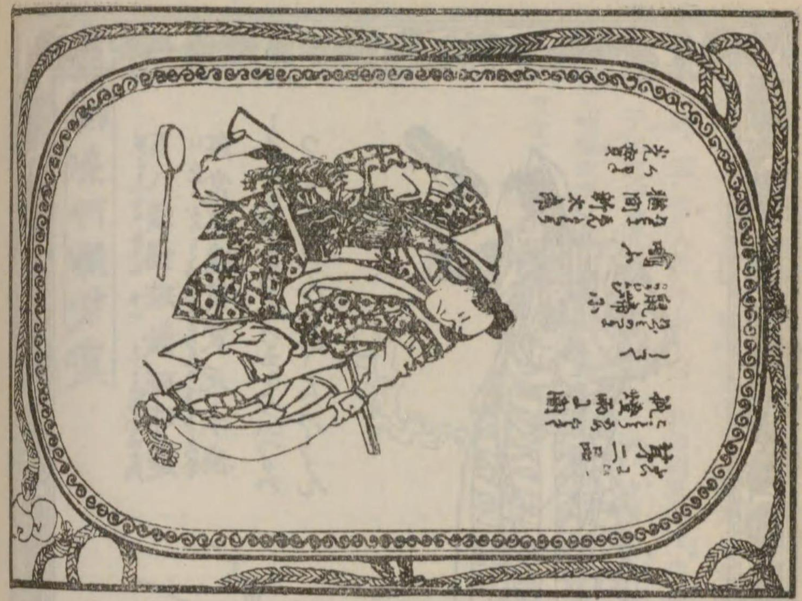
二月鼠の穴を塞ぐ。つく〳〵汝がいたづらを思へ。家に居て人を恐るゝは。足のうらに疵持ちけらし。油をのむ事世の酒にひとしけれど。いつしか沈醉を見ず。粟を盡し器をそこなふは。殊更にいはじ。大囊をかむ牙にふるれば。病を生ず。はづかしき文をちらして。男女の中を妨げ。あやしき巣をつくりて。源平の亂をきく。何をへつらひて。佞人のためしに引出られ。いかにすゝめてか。書を燒く代の宰相となしぬる。神佛のたふときも。尿糞に汚し奉る。草の根をはむ月の鼠は。俊成卿のうらみなりけり。つく〳〵汝が危きを思へ。それ人の賢きや万木鑿をまき。吹矢を儲。鞠をぬりて。往來もたやすからず。けはしき。城をたのむとも。鼬を防ぐ手段はあらじ。杳なる空をながめては。鳶のつかまん愁わするべからず。桁走り障子のぼり。早業得たりがほなるも。思はず桝にかゝりて。いかばかりのからきめ見るらん。虚死して仕合に。東坡が袋をにげたりとも。生捕れてなまなかに。張陽が文をうけなむ。或は鈴を頸にさげて。兒童の甑となり。あるひは筆の爲に髭をぬかれて。老の悔を殘せり。あやまりて畫鼠とあなづられ。濡鼠と笑れ。更に吹鼠とくるしみて。人の爲にぞ悦ばれぬる。我さへかなしきを。燒鼠となりて。狐狸の命とらむこそ。淺ましく罪深けれ。つく〳〵汝が尊きを思へ。日よみの初に呼ばれて。位司賤からず。百數のかしこきも。甲子をむかへて年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立かへれば。子の日の御賀あり。子祭といへるは。いづれの長者の傳へたる。からの日本の歌にもよめり。海原やもしほの陰に友よぶなまこは。海の鼠とかゝれ。秋風の尾花が末に妻こふ鶉は。田ノ鼠の化したるなりけき。烏羽玉の闇き夜は。いかづちともなれり。象といへる獸すら。かつ恐懼れぬる。麝香鼠は筑紫に住なれて。こと國に行ず。かづき姿のわかやかなるは。嫁入の繪虚事にぞ。どこの乙子の七郎とは申す。大ねら小ねら。將廿日鼠と名のり。月々に十二の子をうむ。唯が家にか取盡し得ん。もし白子出て。福の神にや愛せられん。汝が隱里はいづくのほとりぞや。武藏野の鼠穴にや。出羽の境の鼠が關なるか。信濃の奥の鼠宿なるか。目出たき身をもて。かり初の世をむさふる。などか歸らんことを思はざる。窮鼠かはりて猫を噛の

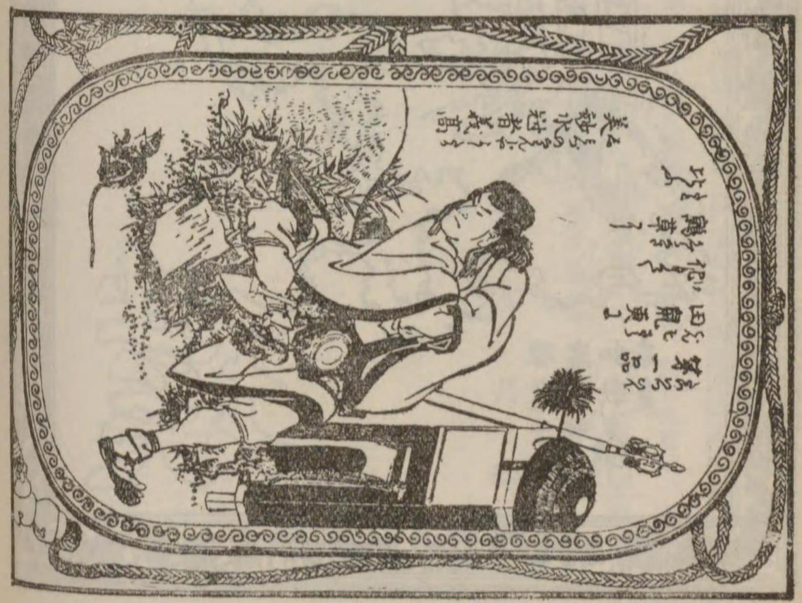
志ありとも。三井の賴豪が千疋の勢すら。本意を遂ぐる事は。猶聞えざりけり。（右去來鼠賦）

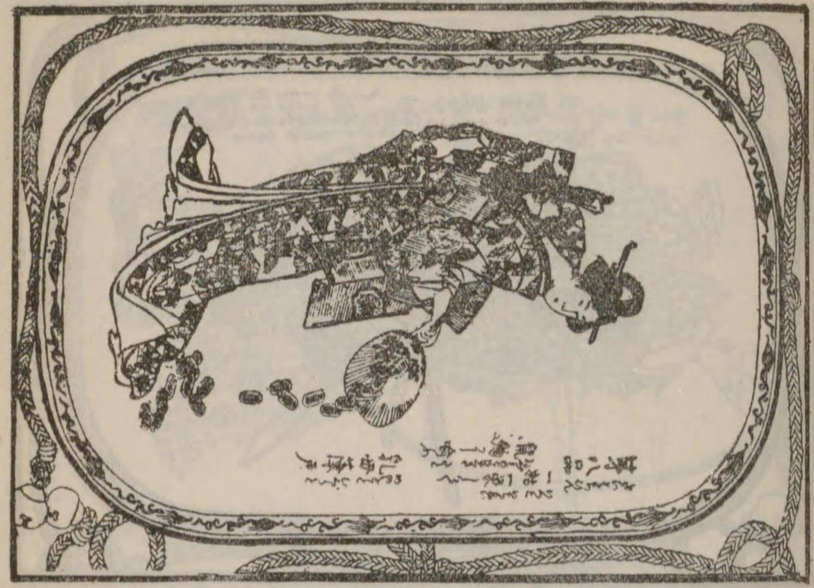
恠鼠傳既落成。引用古書篇。散帙有坐右。偶閲去來鼠賦。乃用賴豪事爲落句。且繕寫而換於序編。筆之稍久。而倚机假寐。若有人告予者。曰。世傳賴豪憤死爲鼠。祀之號鼠廟。甚其言妄也。顧昔者都城。必祀四神。以鎮四方。子則北方玄武神。世俗謂之子聖。或謂之鼠廟。鼠亦子也。凡苑禽獸於十二支。晉以降已既然。以之觀之。則說賴豪故事。嫁諸鼠廟者。軍記附會耳。予俯而笑。仰而覺。竟使僮子執燭。併記予之作。

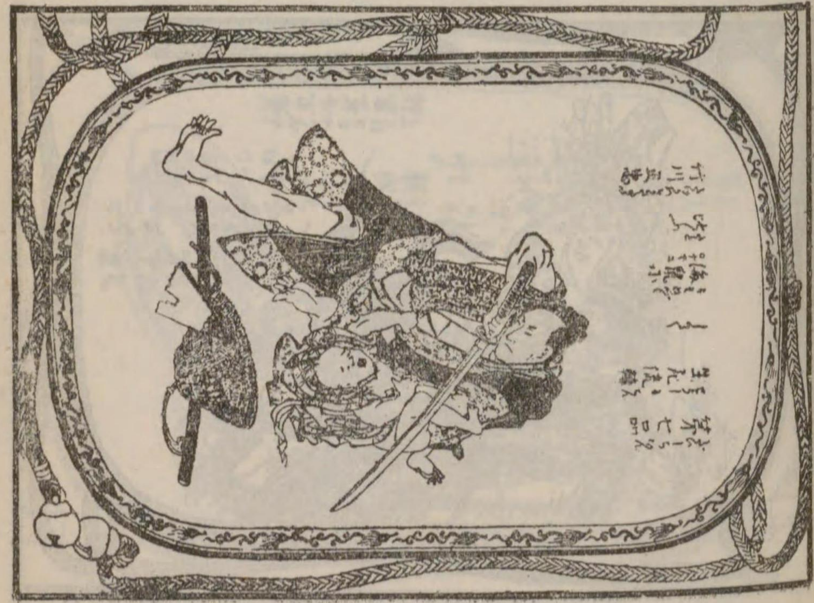
文化丁卯暑月甲子

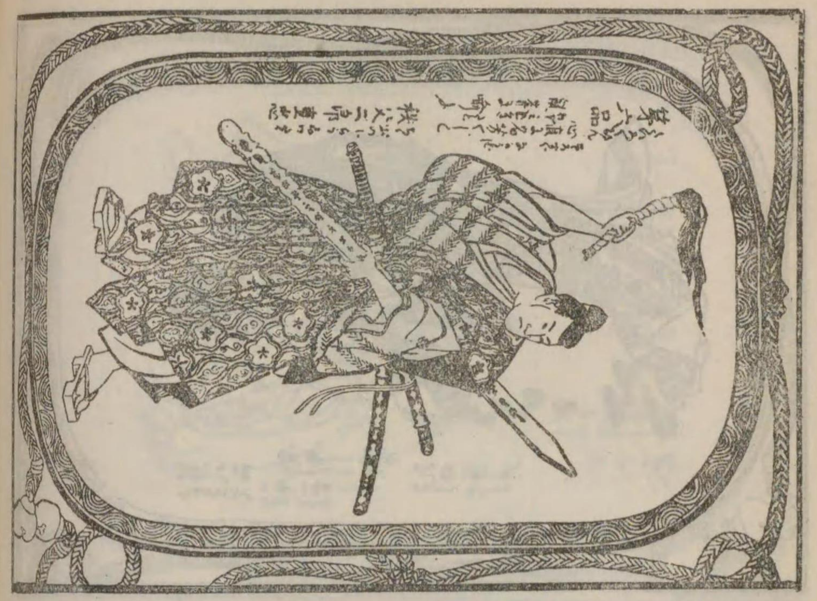
曲亭馬琴識

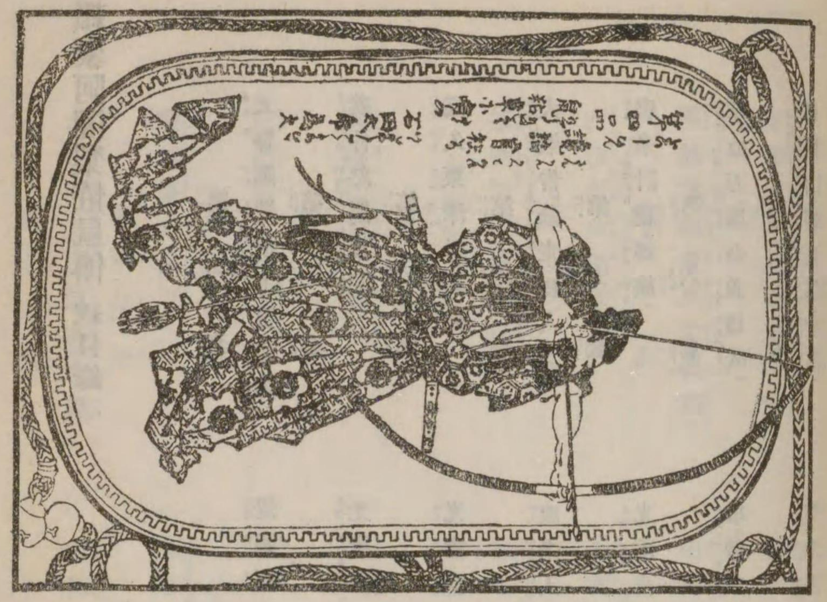












賴豪阿闍梨恠鼠傳 總目錄

第一套

天野岡驚使二木曾殿陣一　覺明叡山說二賴豪故事一

第二套

義仲怒罵二猫間一　光隆瀆捐二館舍一

第三套

爲久粟津射二義仲一　光實鎌倉闕二義高一

第四套

大姫告二急走一良人一　唐糸入間川留レ客

第五套

唐糸計殺二親族一　光澄夜擊二義高一

第六套

擊二血刀一唐糸說二爲久一　事二讐家一義婦慰二大姫一

第七套

日枝山縱豪誘二義高一　粟津原光實論二細鼠一

第八套

鶴岡社頭賴朝認二行僧一　鎌倉營中西行談二文武一

第九套

藥師堂邊重忠詰二義高一　由井海濱恠鼠笑二光實一

第十套

西行與二金猫邨童一　光實竊刺二惡棍一

第十一套

賴朝智解二厩衣歌一　嫩子勇禦二唐糸逆一

右前編五册

第十二套

箱根山爲久喪レ元　塞河原幽魂諫レ主

第十三套

正忠孤忠仕二幼主一　葬戸心烈賣二乳汁一

第十四套

喪レ金瞽女泣レ老　瘞レ玉窮士起行

第十五套

天龍川上忠臣逢二節婦一　富田旅館重忠賞二竹川一

第十六套

丐兒月下各言レ志　棒澤營中密迎レ容
第十七套　光寶進鞠ニ問唐糸一
重忠大款待ニ義高一　第十八套
弄レ假大姫初認レ眞　失レ明義高更歸レ空

目錄終

頼豪阿闍梨恠鼠傳　卷之一

東都　曲亭主人著述　門人　魁蕾癡叟批評

第一套

天野岡鷲木曾殿の陣に便す
壹明叡山に頼豪の故事を說

平家世をとつて二十餘年。官位人臣のうへを極め。威勢宇宙の間を鎭むといへども。行ひ天理に背きしかば。時運やうやく傾て。前兵衞佐頼朝は。伊豆の蛭が小島より起て。關左十箇國を略し。木曾の冠者義仲は。信濃の安曇群より出て。北陸廿八郡を伐したがへ。互に牛角の勢を張て。戰ふ毎に勝ざることなし。抑々木曾義仲と聞えしは。淸和天皇の後胤。六條判官爲義には孫。帶刀先生義賢の孤にて。頼朝とは正しき從弟どちなりけり。然るに前兵衞佐頼朝は。思量餘りあつて嫌忌ふかく。一族たりとも雋たる人をば。終にわが仇となりもやせんとて。妬く思ひ給ふなれば。今義仲の武威盛んなるをもて。心の中のどやかならず。既に氣色にあらはれしかば。相摸國の住人。石田太郎爲久といふもの。ある日佐殿にまうすやう。近曾は頻に物おもはしく見え給へり。倘木曾殿の事。御心にかゝり給ふにあらずや。爲久年來木曾の郎黨。小室太郎とは親き友也。密に信濃へ立越て。小室をかたらひ。假に義仲の手に屬て。君の御爲にあしかるべき筋あらば。機に臨て反間の謀を行ひ。終には木曾殿に自滅さして。眼上の瘤を除き進らすべしとて。いと信だちて申けり。頼朝これを聞て。平家の大敵ならばさもありなん。木曾はおなじ源氏にて。深き怨もなきものを。始終の事を思へばとて。正なき事をせんは由なしとて。許し給はざるを。なほしば〳〵請てゆかんといふに。默止がたくおぼして。かくまでいはゞ。汝が望に任すべし。かならずしも間者とな曉られそ。彼人異儀

なきに于はながくその手に屬て。軍功を勵み候へ。と仰すれば。爲久欣然と領承し。やがて堀江藤次以下の郎黨を將て。信濃に赴き。遂に小室をいひこしらへて。木曾殿の營にとゞまりつ。元來この石田爲久は。勇あれども義をしらず。才あれども便佞なり。こゝをもて強て今度の密謀を申行ひ。義仲に自滅さして。おのが榮利を圖るとは木曾殿終に曉らずして。只わが武勇の慕しさに。身方すとおぼせしかば。心くまなく相語ひ給ひぬ。げに古より今に至るまで。兩雄はかならず並立ず。厭頗。藺相如が終を全せしは稀なり。さる程に壽永元年三月のころ。藏人行家が不覺。一條忠頼が讒言によつて。頼朝。義仲忽地に中あしうなりにければ。佐殿みづから數萬騎を引卒し。上野と信濃の堺なる臼井巓まで押寄給ふに。義仲はその鋒先を避ん爲に。とるものもとりあへず。俄頃に越後へ退きたまふ。そのとき石田太郎爲久。木曾殿の轡づらを牽とめて。あらこゝろも得ぬ。殿には鎌倉の大軍に聞怕し給ふにや。いと正なくも見え玉ふものかな。と呟ば。義仲冷咲て。今頼朝と雌雄を決せんは。大事のまへの小事なり。兩虎食を爭ふときは。狐その虚に乘るといへり。頼朝が鋒さきを避るは。義仲が恥にあらず。討べき平家を討ずして。同士戰せば。それこそ世の胡蹇ならめ。勇むも事によるぞとて。騷ぐ氣色はなかりけり。兵衞佐頼朝は。義仲既に越後へ引退ぬと聞給ひて。人の穩便を存ぜんに。今更勝に乘るに及ばずとて。軈て。鎌倉へ引かへし給ふ途中。武藏國月田川の畔なる靑鳥野に陣どつて。天野藤内遠景。岡驚四郎義眞に宣ひけるは。汝達是より越後にゆきて。義仲にいはんやうは。平家朝憲に背き奉るによつて。追討の院宣をなし下さるゝ上は。夜を日につぎて逆臣を討滅し。宸襟を休め奉るべきに。さはなくして。謀叛の企てあるよし。明白に風聞せり。しかあれど。今度越後へ引入らるゝ條神妙なり。いよゝ殊なる存念なくば。子息義高をこなたへ遣し給へ。頼朝父子の義をなして。女兒大姬を妻し。一家の好を盡すべし。この旨承引なきに于ては。忽地軍兵をさし向て。誅罰を加うべしと慥に申せとて。直に彼地へ遣はし給へば。岡驚。天野の兩便は。汗馬に鞭を鳴らして。越後に馳ゆき。佐殿の言語を傳るところなく述たりける。義仲これを聞て。宗徒の郎黨を

集合つゝ評議あるに。石田太郎爲久。古老の意見をもまたずすゝみ出。何條御曹司を人質として。鎌倉へ遣し給ふべき。彼に勇將あつて寄來たらば。我に猛卒ありてこれを防ぎ。勝負を一擧に決し。安危を百世に定め給はん事。勿論なり。と居丈高になつて申すにぞ。今井四郎兼平。案じ入たる面地にて。否々。先度は穩便に引退き給ひぬるを。今更に變改あらば。平家追討の初一念は外になりて。東國。北陸の大合戰に。夥の兵士を失ふべし。元より御趣意なきに于は。稚君を鎌倉へ遣されん事。ねがはしく候といふに。或は兼平が意見を是とし。或は爲久が申し條を潔よしといひて。衆議さらに一決せず。その時義仲しばし思案して。石田が申すところも一理あれど。彼は新參のものなれば。只顧武威を逞うせんと思ふなるべし。兼平が所存。予が意に稱へりとて。今茲十四歳になり給ふ。嫡男美妙水冠者義高を召て。御身を兵衞佐の婿にせんとて。申し來さるゝに默止がたくて遣すなり。相構て惡びれず。一方の固ともなり給ひね。と聞えしらし給ふに。美妙水冠者はうけ給はり侍りと應て。臆する氣色なかりける。この御曹司は。母上世を早し給ひしかば。手塚太郎光盛が妻唐糸といふもの。乳母に召れて守育奉りぬ。かの唐糸は今井四郎兼平が妹なり。そのとき義高は。父のほとりを退出て唐糸を招ぎ。目今如此々々の仰を稟たれば。われは。鎌倉へ趣くなり。歸り參らん程の像見にとて。笠懸七番を射て見せ給へば。唐糸はこれを最期の遺とや思ひけん。不覺に涙さしぐみけり。かくて義仲は。岡驚。天野を饗應さし。さて近く招ぎよして宣ふやう。汝達立かへりて返辭を申さんには。申し來さる趣。驚き入て覺え候。義仲謀叛の心がまへありなんどと風聞あるは。全く讒者の流言か。更に信用あるべからず。又美妙水冠者が事は。未煉の少年なりといへども。厚意默止がたければ。進らするなり。不便がらせ給ふべし。義仲かくてあるなれば。平家追討の事。心安くおぼされよ。と佶と申すべし。と返答あるに。天野。岡驚畏まつて。かゝるうへは御曹司を伴ひ奉りて。一日もはやく立歸り候はん。鎌倉殿のさこそ待わび給はめとまうす。さて義仲は。誰をか義高の侍として鎌倉へ遣はすべきと詮議あるに。唐糸が兒子大太郎は。生得病身にて物の用に立がたし。義

高と同庚なる小扈從に。宇野小太郎行氏といふものありけり。これは唐糸が夫光盛が甥なり。又兼平が女兒に棧橋とて。今茲十五になりけるを。いと雅きより。彼小太郎に妻する。結號は有ながら。小太郎いまだ十五歳にも滿ざれば。婚姻に及ばねど。その心ざま怜悧ければ。彼行氏しかるべしとて。兼平。光盛がえらみ出して。頻にもふしすゝめしかば。義仲は即ち宇野小太郎行氏をもて。義高の御供と定められ。鎌倉の使者とともに。發足をいそがし給へば。恩顧のものども遺を惜み。おもひおもひの進物して。首途を祝きまうすにぞ。義仲は宗徒の郎黨三十餘人が妻子を見かへりて。今汝等が夫の見がはりに。義高をば鎌倉へ遣すなり。頼朝東國の大軍を將て寄來り。われ又北國の兵士をもて防ぎ戰はゞ。家隷夥を討すべし。世の靜ならんことをのみ思ふゆゑに。一子を棄たるぞ。と聞え給ふに。女房どもは噫とばかり應つゝ。感涙をとゞめかね。かくまで家人を憐み玉ふ。わが君の御恩惠を。他には報い侍らじと。思ふこゝろをいへばえに。いはで袂を濡らすにぞ。それが夫どもは面をあはし。千々の社の前渡して。照る日の下に住ずなるとも。いかで不忠を存すべきと。異口同音にまうして泣ぬ。かくて美妙水冠者義高は。岡驚。天野に伴れ。宇野小太郎を將て。越後を啓行。日を經て青島野の陣に到着ありしかば。頼朝すなはち對面あつて。鎌倉に携へ歸り。これが爲に一室を修理して。信やかに欵待し給ふやうなれど。實は人質なれば。政子。大姫にもあはし給はず。幽居なども。嚴重に衞らして。もつぱら用心し給ふに。政子前は。佐殿の意を曉給はねば。大姫が婿がねなりとて。日毎に女房たちをもて。叮嚀に慰めまうさし。わが女兒は年もまさりて。三五の春も暮行に。なほ兩三年はとく過よかし。愛たく婚姻をとゝのはして。夫婦の睦しきを見まほしとぞ宣ひける。さる程に木曾義仲は。數度の合戰に平家の大軍を打靡し。礪並倶梨伽羅谷に。十萬騎を鑒しにせしより。その威勢破竹の如く。壽永二年の七月には。はや洛ちかく攻着て。日枝に屯を構たり。この地は木曾山の尖きに似ず。眼にめづらしき湖水の風景。八の眺望も妙なれば。軍議の暇に。太夫坊覺明以下。僅に三十騎の兵を將て。彼此を逍遙し給ふに。日吉八箇の末社の内に。鼠の禿倉といふ

ありけり。義仲覺明を召て。これは何なる神をまつるにやと問給へば。覺明答て。三井の長吏。實相房の頼豪が神になりたるにて候と申す。こは何ゆゑに。鼠の禿倉とはいふならんと。不審み給へば。覺明かさねて。昔白河院の御時に。三井寺の頼豪阿闍梨とて。有驗の護者ありき。この時后腹の皇子わたらせ給はざりしかば。主上心もとなく思召のあまり。彼頼豪をめして。汝皇子を祈出してんや。尚効驗あらば。勸賞は乞によるべしと。仰含められし程に。頼豪畏まつて。年來ふかき望の侍るなる。勅諚相違なくば。皇子の御誕生勿論なりと奏して。本寺に立かへり。形の如く支度しつ。肝膽を摧て祈けろ驗にや。承保元年十二月十六日に。皇子誕生ましゝけり。主上斜ならず御感あつて。頼豪を召し給ひ。申せしに違はず。法驗灼然なり。今度の勸賞には。何事をか乞奉るぞ。と御氣色ありけるに。頼豪は園城寺に戒壇を建て。寺門年來の本意を遂候はんとぞ奏しける。主上聞食て。こは思ひもかけぬ事かな。もし三井寺に戒壇を勅免あらば。山門の衆徒憤りを含て。鬪諍已ときなかるべし。僧位增官に望をかけ。寺領坊領を給はらんとならばいかばかりにても乞によるべし。戒壇の事は思ひ絶候へとて。勅許なかりしかば。頼豪形を改て。綸言は汗の如し。豈出てふたゝびかへるの理あらんや。嚮に勸賞は乞によるべしとあるをもて。身命を擲。皇子をば輙く祈出し進らせて候に。今さらに勅許なきは遺恨の至りなり。枉て夙望を遂さし給へかしとて。或は怒り。或は歎き。道理を述て。愁訴すといへども。終に諾なはせ給はざれば。頼豪ふかく恨奉りて。大惡念を發し。わが夙望稱ずば今に皇子をば。とり復し奉るべきなりと罵りつゝ退出しが。ふかく持佛堂に籠居て。穀を斷て人にあふ事なく。眼はくぼ〳〵と落入りて。蠶みたる古朽木の如く。白髮はながく生延て。銀の針を磨立たる如く。手足の爪も切らざれば。全體垢に染て。護摩壇の障子よりも黑かりける。主上事の爲體を聞食て。叡慮さらに安からず。いかにもして彼を寛よと仰て。大江匡房卿を遣されけるに。頼豪はなほうちとけずして。いく程もなく死にけり。このゆゑにや。皇子は僅四歳にて承暦元年八月六日に隱れ給ひぬ。敦文親王と申せしは是なり。その後山門の座主大僧正良眞。勅を承

て。皇子を祈出し奉りけるに。怨靈しば〳〵障礙をなし。山門といふ所あればこそ。わが寺に戒壇を免されね。さらば山門の佛法を滅さんとや思ひけん。賴豪が怨靈。大なる鼠と變。谷々に充滿て經文を啖ふ程に。衆徒驚き慌て。踏殺し打殺しなどすれば。鼠はいよいよ多く出來て。いかにともすべなし。こは全く賴豪が祟なめりとて。それを寬んぜ爲に鼠の禿倉を造り。一社の神に祭りしかば。程なく鼠は鎭りぬ。今よりは百年あまり前時の事なり。と聞傳へて候。と申ければ。義仲つく〳〵と聞て。寔に三井寺に山門ある事。われに賴朝あるが如し。賴豪が遺恨理りにおぼし。夫子は北方の神なり。こゝに來たつて思ひ合すれば。曩に淸盛が家の馬の尾に鼠の巢を營し。と聞たることあり。是併 義仲北國子の方より起りて。南午の方なる洛に入るの祥にして。鼠の禿倉に因あり。さらば願書を寄んとて。軈て覺明に筆を執らし。義仲忽地平家を討滅して。禁闕を守護し。官位は賴朝に超て。征夷大將軍になるならば。神田許多を寄進すべしと祈念しつ。上差の鏑を拔て。件の願書とともに。神前に納給ふ。この日の事は。隨兵三十騎が外に。絕て知者無かりしかば。世には聞えず成りとなん。

第二套

義仲怒て猫間を罵る
光隆憤て館舍を捐つ

平家は終に牟得ず。主上安德天皇を守護し奉りつゝ。周章きて。洛を落ちにければ。義仲やがて。後白河院のおはします。法住寺殿を警固し奉り。高倉院第四の御子。尊成親王を位に卽奉る。後鳥羽院是なり。翌年改元あつて元曆とぞ申ける。この君猶幼くまし〳〵ければ。天下の事。大小となく。院後白河より制度し給ふにぞ。頻に義仲の軍功を御感あつて。勸賞は乞によるべし。何にまれ望ましき事あらば。聞えあげよ。と仰しかば。義仲畏て。未熟の邊將。偶々の功業をなし得て。一時に逆臣を奔らし。萬機の政をかへし奉る事。君の洪福によつてなり。若朝恩空しからずば。征夷大將軍になし下さるべうもやと奏するに。征夷大將軍は。輒く宣下有がたしとて。臨時の除目を行れ。

義仲を左馬頭になされて。播磨國を給はりしが。いくほどもなく更て。備中國を下されけり。義仲これを不足とし。手裏覆す綸言は。昔も今もかはらざりき。僅に一箇國の受領を經んとて。碎身粉骨の軍はせざりし。かくては君の御おぼえも心もとなし。と呟き給へば。石田太郎爲久。その氣色を見て。すはわが便宜を得たりと歡び。密かに義仲に申けるは。殿はいまだしろしめされずや。上にも鎌倉殿のみを。愛たきものにおほせばこそ。勅諚相違して。征夷將軍になし玉はざるを。腹たゝしくおぼさずや。加旃。下郎などに至るまで。殿をば。その器に堪ずと思ふにや。頃日街の風聞をきくに。鎌倉殿こそ征夷大將軍になり給ふ。と申すなれ。この事もし實事なれば。一世の恥辱。末代まで瑕瑾なるべきか。はやく賢慮をめぐらし給ほずば。獵禽盡て。走狗烹らるゝの悔あるべしとて。例の佞言をもて。義仲の憤り給ふやうに。いひこしらへたりけるが。街の風聲は虛言ならず。壽永二年八月に。左大臣藤 兼實公 勅を承りて。前兵衞佐賴朝朝臣を。征夷大將軍になされけり。義仲は年齡いまだ四十に足らで。元來性急の猛將なれば。夙望を果さずして。却て賴朝に超られたるを。憤り思ふ事いと深かりけるに。石田爲久傍らにありて。燃る火に薪を添しかば。義仲の怒氣いよ〳〵煽になりて。よろづあら〳〵しく言行。俄頃に洛中を亂妨して。攝家花門の貴族をも。屑とせず。兼平これを諫るといへども。爲久密に拄し程に。忠言いたづら事となれり。この爲體。平家の惡虐にも過たりとて。三公百官。舌を掉て怕あへるにぞ。上皇後白河院を申す大に驚きおぼして。山門の大衆に仰つかはされ。急ぎ義仲を誅罰有べし。と擬し給へば。義仲ます〳〵憤りて。直に院の御所法住寺殿へ押寄て。生北面。山法師等を。散々に追ちらせば。是彼度をうしなひて逃まどひ。天台座主明雲僧正は。敵の射る矢に命を隕し。八條宮丞擊れ給ひぬ。と聞えしかば。上皇大に御周章あつて。且く木曾を寬給はん爲に。猫間中納言光隆卿を勅使として。六條西洞院なる。義仲の宿所に遣さる。此時義仲は。六條西洞院。大膳太夫信業か故の家に在。光隆卿勅を承て。急ぎ彼處にゆき向ひ。家臣竹川因幡介正忠をもて。かくといはせければ。義仲聞て。いかに猫間が來りしとか。犬こそ放鷹の用にはたて。猫を畜て何かは

せん。とく追走らせよと下知すれば。申繼の雜色答て。いな獸の猫には侍らず。猫間中納言光隆卿の勅使にたゝせ給ふなり。といふに。義仲呵々とうち笑ひ。さらばこなたへ通せとて。烏帽子の緒掛結びつゝ出迎て。勅詔を聞んともせずや猫どの。たま／＼來給へども。この宿所には鼠もあらず。元よりわれは子の方なる。北國より出たれば。猫は仇とも思ふなり。抑々御邊は。山猫の子か。草野猫の父か。花壇に狂ふて鼻つらこすられ給ふなと。飽まで嘲哢せられ。主の後方にありける。因幡介正忠。こらへかねてつとすゝみ出。木曾どのには。いまだ猫間の緣故をしろしめされずや。抑わが主君光隆卿は。七條の坊城壬生のほとりなる。猫間といふ處におはするをもて。世の人猫間中納言と唱ふ。譬ば。信濃國木曾といふ田舍におはせしをもて。木曾殿といふが如し。且彼處を猫間と稱る事は。昔光隆の先君。壬生の中將。世にいまそかりしとき。井を堀して不意も。金の猫を得給ひつ。その形容活るが如く。金花の猫王ともいひつべし。されば彼猫を。當家に傳給ひてより。群鼠ふかく竄て。注進の內に入らず。これ未曾有の物なれば世の人御館のほとりを斥て。すべて猫間と呼ぶ程に。やがて家號ともし給へるなり。そはともあれ。かくもあれ。勅使を獸に比し給ふは。天魔の所爲か。いと淺ましゝとて。いきまきあらく述たりけり。義仲これを聞て。ますます。冷笑ひ。この白徒何とかいふ。猫間と名告て來ましたれば。猫と呼ばんは過ちならず。浪風しぐめる世を鎭めんには。武士こそ物の用にはたて。鼠取ずのゑせ公家に。物食せよと下知すれば。石田太郎爲久。うけ給はりぬと應つつ。豫て用意やしたりけん。大やかなる石決明に。堆く飯を盛りたるを。うや／＼しげに捧もちて。光隆卿の前に居たり。猫間殿は鄕より只顧呆れはてゝ。一言の問答に及ばず。只淺ましとのみ思ひ給ひたるに。今この恥辱にあひて。心の中ふかく憤り給ふと雖も。穩便の御使なれば。と思ひかへし。見むきもやらでおはせしかば。義仲大いに焦燥て。みづから折敷を光隆卿の膝にさし着。食へ／＼と責たりければ。正忠忍かねて。石決明をかい鬪。義仲へ投著れば。飯は席上に散亂して。時ならぬ雪を降しぬ。義仲はやく之を避て。見は其身にあたらずといへ共。怒忍ら心頭に

發りて聲をふり立。こは奇怪なり。と罵もあへぬに。爲久つと走りかゝつて。正忠を組伏れば。胸さかとつて捻返し。上へ下へと揉みあふたり。義仲は。石田が勝得ざるを見て。益々焦燥よれや者ども。と呼ればゝ。郎黨夥走り來て。正忠が頭髮を取て。仰樣に引倒し。押て索をかけたりける。正忠は懋に。義仲を擊得ざれば遺恨さらにやるかたなく。怒れる眼に朱をそゝぎ。君恥らるゝときは臣死すべしといへり。只恨むらくは。木曾が頤を引裂捨ざる事よ。と罵れば。義仲これを背向に見て。螳螂が車に逆ひ。精衞海を堆んとすとも。そはかひなき事なり。ものども這奴を引たてよ。と下知しつゝ。席を蹴立て奥に入れば。郎黨やがて正忠を引たてんとするに。なほ罵りて動きもやらねば。衆皆手をとり足をとり。宙にかきもて廊のかたへ出ぬ。光隆卿は思ひの外なる狼藉に。勅命を述るに便なく。却て家隷を喪はゞ。恥の上の恥なりとおぼせしかば。ひとり殘りとゞまりたる。石田爲久に對ひ。王事噬ことなし。光隆苟も。勅命に依てこゝに來ながら。家臣をとらはれたり。といはれんは。私の恥のみならず。君命を恥むるに似たり。其許よきに申宥て正忠を給はり候と宣へば。爲久は。やゝ落たる烏帽子をとつて。威儀を繕ひ。見そなはするごとく。義仲猛きに誇て朝威を輕じ奉れば。家臣の事などは。いかに申すとも聽べうはをぼえず。しかあれど。それを償ふ程の賜物あらば。爲久よろしく申こしらへて見候べしといふに。光隆卿しばし沈吟して。わが家武人にあらざれば。めでたき兵具などは。持ゐ傳へず。何をがな進らすべき。と問給へば。爲久かさねて。夜光の珠は。十五城をもて換んといひし故事あり。目今御家臣の物語ありし。金の猫は。怪有の珍器なり。是をや贈り給はんかといふに。光隆卿聞て。こは思ひもよらぬ。先祖傳來の重寶を。いかで他人に與ふべき。とばかりいひては正忠を救ひがたし。とやせまじかくやせまじと。案じ煩ひ給ひしが。いな／＼。金の猫は目をよろこばするのみの。翫。忠臣は家を守るの寶なり。よしや巨萬の財寶ありとも。家を守る忠臣なくば。遂に他人の物となるべし。しかなり／＼と思ひもかへして。ふたたび爲久に對ひ。いはるゝ所その意を得たり。金の猫は立歸りて後に。贈り來すべし。正忠が事は。年來召仕て不便

のものなり。偏に其許の憐を垂て。救ひ得さし給へ。とたのみ聞え。忙はしく車に乘りて。中途より雜色を。壬生の館へ走らしつ。金の猫を義仲の宿所へおくらし。その身は直に内に參りて。事の爲體を奏し奉るに。攝政殿はさらなり。上皇聞食てます〳〵驚き給ひ。義仲既に一天の君を怕れずば。此後も又いかなる事をか爲出らん。假に彼が憤りをとかんにはとて。俄頃に。征夷將軍になされしかば。世の人旭將軍と稱ふ。こは彼趙盾を。夏の日に譬し奉るに異ならず。旭は昇こと速なれども。目映して仰ぎ視るに由なければ。その猛き威光に比べて。しか呼るなるべし。是より先爲久は。光隆卿の贈來されし。金の猫を義仲に献り。さま〴〵に言葉を竭して。正忠が一命をまうし乞といへども。義仲は賄賂を見て。面を和ぐる人ならねば。件の猫を手にだに取ず。兼平も又主を諫て。勅使の家臣を搦捕ら し給はゞ。朝敵の汚名を脫れがたし。速かに放かへし給へと申す折しも。かさねて内より勅使を立られ。義仲先度の望に任せられ。征夷大將軍になさるべき旨を仰下されしかば。義仲これにこゝろ折れて。正忠を放かへらし。金の猫を爲久に預けてやがて參内し給ひけり。是はさておき。猫間中納言光隆卿は。義仲の狼藉によりて。勅命を述ずして。いたづらに歸りし事。わが身ひとつの不覺なりと。世にも面なくおぼせしかば内より御咎のなき間に。ともかくもならばやと。心を決給ひながら。さもなきおもゝちして館に退き。妾腹の弟にて。いまだ冠を給はらざりける。新太郎光實とて。今茲十六歳になり給ふが。膂力人に勝れて武藝を好み。心ざまさへ信やかなれば。此光實のみに。あり し事どもを聞えしらし給へば。光實大に驚き怒りてわが子舍に退き。いかにもして兄の寃を雪ばやとて。ひとり肝膽を摧たまひぬ。かくて光隆卿は。一室に入りて。心しづかに看經し。終に自害して失給ふ。時やゝ推移て。女の童がはじめて主の自害をしりて泣つ叫つ走り參りて。光隆の北の方。八重垣に告まゐらすれば。光實も走り來つ。こはそもいかに。とばかりに。屏風蚤遣り轉び入り。血に塗れたる亡體の枕方後方にとり着て。共に滅ぬべく泣給ふ。浩歎に竹川四郎介武忠は。やゝ放されて。義仲の西洞院の宿所を走り出しが。うれしとも思はねば。歸るに足らず。

かねて。王生のほとりちかく來れば。六條坊門の森の杪に烏夥群居て。かは〳〵と鳴に。何となく胸うち騷げば。あらおぼつかな。とひとりごちつゝ。館の門内につと入るに。妻の葺戸待わびたる氣色にて。端ちかくあり。夫の歸り來るを見て。耳の根に口をさしよせ。目今如此の事ありと告るに。正忠いたく驚きて。遠侍を走過るも。夢路をたどる心持しつ。忙慌て參りしかば。舍弟新太郎光實を始めとして。皆枕方に圓居しつ。八重垣の方は。この春出生し給ひける。鈴稚と申す稚君を抱きとり。かく幼きを遺しおきて。自害して果給ふ。心つよきはわが夫なり。痛きはこの子なり。と。かき口説給ふ愁傷を。慰めかねて乳母等も。みなもろ共に泣にけり。その時正忠は。八重垣の方をさま〴〵にいひ慰め。さて申すやう。我君不曾に恥しめられて。勅諚を述るに及ばず。むなしく歸り給ひしかば。叡慮測がたしと畏みて。みづから刀に伏し給ひけん。御こゝろの中思ひやられ侍る。加旃當家の重寶たる。金の猫もて。正忠を償ひ給ふ御仁惠は。忝けなき事いふばかりなけれど。いひがひなくも思ひ奉るかし。正忠がゆゑをもて重器を失はし。剩さへわが君を自殺さして。阿容々々と存命べきかは。直に義仲が宿所に走せゆきて。切死せんには。といきまきつゝ。袴のそばをかいとつて。立あがらんとしたりけるを。光實しばしと呼びとゞめて。共に遺恨の涙を壓。正忠が述懷。われもさこそとは思へど。仇は數萬騎の大將なるを。はか〴〵しき事もしいださず。犬死して忠ならんや。思ふ仔細あれば。只穩便に送葬の營をせよかし。と諭給ふに。正忠も。さすがに北の方の御嘆きと。幼君の御事痛しくて。且く必死を思ひとゞまり。後の事などを。叮嚀にものして。托孤の忠義を盡しけり。

第三套

爲久粟津に義仲を射る
光實鎌倉に義高を闖ふ

後白河院は。猫間光隆卿の自害して失たるを。聞召といへども。義仲のおもはん程を。叡慮にかけられけるにや。又彼卿の。勅諚を述ずして歸りつるを。こよなき越度なりとて。怒らせ給ひたるにや。家嘗なんどの事はさらなり。

却て庄園をも召放されけり。かゝりし程に。その方ざまの人々は。いとゞさゝへうら悲しきに。海士の小船の楫をたえて。漠に漂ふ風情にて。泣々館を出給へば。譜代の家隷。給事の女房も。みな四落八落となりて。竹川正忠夫婦の外に。隨ひ奉るものもなし。そのとき新太郎光實は。正忠に宣ふやう。汝夫婦が信々しさは。兄君にも。よくしりてはせばこそ。前日の危難を救ひて。幼き人の事などをたのみ給ふなるべし。もし再生の恩を忘れずば。嫂君母子を。ともかくもして養育進らせよ。我は又苦に寢。戟を枕とし。義仲を擊て金の猫を取返し。會稽の恥を雪て。孝養に供んとおもふなり。と聞え給へば。正忠うけ給はり。仰を固辭にはあらねど。おのれこそ。灰を呑身に漆をさしても。君の仇を擊べきものなれ。北の御方稚君には。妻にて候葎戸を傳おかんに。心もとなき事はあらじ。まげて正忠を。も倶し給へといふ。光實かねて。いなわが仇を闘ふは易く。汝が夫人と幼君を。養育は難し。その難を捨て易きを取は。程嬰杵臼が羞る所なり。努思ひとゞまり候へ。と諭し給へば。理に迫られて。正忠ふたゝび固辭得ず。男泣にぞ泣けける。かくて光實は。嫂八重垣の方に暇乞し。引わかれて出んとし給ふに。八重垣の方宣ふやう。御身志しは勇くおはせど。いまだ壯年にもあらぬ。身ひとつにて。仇を狙擊んとし給ふは。いと危く侍る。申すまでには侍らねど。鎌倉などに緣をもとめて。兵衞佐を後盾にし給はずば。さる大敵は討がたからん。かならずしも麁忽の擧止をして。歎をまさし給ひそとて。目を押拭つゝ聞え給ふに。光實も遺はをしけれど。ひとり心を鬼にしつ。いとかひがいしく打扮て。往方も定めず出給へば。正忠夫婦は。八重垣の方を扶掖。鈴稚丸をいだきて。嵯峨の片ほとりなる。嵐山の麓に。かすけき住家をもとめて。主從こゝに膝を容るゝに。その家は大堰川を前にあてゝ。風景いふべうもあらねど。物おもふ身は。慰よすがにもあらず。きのふまでは。乳母納女に。掃かし給ひし鈴稚を。拘寃し給ふ母君に。かはり奉るべき葎戸も。千江松といふ一子ありて。いまだ懐をはなれねば。給事もおもふに任せず。主從四人。なす事もなく。けふと暮らし翌と明す程に。多の緣になりにけり。明れば元暦元年正月中旬に至て。鎌倉に義仲の鼠賊

闘え。彼人法住寺殿を攻おとし。明雲僧正。八條宮を害し奉りし事。明白に風聞せしかば。頼朝大に驚き給ひて。且く平家追討の計策を闘き。まづ逆臣義仲を討滅し。宸襟を休め奉れとて。舍弟蒲冠者範頼。九郎義經を兩大將として。東國の大名夥差副。とく〳〵上洛して。一擧に勝負を決すべしといそがし給へば。範頼。義經二手にわかれ。宇治。勢多より押寄給ふに。佐々木高綱が先鋒して宇治川を渡せしかば。輙く洛に責著たり。この折しも義仲は。行家を責よとて。樋口二郎に軍兵夥屬て。河内國へ遣したれば。自方以ての外に無勢なり。かくては洛中にての合戰かなふべからず。いそぎ本國信濃に退き。かさねて雌雄を決せんとて。近江路をこゝろざして。粟津が原まで落給ふに。頼きつたる郎黨は。是首彼首にて討れ。今井四郎兼平が。五百餘騎のみ殘りける。その時木曾殿は。兼平と馬の頭をおしならべ。かゝりせば洛にて。ともかくもなるべかりしに。懋にこゝまで落たれど。敵間近く追ひ來れば。遁れ果べうもおぼえず。さるにても。石田太郎爲久が見えざるは。討れやしつらんと宣へば。兼平答て。何條石田が討死致すべき。纏に都を落給ふとき。這奴が手のもの共を將て。範頼の陣に馳加りたるを慥に見たり。爲久が事につきては。日來諫奉りしが。今はみづから思ひあたらせ給ひけめ。楯親忠。根井行親。手塚光盛。大夫坊覺明。小室太郎などこそ。目ざましき戰して。みな討死はして候なる。しかはあれ。兼平かくてさふらへば。千騎が一騎になるまでも。心つよくおぼされよ。誘たまへ。路をひらきて進らせん。と申しもあへず。群立たる多勢の中へ。咄と嘯て馳入りつつ縱横無礙に戰ひしが。五百騎の兵士も。或は討れ。或は落うせて。後には義仲と兼平と主從二騎になりけり。義仲は爲久を鎌倉の間者とも知ず。彼が舌頭に惑されて。征夷將軍に望を掛。物體なくも君を恨み奉り。はからずも朝敵となりたる事。いと淺ましとおぼせども。後悔其詮あらざれば。今は是迄ぞ。誘もろ共に討死せん迚。再び敵に懸むかはんとし給ふを。兼平いそがはしく押とゞめ。今さらに一騎二騎の半武者を討とり給ふとも。益なきに似たり。兼平防矢つかまつるべきに。彼處の森に走り入りて。心しづかに御腹めさるべし。と申もあへず。間近く追來る敵を拄

て。散々に射たりける。さる程に木曾殿は。兼平に諫られて。向の岡の松蔭に。馬の足掻をはやめ給ふ。頃しも正月廿一日の事なれば。比叡山おろし寒けきに。谷の氷も解やらず。霜の柱に路さへ滑りて。深田に馬を乘入れつゝ。打共打共行ざれば。せんすべなさにこゝろも勞れ。今井や續く。と見かへり給ふを。石田太郎爲久が。闕よつて發つ矢に。丙兜を篦ぶかく射させ馬の頭に額を當て。俯になり給へば。石田が郎黨堀江藤次光澄。同藤五陰重。兄弟二人。深田の中に跳入りて。義仲を引落し。やがて首をぞとつたりける今井四郎兼平は。木曾殿討れ給ひぬ。と見てければ。なじかは些とも猶豫すべき。弓をからりと投すてゝ。太刀を眞額に拔挿頭。西を擊ては東に靡。南を繫ては北に走らし。十五騎に手を負して七八騎を切て落し。爲久にあはんとするに。たえて石田を見ざりけり。兼平已に力究て。今はかうと思ひしかば。鎧踏張。鞍壺に衝立て。大音聲に名告けるは。旭將軍木曾殿の御内に於て。四天王の隨一と呼ばれたる。中三權頭兼遠が四男。今井四郎兼平が討死するを見て武運竭てんときの。手本にせよや殿原とて。太刀の鋒先を口にくはへ。馬より落て死にけり。いと目ざましき最期なり。さても石田太郎爲久は。思ふ隨に義仲を諫課せて。範頼の陣に馳くははり。粟津が原の合戰に。敵の案内をしつたれば。闕よつて。義仲を射て落し。郎黨堀江に首をとらせたれば。今度の軍功第一番と稱せられ。こよなき面目なりとおもへり。かくて樋口二郎も。河内より歸り來て洛に入るの日。遂に虜となりて首を刎られ。洛中洛外の播亂。忽地に靜まりければ。爲久はいそぎ鎌倉に馳參りて。去年よりの爲體を。審らかに聞あげ。曩に義仲の預給ひし。金のねこを鎌倉殿に獻るに。頼朝は彼猫を見そなはして。細工の凡ならざるを賞美し。爲久が計策。その機を漏らさず神妙也。とのみ宣ひて。重くは用ひ給はねど。石田はみづから許して人に誇れば。いと愛たしと思ふもの多かりけるに。秩父重忠これを冷笑て。爲久は。己が榮利をはからんとて。御一門の中を裂。紂を輔で紂を殺す。その心ざまは虎狼に等し。かゝる佞人は武士の風上にもおくべからずとて。爪彈して疾しけるとぞ。こゝに備前新太郎光實は。義仲洛の軍に負て。近江のかたへ落ゆくと聞えし

ころ。寄手の軍兵に紛入りて。彼此と走りめぐりにけれど。終に當の敵に逢ず。義仲は。石田爲久に擊れしかば。忽地望を失ひて。いよゝ世の中を。形なくおぼえ。遺恨やるかたなさに。自殺せばや。と思ひしが。また思ふやう。我身幸なくして。仇を他人に擊するともその子義高。今なほ鎌倉にありと聞く。縱義仲は擊ずとも。その子を擊ば。志をいたすに庶し。且く彼人のなりゆくを見んにはとて。みづから元服して。潛に鎌倉に走下り。わつぱら便宜を窺ふといへども義仲討れて。後は。義高も嚴しく閉籠られて坐するとのみ聞えて。輙く闕ひよるべうもあらず。殊更都鄙の恩劇に。民間といへども。他所より來れるものを止ねば。光實ぜひなく。又近江路をこゝろざして歸りゆくに。路すがら思ふやう。美妙水冠者義高は。朝敵義仲が子なればとて。倘鎌倉にて誅せられなば。今度も又わが志をいたしがたし。よしや夥の月日を經るとも義高を恙なく世にあらせずば。誰を仇として寃を雪ん。とおもふに。いと心もとなければ。あらふる神社に祈請しつ。仇人の命乞をするの外さらに他事なかりける。心の中こそ健氣なれ。

評に曰く。この段軍記の古實をうしなはずして。竊に許多の脚色を說出し來たる。所謂義仲北方子の方より發りて。鼠の祠に祭り。光隆南方花洛にあつて。金の猫を贈り。竟猫鼠の寃を締に至る事。是一部の楔子なり。

賴豪阿闍梨恠鼠傳 卷之一 終

頼豪阿闍梨恠鼠傳　卷之二

第四套

大姫急を告て兩人を走す
唐糸入間川に客を留む

美妙水冠者義高は。鎌倉に赴きてより。既に三年の春を迎て。やゝ十六歳になり給へば。政子御前。只管婚姻をいそがし。去年の冬より准備して。その事を聞え給ふに。頼朝はいまだ遲からずとのみ應て。させる氣色もなく。今に至て政子大姫にあはし給はねど。折ふし侍ふものどもが。雨夜の品定に。御曹司はかくこそおはせ。譬ていはゞ。容止は何がしに似て。それにも立まさり。心ざま又溫順にて。木曾の山里に生育給ふには似げなく。よろづ風流やかにましますとまをすに。大姫は年の齡一八を過て。（元曆元年大姫十七歳なるときは。仁安元年の出生なり。東鑑。盛衰記等を閲するに。安元元年に。頼朝。伊東祐親が家に寓居し。その後北條時政が家を主として。その女兒政子に通ず。しかれば大姫の年紀。古記とあはず。かゝる事作物がたりにおほかり）生ごころさへつき給へば。待にわびしき桃夭の佳會をいつと打つけに。問ねど。色に出るなるべし。しかるに今玆正月中旬より思ひの外の事出來て。義仲忽地に滅亡し給ひければ。義高も朝敵の嫡子なれば。とて嚴しく一室に閉籠られ。宇野小太郎行氏（北條九代記に海野小太郎幸氏に作る）が外には。參り仕るものなく。倘逃亡給ふ事もやとて遠外に守護の武士をつけられたり。義高は身の形なきにつけても。父の討死はいふもさらなり。今井手塚等をはじめとして。みな粟津野の露と消。乳母唐糸が往方さへ。定かならずと聞えし程に。愁傷いふべうもあらず。とても脫れぬ命なりとも。せめて顯身の息の内は。父母の菩提をも弔ひ。又みづから後の世の准備をもせばやとて。朝な夕なに讀經しつ。歎きの中に春も暮て。いとゞ濕りがちなりける。五月のころにはやなりぬ。行氏はこの年來。いと信やかに册ぎしが。義高の物思ひを。見たてまつるも心憂くて。さまざまに諫勸し。ある日又まうすやう。かしこ

けれど。大殿朝敵の名に係りて。果敢なく討れ給ふといへども。君はこの三年が程。鎌倉におはしまして。その事に與り給はず。加旃大姫君の壻がねにてましませば。鎌倉殿にも。いかでか憐みおぼさゞらん。いたくな思ひ屈し給ひそ。と口にこそいへこゝろには。わが身稚き時。父母を喪ひて。君恩他人よりもふかし。もし洛にあるならば。花々しく討死して。年來の御情に。答奉るべかりしを。愁に生殘りて。絆ともなる妹と背の結號せし棧橋は。いかになりけんともしらず。君を思ひ身をはかなみて。いとゞ慰めかねしかば。しばしも憂を忘れ給ふよすがに。義高に申すすめて。主從折々雙陸を撲けるに。興に乘じては。夜をあかす事もおほかり。かゝりしかば大姫は。義高この程の物おもひに病もわづらひ給はんかとて。只その人の事のみを。問もしいひも出給へば。政子御前は。又大姫の思ひほそり給ふに心くるしく。ある日姫君に宣ふやう。義高頃日は。雙陸を好み給ふよしを聞しかば。かゝるものを進らせばやとおもひて。豫て細工にいひつけおきぬ。あれ見給へとて。二ツの木偶さし對て。雙陸を撲機關を。女の童に早出さし。又宣ふやう。昔唐の玄宗帝は。楊貴妃と雙陸を撲給へるとき。重三重四を乞けるに。おもふ儘に勝給ひたるよろこびに。その乞目に緋を入れさし。五位に准給ひしより。朱三朱四と呼ぶとかや。又源氏物語に。近江の君も是を嗜り御身夫婦ゐ睦ましく。かゝる遊をし給へかし。と思ふばかりの贈ものなるに。こは御身より進らせ給へ。これにつきても一日もはやく。婚姻あらまほしとのみ。祈侍りと聞え給ふに。大姫はおほけなき。母上の御慈にこそ。と歡び聞え。軈て女の童をもて。件の機關を。義高の住せ給ふ。子舍に贈り遣し給ひぬ。かくて兩三日を經て。何がしの局とか呼るゝ老女。諸折戸のこなたより。しのびやかに行氏を呼び出し。御曹子は柳營（頼朝を）の御爲に。正しき壻にわたらせ給へども。木曾殿朝敵となつて。討れ給ひぬれば。壻ながら義高の心中量がたしとて。僭に失ひ奉れ。と仰ごとありけるよし。大姫君もれ聞給ひて。いたく驚き愁ひ。いかにもして今宵の中に。鎌倉を出しまゐらせよ。と宣はするなり。こゝを出はなれ給ふまでは。夥の女の童にうちかこまして。人の思ひかけぬやうに計ひ侍りて

ん。とく〳〵用意し給へ。と密語ば。行氏聞もあへず。走り入てかくと告るに。義高はさわぎたる氣色もなく。こは豫て思ひつる事よ。されど大姫が志ざしを化にはせじ。脫るゝ程は脫れて見んと思ふなり。汝よろしく計ひ候へ。と仰するに。行氏こゝろを得て。ふたゝび諸折戸のほとりに立出。彼老女に今宵の暗號を諜しあはせ。主從俄頃に旅の准備して。暮るゝを遲しとまつ程に。既に時刻にもなりしかば。老女は夥の女の童の中に。義高主從を打かこまし。輙く出しまゐらせんとす。そのとき。行氏おもうやう。一旦脫れ給ふとも。忽地追人蒐らば。わが身ひとつにては。いかでかこれを防ぎ得ん。なほ詐りて。後やすく延し奉らんにはとて。襤に大姫より贈り給ひたる。木偶の機關を。義高の居室に操り置。主從終に龍潭の危きを脫れ。武藏のかたへ走りけり。さるからに宿寢の武士は。通宵木偶の雙陸を撲音を聞て。義高のまだ寢給はずと。油斷しつ。次の日巳の刻過る比及に。やうやくその亡を曉て大に瞞。やがて緣由を注進す。折しも頼朝は。公文所に出て。西國合戰の安危を問ておはせしが。件の告を聞て。列座たる武士を見かへり。誰か義高を討留來らんと仰するに。衆皆噫とばかり應て。政子大姫の恨みたまはん程をおもふゆゑにや。われうけ給はらんといふものなかりつるに。石田太郎爲久。遙けき末座より進み出。某馳向ひ候べし。と申しもあへず席をあらゝかに立て。直に宿所に走り歸り。俄頃に手分して。家隷堀江藤二光澄をば。武藏のかたへ遣し。その弟藤五蔭重をば甲斐國のかたへ遣し。その身は伊豆箱根を越て。駿河路までもとこゝろざし。主從三人。三手にわかれて追蒐たり。さる程に。美妙水冠者義高は。宇野小太郎行氏を將て。夜は通宵路を走て。晝は木の蔭。岩の狹間に立やすらひ。鎌倉を出にしより第三日の曛昏には。武藏國高麗郡。川越のあなたなる。入間川まで落延ぬ。こゝに又義高の乳母唐糸は。往に義仲。粟津にて討れ玉ひ。兄兼平。夫光盛も討死せしと聞えしころ。一子の大太郎。姪なりける棧橋を少して。信濃路をまどひ出。武藏國入間郡。入間川の上に來りて。こゝに僑居し。年來手なれたる琵琶和琴などを。鄕の少女等に敎るを生活とし。親族三人。ともかくもして。憂月日をおくるに。大太郎は稚きより多病

なるが。この春いたく眼を病て。終に盲目となりしかば。これをば琵琶法師にせんこゝろがまへにて。明暮糸竹の技を敎けるに。その性音曲を嗜ざるにや。人なみには習ひもおぼえず。よりて打懲さるゝ事しば〳〵なり。これらは私のうへにして。心苦しとするに足らねど。唐糸は只顧に。義高の御形容。いかにをはすらん。とおもひやるにも。大太郎がいひがひなく。稚きより軟弱しくて。眼さへ見えずなりにければ。こゝろのみ焦燥て。相語ふ人もなかりしかば。棧橋はその氣色を見て。いと道理と思ふにも。妹脊の緣し締びたる。行氏が事こゝろにかゝりて。そなたの空のみ瞻望れど。音耗すべきよすがもなく。いとゞ慰めかねたりける。浩處に義高主從やゝこの處に來給ひしが。日もくれ。人も疲勞れて。歩みなやみ給ふにぞ。行氏が申すやう。目今彼處にて。里人に問て候へば。こゝは武藏の入間河原也。と申たり。けふも既に暮て。はる〳〵と來給へば。今宵はこのわたりに宿りを投めて。且く氣力を養ひ。翌は朝まだきより走り給へかし。と申すにぞ。義高點頭て。われもさ思ふなり。しかるべき家もあらば。宿を投て見よと宣へば。行氏こゝろを得て。河原にそひたる草の門に立よりしが。主人はいかなる者にかあらん。愁に物いひかけて。身の大事になりやせん。と躊躇て。忽卒には呼門聞えず。主從門に立在て。內の容子を張ひぬ。かゝりける程に。鄕に行氏が路を問たる里人は。川越の越三といふ惡奸なるが。義高主從の凡ならぬ形容を見て。こは今朝村長よりふれしらしをる。落人なめり。思ひしかば。そのゆく所を究んとて。密に跟來たりて。岸の蛇籠に身を倚せつ。間近く張居たるに。義高主從は。宵闇のあやめもわかで。後方に人のあるをしらず。この時唐糸は。もの習ふ少女等も。習ひ果て歸りにければ。大太郎に筑紫琴を敎るとて

さりともとたのむの雁を頼みにて入間の川にけふぞ入りぬる。

といふ唱歌を。くりかへし〳〵唄するを。義高もれ聞て。行氏が袖を引。今唄ふなる古歌の心は。わが身のゝへをいふに似たり。いかなる人の住家ぞや。いともゆかしき爪音なり。と密語つゝ。なほ竊聞し。思はず時をうつし給ふ。

かくて唐糸は。大太郎に教る事。數回にして。終に熟得ざりしかば。うち腹立て聲をふり立。御身既に十六といふ年なれば童にはあらず。武士の子と生れて。癈人となりし事。身の不幸なればいはんやうなし。かばかりの技を熟る心なくば。何をもて行末口を餬ふべき。あな鈍ましや。と罵もあへず。壁に掛たる胡弓をとつて。背を丁とうつ程にう大太郎は許し給へ〳〵と泣まどひ。搔撈りつゝ逃退に。唐糸はなほ打んとて走りかゝるを。棧橋吐嗟と携留る。袖あらゝかに振拂て。外面まで追ふて出れば。義高主從見るに忍びず。軈て大太郎を搔遣つゝ。唐糸を遮りとゞめ。こは何事にて候ぞ。われ〳〵は旅客なるが。今宵宿を投かねて。たゞ今こゝに來れるものなり。緣故はしらざれども。目も見えぬ人とおぼし。まげて許給へと勸解るを。唐糸は見もやらず。はしりこえて又打んとする折しも。棧橋がおくれ走に。さし出す紙燭の光に。はじめて面を見あはし。こは御曹司にてましませしか。そは小太郎ぬしにはあらずや。不意漫なり。と申すにぞ。義高も且怪み。且歡び。げにまがふべくもあらぬ唐糸母子。棧橋なり。この處にとは思ひもかけねば。鄕にも聲はきゝながら。汝等なりとはしらざりき。大太郎が贅者となりつるも。さこそ便なく思ふならめ。寔に不思議の對面なりとて。いと叮嚀に聞え給へば。行氏も唐糸等が恙なきを祝して。はからざる再會を歡びまをすに。唐糸は近まさりして。何事をもいはず。不覺に目を押拭て。まづこなたへとて。義高を誘引まゐらすれば。行氏は棧橋に。大太郎を扶掖し。みなもろ共に片折戸の内に入るを。越三は楚と認て。ひとり點頭。舊の河原を走歸りぬ。ともしらずして唐糸は。忙しく塵かき拂ひなどする間に。棧橋は溫湯を桶に汲入れて。義高の足を洗ひまゐらせ。又行氏が蹶揚の泥を濯おとして。主從を上座に居らし。蚊遣火くゆらして。欵待いと信やかなり。そのとき唐糸は。大太郎を呼びて。親族三人。義高のほとり近く侍りつ。長途の疲勞を問慰め。さてまをすやう君の恩の高きこと。誰かは化に思ひ侍らん。そが中に。唐糸昔君の乳母にめされて。襁褓のうちより守育奉りき。又兄兼平。夫光盛は。御内に于て四天王と呼れたるものどもなり。縱彼等程にはあらずとも。彼地に到て。君を騙出し奉り。鎌

倉を攻おとして。亡君の寃を雪めばやと。明暮肝膽を摧き侍れど。兄も夫も討死して。粟津が原のあはれ世に。生殘りたる大太郎は。物の用にたつものならず。いひがひなきは女子なり。と身をはかなみつるに思ひきや。主從の義なほ盡ず。はからずもこゝに來ますとは。さていかにして鎌倉を出給ひし。御形容も慌しげなり。緣由をしらし給へかしと申すにぞ。義高點頭て。母上は產後に身まかり給ひぬと聞えて。御容止だにしらず。鎌倉へ赴く日まで。十四年が間養育れたる。乳母は母に異ならず。かく不意環會。よろこばしさを。いはずとも推量せよ。しかるに義高。鎌倉に人質となつて。父の最期にあひ奉らず。剩頼朝ふかく心をおきて。密に誅せられんとせらるゝよし。大姫が告たるによつて。斥て往方は定ねど。一昨の黃昏に。鎌倉を脫れ出。こゝまで迷ひ來たりしとて。三年が程の憂事を。聞えしらし給ひしかば。行氏も機關の人形をもて。直猴の武士を欺きたる事を物がたるに。唐糸はさらなり。棧橋。大太郎等も吁と感じて已ざりけり。そのとき唐糸は。佶とこゝろつきて。外面を見かへり。戰ふく風にも心おかるゝ。落人の御身なるに。かく端近くおきまゐらするは。慮の淺きに似たり。棧橋は納戸に誘引奉りて。夕餐を進らせよ。大太郎は調をさなくとも。筑紫琴を將撰て。旅路の懶を慰めまうせかし。さらばわが身は鄕にゆきて。酒を買もて來つべきなり。足裏の痛み給ふには。酒を吹くにしくはなし。行氏も疲勞給ひつらんが。わが身の歸り來るまでは。怠らず留守してたべ。と是彼に聞えおき。柱にかけたる瓢をとつて。索火燭ふりてらし。熟たる路なればば。烏夜を厭ず。忙はしく走り去しかば。棧橋は。義高と行氏を。おくまりたる一室に誘引て。夕餐をまゐらせ。太郎は琴かきならして。今樣をなんうたひける。

第五套

唐糸が計親族を殺す
光澄夜義高を擊つ

かくて唐糸は。河原にそふてゆくこと十町あまりにして。鄕門なる酒屋に到りて。一瓢の酒を買ひ。これを引提

て歸り來るに。廿一日の月さし登りて。河風いと凉やかなり。世を潛ぶ人を宿しまゐらすれば。只顧にこゝろ忙しく。砂を踏かへさじとするに。外目もふらず。わが家ちかくなりぬるころ。鈑打たる鉢卷に。篠小手したる雜兵十人あまり。後方より跟來たり。唐糸やらじと呼びかけて。左右より組んとするを。こは狼藉や。といひもあへず。閃りと避て撲地と投退。續て懸る一人が胸さかとつて突戻せば。十歩あまりよろめきつゝ。俛に仆れけり。殘るものども。は。この形勢に辟易して。左右なくば打もかゝらず。行べき路に立塞りて。逃さじとのみ闘きぬ。その時捕手の大將軍と見えて。面赤く。髯蒼く。豚のごとく肥ふくれたる兵士一人。すゝみ出て聲を高うし。やをれ唐糸。汝女子なれば穩便の制度をもつて。旅宿に召つれ行んとするに。却尾籠の働きをなす事奇怪なり。かくいふ某は。石田太郎爲久が家隷に。股肱腹心と呼れたる。堀江藤二光澄なり。いぬるころ粟津が原の合戰に。木曾殿の首級を給はつて。比類なき功名をあらはしたるをば。音に聞てもしりつらん。しかるに今度。義高鎌倉を逐電して。往方定かならざれば。わが主爲久。鎌倉殿の仰せを稟け。某又一方の討手をうけ玉はつて。この地に發向せし處に。義高主從は。汝が家に舍藏おくよし。これなる男が訴によつて直ちに馳向ふ折しも。今汝が鄕門なる。酒店より出るを見たれば。跟來りてこゝに及べり。汝は今井四郎兼平が妹にて。手塚太郎光盛が妻なる事は。われよくしりつ。膂力の勝れたるさへ。女子には稀にて。太刀あはする事なども。兄夫に劣らずと。豫て聞及ぶといへども。それを怕るゝ光澄にはあらず。もし志を轉して。義高主從を討て出さば。朝敵餘黨の連累を脫れ。却大いなる僥倖にあふべし。心を定めて回答せよ。といきまきあらく說示せば。惡棍越三も。又光澄が後方にありて。甲夜に義高主從を認たる爲體を演說し。かく證據分明なれば。脫れがたし。とく義高を出して。汝等母子の首を繼といふ。唐糸は既に證人を出されて。いひとくに言葉なく。さすがに命や惜かりけん。光澄に對ていふやう。君臣の義脫れがたくて。一旦義高を舍藏侍れは。發覺るゝうへは是非に及ばず。兒子大太郎は嘗者にて。世わたる便もなき者なり。これをば盲目法師の長とも

して下され。わが身は鎌倉殿に給事を許されて。貧苦を忘るゝよすがともならば。しるべして義高を討せまゐらすべし。さはいへ朝敵の嫡子なりとも。乳母の身として。その君を討する事。過分の恩賞をおもふのみにあらず。偏にわが子のいとをしき故なり。又宇野小太郎行氏は。年こそ弱けれ。夥の中よりえらみ出され。義高の傅として鎌倉までも。參り仕る程のものなれば。武勇も尋常にはあらず。彼その主を討して。切死にする程ならば。平治の金王丸に彌まして。いくその兵士を損ひ給ふべし。彼をばかやう〳〵に欺きて。後やすくいたすべきに。御身潛に闘よつて。義高を討とり給へとて。その謀とを密語ければ。光澄深く歡びて。この事いよゝ僞りなくば。大太郎には夥の賞錢をとらして。一生の安らかにおくらし。又汝をば御臺所政子御前に聞えあげて。大姫君のほとりちかく召仕るゝやうに。爲久吹擧いたさるべし。しかるを當座の難義を脫れんとて。誠しやかにいひこしらへ。或は落さんとし。或は贋首を討つて欺んとせば。義高。行氏等はいふもさらなり。汝等母子が首も杪に梟らるべし。心を得たりや。いかにと云に。唐糸點頭て。疑ひは者によりなん。このこと實言か。虛言か。御身みづからわが庭の木蔭に躲れゐて。わらはがせんやうを見給へといふ。光澄聞てさらばしかせんとて。唐糸を先にたたし。悉皆忍やかに。その家のほとりに至りて。雜兵等をば河原の前後を遠卷さし。又越三をば背門のかたに立しのばしつ。光澄はひとり片折戸の內に潛入りて。生垣の蔭にかくろひ。且く唐糸が暗號をまちぬ。美妙水冠者義高は。かゝるべしとは思ひもかけず。大太郎が琴の音に聞入りて。しばし假寢し給ひしかば。行氏は出居のかたに退きて。唐糸が歸るをまつに。棧橋は三年が程。戀しとのみ思ひつる。その人のはからずも來れるを。海月の骨にあふ心地して。うれしさいふべうもあらねど。今更に恥かはしくて。忽卒にはいひよらず。もろともに端居しつ。更ゆく月をうち眺めて。行氏を見かへり。忘るなよ程は雲井に隔つとも空行月のめぐりあふまで。と伊勢物語に見えたるは。別れて後を契る戀なり。我身も又ふりわけ髪の昔より。御身が妻の名はありながら。世の塵劇に隔られ。いまだ一日も齋眉侍らず。されど緣しあればこそ。空ゆ

く月のめぐりあふ。今宵は影も隈なきを。いかに見給ふにやあらん。ともてる團扇を額に當。ほのめかしつゝ聞ゆれば。行氏も微笑て。さいはるゝをあしうは聞ねど。よしや結號はあるにもせよ。主君危急の秋にして。往方定めぬ旅寢には。結び果なん妹背にあらず。とかくわが事は思ひ絶え。いかなる人にも伴れ給へかし。といひかけて。立んとする裳を引とめ。縱一夜さの添臥はし侍らずとも。親の許せし妹と背を。退よと宣するは心つよし。御身に不慮の事あらば。わが身ひとり存命べきかは。末おぼつかなきあふせならば。この身まづ死して。婦の道を全うし。心操をもしらし侍らん。しかなり。といひもあへず。行氏が刀をとつて。拔はなさんとするを。こは短慮なり。と押とゞめ。双を奪ひとらんとするに。なほ放さじと爭ふ折しも。索簾を搔わきつゝ。やよ棧橋。悞せそ。と呼びとめて。二人が間に走り入るもの。これ唐糸にてありしかば。棧橋も。行氏も。こは思ひがけず。とばかりに。刀を捨て走り退く。はなしろみたる面影を唐糸はと見かう見て。今彼處より竊聞て。二人が心操はよくしりぬ。行氏ぬしの色に愛ざる忠信。棧橋が命を惜ぬ貞節。いづれを何とわきがたき。この夫にしてこの婦あり。誠に一世の奇耦なり。木曾殿滅亡ましまさずば。今茲は婚姻さすべきに。義高囚徒となり玉へば。さる私しの志を致さんやうもなく。打つけにこそいひも出ね棧橋が心の中。いかばかり悲しかりけん。しかるに今宵はからずも。御曹司の御供して。行氏こゝに來ませしは。緣し盡ざる祥にして。久後もたのみあり。夫と齋眉。妻とよぶ事。神の御こゝろもてなし給ふとかいへば。假染の契なりとも。婚姻の醼して。本意遂さして玉はれかし。わが子大太郎は臂者なり。御身夫婦。こゝろをひとつにして仕なば。君の御爲にもあしからず。けふは日子さへよきに。この事御曹司に聞え奉り。姑なり媒なり。叔母が手酌に妹と脊の千年を祝き侍るべし。買もて來たりし酒もあり。さはとて瓢を引提て。庖厨のかたへゆく影を。ふし拜ぬばかりにて。棧橋が嬉しさは。前の恨に引かへて。待間わびしき盃より。色にはやく出けらし。かくて唐糸は銚子に。土器とり添て。携へ出。世にありし昔ならば。數々の儀式もあるべきに。きのふの年魚のしら燒に。味

ひ薄き村酒。彼處にて彈く大太郎が。調をさなき筑紫琴を。萬歲樂とも聞給へと。祝て土器を。二人が間に居たりければ。行氏終に。固辭ことを得ず。某全く妻を娶りて。後の榮を思ふ身にあらねど。棧橋が心操もいと惜しく。かく叮嚀に聞え給へば。まげて仰に從ふべし。と應して。もろ共に座を占れば。唐糸斜ならず歡びて。まづ棧橋に土器をとりあげさし。みづから銚子をとつて。なみやかに湛たるを。棧橋は押いたゞき。飲果て行氏に勸む。行氏飲て棧橋にかへし。三々九献の數にも滿ぬ。その時唐糸つと立て。上坐に居なほり。思はず驚然と笑ひけるが。怪きかな。行氏夫婦。心神俄頃に撩亂し。五臟六腑を絞るが如く。見あはす顏はもろ共に。土のごとくに色變り。われにもあらでいきまき繁く。不審や。今この酒を飲とやがて。こゝち死ぬべく覺るは。われも御身も。面あたり。おなじ苦痛に堪ざるは。命を縮る毒酒なりしか。こは〳〵不思議。と疑ひ惑ひ。夫は妻を介抱し。妻は夫を助んと。思ふばかりに足たゝず。折しも聞ゆる琴の音に。軒の松風聲そへて

風從昨夕聲彌恨。露及明朝淚不禁。

と朗詠した納戸の方を。唐糸見返りて。聲を低し。弱き人たちを無下に殺すは。鬼々しとも思はんが。苦痛もしばしぞ辛防せよ。御身二人を活おいては。今宵御曹司を討するに。手足賓縲なれば已ことを得ず。いぬる頃軍用の爲にとて。兄兼平よりあづかり給たる毒石を。買て來た酒に浸し。冥土へ遣嫁す較計とも。しらで手段に乘たるよ。といふに二人はます〳〵驚き。さては慾に惑ひて鎌倉へ內通し。君を賣。姪を殺す。大惡人ともしらざりし。朽をしさよといきまきて。向上る眼中朱を沃ぎ。刀を杖に行氏が。立あがらんとしてはいく度か尻居に撞と轉輾ば。棧橋いとゞ悲しみて。吾儕夫婦はともかくも。木曾殿の御內にて。四天王と呼れたる。人の妻子にありながら。守育たる主君を殺して。世に立んと思ひ給ふは。計られて今死る。棧橋等より愚ならずや。神も佛もある世には。及ばぬ願ひに猿猴の月日は照らし給ふまじ。この年來かくまでに。物の道理もわきまへぬ。人ならなくに淺ましや。天魔の所爲にて侍るとも。み

づから曉て惡心を。轉してたべ。叔母御なう。喃々叔母御と聲たてゝ。かき口說を。外に聞く。今といふて今死ぬる身の。念佛一遍まをさいで。賢しがほなる諫言すな。さらば緣故をしらすべし。わが身鶴に。酒買ふて歸る途にて。石田が郎黨堀江藤二。夥の兵士をもて犇々ととり卷。なんぢ義高を舍藏こと。越三といふものゝ訴によつて慥にしる。鄰道して討せずば。汝等親子もろ共に。首を杪に梟らるべし。又導して討せなば。兒子大太郎には夥の金を給はり。汝をば吹擧して鎌倉殿に給事さすべしといふ。とても脫ぬ御曹司を舍藏んとて。わが子を殺さん事。いと愚なりと思ひかへし。輙く承引て歸りしが。御身夫婦に拄られ。爲損じてはと深念して。この殺生をするにこそ。鬼とも醜ともいはゞいへ。子を殺し身を亡して。譽られんことは努思はず。百年も二百年も長生して。御身夫婦がなき迹は。よきに弔ひ得さすべきに。けふまでの壽命なり。と思ひ諦め。三途の川も手を引あふて。十萬億土へ旅だて。と嘲哢せられて棧橋が齒を切る遺恨の涙。行氏いよゝ堪かねて。一太刀なりともこの寃。はらさでやは。とよろめき〳〵。切てかゝる刃の下に。立もあがらでかい潛れば。爪音繁き清攪の琴のしらべもいと迫て。修羅の太皷に異ならず。行氏こゝろ勇しといへども。筋骨癱麻て思ふにまかせず。打落さるゝ刀とともに。仆れかゝる隔の襖を。内より丁と蹴開きて。義高奮然と走り出。事の容子を彼處にて聞ぬ。暴惡非道の乳母唐糸。天罰思ひしらせん。と罵もあへず。太刀拔挿頭。跳りかゝつて切んとす。折しもあれ庭の木蔭より。閃き來たる手裏劍に。義高咽喉を打拔れ。仰さまに仆れ給へば。奥に聞えし琴の音も。絕て忽地寂然たり。行氏夫婦は面あたり。主を救ふによしなくて。拳を握り眼を瞪らし。遙向を佶と見れば。堀江藤二光澄。生垣のあなたよりあらはれ出て。徐やかに歩みより。行氏等には目もかけず。軈て義高の首搔おとしつ。燈にさしつけて。得と檢め。懷中より一包みの金をとり出して。これを唐糸がほとりに置き。寔に男子も及がたき。あるじの婦が今宵の働き。立歸りてかくとまうさば。爲久はさこそ歡び給ふらめ。こは當座の賞祿なるに。大太郎とやらんにとらすべし。又唐糸は某と共に。鎌倉へ赴きて。みづから緣由を聞え。給

事を願はるべし。路次の轎子は。村長より來すべきなり。と聞えしらし。遂に義高の首を携て。外面へ走り出。暗號の笛を吹たつれば。遠卷したる。雜兵等。ひとつ處に集ひ來て。この夜の首尾を祝しつゝ。主に從つて立かへりぬ。行氏は手を空しく。主君の首級を遞さじとて。たゝまくしては轉輾。煩悶悶燥忿怒の面色。髻ふつとふり斷て。髮も逆立眼尻に。主の亡骸を見かへりて。已なん〳〵。今ははや。御曹司の待かねたまはめ。只遺憾は生ながら。唐糸親子が宍を啖はず。九ツの世に生を攀とも。怨をなさでおくべきやは。と怒の聲音もろともに。刀を腹に突たつれば。棧橋も落ちつたる。義高の御佩刀を。咽喉へがばと衝たてたり。覺期はしても唐糸が見るに忍びずねぢかへる。障子の内に聲たかく。行氏棧橋しばし待。息の内に只一言。聞えしらすべき事あり。と呼かけて。雄手の障子をさとひらく。日來に異なる大太郎、瞥者にあらぬ打扮は。萌黃縅の腹卷に。白地の錦の直垂被て。金黃作の太刀を佩き。滋籐の弓に。鷲の羽の征矢取そへて。旭の籏を後に立。床几に尻をかけたる形勢。威風凜然としてあたりをはらひ。天晴大將軍と見えていと怪し。今般の夫婦は再び驚き。假盲の大太郎。さては汝も母とひとしく。鎌倉へ降參して。義高君を害せしよ。といはせもはてず。莞爾と打笑み。汝等いまだ緣故をしらざれば。さ思ふも理りなり。今は何をか匿べき。我こそ旭將軍木曾義仲の嫡男。美妙水冠者義高なれ。かくのみいはゞ。なほ不審思ふべし。抑わが父。いとはやくより。平家を滅し。海内を掃清んとするの志おはせしかば。豫て遠き慮をめぐらし給ふに。わが出生したるころ。光盛が妻唐糸も。又一子を產り。よつて光盛が子大太郎と。われを襁褓の中よりとりかへ。大太郎を子を奪れ。或は一旦寄手の圍をとかせん爲に。人質などの時に臨み。輙く敵を欺くべき。父義仲の計略なり。さるからに。この事は光盛夫婦兼平等の外に。しるものなく。われも又しらざりしが。往に鎌倉より人質を望めるころ。父われを潛に召て。はじめて緣故をしらし。父子の名告をし給ふといへども。敵に漏れんことを憚りて。生得多病也と披

露しつ。父討れ給ひし後は。盲者と僞りて人に交らず。唐糸又いたく打懲して。苦肉の計をせし也。かゝりける程に。三年以前。頼朝狐疑のこゝろふかく。壻にせんといひこしらへ。義高を求しとき。わが父こゝろよく領掌あつて。光盛が兒子大太郎に。行氏を傳て。鎌倉へ遣し給へば。こゝをもて今宵唐糸が。堀江藤二に同意して。義高を討せんと承引しも。眞の義高にはあらずして。わが子大太郎なればなり。さはあれ奸智に長たる石田が徒。輙く主を討せなば。疑念を發事もやとて。唐糸いよゝ志を示さん爲に。汝等に毒酒を與て。大太郎が討れしぞ。彼等親子の忠義なる。とはいへわれ故に。可惜壯佼どもを殺す事。いと不便なりといひかけて。頻に嗟嘆したりしかば。堪忍びたる唐糸が泣じとすれどしかすがに。置どころなき袖の露。もろきは人の命にて。子を殺し姪を殺すも。忠義の爲とはいひながら。三年以來逢ざりし。わが子かとも名告られず。それさへ憂に棧橋が。思はれ思ふ妹と背の緣し祝く盃が。命を縮る毒酒とは。產靈もしり給はじ。姪は女兒に異ならぬ。その壻がねはとりわきて。行末たのむが世の中に。ありとありてふ親ごころ。誰かは憐をしらざらん。蒼の花に夜嵐の。毒としりつゝ酌をとる。叔母はさながら天狗道。熱鐵を呑むごとくにて。焰の息を吻たりし。といひ果て涙さしぐみつ。わが子よりなほいと惜しむ。人の信に義高も。感涙を押かね。かゝる忠義の家隷を。養ひ給ひし父義仲。いかなれば。武運全からざりし。けふは則亡日にて。いぬる正月廿一日。敵に端なくあふみなる。比叡山おろし寒けきに。比良の雪さへ深けれど。淺くも石田にはかられて。射かくる矢走石山のかたきは大軍。身方は小勢。逃れかた田に落る雁の落殘たる五百餘騎。われからさきにと討死し。果は兼平只一騎。瀨田の入日に暮そめて。無常を三井の鐘の聲。世に聞えたる名將も。時にあは津の夢の跡。思ひ出れば朽をしや。父の仇人を擊んとて。名を變影を埋つゝ。死してふたゝび世にかへる。義高が心づくしも。汝等が忠義に比れば。屑にもあらざりき。死するも忠。生るも孝。みな是過世の因果ぞと。思ひ諦め威佛せよ。南無阿彌陀佛と唱れば。行氏夫婦思はずも。苦惱を忘れて坐行より。さては事みな討手を歎く。謀にてあり

けるかな。ともしらずして飽までに。惡口いたせし事。省ればさらに面なし。恩の爲に身を殺すは。臣たるものゝ常なるに。かく叮嚀に聞え給ふ。君の仰はわが爲の善智識にて候なり。義高悪なく在すうへは。心にかゝる雲もなし。なほ會稽の凱歌は。草の原より聞はべらん。と宋期の一句潔く。双を飓て雄手より。雌手の膳へ引まはせば。後れはせじと棧橋が一ツ蓮を誓つゝ。恨もはるゝ夏の月。西を仰ぎて唐糸が。臨終薦る念佛と共に。夫婦忽地息絶たり。その時義高は。唐糸を見かへりて。汝が愁傷理なれども。密計敵に洩聞えば。彼等が忠義も犬死となるべし。われは堀江が遣りたる。金をもて路費とし。日本廻國の行者に打扮て。より〳〵身方の兵士を集ん。汝は直に鎌倉に赴きて。頼朝を刺ころし。累る寃をはらせかし。といふに唐糸涙をとゞめ。君の仇。兄夫の仇。今又わが子大太郎と。棧橋夫婦を失ひつるも。みな頼朝故なれば。縱十重廿重の鐵壁城なりとも。近寄て本意を遂なん。君は又其虛に乘じ。北國の勇士を相語。谷七郷に御簾を。すゝめ給へと主從が。密き〳〵諜しあふ。浩處に堀江藤二が下知によつて。村長は。夥の莊客に轎子を舁しつゝ。松明ふりてらして出來るを。唐糸は遙に見て。義高に目注し。やがて障子を引たてたり。かくて村長は引出物の衣裳一襲を。出居のかたにさし入れさし。堀江ぬしの仰によつて。御迎に參りぬ。誘給へと呼門ば。唐糸聞て點頭のみ。まづその衣裳をとつて。古たるを脫かへ。やをら乘うつる轎子を。莊客ばら擡出して。飛が似に走去ぬ。さる程に義高は。豫て用意やしたりけん。兵具は脫て笈の內に納れ。六十六部の妙典を奉納する。回國行者の打扮して。錫杖を引提。鉦を鳴らし。一室を出て。しばし三人の屍に回向し。さてひとり〳〵に亡骸を。庭の叢蔭に押うづめて。假に葬り果。曉ゆく天を瞻つゝ。川原傳ひに出ゆくを。甲夜より物蔭に躱れてゐて。後の後までも。よくその形勢をしらんとて。ひとり殘り留まりたる。惡棍越三。かくと見るより裳を褰。身を低しつ。潛びやかに跟來り。義高やらじと無手と組むを。組せもはてず錫杖もて。鳩尾骨碾と突碎けば。血反吐に塗れ倒るゝ處を。諸孺拂て川へ辷らし。一聲呵々とうち笑ひ。悠々として旅だちぬ。

評に曰。この段殊に演義の體に似ず。もつぱら傳奇の趣きにならへり。しかれども。動靜云爲。おのづから許多の脚色あつて。當時を見るがごとくしかり。當にしるべし。文辭の野なる作者。いよ〳〵筆をくだして。婦幼の爲に佞眉する事。實に已ことを得ざるがごとし。披閲するものこゝに至つて。嘆息せずんばあるべからず。

頼豪阿闍梨怪鼠傳 卷之三

第六套

血刀を挈て唐糸爲久に說
讐家に事て義夫大姫を慰

石田太郎爲久は。おのが身を後やすくせん爲に。鎌倉殿の命を插て。主從三騎三手にわかれ。義高を追蒐て。討しめんとぞいそがしける。しかるに義高は入間川のほとりにて。堀江藤二光澄が手に討れ給へるよし。注進ありしかば。爲久は駿河路よりとつてかへし。宿所にあつてこれを俟。この事いまだ披露に及ずといへども。世に隱れなかりけるにや。大姫傳聞て大に愁傷し。日夜寢食を絶て。殆死んとし給ふ程に。女房たちも慰めかねて。いと痛しくおぼえしが。政子御前は殊さらに。齒を切て石田を憎み。女房たちを見かへりて宣ふやう。美妙水冠者は柳營の女壻にして。大姫の偕老の夫なり。よしや武衞。頼朝を一旦狐疑の御こゝろあつて。彼人を討てと宣はするとも。姫が愁傷はさらなり。わが思はん程をも。深慮すべき事なるに。爲久何等のものなれば。歷々の武士を閣て。かく嗚呼なる擧動はしつる。只速に爲久主從が首を刎て。義高の亡魂を祭り。大姫が鬱胸をはらせよ。といきまきつゝ。或は罵り。或はうち泣給ひけり。女房たちは。この御形勢を見て。いよ〳〵手に汗を握り。仰寃に理におぼえ侍りとのみ。應て立にたちかねたり。母子の哀悼かくの如くなれば。頼朝潛に驚き愁ひて。胸くるしくはおはすれども。今はその詮あるべきにあらず。かゝりける程に。爲久はこの營中の風聲をもれ聞て呆れ果。こは思の外なる事かな。と呟きて。安き心もなかりしかば。直蟄して居たりけるに。堀江藤二光澄。義高の首級を携へ。唐糸を將て入間川より歸り來つ。いとほこりがに。一五一十を演說して。唐糸を伴ひ來たれるよしを聞えしらし。軈て義高の首級をとり出

して。實檢し給へと云ふに。爲久はよくも見ず。いと苦々敷氣色にて。光澄に云ふやう。汝も豫て。わが肚裏は猜しけめ。在鎌倉の大小名おほかる中に。他人の言語を待ずして。爲久今度の討手をうけ給はり。義高を誅戮せしは。不時の恩賞を庶幾のみにあらず。彼主從を世に在せては。われを仇として狙擊んといたすべし。しかるときは。夜も安くは睡られず。今このときを失ずして。義高主從が首を刎。公事によつて。私の趣意を遂なば。名利兩ながら全からんと深念し。既に汝が拔群の働きによつて。輙くその首級は得たれとも。事みな案に相違して。却て自の一大事とは成たるなり。その故は箇樣々なりとて。大姫の愁傷。政子の憤。是彼を說しらし。又云ふやう。牝鷄晨して。武衞ふかく內を怕れ給ふなかに。愛子の悲歎見るに忍びず。且夕にかき口說れて。爲久主從を誅せらるべうも量がたし。汝何とか思ふと問ば光澄聞て驚き呆れ。顏色土の如くになつて。そのいふ所をしらず。爲久しばし沈吟して。聲を低うし。危窮かくの如しといへども。汝幸に唐糸を將て來れり。これわが罪を脫るゝ。活路となるべきものにこそと云ふに。光澄思はず膝をすゝめ。そはいかなる謀にて候ぞ。とく聞えしらし給へ。聞えしらし給へとていそがせば。爲久後方を見かへりて。いよゝ聲を密め。わが謀外にあらず。今唐糸が首を刎。これを政子御前に獻りてまをすべきは。爲久もとめて義高の討手を承るといへども。絕て切害のこゝろなし。追蒐奉りて。穩便の地に潛ばし進らせばやと思ふをもて。その事他人に讓らず。家隷にも密に思ふ程を聞えしらし。彼此に部して。御往方を索しかば。本月廿一日家隷堀江光澄と申すもの。武州入間川のほとりに追ゆきて。彼君の在處をしれり。しかるに今井四郎兼平が妹は。手塚太郎光盛の妻にて。その名を唐糸と呼れ。美妙水冠者の乳母なるが。彼川の上にあり。その夜御曹司圖らずも。唐糸の家に宿かりて。絕て久しき對面を款び。向後の事をたのみおほし召よし。懇切に聞え給へば。唐糸又他事なきおもゝちして。厚く待遇し遂に義高主從を毒殺して。首級を光澄が旅宿にもて來り。恩賞を乞ふ事傍若無人なりしかば。この景遂を見るもの憎おもはざるはなし。光澄案に相違して。心の中周章すといへども。いかにと

もすべなければ。假に唐糸を賞美して。鎌倉に將て歸り。緣由を申すに至て。爲久が計較忽地に齟齬し。一トたびは御曹司の落命をいとをしみ。又一トたびは唐糸が暴惡に齒を切り。立地に毒婦を刎て。自の罪を贖ひ奉つるといはん。これ所謂瓶を碎て童兒を救ふの謀なり。汝目今唐糸を誘引てわれに見參さし。わが暗號を待て手をくだせ。彼は名におふ兼平の妹なり。思ひ侮りて擊な漏しそ。と密語ば。光澄耳を傾てこれを聞。掌を打ていへりけるは。孔明ふたゝび生れて。この國へ來たるとも。その謀。いかでか君が右に出ん。微妙もおぼえ候。と稱賛し。忙しく退出しが。且ありて光澄は。唐糸を將て廊下より環り入り。これを東面なる欄干のこなたに跪せ。降人唐糸を將て參りぬといふ。そのとき爲久は。綟張の腰障子をさと開き。長袴の裾踏かへさして。ほとり近く立出。唐糸を佶と見やりていふやう。其許が今度の功績は。光澄が物語りにて聞り。婦ながら見識逞く。曲れる木曾路を立はなれて。直なる柳營に參りつかへんと冀ふこと。いと神妙也。と賞すれば。唐糸莞爾とうち笑て。邪を去。正に歸ば。恥なしといふことの侍にや。親族を殺し。主を擊して。はる〳〵と參りつる事は。殿の蔭を蒙りて。柳營に給事し。わが子を安らかに養んとおもへばなり。光澄どのにはいはせ給ひし事の僞りならずば。あしからず酬し給はるべしといふ。爲久聞てうら點頭。給事のことは仔細なし。光澄まづ當座の引手物をとらせよ。とくとくといふ言下に。光澄はそのこゝろを得て。承りぬと應も果ず。つと身を起して。唐糸が後方に立まはり。刀を閃りと拔かざして。聲をもかけず欣んとするを。唐糸はやく身を返り。刀を撲地と打墮せば。こは朽をしとて刺副の。解刀を拔んとするを。その鞆にだに手をかけさせず。落たる刀を把ると見えし。光澄が首前に顚び。軀は後に倒れけり。爲久は。眼前郎黨を擊して大に怒り。透間もなく打てかゝれば。唐糸騷く氣色もなく。刀の下を潛り脫。手首を拿て冷笑ひ。女子に似げなき白刄の賜。閻王宮への給事は。わが身にたえて願はしからず。いと正なくも見え給ふ。といはせも果ず爲久は。いよゝ急たちて聲をふり立。やをれ唐糸。汝降人として光澄を斬害す。謀叛問ずして顯然たり。家隷の仇逃さじと。

いきまきつ。ふり拂て又刺かくれば。唐糸はるかに飛退て。剽輕たまひぞ爲久どの。今光澄を殺せしは。御身の爲を思ふに侍り。しかるをなほ曉得ずして。又唐糸を殺し給はゞ。何をもて御身の罪を贖れん。これ石を抱て淵に沈むに異ならず。あな鈍ましやとうち含咲み。丈夫に勝る勇敢識量。飽まで廣ろき胸前より。とり出したる懐紙に。拭ひをさむる血刀のつかの間もなほ油斷せず。寄らば砍らんず面色に爲久は刺かけし。双を掣に拽かねつゝ。間ちかくも逼り得ず。きツとにらまへていへりけるは。こゝろを得がたき汝が提給。光澄を切害して。却て我が爲と稱する事。その利害おぼつかなし事を兩端によして。脫れんとはかるとも。詐るゝ爲久ならず。そのいふところ理なくば。咫尺も其處をやは去らせじと。勢猛く詰問ば。唐糸ます〳〵冷笑ひ。さてわが身しらじと思ひたまふ歟。義高討れ給ひしかば。大姫の愁傷。政子の慍怒甚しく。御身一箇のうへに係りて。薄氷を踏こゝちしつ。とさまかうさま思ひ煩ひ給ふことは。鄕にこゝへ來たりしとき。下郎がものがたりするを竊聞て。よくしりてぞ侍る。かくは今わらはを詭て刺殺さし。この首をもて。自の罪を宥られんと謀り給ふならんが。そはいと淺はかに侍りといふ。爲久は既に機密を言ひ當られて。こゝろ駭ろき。猛に刀を鞘に納て氣色を和げ。われ愚にしていまだ曉得ず。審に說示し候へといふ。唐糸かさねて。殿思ひ見よ。わが身は木曾殿恩顧の郎黨。兼平の妹。光盛が妻にて。しかも義高の乳母なり。よしや唐糸が謀計て。彼君を討ちたりといふとも。こゝに至て人かならず疑ふべし。況て政子御前は。その性怜悧おはすると聞く。且事に臨て人を疑ふは。婦人の常なり。爲久その身の罪を脫れんとて。唐糸が枯首をもて。かくは詐くなり。とあしく猜し給ひなば。毛を吹て疵を求め。草を打て蛇に驚くの悔ありなん。其とき何を證據として。いひ解んとは思ひ給ふ。然を淺くも人を謀りて。唐糸だに殺さば。身の安穩を得たりとし給ふは。釜の中に友を追ふ魚。俎の上に餌を拾ふ鳥に似たり。嗚呼危かな危かな。さるによつて。唐糸が只一刀に光澄を殺せしは。御身が爲にあらずして。又何ぞや。速にその首をもたして營中に赴きたまへ。さて申さんには。爲久微て義高の討手をうけ給

はりしは。討奉るべき爲にあらず。實は竊に助たてまつりて。深く潛せ進らすべうおもひつるに。家隷にて候。堀江藤二光澄。如此々々の處にて。御曹司に追着恩賞を給はらんとて。忽地主命を忘却し。ぜひなく討たてまつりて歸りしかば。爲久が豫ての深念。いたづら事となつて。遺憾やるかたなく。直に光澄が首を刎て候。しかれども。家隷が悞は。すなはち爲久が悞也。かくてもなほ憎しとおぼし召ば。速に腹かき切て。赤心をしらし奉るべし。と聞へあげ。只管賄賂をもて。その左右に救ひを求給へ。しからば十が十ながら。事の整ふのみならず。これより身の僥倖を得給ふべし。その便宜を得て。唐糸を從弟女なりといひこらしへ。給事をさせ給ふに至らば。わが身。政子。大姫に陪從し。をり〳〵御身を吹擧し侍らん。御身一トたび內寵を得て。食祿ともにすゝみ。肩を比ぶるものなくば。いかで今日の如くならんや。かくてもなほ唐糸を殺さんとし給ふか。みづから思量して。惑ひ給ふなといふ。爲久つくづく聞て。大に歡び。小膝をすゝましいふやう。われ才短く。思ひ足らずして。其許を殺さんとしたる事。省ればさらに面なし。且く讐敵の思ひをなすといへども。既にその好意を聞くうへは。われに于て疎意あるべきにあらず。其許は寔に女丈夫なり。われ今光澄を擊して。右の腕を失ひつると思ひしが。却て其許を得て。千鈞の膂力をましたり。と嘆賞し。厚く是を饗應しつ遂に堀江が首級を携て營中に參り。唐糸がいへるごとくに聞えあげ。賄賂をもて左右に救を求しかば。女房たち。又言語を竭して。石田が罪なきよしを執しまをすにぞ。政子御前の憤やうやくに解て。却て爲久を奇特のもの也とおぼしける。さる程に爲久は。密に御曹子の首級を。伊豆の修善寺に葬りて。假に追善の佛事をとり營みしかば。政子傳聞給ひて。いよ〳〵爲久を疑ひ給はず。しかはあれ。大姫は只哀悼の淚乾く隙なく。義高の菩提の爲。尼にならばやとて。頻にその事をまをさし給ふにぞ。母君はいとゞ胸くるしく。いかにもして大姫を慰め。なき人の事を思ひ忘るゝよすがもがなとて。女房たちを集合。とやせまじ。かくやせまじ。と問給へば。みな答へ申やう。人のこゝろを和ぐるは。管絃にしくものなし。その技に長たるを。召さし給へかし。と申せし

かば。政子しかなりと回答給ひて。もつはらその人を索さし給ふ程に。石田太郎これを聞て。すは究竟の事こそ出來にたれ。と潛に歡び。ある日何がしの局とか呼るゝ。老女に就て。唐糸が事を聞ゑあげ。彼は爲久が從弟女にて。琴道に妙なることは。をさ〳〵俊蔭が女兒にも劣候はじ。姫君一トたび彼か爪音を聞召ば。忽地に愛おぼして。降くらす霖雨に。日光を見給ふがごとく。御こゝろも立地に。はるけくならせ給ふべし。加旃よろづにこゝろ利たるものなれば。おん側に召おかせ給ひて。しかるべからんもの也。と信だちて申せしかば。政子御前聞給ひて。その唐糸とやらん。爲久が從弟女ならば。諱べきものにはあらず。とくそのものを參らせよ。と仰下されしかば。爲久畏て。猛に衣服調度の准備をいたし。唐糸を晴やかに粉粧して。軈て營中に進らせけり。かくてぞ唐糸は。堀江を打てわが兒の仇を報い。又爲久を說伏せて。おもふまゝに鎌倉殿に給事をいたし。折を窺ひて賴朝を刺殺し。亡君親族の寃を雪めて。義高を世に出し進らすべう思ひしかば。營中に參り仕るに及で。ます〳〵萬事に心を用。信やかに言行ふ程に。政子も大姫も。さるおそろしげなるもの也とはしり給はず。年來給事の女房たちにも立まさりて。愛たきものにおぼしける。是はさておき。堀江藤二光澄が弟。藤五蔭重は。曩日義高を討とめんとて。その身は甲斐。信濃を斥て迫蒐たりしに。義高ははや武藏の入間川にて兄光澄が討とりぬと聞えしかば。途よりとつてかへし。鎌倉に立かへりて。傍輩の若黨に。事の容子をきけば。主の爲久。自の罪を脫れんとて。事を光澄に託。矢場に首を刎て。これを營中に進らせたりといふに。蔭重大に驚きて。ふかく主を恨み。引こもりて居たりけるを。爲久わりなく召出して。夥の引出物をとらし。汝が兄。忠義拔群にして。われに代て死したれば。吾今より汝を見る事。光澄を見るが如し。かゝれば主從の恩義いよ〳〵厚くして。聊も疎意あるべきにあらず。必ずしも他のいふ事を實事として。麁忽の擧動なせそといふ。その言語いと叮嚀なるに絆されて。蔭重忽地說惑され。小人の淺ましさは。つく〳〵と思ふやう。いぬる正月廿一日の合戰に。わが身一番に。深田の中に飛入て。木曾殿を馬より引おろしたれど。その功却て兄に超

られ。日來朽をしく思ひつるに。わが兄既に世を逝て。主君又かくの如く懇切に聞え給ふを。なほ恨み奉らんは物體なしとて。終に兄が討れたる緣故を問諦ず。いよ〳〵信々しく仕けり。

第七套

日枝の山に賴豪義高を誘ふ
粟津か原に光實猫鼠を論ず

美妙水冠者義高は。大太郎と行氏夫婦が忠義の爲に。命を隕せしかば。容易石田が黨を詭き課せて。遂に唐糸に立わかれ。その身は廻國の行者に打扮て。彼此を廻歷し。おなじ年の秋のころ。ある夕江州粟津野に來にけり。いぬる正月廿一日。父左典厩義仲朝臣。この所にて討死し給ひぬる。と豫て聞けども眼前。見れば又哀悼の涙に袖もひたぬれて。勇きこゝろもしかすがに。よはの月影さやかにて。三井寺の鐘無常を示し既に二更になりにけり。とても宿かる家もなければ。今宵はこゝに野宿して。通宵回向し奉るべしとて。これかとおもふ墳のかたはらに笈扛おろし。鉦うち鳴らす稱名も。頓寫の琵琶の海づらに。調すゞしき浪の音。夜も四ツの緒に深そめて。草葉に落る秋の螢も。今はこの世になき人の魂かと見えてあはれなり。義高はしばし父の墳墓に額つきて。心中の鬱憤を訴。幽魂の衞護を祈り。先考尊靈頓生菩提と念じつゝ。と見れば雌手なる木立の間に。結び捨たる柴の門ありあるじは法師とおぼしきが。出ていまだ歸らざるにや。戸は引立たるまゝに。燈火の光もせず。斜なる竹緣をつらぬきて。吳竹の春しりがほに。萩。薄の生出て。闇蛩はやく秋を告。あれたるまゝの住居なり。折しもあれ。今まで晴たる天。俄頃に結陰て。月はなほ半額をあらはしながら。さと降る驟雨に。義高は忙しく。笈を柴の戸の軒下に扛入れ。緣つらに尻をかけて。しばし晴るゝをまつ程に。睡魔頻に黑眠を催して。思はずも假寢すれば。忽地瓦雜々々と胖響するに。驚き覺て見かへれば。いと大きやかなる鼠。笈の中に秘おける。旭の嬢を引銜。湖水を西へ走りゆく。義高ます〳〵驚き怪み。棍頭槍をかいふつて。逃さじと追蒐つゝ。ゆくともしらず須臾の間に。琵琶湖の汀をうち過て。嵯峨なる高峯に

追到れば。鼠は巖石の下に躱れて。忽地見えずなりしかば。義高大に嘆息し。われ 苟も清和の後胤。朝日將軍義仲の嫡子として。頼朝に世を狹められ。乞丐囉齋の打扮して。ひとり諸國を徧歷する事。只顧浮屠家に侵媚して。父の菩提を弔ん爲にあらず。密に舊好の武士を相語ひ。義兵を揚て仇を報い。孝養に備んと思ふにあり。しかるに今鼠の爲に重代の籠を 銜去らるゝ事。われながらいと怪し。世につれてかく窶々しくなりぬれば。さゝやかなる毛類にも。悔らるゝ朽をしさよ。死虎は鼠生にしかずといふ。世の常言も恥けれ。よし遮莫この巖。うち碎きても鼠を追留。籠を空くはすべからず。李廣が虎と見たるはものかは。念力徹る勇士の刀尖。千引の巖もうち碎かば。などか摧さらんとひとりごち。棍頭槍をとりなほし。奮然として走りよる。時に不思議や。巖の下より。一道の白氣。陰々と立升り。巖石 自ら二ツに裂て。内に獨の老僧あり。形は松と共に瘦せ。萬根の髯髯長く黄みて。枯野の薄を逆に掛たる如く。廿枚の爪尖く伸て。朽木の枝に。茸の生れるに異らず。瞳の光人を射て。吻息は狹霧となる。苔の衣は垢つき蔽て。かき垂たる裾海松に似たれば。今も苦海の底に沈みて。眞如の月は澄ぬなるべし。義高はこの怪異を見るといへども。怕るゝ氣色もなく歩をすゝまし。わが籠を竊去りしは。田鼠の巣を造ん爲にか。と思つるに。この妖僧が所爲にてありけり。汝はこれ鬼か精か。いて妖の皮を剝てんと罵りて。颯かゝらんとするに怪しいかな。肢體忽地癱痪。われにもあらでついゐたり。其時老僧は。閉たる眼を睜開きて。義高をさし招き。善哉壯士。來れわれ汝をまつこと久し。かならずしも怪しむべからず。われは是。むかし白河の帝を恨み 奉る。憤に世を辭したる。三井の長吏頼豪阿闍梨が神靈なり。思ひ出れば腹たゝしや。綸言汗のごとしとはいへど。諾しことをかへされて。御禱の勸賞相違し。わが宿望を果されず。緣 故 は山門より。拄たてまつるをもて默止されたれば。その寃を雪ん爲に。數萬の鼠となつて。經卷を破損せしに。わりなく一社の神に祭られ。忘れて年を經しものを。いぬる壽永二年の秋のころ。義仲はじめて入洛の日。わが禿倉に詣で。願書を寄進し。官位頼朝に超て。征夷將軍となり。宇宙の權を執こと

あらば。神田數十町を寄せて。當社に彼覆の莊嚴を加ふべし。と丹誠を凝らして祈請せられしかば。われ速に納受して。その軍威を助けし程に。戰ずして平家は洛を落にき。しかるに御白河院。叡慮反覆し。義仲が軍功。勸賞は乞に任さるべしと仰下されながら。望み申すところの。將軍は勅許なく。却て頼朝をもてこれに任ぜらる。されば義仲の鬱憤を。わがありし世の怨に思ひくらべて。更に舊怨を惹ぬる事。亦是輪廻のしかるところ歟。われは白河の御宇に憤死し。義仲は御白河院を恨り。このゆゑに。わが靈ながく義仲に憑りて。その心ざまをあら〳〵しくし。卿相を罵はづかしめ。院の御所を火攻するに至て。上皇大に驚き給ひて。やがて義仲を征夷將軍になされしかば。一旦その宿望を遂るに似たれど。武運 全 ざれば。しばし洛に跋扈せし。榮花は廬生が夢の世や。只一炊の粟津野に。朝の露と消ぬる事。いと惜とおもへど。天命の歸することは。わが神力にも及びがたし。しかるに汝。その 志 逞く。父の寃を雪んとて。諸國を廻歷し。密に舊好の兵士をかたらふをしる。さるによつて。われ妖鼠の神通をあらはして。この山へ誘引つ。われと汝と宿因ある事を說しめし。今より影のごとくに憑したがひて。もつはら奇術を行はし。或は敵陣に間諜を用ひ。或は合戰の場に臨みて。進退に便よくせんとおもふなり。ちかく來れといふ。義高これを聞て大によろこび。欣然として阿闍梨のほとりに蹲踞し。わが父世にいまそかりし時。ふかく心願をかけたりし。頼豪阿闍梨の神靈とはしらず。肉眼眩くして。ほと〳〵神威を犯さんとせり。阿闍梨設義高を擁護して。出沒自在ならしめ給はゞ。虎に翼を添るが如し。直に鎌倉の營中にしのび入り。頼朝が首を捻斷て。孝養に備ん事。瞬のうちにあり。といと勇しく應けり。頼豪かさねて。やよ義高。血氣の勇に捷べからず。奇術よく人を征するとも。又諱べきものなきにしもあらず。猫間光隆の弟。新太郎光實。復讐の 志 篤く。曩に義仲の討死を聞て。大に望を失ひ。更に汝が在所を索て。現に咫尺の間にあり。これはなほ怕るゝに足らず。只彼頼朝が。朝暮座右に置て愛翫ぶ黄金の猫は。忌憚るべし。これは是昔天台の圓珍。異朝に經を得て歸朝のとき。船中鼠に佛經を齧破られん事を愁ひ。紫磨

金をもて。一ツの猫を造り。之を船中に安置す。件の猫おのづから靈あつて。その在ところ。群鼠穴を出ず。圓珍入寂の後。彼金猫。忽然としてゆく所をしらず。遙に春秋を經て。坊城。壬生の中將井を堀らして。これを土中に得たりしかば。ふかく秘藏してその子光隆に傳ふ。光隆院使たりしとき。義仲に面叱せられ。家隷正忠を擒とせらるゝに及で。彼金の猫をもてこれを贖ふ。その後義仲洛を落る日。石田爲久彼猫を竊とつて。賴朝に獻れり。因てその猫。今なほ賴朝の坐右にあれば。輕々しく近づくべからず。今より後三年を經て。八月某の日に至らば。件の猫忽地營中を出る事あらん。そのときを俟て宿志を遂よ。しかれども。秩父重忠聰察にして。よく人を認る。努怪るゝ事なかるべし。いで妖鼠の咒語を授んとて。秘文を唱ること三遍。義高頓にこれを諳ず。賴豪その强記を稱贊し。今はやや心やすし。さらば旭の籏をかへし得させんに。とく〳〵歸れといそがしつ。懷中に手をさし入れて。件の旗をとり出せば。義高双の手に捧受て。なほ後來の吉凶を問んとするに。裂たる巖石おのづから。蹙然として起かへり。賴豪を內に包て。舊く如くになるとひとしく。霹靂一聲脚下に發り。俄頃に山鳴り震動し。高峯の上より驀直に。轉び墮る。とおどろき見て。楠柯の夢は覺にけり。義高假寢の夢破れて。うち仰見れば。秋の雲行定なく。早晩はれて月影も。隈なく照す鳥の海。明石も須磨も外ならず。日枝は遙に聳立て。その身はなほ粟津野の草の菴の簷下にあり。あるじはいまだ歸らざるにや。裡は寂として音もせず。さては夢にてありけるか。夢かとおもへば眼前。旭の籏はわが手にあり。夢にもあれ現にもあれ。賴豪阿闍梨の靈。われを誘引て。妖鼠の術を授。護神となりて。本意遂させんと示されしこと。是併因あり緣あり。夫太倉の鼠は。食に飽て驚かず。則下の鼠は。穢を食て人を畏る。貴賤强弱異なりといへども。われはこれ託社の鼠。賴朝これを燻。これを濯んとはかるとも。遂に捕ることを得じ。況て貓間光實とやらん。わが父を狙擊んとして果さず。今又われを仇として。在處を索めぐるとは。橈野の雉子猫古巢を追はれて。せんすべなさの人めばかり。忠孝の名を盜人猫。鵜のまねしつる烏猫。猫間の親族數を盡して。討とらんと

鬪とも。死灰に等しき灰毛猫。忽地死出の山猫。となすべきものを面のあたり。環會はで遺憾し。とわれを忘れて高やかに。ひとり言して呵々と。うち笑ふ聲に覺たりけん。一叢くろむ庭の松。木立の間に人ありて。笠を敷寢に臥たるが。欠伸して身を起し。義高を透し見て。其處にもひとり修行者のおわするよ。われも甲夜よりこゝに來て。宿かるべうおもひたるが。折あしく主人は居らず。今にもかへり來べきかとて。待草臥て假寢し。其許の來給ひたるをしらず。はや更闌たりと見ゆるに。大津へは行がたく。一樹の蔭一河の流れ。おなじ宿りも他生の緣。いざさらば夜とともに。語あかして迭代に。旅路の憂を慰めなん。許したまへ。といひ懸て。木立を出て竹緣に。押ならびつゝ尻を掛る。その人は。これも又觀音の靈場を。巡禮する優婆塞にて。年の齡もいと弱く。是彼劣り勝りせず。義高はわが外に。人はあらじと思ひたるに。この優婆塞に物いひかけられ。手に持たる旭の籏を。慌しく懷にさし入れつつ。見かへりていふやう。梢を屋根とし草を褥とし。足の止まる處にて夜をあかすは。修行者の常なれば。足曳の山犬に送られては。獵夫が門を敲き。八百日行濱千鶴を友として。海士が家にやどかる夕もあれど。難行苦行は後世の爲とおもへば。懶とはせねど。かく可惜夜の月を瞻て。言敵のなきばかり。物足らぬものはなし。そも其許は原何國の人にて。はやくより世を厭給ひたる。父の爲か母の爲か。或は結びも果ざりし。女郎花の香をなつかしみ。色情ゆゑに惑ひ出たるにはあらずや。さらばなほ。聞まほしう候といへば。順禮の優婆塞答て。われはつぎねふの山城に人となれど。いまだ定まる妻もあらず。なき父母の爲兄の爲。開威き。花山法皇の流を汲む。大慈大悲の楊柳水。三十餘箇處の靈場を。順禮せんとて出たれど。なほ故鄕の忘れがたくて。いまだ遠くは立も去らず。又其許は何國の人ぞ。さればこの身は。信濃路の山里に生育て。都の手ぶりは見もしらず。しからば都鄙の物がたりを。迭代に聞しもし。聞もせば興ありなん。こはおもしろし。とこぞり寄る。秋の浦風身に入みて。湖水にかよふ鐘の音を。山城の行者僂て。さてもこのころの夜の長さ。あれ聞給へ。今うつ鐘は子刻なり。さは子の刻にて思ひ出ぬ。信濃

には鼠が驛と呼ぶ處ありと聞しが。元來鼠といふ獸は。晝はふかく穴に隱れ。夜は出て食を盜む。されば國に賊家に鼠。いぶせきものゝ譬に引。いと憎べきは是なり。といはせもあへず冷笑ひ。其許は鼠の惡を說て。いまだその善をしらず。夫鼠は靈中の靈なるもの。抱朴子に。鼠の壽二百歲。人に憑て卜す。その名を仲といふ。よく一年中の吉凶。及千里の外事をしるといへり。されば世俗。鼠をもて。大黑天の使者と稱す。故あるかな。大黑は。水德の神にして。北は子の方。その色黑く。すなはち水を主る。又本草綱目金石の部に。黃金の氣は赤くして。夜火光及白鼠ありといへり。亦是世俗白鼠を。福の神と稱る事。本草の說によれり。かゝれば鼠は靈中の靈あるものにして。愛すべき獸ならずや。われをもてこれを見れば。只憎むべきは猫なり。蒙貴と異名せられて。主の膝に睡れるぞなめげなる。或は碗中に魚肉を奪ひ去。賓の饗應を缺して。盜人の名を恥ず。あるは爐の灰に糞を埋めて。十里臭氣を傳ふ。狎るゝにはやくして忘るゝこと又速なり。三年これを養といへども。一ト たび去てはその主を省せず。彼を佞人に喩たるも。又うべならずや。といふ折しも。あるじの法師はさゝやかなる。白張の燈籠を引提つゝ。わが菴ちかく歸り來るに。二人の行者が。緣つらに尻をかけ。聲高やかに相語ふを聞て。潛にあやしみ。笠を脫て燈籠の火光を掩ひ。徐やかに步みて。背門のかたより撓り入り。この物語を竊聞とは。件の二人はたえてしらず。山城の行者猫をあしさまにいはれて喜ばず。これを見かへりていふやう。夫猫は居家必用の獸なり。田夫これを養ふて稻穀を守らし。山妻これを愛して。十二時を辨ず。古人五德を擧て賞翫いと深し。又朱翼に云。猫の睛は十二時を辨ず。子は時の先なり。このゆゑに。猫は鼠をもて食とすといへり。詩人猫を賦して將軍と稱へ。英雄小人を罵て鼠輩と卑しむ。かくてもなほ。鼠を勝れりといふやと。問へば。義高頭をうち掉て。女三の翠簾をもれ出て。淫奔の媒せし。昔物がたりはあれど。佛緣うすくして釋迦の涅槃に參りあはず。侯者の時を得がほなるも。一朝籠衰へては。草野猫となり下り。宿なし猫と蔑めらる。それにまされる鼠の德。窮鼠却て猫を食む。鼠如此といきまきて駒くらとつて引

よせるを。左右へふつと拂ひ除。直につけ入る手首を握りもちてもろともに。庭へ閃りと飛下りて。打つ打れつ。追ひつかへしつ。しばし挑みあふ程に。義高の懷より。はらりと落る旭の籤を。あるじの法師拾ひあげて。これなん木曾の白籤と。いひも果ぬに義高が。唱ふる秘文に奇なるかな。籤は法師の手をはなれ。閃きつゝ主の懷に。入さの月も影くらし。さてはと點頭山城の行者が苞より投出す。刀の光をものともせず。ふたゝび唱ふる秘文とともに。數萬の鼠。忽然と群り出。裳にまつはり袂に入るを。ふり落し切はらへば。鼠も人も雲霧と。消て跡なくなりしかば。山城の行者はさらなり。法師もあきれて引提たる。燈籠撲地ととり落せば。發と燃たつ光火にて。二人は面をあはしつゝ。これは。と計り踏滅す燈籠。善惡もわかぬ野羽玉の闇の扉を引あけて。法師は內に入にけり。彼山城の行者は誰ぞ。猫間新太郎光實なり。又あるじの法師は。誰ぞ佐藤憲淸入道西行なり。

評に云。石田爲久。唐糸を殺して。自の罪を脫れんとす。侯人の毒計かゝる事多かるべし。唐糸はやくこれを猶して。光澄を殺し。遂に爲久を說破して。讎家に到る階梯となす。臨機應變石田に勝れること遠し。又陰重が引出物を得て。兄の死を問ざりしは。所謂使ひがたくよろこばし易き。小人の所爲にして。評するに足らず。將賴豪が舊怨を雪んとて。靈を義高に託せしは。又是しうねき法師の淺見。いと苦々し。夫己を修。人を征するは。德にあつて術に非ず。天慶の將門。形貌を七人に現じて。敵將を欺き。大江山の賊。飛行を千里に放にして。良賤を劫すといへども。一朝その巢壞るゝに及で。瓦礫と共に碎たり。されば義高。苦に寢戟を枕として。父の仇を報んとするは可なり。惜かな善を積。德ををさめて。しづかに天命を俟ことをしらず。猫間光實の柔順にして。却その志金石のごとくなるには及ず。事みな寓言に係るといへども。世の童子等よく見るときは。善を奬し惡を退け。迷の門を開くことあるべし。且猫鼠の論に至つては。もつぱら一編の大意を明す。この書はじめに。義仲子の方北國より出るをもて楔子とす。義仲鼠の禿倉を出す。鼠の禿倉を楔子とす。鼠の禿倉。金の猫を

出す。金の猫を楔子とす。金の猫西行を出せり。事々物々楔子あり。楔子は物をもて。物を出すの謂なり。

(西行略傳)西行始の名は。憲清。俵藤太秀郷の後裔。藤原康清が次男なり。弓馬の家業に達し。又好で書典を讀。管絃をならひ和歌をよくす。曾奥州の郷里を出て京師に到り。鳥羽上皇に仕奉りて。左兵衞佐に任ぜられ。北面の衞士たり。上皇の眷恩淺からず。朝暮詠歌をもて。御製に應ずと云。大治二年の十月。上皇鳥羽新造の離宮に幸し。障子の丹青を題として。卿相に歌を詠し給ふに。憲清その列に則りて。十首を進る。上皇大に叡感有て。御劔を賜ひ。中宮又御衣五襲を賜ふ。憲清纒頭して退出づ。人みなこれを羨ざるものなし。憲清素より遁世の心あり。逡巡として年を送る。こゝに佐藤憲康といふものあり。乃憲清が氏族なり。曾手を携て朝より退り。且交加て睦み晤語ふに。ある日憲清がいふ。予が先祖秀郷。叛夷を征して朝廷の藩護たりしより。その餘塵我儕に至て。朝恩稍厚し。人間の浮榮は。久しく恃べからず。彼山林の下。豈係慕ところならんや。憲康聞て感泣し。遂に世を遁れん事を相約す。憲清その詰朝鳥羽院に候て。かへさに憲康が門を扣くに。門外に人聚り。家内群り悲しむ。訝みてその故を問へば。家奴がいふ。昨夜主人俄頃に身死る。その母七十多歳。その妻は十九歳なり。こゝをもて悲歎いよ〳〵深しといふ。憲清聞て大に驚き。ます〳〵哀念を催して。頻に遁れ去らんとす。しば〳〵致仕すれども許されず。已ことを得ず纓を解て祝髮し。名を圓位と改む時に崇德院の保延三年。秋八月なり。その後名を改て西行と稱ふ。年來相從ふ家人あり。彼又剃髮して西住と名づく。憲清このとき妻あり子あり。これを捨て隱去り。草舍。柴の扉。閑雅をもつて生涯を安くせんとす。一年伊勢太神宮に詣で。直に關の東に赴んとす。遠江國天龍灘に至て。武夫の乘船に便る。船中の人最多し。武夫これを怒て。西行を打に。頭破れて血流れ出づ。しかれども慍る氣色なし。西住これを見て。且怒り且哀む。西行がいふ。予麗を出しより以來。固に前程のこゝに及ぶをしれり。不欺の禍なほこれより大なる事ありとも。繼て憂とするに

足らず汝速に故郷に歸るべしといふ。西住已ことを得ず東西に相別る西行獨行して佐夜中山を越。大井河を渡り。駿河の岡部を經て。宇都山を踰越し。清見が關を過り。富士山を眺望し。足柄に至り。相摸路に出て。鳴立澤の詠あり。裳を武藏野の露に拂つて。笠を白河の月に傾け。笠島に實方の墳をたづねて。枯野の薄を吟じ奥羽兩國の長。藤原秀衡を訪ふて。又洛に歸る。秀衡は西行の親族なり。懇に留むれども。西行遂に留らず。その至るところ。かならず和歌を詠じてこれを過。時の人稱嘆して。以て口順とす。かくて美濃路に到て。ふたゝび華洛に入り。又杖を四國に拽んとして。幣を加茂の神社に奉り。洛を出る事を告ぐ。時に仁安二年の十月。四天王寺に赴き。洛に江口の里を過て。宿を遊女に求るに許さず。和歌を詠じて過。かくて讃岐の松山に到て。崇德院の御廟に參る。玉の床の諷詠あり。これを靈墳に手向たてまつりて。菴を同國善導寺の側に締び。且くこゝに留る。西行出家の後。その妻雍染して尼となり。この女兒をある人の家に附託て。ふたゝび是を顧ず。年を經て。西行長谷寺に遊ぶ日。ひとりの尼の讀經するを聞。まづ和歌を詠じてこれを詰る。尼又これを聞て。走り出づ。これを見れば。舊の妻なり。汝今何處にありやと問ば。高野山の麓に住はべりと答ふ。互に別後の情を述て別去ぬ。その後西行偶女兒の所在をたづね。人に憑てこれを呼ぶ。兒女父の來れりと聞て。且喜び且泣て。出てこれに見ゆ。西行世を遁るゝ時。この女兒僅に四歳。こゝに至て既に成長す。西行その恙なきを見て。喜んでこれに告ていふ。汝が母現に高野山の翠微にあり。寧苦樂を他人と共にいたさんより。ゆきて慈母に從へといふ。女兒その旨を禀て。遂に彼家を去り。母とともに住て。孝養最厚し。かくて治承二年の九月。西行獨りの伴侶とともに。西國に赴く日。又江口を過りて途に驟雨にあへり。路傍の菴にひとりの尼あつて。雨の漏に慌忙たるを見て。贈答の歌あり。ゆく〳〵安芸の嚴島に詣で。歩を筑紫にすゝめ。宇佐八幡宮を拜し。鐘御崎に到て。更に攝州に歸り。昆陽野を掠て。南都に到り。春日社に詣。三笠山を瞻て。東大寺に遊び。俊惠法師と和歌

を談ず。後又高野山の麓に到て。居ること數十日。ふたゝび讃州に赴きて撰集抄九卷を撰む。時に壽永二年の春。善導寺の圓坐にあり。文治二年の秋。奥州に赴きて。秀衡を訪んとす。中途鎌倉に遊て。鶴が岡に詣ずといふ。是より以下は。この草紙の第四卷に見えたり。

魁雷子云。東鑑撰集鈔。西行物語。山家集等を按ずるに。西行。粟津野に住けるよしは見えず。これは是野史の寓言ならん。作者第七套に至て。纔に西行の二字を說出し。いまだ彼は原いかなる人。又何によつてこゝにありといふことをいはず。よりて婦幼の爲に。その略傳を述て。始終を審にせり。

吾師。簑笠翁。嘗いへる事あり。世人二月十五日を西行忌とす。この說疑らくは非ならん。按ずるに。草庵和歌集類題の部に。

西行上人の跡の雙林寺に住侍りしころ。二月十六日人々來て佛事行ひ歌詠し事をおもひ出て。

昔とぞ又しのばるゝ跡とひしその二月の春のおもかげ　頓阿

かゝれば。西行は建久九年二月十六日に入寂せられしを。後人その二月の望月のころといふ歌によりて。十五日なりと思へるにや。件の歌は。辭世にあらず。又望月の頃といへば。決定十五日と云にはあらざるべし。十四日より十六日迄を。望月のころといはん歟といへり。抑西行上人は。出塵淸標凡ならず。又詠歌の絕妙なる。玉をつらねずといふことなし。俗に保延三年に離れ。世を建久九年に下る。すべて六十二年の際。一巾一衣。一杖一鞋。東西南北して思の至らざる隅もなく。前後意を同くす。實に蓋世の一畸人。前に敵なく。後に對なし。うべなるかな。數百年今に至て。黃口の童もよくこれをしる。その詠歌に至ては。數擧に遑あらず。予寡聞を羞ずして。漫に毫を染。篇後に數行を記すことを許さる。寔に附驥の面目なり。

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之三　終

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之四

第八套

鶴岡社頭に賴朝行僧を認る
鎌倉營中に西行文武を談ず

文治二年八月十五日。源二位賴朝卿。鶴岡の八幡宮へ詣給ふ折しも。ひとりの行僧。右の鳥栖の傍なる。大銀杏樹のほとりを徘徊す。奉幣了つて。近臣をもて。彼行僧を問し給ふに。佐藤憲淸入道圓位なり。此度長源坊にかたらはれ。大佛造作の沙金を募緣の爲。奥州の親族。藤原秀衡が館へ赴くなる。道の次に。當社へ參詣いたし候。と答申ければ。賴朝卿聞召て。さては西行にてありけるよ。彼人は。和歌はさらなり。弓馬の家業拔群なるよし。豫て聞ところなり。やうこそあらめ。營中へ將て參れ。と仰すれば。近臣うけ給はり。綽の赴を西行に聞えしらし。これを俱して參りけり。賴朝歸館の後。大場景能。秩父重忠。石田爲久以下。弓馬の古實にこゝろを得たる武士。十餘人を集へ合。さて西行を呼び入れて對面あり。頻に文武の古實を尋問玉ふに。西行答て。貧僧在俗の日は。先祖秀鄕朝臣より。相傳の武藝。をさ〳〵その奥旨を存ずといへども。一トたび空門に入て以來は。萬事悉忘却す。又和歌は。その到ところ。見るに就。聞くに就。思ふにまかして。僅に三十一字を詠出るのみ。敢得意とするにあらず。しからば又何をか申べき。と固辭まふして。さうなくは云はざりけり。そのとき賴朝は。ほとり近く候じたる。秩父重忠に。そと注目し給ふにぞ。重忠はやくその意を曉得。膝をすゝめつゝ。西行を誘んとて云へりけるは。平家の公達は。華洛におはして。雲の上人とのみ。交參給ひしかば。歌人も多かり。坂東武士は。心ざまこそ勇けれ。和歌などは聞だにならはず。いと無念の事なり。重忠が如き。田舍侍の。かくいふは嗚呼なれど。年頃疑しとおもふ。一ツ二ツ

を問まほしき事あり。

菅家の歌に。

宵の間や。都のそらにすみもせで心つくしのありあけの月。

又。弘法大師の歌に

忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水

この二首いかにともこゝろを得がたし。菅家のおん歌。宵の間や。都のそらにすみもせでとは。筑紫より華洛は東にあたるなるに。宵の月の東より出ざることやはある。又紀の玉川は。毒水なりと世俗のいふは。左のわすれても汲やしつらん云々の歌によりて。唱へ出せるとおぼしきに。世に六玉川とて。六箇國の清流水を撰出すほどにて。毒水をとり入れたるはいかにぞや。夫玉とは賞美の詞にして。玉琴。玉笛。玉鋒などいふ是なり。もし高野の奥の水。毒あらば玉川とは稱ふべからず。緣故をしらし給へかし。と信たちていふ。西行含咲て。秩父どのゝ不審。いと理にこそ。こは傳寫の誤なるべし。菅家の御集には。

宵の間は都のそらにすみぬらん心つくしの有明の月

とあり。かくてこそ歌のこゝろは。有明の月とともにあきらかなり。菅丞相罪なくして罪せられ。太宰帥に左遷あり。筑紫は西のかぎりなり。ゆゑに西國に漂泊せし懶を。曉月の西に沒るに譬給へり。さればこの有明の月も。宵には東の方。華洛のそらにこそすみつらめ。われも年來華洛にありて。九重の雲井に奉仕たる身の。今は西國の果に遷來にけりと。人間の一期盛衰を。一夜の月の出沒に譬給ひたる。述懷の詠歌なり。又忘れても汲やしつらん。云云の歌は。世に弘法のよみ給へるよしいへど。慥なる所見なし。されど歌のこゝろをもていふときは。玉川の清流水也賞翫のあまり。高野の奥にも。かくめでたき水はあり。忘れても汲かし。大かたは汲にてあらんずらんといふな

り。汲やしつらんとは。今や牽らん望月の駒。今やさくらん山吹の花なぞ詠る手爾乎葉に等しく。忘れても。汲てあらふ。汲かしとよみたるかとおぼし。さて玉川は。舊多磨川と書て。武藏國母企郡にあり。この水多磨郡に合流するをもて。多磨川といふか。和名鈔には大婆とあり。磨の字を。婆と讀が古實なり。その後好事の人。それの玉川是の玉川とて。六玉川の名をおはして。うたどもあまたあり。かゝれば。高野のおくの玉川とよめるも。弘法より後の人の作ならん歟。山川には石毒蛇毒などある。常のことなれば。今は紀の玉川に。毒あるかはしらず。彼うたをもて論ずるときは。毒水といふにはあらじ。すべて歌のこゝろをよくも考得ずして。嘘談をなす人あらば。訛もつて訛をつたへ。久しくして曉らざる事あり。譬ば。

山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞちりける

といふたは。何となく春の夕ぐれに。霏々と花のちりかゝるが。あはれにいとをかしと詠たるにて。さながらその氣色を見る如し。これを後の人は。あしう聞て。入相の鐘を撞ば。かならず花の散ものなりとこゝろ得。花に鐘は禁忌のやうに思ひあやまりたるにや。近ごろのうたには。花のために鐘を憎こゝろをさへ詠出せし。と繹審に說示せば。重忠ふかく感伏し。鎌倉殿をはじめて。群臣みな噫と感じて已ず。閑談いと興に入ほどに。賴朝卿。西行に對て宣ふやう。世の人のいふを聞に。むかし左馬頭賴光朝臣。ある夜の夢に。漢土の養由基が女兒。椒花女といふものより。水破兵破の矢。雷上動の弓を得て。秘藏せられしとぞ。しかれどもわが家にては。かゝる事は口碑にも傳たる事なし。又彼水破兵破と稱たる矢は。いかなるものなりけん。その形だに聞及ず。且養由基は。周の時。楚の共王の上將にして。百步の外に。柳の葉を穿たる。弓の手たれなり。史傳を按ずるに。晉楚。楚失磯と云所にて合戰致せしとき。養由基は萬弩にて射殺さる。又その女兒に。椒花女と云ものありけるよしは。彼國の書に絕て見えず。加之その說をなすもの。養由基は。百餘歲にして。父子終に仙境に入るといふ。いと怪し。彼水破兵破といふ矢。實にあり

けるにや。わが家の事を。他人に問はゞいと鈍ましき所爲なれど。其許は弓矢の古實に精細人なれば。かくはいふなり。もし考もあらば。隔意なく聞えしらせ候へ。年來の疑を解べきに。と宣へば。西行法衣の袖をかき合し。宣ふところ寔に高論なり。養由椒花女が事は。論ずるに足らず。是は賴光。弓矢の家業に長給ひしかば。なほその所爲を高くせんとて。何の比よりか嗚呼なるもの。かゝる不思議をさへいひ出せるなるべし。故いかにとなれば。水破兵破といふ矢。別にあるにあらず。碎羽も。漂羽も。矢のゆく聲をもて呼のみ。鏑に目あるは。聲あり。その音風に逆ひて。漂といふがごとし。又目なき鏑は。聲なし。發ときに。透としてゆくものなれば。透發といふにやあらんずらん。かくは申せ。なほふかき緣故あるにや。老法師が僻案を申すまでなり。又雷上動は。易の卦によりて名づけたる歟。別に仔細はあるべからず。と答しかば。君臣ます〳〵感激し。賓主笑壺の會にぞありける。されば西行は。終に誘れて。文武の故實。その要略を談ずる程に。賴朝ふかく歎び給ひつ。近臣俊兼に仰て。悉くこれを書記さし。又西行に宣ふやう。今日はからずも貴僧と閑談を得て。年來の疑念を一時に解のみならず。弓矢の故實。ながくわが家に留る事を得たり。こゝに候ずる武士はみな賴朝が股肱耳目の家來なり。今試に問べし。當座の衆中。孰か最弓矢の業に富たる。最負斟酌の議を用ひずして。明白に指示給へかし。と宣へば。西行莞然とうち笑て。この席に列たる勇士は。皆これ麒麟閣の功臣にも勝れり。就中。大場景能は。老功の武士なるべき歟。往時保元の戰に。この人筑紫の御曹司八郎爲朝の矢面に向ひながら。九死を出て。一生を得たり。彼爲朝は。古今未曾有の强弓。百發百中の達人たり。よりて彼人の矢面に立もの一人として生て歸る者なし。しかるに景能僅に薄痍を負て引退くものは。これその弓矢の故實に熟したる故なり。問はし給はゞ分明に候べし。と申すにぞ。賴朝うち點頭て。景能を近く招き。かゝる事やありし。物がたり候へ。と宣へば。景能はいと面目ある氣色にて。さて申すやう。愚者の一得。思ひの外なる褒賞を得て。殆と迷惑つかまつり候。但し勇士の用意すべきものは武具なり。就中。熟用ふべきものは弓矢の才能な

り。と僕弱官のころより。心づきて候ひき。されば。鎭西八郎は。吾朝無双の弓とりなり。しかれども弓矢の才能を案ずるに。その涯分に過たる歟。僕保元に。御父義朝々臣に從ひ奉り。大炊御門河原に向ひ候とき。不意に八郎殿の弓手にあへり。時に爲朝弓を彎んとし給ひしかば。景能竊に思ふやう。是尋常の武者態にあらず。八郎御曹司にてぞあらんずらんとて。走して敵の弓手に馳たり。然ば爲朝は。鎭西に人となり給ふから。騎馬のとき。弓は聊心に任かせざるが如し。景能は又。東國に生育て。よく馬に馴たり。こゝをもて絆相違して。弓の下を越るに及で。景能が身に中らず。やがて膝に當りつ。もしこの故實に及ばずば。忽地その一箭にて射殺さるべかりし。されば勇士は。只騎馬に達すべきなり。といよゝその准備懈候はず。と憚る氣色もなく申せしかば。衆皆ふたゝび耳を側だて。げに業は道によつて賢し。もし西行にあらずば。よく景能をしりがたかりぬべし。憐こよなき面目かな。とさゞめきあへる折しも。政子御前。唐糸を使として。美酒一樽と。伊豆の浦の甘海苔。鎌倉山の菌なんど。種々調理したるを進らせて宣ふやう。不意珍客を得給ひて。群臣を集合。うち晤譚し給ふよし。傳へ聞侍るに。今宵は秋の最中にて。月もまつべき程なり。よりてとりもあへず。是進らせ侍るにこそ。と聞えあげさし給ふ。賴朝氣色よく見えて。軈て件の偏提を開かし。唐糸に酌をつかまつらして。これを西行にすゝめ。重忠景能爲久等にも賜てけり。かくて酒酣に及べるとき。賴朝卿。唐糸を見かへりて宣ふやう。今の世にも。未練の壯佼は弓の本末もしらざるものあり。しかるに汝は武藝にさへこゝろを得たり。と政子大姫が物語にてしれり。この席に侍るこそ身の幸なれ。日來武藏につきて思ふこともあらば。いへかし。とぞ宣へば。唐糸答申すやう。糸竹の技は。幼よりならひたるに。よくもせねど。人なみには侍るべし。武藝はいかで學べき。この迹なき事に侍りとて推辭を。石田太郎爲久。佶と唐糸に對ひて。鎌倉殿のかく叮嚀に宣はするを。推辭奉るは。却無禮なり。元來女子の事なれば。ふかく思ひわきまへたる事なくとも。そは許し給ふべし。一言も申さずば。興なき所行ならんかし。といふ。その意。重忠景能等が文武の

問答を妬く思ひて。唐糸は。おのが從弟なりとて。薦て給事に進らせたるものなれば。せめてこれが才學なりとも人にしらして。鼻を高うせんと思ふなるべし。時に重忠唐糸に對ていふやう。爲久の申さるゝところ。いと理なり。君の仰を固辭給ふは畏かるべし。目今鎌倉殿の宣はせし如く。武藝不鍛練の壯佼を罵りて。弓の本末も知ずといふ。されど弓矢にて名目甚多し。悉くこれを記たらんも。又一藝に遮し。和漢の名目弓矢の故事聞まほしといふに。頼朝も又しば〳〵責て已給はず。こゝに唐糸。終に推辭事を得ずして申すやう。しからば幼稚かりしとき。父のいひつる事又從弟にて侍る爲久等が。人と晤談を聞たるなど。只ありのまゝに申すべし。或は聞悞り。或は思ひ違て侍る事多かりなん。殿たち教給ひね。と微笑て應しかば。西行これを聞て。武士の武藝を談ずるは。平生の事にて珍しからず。女房の才學の程をしもしらば。いと興ありといふに。頼朝いよ〳〵氣色よくて。とく〳〵といそがし給へば。唐糸はなか〳〵に臆せず。遂に弓矢の名目をまうしつ。夫唐土の博士の說に。弓はこれを張るときに。穹宗然たり。故に弓といふ。弓は穹なり。その末を簫和訓ゆ といひ。又弭和訓ゆ といふ。骨をもてこれをつくる。弭々然として滑なればなり。中央を弣和訓ゆ といふ。人の握持ところなり。材を用ること六ツ。幹角筋膠絲漆これなり。本强ときは。及ぶところ必ず遠し。角の勢順なるときは。發ところかならず疾。筋の力銳とき。は必深し。これを合するに。膠をもてするときは和す。これを纏ふに。糸をもてすれば固し。これを裹に。漆をもてすれば。霜露これを損せず。六の材共に美にして。又天時工巧相應す。これ工の良所以なり。とかや。又わが國の故事をいへば。上頭を月とし。下頭を日とし。彊より第一藤をはつかけといふ。第二藤をひめそりといふ。第三藤をしづやかけといふ。第四藤を八幡卷と云。第五藤をとりうちといふ。第六藤をせんたんまきといふ。第七藤を押付といふ。第八藤を矢すりの節といふ。第九藤ををからみといふ。これ握もつところにして。漢に弣といふもの是なり。第十一藤を矢つめおろしといふ。第十二藤をひきたゝきといふ。第十三藤ををとこしといふ。第十四藤を引鰓といふ。その下はやすめ緒なり。

又弦は。鳥の下四寸をしかけといふ。その下を大ふくらといふ。又その下をはづだまりといふ。その下を手たまりといふ。兎の上三寸を。又しかけといふ。弓は表裏陰陽に則。日月星辰の象を具て。天の廿八宿。地の三十六禽。みなその氣をこめたりとぞ。凡文武の兩道を具足したる人。これを弓とりといふべし。されば君子は必本を務む。この故に正鵠を失すれば。これをその身にもとむといへるにや。又矢は釋名とかいふ書に。矢は指なり。言こゝろ。指向ふところありて。迅疾なるものなればなり。又これを箭といふ。前進の謂なり。周官の司弓矢は。八矢の法を掌るものなりとなん。矢の本を足といふ。足又これを鏑和訓か といふ。鏑は敵なり。言こゝろは以て。敵を禦べし。齊人これを鏃和訓や といふ。鏃は族なり。いふこゝろはその中るところ。皆族滅す。關西にこれを釭といふ。鉸は鉸なり。といふこゝろは。鉸刄あり。その末を括和訓や といふ。括は會なり。言こゝろは弦と會す。括の旁を刄といふ。言こゝろは。形刄に似たり。又我國の制。大鏑。小鏑。音無鏑所謂碎蕤目無鏑同上矢頭細葎。小鳥葎。脹葎。金磁頭。蠶目。戲。村濃矢。矧。鏃等の數種有。刄の左を矢くひと云。右をけらといふ。矢くひの下を筈卷と云。羽の中央をやりはといふ。四羽なれば。その下を云。やり羽の下を走羽と云。その下をかけ羽といふ。矢竹の中央を中の節と云。その上を袖すりと云。中の節と下をすけ節といふ。その下を射つけの節といふ。鏃の上を根かつきといふ。根かつきより上へ。地水火風とこれを數へ。羽の中央を空をすとかや。かく聞て侍れども。矢一ツ發すすべもしり侍らず。たゞ口にいふのみにて。鷸鵡の人まねしたらんやうにて。殿達かたはらいたくぞおぼすらん。恥かはしさよといふに。西行は。しば〳〵唐糸を尻目にかけて嘆息す。頼朝は思ひの外なる唐糸が。才學の男子にも。勝るを感じおぼし。さすがは爲久が親族なり。かゝる女子を傅おくときは。生侍にも勝りて。大姫がよき護たり。と頼に褒美し給へば。群臣各々これを榮とするに。爲久は鼻のあたりを嗚呼めかして。したり貌なれど。重忠のみ唐糸を稱嘖ず。冷笑てぞ居たりける。かくて唐糸は。暇給りておん前を退出たり。且して西行法師は。猛に外面をうち贈ぎ。

怪しや鎌倉殿を恨るものありて。今見に築垣の外邊を徘徊す。重忠は四相を察る人なり。とく出て見給へかしといふに。諸臣大に驚き怪み。西行は。文武の秀才なり。と聞しかど。天文。地理。卜筮。說相の事をさへ。ようするとは。いまだ聞も及ばざりし。しかはあれ。今鎌倉殿のおん前にて。かくいふは定めて見るところそあらめ。こは聞も捨がたき珍事かなとて。互に面をあはしつゝ。絶て口を開くものなし。重忠は。鎌倉殿の仰をまちて。佻々しく身を起さゞるを。頼朝見そなはして。敢嶷ぎ給ふ氣色もなく。重忠などて猶豫せる。西行のいはるゝところ。由あるべき事ぞ。とく〳〵といそがはし給へば。重忠は阿と應も果ず。長袴の裾かいとりて。やがて遠侍のかたへ退出つ。

第九套

薬師堂の邊に重忠義高を訝る
由井の海濱に怪鼠光實を笑ふ

猫間新太郎光實は。いぬる年。粟津が原にて。不意も義高に環會。既に宿志を述て。怨を報んとせしに。義高怪鼠の術をもて。忽地に身を躲し。往方しれずなりしかば。大に望を失ひてなほ。彼此を遍歷し。心ならずも。はや三年を經る程に。熟思ふやう。義高既に幻術を得て。出沒不測也。われ今孤獨にして。漫に環會んとするとも。勞して功なからん歟。緣の趣を按ずるに。彼かならず頼朝を父の仇とし。これを狙擊んとて。鎌倉近く。徘徊する事もやあらんずらん。曩にわが嫂の敎訓もあれば。潛に鎌倉に赴きて。柳營昵近の武士に就。わが夙志を告。鬱憤を訴。武將の威德を權て。仇を報ばや。と深念し。今茲文治三年の春の末。鎌倉に趣きて。しのびやかに。秩父庄司二郎重忠が宿所に到り。緣故を審に告にければ重忠聞て。義高は。曩に石田爲久に擊れ給ひぬるに。今なほ彼人存命給ふこと。いと〳〵怪し。と思ふに爲久が擊たるは。贋ものにてありけめ。しかるときは。鎌倉殿を仇とし。寛でやはある。こはゆゝしき御大事なり。まづ重忠が家に潛て坐せ。ともかくもして宿志を遂さし進らすべし。と承引て。よろづ信やかに歟待すといへども。義高の事はいまだその證驗を得ざるをもて。佻々しく鎌倉殿へは聞へあげず。只意の

中に含て。しのび〳〵にその往方を索る程に。光實をば。假に家隷とし。いと下郎に打拂して。毎日にこれを將て。谷七郷を漫行きしつ。これは重忠主從。眞の義高を認らざるをもつてなり。しかるに八月十五日。鎌倉の營中において。西行法師。猛に外面をうち瞻ぎ。目今癖者ありて築垣のほとりを徘徊す。といへりしかば。重忠はこれかならず冠者義高なるべし。と猜しながら。明白にはいはず。遂に頼朝の仰を稟て。忙しく門外へ出んとするとき。まづ正門のこなたに。主の俱まうしてありける榛澤六郎と。猫間光實のみに。緣由を告しらし。只この二人を將て。連忙しく外面へ走り出。御所の四隅を巡歷す。浩る所に。藥師堂のこなた。溝渠のほとりを。編笠ふかくして。武士の浪人めきたるが。漫に徘徊し。つく〴〵と裡を見入れつゝ。目今重忠主從が出來ぬるをやしりたりけん。道を横ぎりて。避んとするを。重忠佶と見て。あのもの將て來よ。といへば。榛澤六郎うけ給はりぬ。と應かけて。喘々これを呼びとめ。秩父どのゝ呼し給ふなり。こなたへ參り候へといふ。件の浪人見かへりて。わが事にて候歟といふ。榛澤再て。秩父殿の召さし給ふに。とく〳〵參り候へ。といそがせば。しぶりながら編笠を脫で雌手に引提。伴れてほとり近く來にけり。そのとき重忠は。道の次なる。桂石に尻をかけ。彼浪人を招きよして。これを見るに。面色白く。眼睛秀。身丈高くして。骨筋逞し。身には黑き袷の未の時は遙かに過たるを被て。腰に朱鞘の小刀を跨。ついゐたる形容平人ならず。重忠と見かう見て。嘆賞なし。天晴健男なるかな。武勇もさこそ。と思ひやらるゝなれ。そも誰家の子ぞ。年は幾許春秋ぞ。名は何と呼るゝにや。と問に。浪人答へて僕は。飛騨の乘鞍嶽の麓に生育て。名もなき下士なり。年紀はいまだ二十に至らねど。父母もなく兄弟もなし。此度遊學の爲。この地へ赴きたるにて候といふ。重忠聞て。さては青雲の志ありて。鎌倉へ來れるにこそ。重忠屑ならねど。もし樹を擇に及ばずば。所領にかへて。扶持すべし。いかにわが家に奉公すべくや。と問ば。浪人左右の手を。膝に累おきて。好意は欽ばしく候へど。いまだ志すかたも見果ざれば。思ふまゝに遊歷して後に。かならず庇を蒙るべし。目今は仰にしたがひがたく候。と答

しかば。重忠うち點頭て。しからば力およばず。なほ時節もありなん。飛驒より鎌倉へ出るには。必定木曾路を過りけめ。信濃は聞ゆる山國なれど。名所もいとおほし。山は。姥捨。朝間。風越の峯。恨の山。うらこの山。いくら山。笠取。阿計呂。阿都佐山。有明山。浦の山。蓼科山。一隔山。位山。川は筑摩。相染川。鹽田川。梓川。御言川。里は伏屋の里。更級の里。憑の里。美妙水の里は。わきて見どころもあるべし。枚は桐原。望月。野は信濃野。菅の荒野。伊奈野。原は。園原。蕎麥原。橋は。木曾の棧。久米路の橋。湖水は諏訪の湖。關は樗の關の蹟。溫泉は東間の御湯。七くりの湯。犬養の湯。信濃の御湯。神社は延喜式に載られたるもの十箇郡。合して四十八坐。この外の小社は。枚擧に遑なかるべし。これら何が最も好景なりし。聞まほしと詰問ぱ。浪人答て。僕元來文もなく武もなければ。只いたづらに見過して。ひとつも記候はずといふ。重忠微笑て。さもこそとて。懷より石筆をとり出し。腰なる扇をさとひらきて。

夏くればふせやが下にやすらひてしみづの里にすみつきぬべし

かく書寫て。これを浪人に與ていふやう。こは見參の引出ものなり。其許。遊歷しをはらば。必わが家に來給へ。そのときの割符とも見るべきなり。と聞えしらすれば。浪人はその歌をしば〳〵吟じて。押疊つゝ。懷に挾。芳意寔に謝するに堪たり。もし緣あらば。ふたゝび見參し奉るべし。と回答果。光實を尻目にかけて。つと身を起し。由井が濱のかたへ過り去ぬ。猫間光實は。重忠の後方にありて。彼浪人は粟津の草庵にて。猟鼠を論じたる。廻國の修行者に。露ばかりも違はず。こは疑ふべくもあらぬ。義高なりと見てければ。舊怨更にいやまして。名告もし。飛もかかりて。擊とるべう思ひながら。重忠はやくその氣色を曉得。しば〳〵見かへりて。目をもてこれを抑留する程に。終に手を動す事を得ず。義高既に立去て。ゆくことやゝ二三町に及びしかば。堪かねて。直に追ひ蒐んとするを。重忠。忙しく押留め。彼浪人を義高なりとは。われも又はじめよりしらざるにあらず。しかるをしりつゝ見過したるは。彼幻術を得て。容易搦がたければなり。さるを御邊血氣の勇にはやり。もし誅られて返擊などにせられなば。年來の志をいたづらになすのみならず。死して後も。なほ世の胡慮なるべし。それこそ絆みな慮の淺きにあるなれ。よしや義高出沒自在にして。人の耳目を曛すの術ありとも。往昔より妖術をもて。本意を遂たるものを聞かず。漢の張角。我が朝の將門なんど。或は愚民を惑し。或は敵將を誑くに足れども。天兵一トたび至ては。瓦石とともに碎たり。しからば義高も。しばし放おきて。竊にその妖術を折き。一擧して拉ぐべし。努剽り給ふな。とひそめきて敎諭したりければ。光實は齒を切り。拳を捺りて思ひとゞまりつ。重忠又榛澤六郎にいふやう。義高既に。われに認られたれば。この地に足を留むべからず。彼何所をさして去やらん。主從三手にわかれて。これを見究ば。攻るにも防にも便あり。汝は東の方。葛西谷より。屏風山のかたへ向へ。光實は又。この條を眞直に。由井の濱のかたへ赴き候へ。われは西の方。小袋坂をさしてこそ向ふべけれ。寄集ふところは。鶴岡一の鳥栖際にて。おの〳〵ひとつに聚べしとて。よくその手分を定め。又光實にいふやう。御邊義高に追つき給ふとも。只密やかにその後方に跟ゆきて。ゆく先を見究なば。其所よりかへり給へ。彼になしられ給ひそ。といひ諭しければ。光實これを諾なひて。主從遂に三方へ立わかれけり。かくて猫間光實は。義高を追蒐て。遂に走り着。その後方に跟て。ゆく〳〵由井の濱に到るに。日も暮なん〳〵として。往來の人も迹絕たり。そのとき光實思ふやう。われ今。仇とともに咫尺の地を踏ながら。手を空しくせんは。大丈夫のせざるところなり。重忠の敎訓理あるに似たれど。天の時はふたゝび得がたし。地の利又究竟なり。もしこゝにて怨を復さずば。何の時をか期すべきとて。間一町ばかりおきたるが。濱邊にそふて白砂を蹴たてつゝ。急に追ひ携り。既に名告かけて欲らんとするに。奇なるかな。義高の形朦朧として見えず。こは朽をし。といきまきて。彼此を佶とにらまへて立在ば。思ひもかけず。その容犢に等しき大鼠忽然とあらはれ出。行べき前を遮り留たり光實是を見大に怒り。這ごさんなれ。義高が妖の皮。引剝捨べし。と罵もあへず。刀を拔て跳り

かゝり。その眞中を一刀刺に手に障るものなし。こはいかに。と呆れ惑ふ折しも頂の上に呵々と笑ふ聲し今返擊にせんも容易けれど。汝が志の健氣なるに放して。立地にその命を絶ず。みづから曉て。思ひとゞまれかし。といひこらし。又呵々と笑ふ聲して。さとおろしくる風とともに。しら浪高くうちあげて。はつと群だつ千鳥の外には。目にかゝるものもなし。光實頻に義を見て勇むといへども。いかにともすべなく。今こそ重忠の教訓をおもひだして。只いたづらに刀を引提。大息吻て立たりけれ。

評に云く。西行上人。鎌倉の營中に招れて。和歌を論じ。武藝を論ずる條は。東鑑以下の諸說に根きて。實錄の赴に粗あへり。その辯に至ては。是又先達の論をとり出て。これに作者の發明をまし加へ。絆みな出所あらざるはなし。この段のみ。演戲雜戲の體を脫落して。閱者に倦ざらしむ。只恨らくは。無用の辯なりとて。婦幼の爲に厭るゝ條多ならん歟。又いふ。政子の唐糸をもて。頼朝へ進らせたる甘海苔は。往々東鑑にも見えて。このころもつぱら。賞翫したりとおぼし。但時節仲秋にして。海苔を賞するに。少し早かるべし。又いふ。大場景能が。保元の合戰に。爲朝の弓勢を論ずる條は。東鑑と少しも違ず。この實錄のまゝを撮合せり。又淸水の里の歌は。堀川後度百首。大進が歌なり。今按ずるに。信濃地名考にいはく。しみづの里に。しみづの驛あり。いにしへの官道なり。信濃なる淸水と詠れたるは。この地なるべし。今松本の城南。埋橋村のうち。わづかに淸水てう地名見ゆ。所謂驛の跡なるべし。郡毎に。しみづの地名あれど。官道にはあらずといへり。こゝに重忠の件の歌をとり出て。義高を驚したるいとよし。又夫木集に。二條天皇后肥後堀川卿百首おなじ歌に

おりたちてしみづの里に住ぬれば夏をば外に聞わたるかな

この外なほあまたよめり。

頼豪阿闍梨怪鼠傳 卷之四 終

頼豪阿闍梨怪鼠傳 卷之五

第十套

西行猫を邨童に與ふ
光實竊に惡棍を刺す

西行法師は。こゝろならずも鎌倉殿に抑留せられて。文武の長談に。秋の日はやく傾けども。興なほ酣なり。今宵は。三五夜中の月も。隈なかるべし。夜とともにかたり明し候へとて。頼朝叮嚀にとゞめ給へども。西行終に留る氣色なく。奥州へは路なほ遙に候へば。彼地の事をなしをはり。歸路又見參に入るべきなり。とまうして推辭しかば。頼朝すべなく。曩に義仲追討のとき。石田太郎爲久が分捕しつるよしにして。進らせし猫を。ほとり近く置たれば。これを把て西行に與へ。けふはからずして老師を煩すといへども。させる款待をせず。遺憾甚し。こは當座の引出ものとも見給へ。と賜すれば。西行もその志の信なるに固辭ず。彼金の猫東鑑以下銀の猫とす を受ていふやう。貧僧不思議に貴所に値遇して。暫時滯旅の疲勞を忘るゝに似たり。然るに。又この布施を受て。些の報せではあるべからず。つらつら貴所を相するに。今宵劍難あり。深くおん愼あるべし。しかりといへども。子の時をだに過し給はゞ。絆おのづから安かりなん。今一首の腰折あり。よく記憶し給はゞ。後かならず曉得事あつて。みづから禦に足るべきなり。と密やかに說示し。さて詠出せる歌。

よれば又左にも右にもいとにくしふくろばしてよ木曾の麻衣

吟ずる事三度にして。遂に別を告。忙しく退出けり。そのとき頼朝は。つくづく歌のこゝろを考給ふに。いまだ發明する所なし。重忠も又歸り來ざれば。何とやらん心中穩ならねど。元來智勇洵叡にして。天の生せる英雄にて

おはすめれば。絶て氣色にも顯し給はず。酉の比及に。後室に入りて。政子大姫と共に。夥の女房たちを集合。唐糸に筑紫琴を撥埒さして。この夜の月を賞し給ふ。大姫はいぬる年より。義高の事おもひ忘るゝ隙もなく。世の中を形なくおぼせしかば。花にも月にも。心とゞまるべうはあらで。羅綺にも堪ぬおん容止の。いといたう細りて。雨に惱る春の鳥の。塒に迷ふ風情なれど。今宵の月を見ざらんや。病はこゝろより起るなるに。親をも慰。みづからも慰め給へとて。はゝ公の强てものし給ふに。なほ蟄居らんは畏し。とおぼして。侍兒等に册れ。病を推して。その席につらなり坐しけるに。北條以下。和田秩父なんど。在鎌倉の武士。その内室をもて。いと愛たう造り建たる盃臺を。おもひ〳〵に進らせて。祝義をまうしける。そが中に秩父重忠の内室嫩子は。心ざまの怜悧のみならず。よろず雄〻しき婦人にぞありける。かゝれば頼朝は。重忠が今に回報をまうさざるを。訝みおぼす折なるに。潛にこの事を問んとて。北條和田以下の内室には。みな暇を給はりて退出さし。嫩子ひとり。小夜深るまで引とゞめて。女房達もろともに。ぐゑんじの歌骨牌をとらしつ。或は又四表八表の物がたりさして。頻に大姫を慰給ひける。是より先西行法師は。申の下尅に及びて。やゝ營中を走り出。今宵は金澤までもとて。忙しく走りつゝ。と見れば道の次に。年八ツか九ツかばかりなる賤の子。大きやかなる龜の眞中を。索もて楚と結下。小石砂のうへともいはず。ぐわらりぐわらりと引摺けり。そのとき西行は。しばし立在て呼とゞめ。子どもよ。その龜を放せ。われその代に。よきものとらせんぞ。といひもあへず。法衣の袖より。金の猫をとり出だして見するに。件の童大いに歡び。龜をば直ちに溝渠のうちへ投捨て。走り來れば。西行見かへりて。よくこそ放したれ。是れもてゆきね。といひながら。後さまに金の猫を遞與し。金澤をさして走り去ぬ。されば童はおもひかけず。よき物得つ。とこゝろ喜しく袖に抱きて。若宮小路を。南へ濱邊を直ぐに歸りゆく折しも。忽地後に人ありて。こや〳〵。と呼びかけたり。その打扮。身には澁染の上總木綿のいと屈かぎ單衣を被て。頭に鼠嚙のふりたる笠を。歟の手には白布の甲掛をして。足には新藁の尻切を穿。身丈短く面

色赤く。眼は圓にして。木兎の如く。鼻は横りて。栢榴に似たり。この人は是。生平に鶴岡神手洗井のほとりに出て。放龜を鬻を活業とする。横手が原の風九郎と呼るゝ惡棍なり。件の風九郎。この日も夥の龜を兩個の箱に養ひ。或は索もて篋の鳥栖木に括さげ。終日八幡の社頭にありて販し。なほ賣殘れるを。朸してうち擔ひ。家路をさして歸へるなりけり。その時童は。風九郎をみかへりて。阿爺公よ。けふは常よりも遲かりし。もろともにとて。呼びかけ給ひぬる歟。といへば。風九郎點頭て。汝はなほ幼きに。などてかく。ひとり遠くは遊ぶぞ。鶴岡の流鏑馬みんとてか。送りて得させんに。われとともに來といふに。童欽びて。後になり先に立て行程に。風九郎乂いふやう。汝は擲に。行僧によからぬ物を貰ひたり。われ潛にこれを見て。いと苦々しく思ふなり。その猫見せよ。といふに。童は頭をうち掉て。いな。是は御身に賣らしたる。龜と換たればいと惜し。いかで坐にみするものかは。と氣色ばむに。風九郎冷笑て。さる忌はしきものに何にかせん。憐むべし。汝この猫を家にもて歸らば。立地に罰を蒙りて。翌までは よも活じ。命をしからずば。ともかくもせよといふ。童聞て大に驚き。そは何故ぞ。緣故をしらし給へとていそがせば。風九郎かさねて。汝はこの猫を。尋常の弄物と思ふべけれど。それは荏柄天神の香爐なり。神のいと惜み給ふものなればとて。社僧これを秘おきて。人に見せず。しかるを彼惡僧盜出したれど。神罰にて走る事を得ず。懲にもてあまし。さて汝に與たるなり。ともしらずしてもて歸らば。忽地に罰を蒙るのみならず。社家より大なる祟あらば。父も母も。いかなるからきめを見んも。又しりがたし。汝はわが家ちかき里の子なれば。かくはいふなり。命をしからずば。ともかくもせよ。といひも果ぬに。童は忽地に氣色變りて。手にもたる金の猫を。撲地と投捨。よゝと泣つゝいふやう。よからぬ和尙に欺かれて。たま〳〵買得たる龜をば失ひつ。却ておそろしげなる物と換たり。こは何とせんとて蹉跎し。思ひくしたる形容なり。風九郎これを見て。潛に歡び。慰めていへけるは。汝年なほ十にも足らねば。神も免給ふべき歟。いたくな泣ぞ。われ汝が爲に。その猫を荏柄にもてゆきて。竊に返し奉るべし。あな物醪な

や。こゝらあたりには。犬の糞多きに。などて捨たる。猫は糞なりとも。犬をば嫌たまふものを。といひつゝ。忙しく捐たる金の猫を取て。懐に挾。又いふやう。われ今これを天神に返し奉りて。勸解まうさば。汝が命はいふもさら也。父母も又恙なかるべし。さはいへ。もし親に告。他にも物語る事あらば。遂に神罰を脱がたし。その度は勸解とも。決して放し給はじ。努此事をいはじとならば。よきに賠話して得させんに。是もてはやく歸れかし。とさまざまに賺こしらへ賣殘りたる龜の。しかも大きやかなるを。一ツとり出して與しかば。童は目を拭ひつゝ。件の龜を重やかに押戴き。阿爺公よ。よきに勸解し給はれかし。もし神の憎給ひて。夜の中に。とりも殺し給はんかと思へば。淺ましくもいと悲し。よしなき物を得たり貌に。且くも喜しかりつる悔しさよとて。なほ啜あげて。泣も止ざれば。風九郎はいよゝ笑ひを忍び。吁汝は怜悧童なり。人にだに語らずば。ふたゝび咎給ふ事はあらじ。われもしこの處にて逢ずば。可惜命を失して。父にも母にも。いくばくの悲しみをさすべかりし。死たる童はかならずゆく。彼寨の河原といふをしらずや。十歳より以下の稚子が拾ふ小石の罪おもみ。一重積ては父の爲。二重積ては母の爲。三重積ては自の爲と。積も果ぬにおどろしき。鬼の笞に打崩され。積ねば積とて打罵られ。地藏菩薩の袖の下に。身は躲せども隱れぬ罪障。娑婆にて親のいふ事聽ず。木のぼりしたる報にて。劍の山へ追ひあげられ。水戯せし報にて。血の池へ追ひ入られ。撮啖せし報にて。餓鬼道の苦艱を禀。科なき犬を擊たる報ひは。畜生道へ墮るとかや。死しては咲ぬ花よりも。枕團子にならぬは僥倖。さるおそろしき黄泉の旅へ。行ともなくばこの猫の。ねの字も人になしらせそ。と猫撫聲にいひ懲され。童はいよゝ忍びかねて。涙とともは青淥を。絞りもあへず泣沈み。悲しき事を聞侍り。よしや友どちの夥計を省かれ。毎日に灸を灼らるゝとも。けふの事をいかでか人に語るべき。といひつゝなほも立かぬれば。風九郎やをら手をとつて引起し。何事も命は物種。聞わきたらば仔細に及ばず。とく〳〵歸れ。といそがされ。童はおのが手にもたる。龜の項より縮める鹿の。萬代を經し心持して。風九郎をふし拜み。家路を殺て走去りぬ。

かくて風九郎は。しばし其方を目送りつゝ冷笑ひ。さてもうまき童かな。捨賣にしても二三百金の物價はあるべし。まづ拜謁。とたはぶれて。懐よりとり出す猫は。海より出る三五の月と。ともに輝く柴麝黄金。と見かう見て莞爾とし。ひとり點頭おしいたゞき。擔篋の杁肩にして。ゆかんとする後方より。擔索を無手と引留めたり。風九郎驚として。そは誰とて見かへれば。これもわが里近く住む。農夫何がしが一子に。峨々太郎と呼るゝ。十六歳の大童。あしきことには年より長て。只管に酒を好み。彼此にて物あらがひす。と名たゝる溢者なりける。されど。風九郎も。おぼえある癖者なれば。騒ぎたる氣色もなく。呵々とうちわらひ。こはたれなるらんと思ひつるに。餓鬼大將の峨々太郎。祭禮の神酒の喫醉。ひとり心たのしくてか。正なき事をな。せぞといへば。峨々太郎も又呵々と冷笑ひ。われは絶て酒を喫ず。まさな事は汝こそすれ。人はなほしらじとや思ふ。若宮小路より迹を跟て。彼も是もよく見たり。汝ひとりによきことさせんや。その猫こせ。といひもあへず。懐に手をさし入るゝを。身を反りて拂ひ除。それしられては一大事。よしなき猫をとらんとて。言葉にかどの瘦犬の子。棒喫せんといきまきて。擔荷を撞とうちおろし。軈て杁を搔取。はやく諸孺丁と薙んとするを。峨々太郎跳踰。杁を撲地と打落し。つと入りて引組だり。されば夜の鶴岡。子ゆゑにあらで惡棍の。慾に惑ひし一生懸命。一の鳥居の浪打際に。寄てはかへし組ては別れ。蝴蝶に狂ふ貓蛇の爭ひ。或は奪つ奪れつ。果は頭髻を取あふて。捻挫んと挑む程に。もろとも輾かゝりし。路の木槿の掛稻より。ぐざと突出す朴刀に。是彼胸骨つらぬかれ。苦と叫ぶ聲とともに。鮮血さと濆り。忽地無常の風九郎。峨々太郎を臥累り。砂を颺で死てけり。時に掛稻の間ひきわきて。血刀提立たる壯佼。貲布の袗衣に。菖蒲皮の形したる。萠黄木綿の袴高く括提。藤鞆の長き兩刀を帶たり。まづ半身を顯して。雄手雌手を見かへり。徐々と歩み出て。頬かむりせし手拭を搔とりつゝ。双の血を拭ひ去。やをら鞋へをさめて。風九郎が屍のほとりなる。金の猫を取てつらつら見つゝ押戴き。時なるかな。わが家の重器。はからずして復る事。神明いまだ捐給はず。今よりこの猫をもて。義高

が妖鼠の術を破らば。その首を得るも。又遠からず。あな喜しとひとり言して。懷に楚と挾。袖うち拂ふて去んとすれば。前より張ふ人ありて。ゆく前を立塞ぎつ。又立もどりて。道を引かえ去んとするに。こゝにも又人ありて。そのゆく前を立ふさぎつ。されば壯佼は。右へ去んとすれども去がたく。左へ去んとすれども去がたし。前は渺々たる蒼海にして。後は藪澤なり。とさかうさまくねりあひて。三人○○に立ならび。佶と面をあはしつゝ大に驚き。こは。秩父どの榛澤氏。といふに主從手を擧て。音なせそ光實ぬししからば前より何事もとくと見たり珍重々々いざもろ共に。とゆふ汐の。月を燭に歸るなるべし。

第十一套

頼朝の智麻衣の歌を解く
嫩子の勇唐糸が逆を禦ぐ

この夜頼朝卿は。重忠の内室嫩子と夥多の女房を集合。唐糸に琴を彈し。政子。大姫とともに。月を瞻て秋情を感給ふに。曩に西行法師のいひつる事。とにかく心にかゝり玉ふものから。人にもしらせず。つく〴〵と彼の歌のこゝろを考へ給ふに。いまだそのよしを曉得らず。盃の數もかさなり。興ます〳〵酣なる比。厠へ登んとて。つとたち給へば。唐糸はやくその氣色をしりたりけん。後方に從ひて。臘塗の匣に銀の水注子を取添。廊下を繞りて外面に待居たり。そのとき。頼朝は厠にありて。なほ彼歌をしば〳〵吟じかへしつゝ。忽地曉得給ふよう「よれば又左にも右にもいとにくし」といふ上の句は。國字のゝ字二ツを。左右にして。中へしの字を加ふれば水といふ字になる歟。にくしの二くは。くの字二ツなり。又下の句にふくろばしてよ木曾の麻衣とある。この麻衣の衣に上の句のよれば。またの由といふ字を加へて。袖といふ字になるなり。いとにくしの糸は。唐糸に象り。木曾の麻衣とは。彼唐糸こそ。木曾の殘黨なれ。このもの水を進らするとき。密かに袖を綻ばし。これを避よといふ謎なめり。と寤らに發明し給ふ拊しも。潺潺遙に嚮て。子の刻になりぬ。さればこそとて。やをら袖を綻して。僅に鏃目のところ〴〵を綻し。

さらぬ容にて厠を出。とく〳〵水をもて。と宜はすれば。唐糸つと參りて。水を進らするおもゝちし。傍より頼朝卿の右の袖を無手と引飜み。氷なす懷劍を拔出していふやう。今は何をか匿むべき。妾は石田爲久が從弟にはあらず。實は朝日將軍木曾義仲の御内において。一人當千と呼れたる。今井四郎兼平が妹。手塚太郎光盛が妻なり。君の仇。兄夫の仇にて坐すなれば。一太刀恨み奉らばやとて。爲久を計策。かく給事して侍るなり。時來つて今宵たま〳〵咫尺し奉れば。縱脫んとし給ふとも。脫し奉るべうもあらず。さらばおん首を給はりてん。といひも果ず。双を閃かして胸前を刺んとするに。頼朝は身に寸鐵を帶たまはざりしかば。女なれども侮りがたくおぼして。横さまに三間ばかり。鉦の飛がごとく。閃りと飛退給ふに。豫て綻したる袖なれば。さらりと斷離て。いたづらに唐糸が手に殘り。主は欄干の下に立給ひつ。唐糸は。只一刀にとおもひつるに。こは朽をしとて。なほ追蒐て擊奉らんとするを。頼朝佶と見そなはして。癖ものあり。寄れや拄よ。と呼はり給ふに。後廳なれば。武士一人も侍らず。嫩子は。常ならず。鎌倉殿の人を呼給ふ聲。いと忙しきを洩聞て。つと身を起し。長押にかけたる薙刀を搔とり。女房達續き給へ。といひかけて。驀直に走參れば。廿餘人の女房たち。われ後れじと群たちて。目今頼朝卿を追蒐奉り。廊を二たび三たび走り繞る唐糸を。左右よりとり圍み。おの〳〵短刀を鞘ながら打ふりて。生拘らんとて鬪ば。唐糸大に焦燥て。星眼を睜き。朱の唇をひるがへし。長なる黑髮をふり亂しつ。ものものしや。といきまきて。西を打ては東に當り。北を颯しては南を拄。四角八面。縱横無礙に挑み戰ふ。その疾こと雷光の走るが如く。又陽炎の立昇るに異ならず。雄々しき勇婦の刀尖に。夥の女房當りがたくて。動すれば擊颯され。踏かへす裳は紅に。留奇南發と薰らして。脛さへあらはなるは。山風に吹おろさるゝ春の花。空にしられぬ白雪の。匂ふかと怪まる。政子大姫は。殊さらにうち驚き給ひて。小薙刀を衝たて。前後の杉戸を楯にして。勝負いかに。と見給ふに。奮擊突戰。半晌ばかりして。主客もろともに大に疲勞れ。互に發と引わかれ。一息吻て立たりける。油斷を見て嫩子は。薙刀を水車の如くうちふり。

唐糸やらじ。とかけんとするを。懐劍もて拂ひ除。つけ入らんと競かゝれば。嫩子は二足三足退きつゝ。薙刀を戛利と捨。やと聲をかけて唐糸が懐劍を丁と打落し。怯むところを突倒し。押て索をかけたりける。唐糸猛しといへども その身鐵石にあらざれば。初度の戰ひに腕も撓みて。嫩子に敵しがたく。勢竭て生拘らるゝといへども。なほ頻に罵りて已ず。今宵もし嫩子なかりせば。いと危かるべきに。さすがは重忠が妻なり。いとも微妙擧動かなとて。政子大姫はさらなり。賴朝卿ふかく賞嘆し給ひけり。浩處に秩父重忠かへり來て。鎌倉殿に義高のことを密語まふし。又風九郎。峨々太郎がことを聞えあげ。曩に西行に賜はりたる金の猫は。元來猫間光隆卿の家藏なるが。いぬる年如此々々の事によつて。光隆卿これを木曾義仲に贈り。家臣竹川正忠を贖得たり。しかるに義仲はその性猫を忌嫌ふをもて。これを石田爲久に豫たるを。木曾殿落沒落の日。爲久は御方の陣に馳加り。猫をば分捕せしとまうしこしらへて。鎌倉へ進らせたりとぞ。又西行法師は。無慾の桑門なるがゆゑに。金の猫を給はるといへども。愛惜のこゝろ露ばかりもなく。御所を出ていく程もなく。賤の子にとらせたるを。惡棍風九郎。彼童を賺して。件の猫を掠とり。遂に峨々太郎といふ溢者にしられて。これを爭ふ折しも。猫間光實。忽地二人の惡棍を殺して。猫を輙くとり復しつ。この光實といへる人は。猫間光隆卿の舍弟なるが。妾腹なれば。その比冠を給はらず。平人にて。新太郎と呼れたる是なり。光實復讐の志切なりと云ども。義仲粟津野にて。戰死ありしかば。夙志を遂るに由なし。よりてその子義高なりとも擊て。亡兄の寃魂を慰めばやとて。この兩三年が間。回國の修行者に打扮。はからずも粟津が原にて。義高に撞見しが。義高妖鼠の術を得たれば。立地に本意を遂るに及ばず。近比鎌倉に來りて。重忠を憑まうさるゝに默止がたくおぼえ。密に扶持して。假に家隷とし。毎日にこれを將て。谷七郷を徘徊し。もつはら義高の在處を撈索るといへども。蹤なる證迹を得ず。こゝをもて佻々しく訴へまうさざりしが。今日西行の言によつて。面あたり彼人この地に立しのぶをしれり。しかれども。歐冶不測の妖術あれば。且くこれを欺し。その妖術を敗りて後。一擊して

搦捕べう思量して候。と彼是おちもなく聞えあげ。また嚮に光實。由井が濱にて。ふたゝび義高を擊漏らしたる爲體を述。さて申やう。件の金の猫は。鼠妖を折くの奇特あり。願くば猫をその舊に復して光實に給はり。彼人の宿志を果さし給へかし。と密やかに申すにぞ。賴朝大に驚き給ひ。さては義高なほ死ず。不思議の幻術を得たるかな。寔に西行の先見。掌を指すが如し。誰かしらん。唐糸は兼平が妹。光盛が妻にして。賴朝を狙擊んとするものとは。しかるに御邊の妻。嫩子が。比類なき働によつて。輙くこれを搦得たりとて。はじめて西行の歌を說しらし給ふに。重忠はふかく感激し。西行法師は凡人に在ずとて。頻に是を稱贊せり。賴朝又宣ふやう。義高が事は。政子大姫に知ずべからず。もしこの事世に聞なば。わが最愛の女兒を喪ふべし。思ふに爲久は唐糸に謀られて。これを營中に給事さしたる歟。又義仲に荷擔して。彼と志をあはし。賴朝をうしなはんとするもの歟。所詮爲久を生拘て鞫問せずば。いかに共知がたし。まづ光實に御邊の家隷をさし副て。爲久を搦とらし候へ。且唐糸が事は。その從類を穿鑿すべきものなり。忽になせそ。と仰すれば。重忠うけ給はりて。外面へ退出。猫間光實と榛澤六郎に。機密を告。はやく爲久が宿處に走向ひ。生拘來るべし。といそがせば。猫間。榛澤。欣然として領掌し。雜兵夥を將て。飛がごとくに。石田が家に走てゆく。さる程に重忠は。唐糸を引立て。公文所の前栽に。炬火を燒し。そのほとりに唐糸を引居。宿寢せし青侍に。これを守らし。重忠みづから義高の在處と。猫久等の事を責問に。唐糸はなか〳〵に臆したる氣色もなく。義高君の事は。露ばかりもしり侍らず。爲久。又わが方人にあらず。わが身その始め。石田が家隷堀江藤二を擊て。却て爲久を說伏せ。彼に便りて。營中へ給事いたせしは。鎌倉殿を一太刀恨み奉らんとてなる事。勿論なり。且石田も木曾殿に仇あり。堀江兄弟も。又義仲のおん首をあげたるものなれば。まづその家隷を擊て。十が一の憤を散しつ。世の人のいふを聞くに。鎌倉殿は。寬仁大度の大將にて。重忠ぬし又理非明斷の良臣なりとぞいふ。しかるに今。その君臣の言と行ひを見れば。聞しにも似ず。よしや木曾殿武威に誇り。天氣を犯すの罪を得給ふとも。義高

君に何の科かおはすべき。さるを鎌倉殿。忽地に壻舅の義を忘れて。その根を斷。その葉を枯さんとし給ふは。識量甚狹し。もしこれをしも諫得ずば。何をもて御身を良臣といはん。その愚なる事。石田に勝れり。かくいふを憎しとおぼさば。とく〳〵首を刎給へ。わが身。女子なれど。恩の爲に死んは。本來の面目なり。と回答て。その後は問ども終にものいはず。重忠これを聞て。且感じ。且嘆じ。やがて緣由を聞えあくるに。頼朝しばし沈吟して宣ふやう。唐糸女流なりといへども。その志奪ふべからず。われ其忠義に愛て。立地に殺すに忍びず。便宜の地に。土牢を修理て。嚴しく禁獄いたすべし。とぞ仰ける。かくて鷄明曉を告る比及に。猫間光實。榛澤六郎は。いたづらに歸り來て。重忠に告ていへりけるは。某兩人直ちに石田が宿處へ走向ひて候に。門戸を引よしたる儘にて。裡には人もなし。事の爲體いと怪しければ。近隣の武士。或は市人等を呼起して。その往方をたづね問に。皆答ていふやう。今夜子の比及に。誰とはしらず。石田が家に呼門ものあり。何事ども。しかとは。聞えず。只唐糸の二字と。とく脫れ去り給はすば。禍忽地その身に及ふべし。といふを聞ぬ。さては彼人。罪の脫がたきをしりて。逐電したるものならん歟といふ。よりてなほ爲久を追留んとするに。時は遙に後れ。且その往方をしらず。事の體爲怪しければ。まづ走り歸りて候と演說す。重忠これを聞て眉を寄せ。忽地膝を拍ていふやう。石田を呼出したるは義高の妖術ならん歟。爲久は彼人の爲に父の仇なり。義高奇術あれば。はやく唐糸が事をしつて。その罪爲久を係累し。もろともに首を刎らるゝことあらんか。と危み。爲久主從を誑引出し。手づから擊て。怨を復さんとするものなるべし。見よ〳〵爲久主從が首は。今夜地上に落て。翌は馬蹄にかけらるべし。しからば。これを追ずともあれかし。といふに。猫間光實も榛澤六郎も。重忠の聰察世に勝れたるを感伏し。終にふたゝび爲久を追はず。詣朝重忠は爲久がことを聞えあげしかば。頼朝卿。さもこそと點頭おはして。いよ〳〵唐糸が獄屋をいそがし給へば。重忠すなはち。釋迦堂が谷なる南の巖崖を切開かし。いと嚴重に造り建て。其所に唐糸を籠置。獄守をして。日夜これを守らせけり。今なほ釋迦堂谷の南に

その蹟遺り。内に石塔數多あり。鎌倉志に云。相傳ふ。唐糸は手塚太郎が娘なり。一說に光盛が妻と云未ノ詳。頼朝に仕居けるが。木曾義仲の爲に頼朝を殺さんとて。脇指を懷中に隱置けり。遂に露れて。この土の籠に入置れけるとなん。東御門の山の上にも。唐糸が土の籠といふ處あり。しかれども非なりといふ。以上今按ずるに。唐糸が事。東鑑。衰盛記に載せず。只口碑に傳るのみ。こゝをもて。その說區々にして。詳ならず。女流の刺客は。和漢に罕なり。是はさておき。頼朝卿は。秩父重忠をもて。潛に義高の在處を索さし給ふ程に。有一日。又重忠を呼て宣ふやう。つら〳〵緣故を案ずるに。唐糸大事を爲損じて。われに防禦等閑ならざるをしるから。義高ふたゝび深く躲れて。佻々しく身を動すべからず。しかれども。平家の殘黨。若義高に附從はゞ。ゆゝしき大事ならん。兄心もとなきことは。華洛に多し。御邊いそぎ妻子を將て上洛し。京都の守護時政と心をあはして。禁闕を守候へ。又猫間光實においては。鎌倉に殘しおき。密やかに。義高を索さすべし。よりて件の金の猫は。彼人に返し與ふべきに。その趣をいひしらし候へ。と仰するにぞ。重忠承て宿所に退り。絆の趣を光實に聞えしらし。俄頃に行裝を整て。内室嫩子と。今茲三歲になりける。嫡男重稚を將て。榛澤六郎以下の家隷を召從へ。八月下旬に首途して。只顧に路をいそがし。日數十日あまりにして京着し。源廷尉の舊の迹。堀河の宿所に入つて。北條時政この頃時政京都にあり。鎌倉殿の仰を傳へ。もつぱら禁闕を守護し奉けるとぞ。

評に云。この卷すべて楔子あり。この事前に評するが如し。頼朝鶴岡詣を楔子とす。朝頼西行を出す。西行を楔とす。西行金猫を出す。金猫邨童及風九郎。峨々太郎を出す。風九郎峨々太郎を楔とす。風九郎峨々太郎。猫間光實を出して。其猫本に復。是正楔なり。又文武の評論を楔とす。文武評論。景能重忠を出す。重忠を楔とす。重忠。西行の詠歌を出す。詠歌を楔とす。詠歌義高唐糸を出す。唐糸を楔とす。唐糸嫩子を出す。これ奇楔なり。古人云。楔子は無中の有生にして。みな憑空の詞なり。今按ずるに、楔子は蓮を砍るに。藕中の

糸。その砍るに隨つて竭ざるが如し。又瞿曇氏に。十二因緣の說あり。亦是浮屠家の楔子なり。

○或人問。賴朝の西行に贈る者は。銀の猫なり。しかるを今金の猫とするはいかにぞや。答ていふ。金はその色黃にして。その性土に應ず。金となるときは。彼猫はじめ土中より出るによろし。且金は。秋氣殺戮の主なり。光實これをもて。義高の妖を征し。復讐の宿志を舒るに宜し。又金花猫王の說。載して搜神記に見ゆ。金花は和にいふ三毛なり。猫はその形虎に似て。その毛黃色を帶るものを佳とす。故にこゝには金の猫とする歟。作者の用心。すべてかくの如くなる事おほし。今悉評するに及ばず。

○附ていふ。この書八卷を全本とす。今第一卷より第五卷まで。屋て前編とし。綉辛既に落成す。六卷より以下大尾に至まで。なほ作者の胎裏にありて分娩せず。來春かならずその稿本を乞得て。續て全璧とすべし○又いふ。作者みづからいふ。この書第二卷と。第六。第七。第八卷を得意とすと。しかるときは。この編中得意の作文寡し。閱者をして遺憾多からしむ。よりて今その聞るところをもて。後編三卷の大意を附錄す。

第六卷　後編の上册とす　近日嗣出

大意　箱峰に義高。石田爲久を擊にはじまり。渡月橋邊鈴稚主從閑居の話。竹川正忠夫婦。忠義の段。半にして終る。閱者茫然として淚をたゝの卷なり。

第七卷　後編の中册とす

大意　正忠が妻孤戶。恩の爲に身を賣て孃子に從ひ。鎌倉に赴く中途。正忠幼主を懷にして。これと東海道の旅館に邂ひ。終にその子をころして主を救ふ話なり。

第八卷　後編の下册とす

大意　大姬ふかく義高を追慕して。ふたたび病をなすにはじまり義高鎌倉の營中に蹤隱し。唐糸大姬節に死し。光實金の猫を以て妖鼠の術を破り兄の寃みを雪るに終る。

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之五　終

賴豪阿闍梨恠鼠傳引用群書要語

【貓】(本草綱目卷五十一。獸部) 時珍曰。猫苗第二音。其名目自呼。陸佃云。鼠害レ苗。而猫捕レ之。故字從レ苗。禮記所謂迎レ貓。爲ニ其食ニ田鼠一也。亦通。格古論云。一名【烏圓】。或謂【蒙貴】。卽猫。非矣。亦云。貓有レ病。以ニ烏藥水一灌レ之甚良。世傳薄荷醉レ貓。死貓引レ竹。物類相感然耳。(今按) 我俗傳。貓疫以ニ銅屑一雜ニ魚肉一餌レ之必愈。近曾試レ之。似レ有レ功。然藥餌遲。則亦竟不レ活。

(西陽雜俎後集卷八)段成式云。貓目睛草圓。及レ午豎斂如レ綖。其鼻端常冷。唯夏至一日煖。其毛不レ容ニ蚤虱一。黑者闇中逆循ニ其毛一。卽若ニ火星一。俗言猫洗レ面過レ耳。則客至。楚州謝陽出レ猫。有ニ褐花者一。靈武紅叱撥及青驄色者。猫一名豪貴。一名烏員。平陵城古譚國也。城中有ニ一猫一。常帶ニ金鎖一。有ニ錢飛若ニ蛺蝶一。土人往々見レ之。

【猫睛】(失翼)貓睛辨ニ十二時一。子爲ニ時先一。故貓食レ鼠。

【納猫】(俞宗本納貓法)凡買レ貓用ニ斗桶等物一。以レ袋盛レ之。勿レ令ニ人見一。至レ家計ニ筋一根一。和レ猫置ニ於桶內一。盛レ之。每過レ水溝飲處一。將レ石置レ之。使レ不レ過レ家。從ニ吉方一歸。取レ猫出。拜ニ堂竈犬一畢。將ニ猫筋一挿ニ于土堆上一。使レ不レ在ニ家撒屎一。然後復レ床睡。勿レ令ニ走出一。爲レ法也。

【和訓】(和名類聚鈔)貓和名禰古萬。似レ虎而小。能捕レ鼠爲レ糧。

(契冲雜記)猫ねこ猫子待の略歟。鼠の類につらねこといふあれば。ねことのみいふは略語の中にことわり背べし。猫の性は鼠にても鳥にても。取得んと思はねば。とらぬものなり。よりて待とつけたる歟(眞淵ノ頭書云)猫はたゞ睡獸の略なるべし。けものゝけの字。反こなり。或人苗の字につきて。なへけものといふはわろし(今按)或說に【あさくまゝぬ】を猫とす(秘藏)小夜ふけてあさくまゝぬにあひぬるかみえひきくまのうちふれてなく

【猫命婦】(小右記)長保元年九月十九日。内裏御猫産レ子。女院左大臣右大臣有二産養事一。有二衛重椀飯納レ筥之衣等。猫乳母。馬命婦。時人笑レ之。奇怪事也(枕草紙)うへにさふらふ御ねこは。かうぶり給はりて。命婦のおとゞとて。いとをかしかりければ。かしづかせ給ふか。はしに出たるを。めのとのむまの命婦。あなこまや。いり給へとよぶに。云云。

【靈猫】(本草綱目獸下云)藏器曰。靈猫生二南海山谷一。狀如レ猫。自爲二牝牡一。其陰如レ麝。功亦相似。異物志云。靈猫一體。若雜二入麝香中一。罕能分別。用レ之亦如レ麝焉。(今按)香狸。神貍。淨猫。皆靈猫之類。

【吻】(群書纂要)吻呼レ猫聲。

【山貓】(野史)山貓生二八丈島一。形最長大。常栖二山中一。嘗屬。捕レ鳥爲レ糧。動入二人家一。銜去小兒一。啖レ之。

【鼠】(本草綱目卷五十一)時珍曰。【家鹿】卽人家常鼠也。以二其尖啄一。善穴。故南陽人謂レ之【鼷鼠】其壽最長。故俗稱二【老鼠】一。其性疑而不レ果。故曰【首鼠】。嶺南人食而諱レ之。謂爲二【家鹿】一。鼠字篆文。象二其頭齒腹尾之形一。(正字通)鼠。賞呂切。音暑。六蟲。善竊。晝伏夜動。四齒無レ牙。前爪四。後爪五。尾文如レ織。無レ毛。俗稱レ鼠爲二【耗蟲】一。易繫辭長爲レ鼠。(雲仙雜志)山中謂レ鼠爲二【社君】一。又【水鼠】穴二水旁岸隙一。似レ鼠而小。食二菱茨鰕魚一。又【氷鼠】(東方朔云)生二北荒積氷下一。皮毛柔可レ席。

【鼠王鼠母】(酉陽雜俎)舊說【鼠王】其溺一滴成レ鼠。一說【鼠母】頭脚似レ鼠。尾蒼口鋭。大如二水中者一。性畏二狗溺一。一滴成二一鼠一。時鼠灾多起二於鼠母一。七々所レ至。虎動成レ萬。萬鼠其肉極美。凡鼠食二死人目睛一。則爲二鼠王一。俗云。鼠齧二上服一有レ喜。齒レ衣欲レ得有レ蓋。無レ蓋凶。

【璞】(西京雜記卷六)玉之未レ理者爲レ璞。死鼠未レ屠者亦爲レ璞。月之且レ爲レ朔。車之軸。亦謂二之朔一。名齊實異。所レ宜レ辨也。

【仲】(抱朴子)鼠百歲則色白。善憑レ人而卜。名曰レ仲。能知二一年中吉凶一。【鼠戲】(五雜俎)長安丐者有二鼠戲一。鼠至頭。非二可レ教者一。不レ知何以習レ之。【捕鼠】(秘苑俗解)捕レ鼠法。蟹ノ中ノ黃ナル物ヲ陰乾ニシ。安息香。鼈甲。芸香ト共ニ和。屋ノ中四方ノ壁ノ上下ニテコレヲ焚ベシ。鼠自然ト走出テ人ノ前ニ至ル。捕ヘテ野外ニ送ルベシ。殺シ傷ルコトナク。悉除去ルノ良法ナリ。

【和訓】(和名類聚鈔)鼠昌與反。和名禰須美○又鼠一名【見えひきくま】(秘藏抄)に見ゆ。又【よめのこ】といふ。(定賴家集)に見えたり。

【鼠國】(述異記)西域有二鼠國一。大者如レ豹。中者如レ兎。小者如二常鼠一。頭悉白。商賈經二過其地一。不二祈祀一。則齧二人衣一。(今按)我俗謂爲二鼠隱里一者是。

【火鼠】(正字通)火鼠出二西域及南海火州一。山有二野火一。鼠產二于中一。甚大。人取二其毛一。績レ之。號二火一浣布一。遇レ汗燒レ之卽潔。

【鳥鼠】(事文後集)鳥鼠山鼠。尾短形如二家鼠一。鼠在レ內鳥在レ外爲二牝牡一。

【田鼠】(月令)季春田鼠化爲レ鴽。

○鼠種類最多【鼷鼠】(郭璞云)其大如レ拳。其文如レ豹。(說文云)鼷鼠小鼠也。食二人及鳥獸一。雖レ至レ盡不レ痛(和名鈔云)鼷鼠上音奚。和名阿未久知禰須美。亦有二【鼶鼱】一。和名乃良禰。亦有二【鼶鼲】一。和名豆良禰古。亦有二【鼶鼠】一。和名毛美(鈔云)俗云無佐佐比。亦有二【鼶鼠】一。和名以太知。亦有二【鼶鼠】一。一名【鼢鼠】和名宇古呂毛知。常在二土中一行。若見二三光一。卽死者是矣。(今按)鼷鼠性畏二擔馬音一。若樹間掛レ之。則鼷鼠不レ壞二其根一。

文化丁卯仲冬上浣

相猫兒法

詩訣

猫兒身短最爲良　眼用金銀尾用長
面似虎威聲要嚇　老鼠聞之立便亡

又詩云

露爪能翻瓦　腰長會走家
面長鷄種絶　尾大懶如蛇

又法口中生三坎捉一季五坎捉二季七坎捉三季九坎捉四季花朝口咬頭牲耳薄不畏寒純白純黑純黄若有猫兒此樣毛色不必揀　看花猫法身上有法又要四足及尾花俱得過方好

右吳郡俞宗納猫法重錄于恠鼠全傳後編簡端

文化第肆丁卯年冬十二月上浣

飯台曲亭蟬史

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之六〔後編上册〕

東都　曲亭主人著述
門人　魁蕾癡叟批評

第十二套

箱根山に爲久元を喪ふ
塞河原に幽魂主を諫む

石田太郎爲久は。その夜さり唐糸が賴朝卿を擊んとして。嫩子に生拘られ。わが身の隱慝。忽地に發覺たるをしらでありけるに。亥中の比及に。頻に門を敲く者ありけり。門卒これを怪みて。誰と問に。その人答て。おのれはむかし。爲久ぬしに再生の恩を禀たる者なり。その事は主人もしらで坐すべけれど。仔細を述るに及ばず。潛に火急の一大事を告まゐらせんとて來れり。御内において。一二の人に見參せまほし。このよし。とく〳〵まうし給へかし。といふに。門卒等いよ〳〵怪しみて。一人走りゆき。石田が老黨堀江藤五陰重に。かくと告るに。陰重聞て眉を顰め。やがて立出つゝ。物の隙よりさし覗くに。夜間なれど月いと明く。絶て見も馴ざる男只ひとり。門外に立在り。こはやうあらめと思ひしかば。忙しく走り入りて。主君爲久に。絆の體爲を告にければ。爲久もそのこゝろを得ず。汝まづ出て。緣由を問。夜間なるに。かならずしも内へな入れそ。といふに。陰重ふたゝび外面に致り。やをら物見をおし開き。件の男に對ひて。こゝに來れるは何人ぞ。かくいふは石田どのゝ御内にをいて。さるものありとしられたる。堀江藤五陰重なり。事あらば。しらし候へ。と呼びかくれば。彼人近くすゝみ寄て聲を低うし。故ありて明白には名殘がたし。今夜營中に椿事出來にたり。その故を尋るに。唐糸往に爲久ぬしの吹擧によつて。大姫君に給事いたせし

は。原その志。鎌倉殿を一太刀うらみて亡君亡父の仇を報んとするにあり。しかれどもその便宜を得ざりしが。今宵はじめて鎌倉殿に咫尺し。矢庭に擊奉らんとするに。緯成らず。重忠の内室。嫩子。夥の女房たちを集會て。遂にこれを搦たり。さるによつて。重忠仰を禀て。唐糸を鞫問し。一味の徒を穿鑿するに。彼明白にいはずといへども。爲久ぬしにお疑ひ係り。俄頃に討手の兵を向らるべしとて。營中殆騷動す。もし虛々と家に在さば。殃忽地その身に及んで。白刃の首にのぞむとき。臍を噬ともそのかひあらじ。おのれそのむかし。爲久主に。人知れず庇衆の恩惠を禀たるものなれば。その恩を報ばやとて。告進らするにこそ。といひ果て飛がごとくに走去りけり。蔭重はこれを聞て。大に驚き。直に主のほとりに參りて。彼男がいひつる一五一十を告にければ。爲久聞もあへず。呆れ惑ひてせんすべをしらず。且していふやう。唐糸われに志をよするおもゝちせしは。復讐の爲にてありけるよ。しからば彼老女。鄕に汝が兄。藤二光澄を引入れて。義高を擊したるも故あるべし。おもふに光澄が擊とつたるは。眞の義高にはあらざる歟。とまれかくまれ。われ唐糸を從弟女なりといひこしらへ。營中へ進らせたれば。彼に連累さるゝとも。罪いひとくに言語なく。脫るゝに道なし。悔しきかな。われ慮淺くして。這奴に賣られたり。そもこの事を告ぬる男。むかし人しれず。恩を禀たり。といひつるも。絕て思ひあはする事なし。彼も是も。不審き事のみなれど。手を束ねて死地につかんは。いよ〳〵世の胡慮なるべし。さらば遠き縣などへ。脫れ去り。時をまちて身の悞をまうし賠なん。しかれども從者夥將て走らば。道果敢ゆかずして。便なき所爲なり。この事沙汰すべからず。と密語て。とるものも拿あへず。主從只二人。馬にうち跨て。後門より走り出。鞭を鳴らし。足騷を跳らし。貌姑峰路を望て脫去りつ。かくすとすれど門卒等。既に緣由をしりてけるに。只今爲久が。堀江藤五只ひとり將て。慌しく走り出るを見て。されば之そとて。彼に告これに聞えしらし。只上を下へと騷動す。原來侯奸邪智なる爲久が下風にたつものどもなれば。主の先途を見とゞけんともせず。主のものわが物。すべて貯蓄たる金銀衣服。おの〳〵手に當るを幸に分配し。夜に紛れて遂

電し。みな散落になりにけり。さる程に爲久主從は。投て往方を定めねど。只顧に馬を走らし。貌姑峯路にわけ入るに。あまりにいたく馳たれば。馬をば乘斃しつ。主從步行より湖水の畔まで來にけり。頃しも十五夜の月。山の挾に傾きて。曉がた近くなる程に。芒花女郎花の風に戰ぐも。跡より追るゝ心持して。立休らふべくもあらねど。いたく疲勞たれば。地藏堂の前面なる。松の株に尻をかけ。主從面をあはしつゝ。忙然たる折しもあれ。天とぶ雁の音。草葉に聚く蟲の聲までも。わが身の秋と慰かね。爲久嘆息していふやう。いぬる元曆のはじめには。近江なる湖水のほとりにて。義仲を射て落し。こよなき功名をあらはしたるには似ず。いひがひなくも貌姑峯なる。湖水の畔に脫れ來て。投てゆくべき方も定めず。人の世のたゞずまひ。かくまでも墓なきや。と身の惡報は思もかけず。世を慍り。人を怨て呟くにぞ。蔭重も今さらのやうにおぼえしが。心よわくては。と思ひかへし。主を諫ていへりけるは。あな。殿には。などて日頃には劣りて。女々しき事聞え給ふ。さしも平家の大敵を追ひ落して。洛に足をためさせず。その威勢。旭のさし昇るに譬ひられたる。木曾義仲を謀課して。輙討とり給ひぬるものを。よしや唐糸に連係せられて。鎌倉殿に疑れ給ふとも。しばしこれを避。便宜を得て緯の本末を聞えあげ給はゞ。いかでか思ひかへし給はざらん。と信だちていひ勵せば。爲久聞て又いふやう。しかりといへども。われ俄頃に夥の路を走らしたれば。馬も斃れ。自も又飢勞れて。この山踰がたし。今にもあれ追手かゝらば。いかにして禦ぐべき。汝謀あらば。とくしらせよかしといふに。蔭重も何となく。わが跡見られて物凄しく。しばし默然としてありけるが。忽地道次なる。地藏堂を指していふやう。こゝは名にしおふ塞の河原とて。のぼりくだりの旅客も。この地藏井へはかならず詣るとぞ。しからば些の供物なき事は候はじ。おなじくは彼所の堂内に憩ひ給へ。曉ゆくとも人にしられずして。主從が餓を凌ぐに便あり。誘給へと袖を引けば。爲久やうやくに氣色をよくし。げに地獄にも佛はありけり。さらば彼處に憩ふべし。と云ひかけて。やをら立あがる折しも。誰とはしらず。地藏堂の内より。打出す銑銀に。前にすゝみし蔭重が吭ぐさとつ

らぬかれ。鋒白く項へ出て。濆る鮮血とともに。一聲高く叫びもあへず。仰さまに撲地と仆れて。忽地息は絶てけり。爲久これを見て大に驚き。こはいかに。と周章し。身を轉して。松の後に躲んとするところを。ふたゝび打懸る銑鋺に。石田は右の手首を。松の幹へ縫つけられ。雄手をあげつゝ。引拔んとて身を悶搔くを。拔しも果ず。又うち出す。双は電光石火のごとく。左の腕もあげたる儘に傍の松に縫留たり。かゝりしかば爲久は。洛の山にともすといふ。大文字の火のごとく。又斷紙鳶の梢にかゝりたるごとく。手をひらき足を踏鳴らし。われを放せ。われを放せ。と叫ぶのみ。絶てせんすべなかりけり。時に地藏堂の扉を。内よりさと押開き。武士の浪人めきたる壯佼。身には黑き單衣の涅のごとくなるを。裾短に被て。腰に朱鞘の兩刀を十文字に跨へ。手に一盞の編笠を引提て。徐やかに歩み出。爲久を佶とにらまへて云ふやう。覬覦の盜臣。三寸の舌は劒より鋭く。人を殺して榮利を謀りし。天罰おもひしりつらん。われは是朝日將軍木曾義仲の嫡男。美妙水冠者義高なり。わが父遠き慮あるによつて。この身は總角のころより。假に唐糸が一子大太郎と僞り稱へ。又眞の大太郎は。義高と呼れて鎌倉へ赴き。入間川の上にて。汝が家隷堀江藤二とやらんに擊れ。唐糸又行氏棧橋を毒殺して。貳なき志を示し。遂に堀江藤二を欺て。汝を說破し。鎌倉に給事して。頼朝を狙擊んと約せしかば。われは諸國を徧歷して。舊好の勇士をかたらひ。義兵を起さんとするの外。更に他事なし。しかるに去ぬる年。頼豪阿闍梨の靈。教諭して。三年が間は。鎌倉に立も。入べからずと示されしが。今年やうやくに。その期の果たれば。近曾鎌倉を徘徊し。密に唐糸と計をあはして。既に事を起さんとする折しも。途に重忠に怪られて。いたづらに默止せし程に。絆忽地に齟齬し。今宵唐糸は生拘られたる事は。われ幻術をもて。はやくこれを曉得つ。よりて汝も又頼朝に疑れ。唐糸と共に。罪せられなば。いよ〳〵遺恨なり。こゝをもて。甲夜に汝が門戸を敲き。むかし人しれず。再生の恩を禀たるものなり。と僞りて急を告。この所へ誘引よしたるは。みなこれわがなせしなり。曩にわが父。不意朝敵となり給ひ。あはれ眞律の恥辱にて。汝に擊れ給ひぬる。恨は一言に蔽し

がたし。おもひしれ。天の彰々たる事。曩らざる鏡のごとし。笑の世に双を隱し。頼朝が間者となりて。わが父を陷れたる惡報にて。今かゝるせめにあふみなる。湖水をこゝに湖の。汀に曙す死羞は。汝に出て汝に返る。主從が身のなる果。今義高が義兵を起す。軍神の血祭は。これにます犧牲なし。あなこゝちよし。と罵り迫りて。刀を閃りと引拔ば。爲久ます〳〵身を悶搔き。穢きかな美妙水冠者。義仲の滅亡は。武威に誇て一天の君をおそれず。その暴逆平家にも超たればなり。さるを爲久をもて。仇なりと罵るはいかにぞや。縱恨あるにもせよ。などて名告かけて勝負は決せず。双を飛して腕を折かし。進退自由ならざるを擊んと謀るは。勇士のせざる所なり。といはせも果ず。義高呵々と冷笑ひ。犬自ものゝ爲久を擊に。なでう武道を用ふべき。よしや一旦の謀にもあれ。汝はる〳〵と信濃に來たりて臣附し。わが父亦寵用して。恩惠日に厚かりしに。情なくも。遠矢にかけて射て落したるは。是勇士のする所歟。頼朝汝を賞美して。おもく用ひざるぞうべなる。しかるをわれを穢しといふ。汝が清しとするはなぞや。と責問に。爲久ふたゝび應せず。頭を低て聞ざるがごとし。その時義高。勃然として大に怒り。双をうちふりて。爲久が眼上へ。いくたびか閃かし。まづ左の足を打落して。しばし苦痛をさし。又右の足を刖落せば。鮮血滾々としたゝりて。二匹の紅絹を引に似たり。義高はこれを見て。さもこそ。とうち咲つゝ。腰の番を又一太刀。ばらりずんと切放せば。腸ながく地に引て。章魚乾わたす磯家の簷。或は時ならぬ山藤の。松にかゝるに彷彿たり。かくて義高は。爲久が左右の腕をうち放すに。軀は地上に撞と落。手首はなほ松にのこりて。奇しき茸を見るが如し。かくて三段四段に切はなち。さてその首をうち落して。地藏堂のほとりに引提來つ。これを搔居て。膝を折掌を合し。今月今日。奸賊爲久主從を誅戮して。亡父尊靈に手向奉る。當の敵頼朝も。遠からずして復かくのごとくなるべし。尊靈速に納受して。天堂に生じ給はん事こそ願はしけれ。南無阿彌陀佛。と唱れば。怪しきかな。男女の聲して。もろともに念佛す。その聲耳のほとりにあり。義高ふかく訝て。左右を佶と見かへれば。曩に入間川にて。忠義の爲に命を隕せし。宇野小太郎行氏

と。その妻桟橋なりしかば。義高いよゝこれを怪しみ。且哀悼に堪ずしていふやう。汝等は若草の。結びもはてずも ろともに。その根には歸れども。忠節比なきをもて。西方極樂の無熱池なる。並頭の蓮花臺にあらんづらん。とおも ひぬるに。なほ三熱の苦惱を禀。妄執の雲に誘引れて。迷てこゝに出たるよ。汝等はいふもさらなり。唐糸が餙忠 も。志を舒るに及ばず。事發覺て。擒になりたるを歎き。今幻にあらはれし歟。將聞えしらずる事やある。と問に。 行氏棧橋蹲踞して。潸然と落涙し。且してまうすやう。賢察のごとく。臣等が横死は。原忠義の爲なれば。絶て泥犁 邪の呵責を受ず。今倖に忉利天宮にありて。六道能化の教主。大悲深極。地藏尊の濟度利益によつて。靈を貌姑峯 にかよはして。加持羅伽山の靜さをおもひ。神を塞河原に遊ばして。恒河沙可度の群集を伴へり。されば六環金錫の 響を聞ては。松吹風も羨まず。一顆の摩尼の光に愛ては。汀渚の石も屑ならず。只臣等が忠魂は。ながく君のおん衞 たらん事を思ふのみ。皆是地藏大芥の引接化導によつて。こゝに偶々見え奉る事を得たり。しかるに唐糸は。その心 ざま雄々しく。その謀拙なきにあらざめれど。頼朝卿の時運高大にして。事成らざるをいかにせん。わが君目今。 石田太郎主從を擊給ひぬれば。復讐の本意遂給へるに。なほ頼朝卿をも打滅し。おん父義仲朝臣の志を繼んとし給ふ は。究めてよろしからず。速に思ひとまり給はずば。却彼人に辱しめられ給ひなん。今は是までなり。はやく山林に 隱居して。先君の菩提を弔ひ。後世のいとなみこそあらまほしけれ。と夫婦ひとしく諫けり。義高つく〳〵と聞て頭 をうち掉。汝等がいふ所。ことわりあるに似たれども。勝敗は時運にあり。はじめより事の成らざるをおしはかりて。 仇を擊の志を轉さんは。子たるものゝ道かは。田横に孤島に沒し。豫讓は戰衣を刺す。勇士のする所。かくぞあるべ き。もし事成らずば。われ死なん。復讐の事は思ひとゞまりがたし。汝等ふたゝび諫言なせそ。といきまきて。承引氣 色なかりしかば。行氏又まうすやう。君の御心にしては。さ宜はするも理なれど。爲久こそ憎みてもなほ憎べきの仇 なれ。鎌倉殿は。平家の惡逆を討て霞燃を隱め。勅命を禀て先君を追討し給へるものを。これさへ仇として。狙擊んと

と計り給はゞ。反逆の罪脫れがたけん。加旃頼朝卿は。武運めでたくおはする事。いにしへにも例を聞かず。日本國 の總追捕使を給はりて。宇宙を掌握し。事みなおもうに任せざるはなし。伯夷叔齊が清潔にならひ。餓て首陽の山に死 すとも。彼を擊んは天に逆ふならずや。いにしへにも。天に順へば生。天に逆へば亡といへり。努思ひ止まり給ひか し。といはせもあへず。義高忽地に氣色變り。やをれ行氏。汝頼朝の時運を稱す。平家富士沼の水鳥に驚き て。不覺の譏を得たりしも。實盛が口のさかしきより起て。自方の英氣を折きたればなり。不吉の諫言聞も忌はし。 と焦燥て。つと身を起し砂を蹶たて。原の山路に歸らんとするを。行氏棧橋忙しく。左右の袂に携着。なほ諫んと したりしかば。義高怒て袖引はらひ。刀を拔て丁と砍れば。今までありつる夫婦が形。煙のごとく滅えうせて。湖水の かたに鴛鴦の。とも音遙に聞えつゝ。天はほの〳〵と明わたり山の挾しろくなりにけり。

第十三套

竹川因幡介正忠は。いぬる壽永二年の秋。主君猫間光隆卿。木曾義仲に面叱せられ。憤に堪ずして自殺し給ひ。 その家忽地に滅亡せし程に。光隆の舍弟新太郎光實は。木曾を狙擊んとて。洛を潛出。家隷等はおのがさま〳〵に離 散しつれども。正忠ひとり托孤の精忠を竭すに。その妻葎戸。又夫に劣ぬものなれば。夫婦かひ〳〵しく。光隆の後 室八重垣の方と。幼君鈴稚丸のおん共して。嵯峨の片ほとりなる。大堰のわたりに赴き。こゝにさゝやかなる草舍を造 かけて。しばし身の置どころとして。艱苦の中に。はや三年あまりを經て。貯祿物も既に竭たり。加旃正忠に老母 ありて。年の齡七十にあまり。目は盲て耳も聰らず。立居さへ自在ならぬに。一子千江松なほいはけなければ。是彼 手足まつはりにて。よろづ便なきことのみなれば。夫婦が忠孝尋常に過たれば。いよ〳〵志を移すことなく。君に事。 親に事へて。身の貧しきを憂とせず。しかるに八重垣の方は。年頃積るもの思ひに。いといたう身も細り。光實は出

正忠孤忠幼主に仕ふ
葎戸心烈乳汁を賣る

給ひしより。絶て一とたびも信なかりしかば。是につけ彼につけて。心ぼそさもいやましつ。牡鹿鳴く嵯峨野の秋と詠じけん。うら悲しさを身ひとつにして。長き病蓐に臥し給ひしが。病日にまして。首のあがるべうもあらず。醫師も眉根をよして。おこたり果なん事。おぼつかなし。と密語にぞ。正忠葎戸は。いよ〻安き心なく。數もあらぬ夫婦が衣服。太刀髪の飾なんど。調度に至るまで。沽却して藥を調ひ。眞珠。熊膽。人參。すべて價貴きを厭ず。療治等閑ならずものせしが。頃しも十月の下旬なれば。旦開の風も寒けきに。物みな售竭してせんすべなし。只此うへは。神佛の冥助を禱る外あるべからずとて。夫婦迭代に。清涼寺の釋迦堂。清水寺の觀世音に參詣し。八重垣の方の疾病。平癒なさし給へ。と禱る外。他念なかりけり。しかるに。鈴稚は。僅四歳にておはすれば。いまだ乳房を放れ給はぬから。母うへは久しく病體。近曾乳汁といふものは。露ばかりも出ざるに。なほ緣りて懷を放れ給はず。是さへ病人の胸くるしくおほさめとて。葎戸はさま〳〵に。鈴稚をいひ慰め。嫌しこしらへ搔とりて。外面へ走り出るに。いたくむつかりて。いよ〻母君のほとりを放れ給はざれども。なほいかにもして。おのが乳汁を進らせんとするに。生ものじりて。口のほとりへもよせさし給はざりしかば。正忠も葎戸も。この形勢にせんすべなく。かゝりせばはじめより。葎戸が乳をもて養育奉るべかりしに。母君の手して育給はゞ。慰よすがなりなん。と八重垣の方の宣はせしも。今に至りては化となりて。俄頃に引はなち奉りがたし。もし乳ばなれにて。稚君さへ。病もわづらひ給ひなば。いかに悲しかりなん。と思へばいとゞもしほ草。ほしもあへぬは涙なる。正忠が一子千江松も。鈴稚と同庚にて。いまだ母の懷をはなれず。貧しき家に主從の差別もなく住ひすれば。よろずに心おきのみせられて。晝は終日。夜は通宵。葎戸が信やかに看病し進らするを。八重垣の方はしば〳〵推辭て。わが病蓐はきのふけふの事にしもあらず。果しなき介抱を。あまり信々しくものせられては。却てこゝろ苦し且正忠が母刀自は。目も盲立居も自在ならぬを。われ故に等閑ならんはこゝろにず。只わらはが事はうち捨ておけかし。と宣はするに。刀自は心ざす正しき輩なれば。かゝるとき物の用に

もたゝぬ身の懋に長生して。子にも嫁にも一層の艱苦をまさする事よとて。葎戸に介抱せらるゝを厭ひ。をり〳〵夫婦のものにいふやう。人の子として。親に不幸ならじと思ふは。さる事なれども。譜代重恩の主君。かく寞々しくなり給ひて。危急存亡の秋に當りては。親をしも省みすべからず。われは老くだちて。餘命いく程もあらぬ身なり。只後室のおん病蓐。又稚君のおんゆく末。いかにおはすらんと思ひやれば。御身夫婦が心の中さへ推量られて。一日もはやく往生せまほしきぞかし。かくまでもなほ母を勦らんとて。給事を疎にいたさば。速に縊死して。後やすくせんものを。と教訓す正忠葎戸これを聞て。なでうわが母の故をもて。主君を等閑にいたすべき。かくまでに思ひ給はば。何事も御心の隨にてあるべし。かならずしもよからぬことをして。正忠等を不孝の子とないはし給ひそ。と應しかば。刀自は歡びて。とにかく夫婦が手助せんとて。搔探りつゝ曲突にふし柴折くべて。飯を炊。藥を煎じ。或は孫の千江松が守などして。傍痛き事のみなれど。これをとゞめなば。又その心に悖らんかと。明白にはいひがたく。世とて時とて形なや。ひとりの親に孝養を。盡すにも盡されぬ。貧しき家には人しらぬ。物思ひのみおほかり。と夫婦面をあはしつゝ嘆息し。こゝろで泣て日を送るに。八重垣の方は日に日に病おもくなりて。頼すくなく見え給ふに。この二三日は。藥の價も竭にければ。正忠夫婦は。いよ〻思ひ屈りて。潛にこの事をうち議ふに。葎戸がいふやう。人の壽命に限りありとも。湯藥をも進せず。見殺しにしたてまつらんは。遺恨ならめ。わが身今。五ツも六ツもわかゝりせば。花街に身を賣ても。些の金は調ふべきに。捨る操のそれよりも。よるとし浪こそ悲しけれ。よき思案はおはさずや。と膝さしよして問にければ。正忠聞て頭を傾け。健男のいと猛きも。智あるものゝ才學にも。及びがたきは只金なり。さればとて。御身を。宿遊女などにせば。われはとまれかくまれ。主君の恥なり。かゝる事はいひも出給ふな。寔に夫婦が孤忠をば。神も佛も憐み給はざるにやあらん。欲に惑はぬ身にも今。ほしきは瑤錢樹なり。と思ひ逼りて日來には。似げなき愚癡もあはれなり。葎戸も又目を押拭ひ。とばかりにては果しも侍らず。つく〴〵思ひ

めぐらすに。わが身幸に乳汁の出るに。お乳嬭母に身を賣らば。川竹の瀬にたつほどにあらずとも。手を空しくして居らんにはますべきなり。さはおぼさずやといへば。正忠聞もあへずうち點頭。よくぞこゝろのつき給ひし。鈴稚君は生ものしりて。そなたの乳汁を飲給はず。千江松も。はや四歳なれば。飯粒にて養育ば養育なん。そなたこゝにあらずなりては。いよゝ便なかるべけれど。今の難義には思ひかへがたし。法隆寺の門前に。兎口婆々とて遣嫁給事なんどの媒妁して。生活とするものありとぞ。われ彼所にゆきて相議ふべし。しかりともこのことを。八重垣の方にしらし奉りては。病着の障ともなり。又わが母も。いとゞ懶くぞおぼすべき。期に臨てはも角もいひこしらへなん。まづこのことは。意中に秘給へ。と密語ば。葹戸そのこゝろを得て。しのび〳〵に示しあはし。さて正忠は。兎口婆々が家に到りて。件の事を談合するに。兎口婆々これを聞て。わが方にも些の心あてあれば。遠からず回答し侍らんといふに。頼もしく思ひて歸りつ。その次の日は。八重垣の方の病着。すこしおこたり給ふやうにて。この四五日。いかに勸ても。箸だにとり給はざりしに。今朝は半盞の粥を啜り給ふから。葹戸等は。枯槁の雨にあふ心持して。欽ぶこと限なく。正忠は清水寺の觀音に詣て。このよろこびをまうし。そのかへさに兎口婆々が家を訪ふて。昨日の回答を聞んとて立出ぬ。かくて葹戸は。八重垣の方の枕方にありて。肩腰を擦りまゐらせ。江湖上の物がたりして慰まうすに。千江松が外面にて。いたく泣聲したりしかば。八重垣の方首を擡て。やよ葹戸。千江松がいたくむつかるに。とくゆきて乳を飲せかし。としば〳〵宣まふに。うちもおきがたくて走りゆき。やがてわが子を竹椽に引揚つゝ。膝に掻乘して乳房を銜すれば。小春の晷さし入れて。彌生のころよりも暖なれば。千江松は乳を吸ながら目睡つ。と見れば由緒ある武士の内室。清涼寺詣すとおぼしくて。行轎の戸を細やかに開かし。從者夥將て。渡月橋をねりゆくにぞ。葹戸遥に見送りて。世にある人の物詣は。かくこそありけれ。わが主八重垣のおん方も。昔のさまにて在さば。やはり給はじものを。難波へ下人の世の。蕚は春の花よりも。なはかなしと。綴りこち。亦來しかたを思ひ

出る。折しもあれ兎口婆々忙しく走り來て。葹戸にいうやう。お乳の人に出給ふは御身なる歟。きのふ主人のたのみ聞え給ひしに。幸よろしき方のおはしまして。頓に召養んと宣ふかし。こは東にて横勢ある殿なるが。近曾京上りし給ひつるに。この曉は。鎌倉へと歸りたまふ。よりて東へ將て下らんとなり。いよゝ行んとならば。目今伴ひ侍るべし。といふ葹戸これを聞て。先千江松を障子の内に抱き入れて。そと枕をさし。舊の椽頰に出て兎口婆々に對ひ。給事の事は。豫て思ひ定て侍れば。時しも嫌はねど。折ふし夫は東山へゆきて。いまだ歸り來ず。しばしまたし給はば。身の暇をまうして。去り侍りなん。といふを。婆々聞もあへず。いな。さる緩やかなる事にはあらず。御身も見給ひつらん。目今清涼寺へ詣給ひし夫人は。すなはち乳母を養んと宜ふぬしなり。轎の内より御身を見そなはして。乳の間も廣からぬに。年紀もよし。購得て伴ひ來よとて。家臣何がしどのに仰せしかば。かく案内し進らするにな。しかればしばしも猶豫しがたし。直に談合し給ひね。といひかけて。外面を見かへりつゝさし招ぐに。忽地行裝したる武士。年齢は四十ばかりなるが。從者二人將てすゝみ入り。葹戸にいふやう。故ありて今主君の名はしらしがたけれど。兎口とやらんがいふごとく。此度鎌倉へ將て下り給ふなれば。いと火急の事なり。いよ〳〵參らば。身價は十金と定めて。金は殘りなく遞與すべし何事も心忙しき折なれば。手形は後日に。人をもて受とらするとも。そは遲きにあらず。とく〳〵參り候へ。と聞えしらし。軈て懐中より。小判十兩をとり出て。椽頰におきならべしかば。霜に後るゝ菊の花の。一輪開るに異ならず。葹戸はこれを見て思ふやう。この事はか一ねてより。夫も覺期のうへなれど。常にかはりて歸りの遲さよ。さればとて待んとせば。この談合はとゝのひがたし。寔にこの十枚の金は。八重垣の方の齡を延る。仙境の菊花水。不死の神藥なるものを。夫婦親子の愛惜も。忠義にますことやはある。とよはるこゝろゝを鬼にして。彼人にいへりけるは。目今もまうせしごとく。夫は家に侍らねど。かくいそがして。身價を給はするに。推辭侍るべうもあらず。家には久く病人ありて。その藥の價にとて。わが身を賣侍るかし。それさへ悲しきに。

姑はいといたう老髏。わが子はなほ稚くて。緣由を聞えおかんも便なし。今にもあれ夫が歸り來て。かくとする心やりまでに。一筆遣し侍る間は。許し給へかし。といふに。彼人黠頭て。それ程のことは何か厭ん。用意あれ。とゆるされて。萑戸は忙しく。彼金をとつて障子の內に走り入り。力なき手に摺流す。硯の墨も煩夫も。うすき緣しとうち歎き。涙ににじむ紙屋紙の。かひなきことを繰かへし。筆にいはする暇ごひ。姑のこと。わが子のこと。書遣すさへ悲しさの。塞る胸と共に裂。小刀ならぬ筆の鞘。よしあししらぬ稚兒の寢貌もこれが見をさめか。と思へば斷に剪かぬる。書簡卷こめて封皮して。今朝食殘す白粥も。今この糊とならんとは。思ひかけねどその人の。思ひかけよと貼ておく。出居の柱はゆがみても。直きこゝろは神ぞしる。千江松が腰に着たる。守袋をそと開て。件んの金を押入れつゝ。只一重なる附紐に。しがらみつくる恩愛の。口にえいはぬ生別れ。屏風かい遣りさし覗ば。八重垣の方は鈴稚丸を。抱寢してすや〳〵と。睡り給ひし面影の。たのみすくなきを見ればなほ。涙ははふり落れども。泣じと袖を嚙締て。屏風引よし走り退き。窓の横日に脊を曝らす。姑のほとり近うゆきて。その耳に口をさし寄し。母御よ。何事かはしらず。正忠どのにあはんとて。人の詣來給ひたるに。歸りの遲きも心もとなし。わらはゝ山田村のほとりまでいゆきて。歸り給ふを見ば。いそがして伴ひ來侍りなん。家の內なりとて心を緩し。斷離たる席薦の緣に足をからまれて地炕へ轉び入給ふな。八重垣の方も。稚君も。よく睡りて坐するに。千江松さへ假寢して侍るなれば。この間にこそ。と思ひ侍り。といひしらすれば。刀自點頭て。わが事は思ひ過し給ふな。正忠にあはんとて。人の來ませしとは。こゝろもとなき事にはあらぬ歟。あなわが子は何してをるぞ。朝夕の薪炊はさらなり。お主の看病。孫が介抱。走り使も嫁ひとり。ならはぬ手技に熟るゝ身の。嬾しとせぬ心操が。痛しさよと見かへれど。見ることかたき盲目のこれを別れとしらざれば。いとゞ苦しき萑戸が。あけていはれぬ離別。只健にいつまでも。夫の孝養うけ給へ。しばしなりとも物思ひをさしまゐらせじとていひこしらへ。歎きまうす不孝の罪。免し給へ。と合す掌に。神ならぬ身の

餘念なく。刀自が爪繰珠數よりも。嫁は涙の玉ぞます。かくて萑戸は。外面へ立出て。彼武士に對ひ。さこそ待わび給ひけめ。誘給へといふに彼人は。准備の轎を。折戸の內へ扛入さし。是へと指揮に萑戸は。憚あれど見苦しき。わがざまかくせと宣ふを。推辭まうすは心つきなし。許し給へ。といひかけて。乘移る後先より。はや擡出す下部が息杖。胖響に千江松は。忽地に目を覺し。稚こゝろにも不審ければ。慌忙走り來つ。母御いづ地へゆき給ふ。わが身を伴ひ給へかし。といふもまはらぬ舌ながら。走りめぐりて母親の袖に携りてよゝと泣。兎口婆々さし寄りてかゝることもあらんかとて。今來る途にて拾ふて來たり。是進らせん大人しう。留守し給へと賺しこしらへ。袂より出す落栗を。さゝやかなる手に受て。莞爾と咲めるわが子の顏を。見る萑戸は笑栗の毛毬もて胸を刺るゝごとく。涙見せじと引おろす。籠もかごの鳥が啼。東へとてゆく首途とも。しらで見送る稚兒を。迹にのこんの雪と見し。花はむかしの嵐山に。思ひあはする桓山の。四鳥の別かくやとて。翅しをれて扛れゆく。後の歎きはいかならん。推量られて哀なり。

評に云。石田爲久奸智を廻らし。義仲を欺きて臣附せし以來。よりその恩賴朝に勝れること遠し。しかるを射てこれを殺す。その謀甚穢し。こゝをもて惡報遂に脫れず。亦義高に欺れて。貌姑峰山中に元を授たり。見つべし。作者。二ツの湖水を以。人心の清濁と。因果の淺深を示す事。頗奇なり。亦云。正忠。萑戸が誠忠は。更に愚が評をまたずして。懲惡勸善の素意顯然。且鈴稚半熟て。萑戸が乳を飲ず。倘しからずば。正忠その寞を沽らんや。

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之六後編上冊　終

賴豪阿闍梨恠鼠傳 巻之七〔後編中册〕

第十四套

金を喪ふて瞽女老を泣く
玉を瘞て窮士起行す

悲しきかな。四歳の稚兒。哀別と離苦とを曉得らず。扨ても正忠が一子千江松は。纔なる落栗もて。兎口婆々に賺され歸るときしも定かならぬ。母親を放やりて。彼栗を只管に。愛たきものに思ひしかば。これをもて行て祖母さまに見せばやとひとりごち。忙しく折戸の内に。走り入らんとしたりしが。悞て門方なる。溝の中に輾び入り。半身漬淖になりて。よゝと泣つゝ跂出んとするに。水は深からねど。踏こみたる足を拔得ず。いとゞすべなかりける折しも。麥蒔果て立かへる農夫等。この形勢を見て。慌忙き。走り寄りて千江松を引あげ。左右の腋へ手をさし入れ。引提て竹椽のほとりに將てゆき。母御よ。とく出給へ。この兒は。只今溝中に輾び墮たるを扶あげたり。やよ〳〵と呼ぶ程に。刀自聞てうち驚き。おいと應でやうやくに身を起し。柱にとりつき障子に傳ひ。頓にはたち出かねるを。農夫等は待わびて。千江松を椽頰に扛すゑ。呼ずてゝ皆歸りけり。そのとき刀自は探出て。千江松がなほすゝりあげて。泣をしるべに搔探よすれば。腰のあたりは。すべて泥に塗れ。その臭きこといふべうもあらず。刀自はこの景迹に呆れ果て。まづさま〴〵に勦り慰め。さていふやう。日來はひとり遊ぬに。折あしくて母は家にしもあらず。よしなや漫行してこの悞はいたせしならん。かく裳の濡たれば。さぞな冷たうあるべきが。被更もなきをいかにせん。今にもあれ。母が歸り來てこれを見れば。いたく腹たてゝ。うちも懲しもせでやおくべき。かさねてはこゝろして。溝のほとりなどへは。立なよりぞ。とはいへ草履も紐つけて。穿するものを只ひとり遊ばするはみな親の。心つきなき所爲にして。

そなたに理無事はあらず。よしやわが眼は見えずとも。彼所の川原へもて出て。せめて糞の泥のみは。洗ひおとして得させんに。しばしこれを被よかし。とおのが紙衣を脫捨て。後むかして解著紐に。結び提たる稚兒の。守袋は葎戸が。遺せし金のあるべしとは。しら檻の杖探り取り。紙衣をやがて打被せつゝ。泥水霤るを引提る。三ツ身の衣の汚目も。孫にめのなき恩愛の。いと深けれど豫て聞く。淺瀨のかたへ歩み寄れば。流るゝ水も大堰川。音さへいとゞおそろしき。鬼ならなくに婦の留守。いとも危き洗濯の。老の拳の力なく。揮浣衣をあら川の。浪のまに〳〵卷とられ。こは何とせんと周章し。忙しく杖をもて。其所か是所かと搔撈れど。委なき瀨に押流され。かへらぬ衣も後悔に。思ひくしたる顏の色は。流るゝ水よりなほ青く。かゝりせば葎戸が。歸り來るまで待べきものを。只その人の手助せん。とおもひしよりこの悞して。缺代もなき給のあはれ孫には今宵より。何を被すべきうたてや。とひとり言して忙然たり。かくてあるべきにあらざれば。刀自は徒に杖に携りて。舊の椽頰に這のぼるを。千江松は待わびて。祖母さまよ。衣を洗ふて給はれかし。とく被せ給へといそがせば。刀自はいとゞ面目なく。さればとよ。よしなき所爲とて。そなたの衣は川の瀨に。押流されて往方しれず。爺も姆も歸りなば。いひ譯もなか〳〵に。汚れたる隨にておかば。ともかくもして葎戸が。被すべかりしを懋に。角を砍て牛を殺し枝を縶て樹を枯らす。みな是祖母が悞なり。と賠話をも聽ず蹉跎し。などて衣をもて來給はぬ。寒し〳〵。と聲ふり立て。叫るゝ刀自は胸くるしく。さぞ寒からん堪忍せよ。風ひかせじと搔よせて。懷あけて抱き入るゝ。折しもあれ竹川因幡介正忠は。淸水寺のかへさ。兎口婆々を訪ふに。彼家にあらざれば。なほ彼方を索るとて。思ひの外に時をうつし。やゝわが家に歸り來つ。と見れば葎戸は居らずして。母刀自只ひとり。端ちかう出て。赤裸なる千江松を。かき懷たるも訝しければ。やがて其ほとりに參りて。正忠只今歸りて候。八重垣の方はいかに坐すらん。今朝にかはらせ給ふ事もなくおはしますにや。葎戸はいづ地へゆき候らひし。千江松はなどて大人しう留守をいたさず。立居も意にまかし給はぬ。祖母さまに抱れたる。あまり甘やか

し給ふから。いつまでも手をはなれず。去年には劣り候。といと苦々しげにいへば。刀自聞て。いな。孫を叱り給ふな。これが抱るゝには物がたりあり。八重垣の方は。そなたが出給ひし後。鈴稚君を抱寢し給ひて。なほ覺給はず。嚮に誰にかありけん。正忠にあはんとて來ませしかば。萑戸は山内村の邊まで行て。そなたの歸るやいなやを見んとて。走り出しが今に歸らず。千江松は母の迹を追たるに歟。門方なる溝に輾び入りて。泥に塗れたるを。近隣人の來かゝりて。やがて引あげて給はりつれど。只一ツなれば。給の穢れたるを。被せておかんが痛しさに。前なる河原にて。洗ひ清めばやと思ひて。もて出は出たれど。忽地水に卷とられ。悔て詮なき悞を。聞えしらするも面ぶせなり。日來そなたも萑戸も。孝行にして給はるから。起居にさへこゝろをつけて。何事もすなといひ給へど。せめて些の手助に。成なんものと辛じて。人なみならぬ老が身の。たま〳〵事も毛を吹て。疵を求し鈍ましさよ。と只顧羞たる物がたりを。正忠は聞もあへず。うち驚き。千江松が給は失ひ給ふとも惜むに足らず。もし御身悞て。川へ輾び墮玉はゞ。千悔すとも及がたし。この後はみづから誡て。川原などへ出給ふべからず。かく危きに近づき給ひて。恙なきは正忠等が僥倖なり。絆の起は目も見え給はぬ母と孩兒に家を戍らせたる。萑戸が不覺より出て。母の悞は露ばかりもなし。さるにても八重垣の方の。久しく覺給はざるぞ心もとなき。鈴稚君もゝろともに。熟睡してやおはする。といひつゝ立て奥在たる。屏風搔遣りさし視けば。無慙やな八重垣の方は。いつの程にか絆切れたり。ともしらずして鈴稚は。冷たき乳房にとりつきつゝ。正忠を見て莞やかに。うち咲給ふも淺ましく。こは〳〵いかに。と驚き瞭。涙を拭ひあへなくも。死たる人を抱起し。聲を限に呼び活つゝ。藥を口にさしいるれど。はや程經ぬれば驗も見えず。刀自は今正忠が。たゞならぬ呼び聲に。慌しく千江松を。懷よりかきおろして。屏風の内に探り入り。かくと聞より腰たゝず。空しき枕にとりつきて。よゝと泣ば千江松も。祖母さま寒し冷し。と赤裸にて走り來つ。友音あはする鈴稚は。何事とも思ひわきまへねど。主從親子もろともに。われから濡るゝ袖の雨。晴間はたえてなふりけり。げ

にやつひにゆく。路とは豫てしりながら。きのふけふとはしらざりし。正忠が哀悼は。比ていはんやうもなく。苦しき胸をうつ蟬の。もぬけの骸のいつしかに。變り果にき母君の。懷慕ふ鈴稚を。引退ればなほ泣聲も。たかき卑きおしなべて。母子一世の別路は。とゞむるよしもあらざりき。刀自はいよゝ泣沈み。せめてわが眼の見ゆるならば。末期の水も進らせて。唱名すゝめまうさんに。睡り給ひぬ。と思ふなら。浮世の夢の覺給ふも。見えず聞えず人はかく。老ては存命かひもなし。老少不定といひながら。老樹の刀自は朽もせで。若樹の花をこゝろなく。散らす無常の嵐山。歌によみ詩に作るとも。わがこの歎は述もつくさじ。況て身まかり給ふ君の。息の内なる一言も。遺し給はねばいとどなほ。朽をしくこそおぼすらめ。縱命に限りありとも。などてわが身をかはらして。迎とりては給はらざる。朝な夕なに繰る珠數も。おもふに任せぬ玉の緒は。さてもつれなき世の中に。神も佛もなき事か。と老のくり言くりかへす。片輪車のよるべなき。母の歎きを慰めかねて。正忠は溯うちかみ。今朝のみは八重垣の方の。おん顔の色もよくて。粥などすゝめ進ずれば。こゝろよく受給ひしを。今さらおもへば。燈の。消なんとするときに。しばし光をますといふ。常言もあるものを。こゝろもつかで淸水へ。詣たるさへ悔しきに。萑戸がわれを呼ぶとて。漫に出て歸らぬは。いと淺はかなり。と呟きて。おもはず向上る出居の柱に。一封の書翰を貼て。書おきの事と寫しつ。こは訝しとひとりごち。身を起して引剝し。封押切て始終を。讀も果ず仰天し。惜むべし萑戸は。藥の價に身を賣て。鎌倉に赴くよ。といふ聲のいと高きに。泣沈たる刀自も。頭を擡。耳を側て。正忠そは何とかいふ。萑戸は主君の爲に身を賣て。東地へ赴くとて。書遺したるものありと歟。あな痛し。豫てより。夫婦談合せし事ならば。我身にも聞えしらし。告別して出行ざる。忠義に捨る身なりせば。それをわりなく留はせじ。老ては事に僻めりとて。わが子も婦もかくまでに。隔るならめ。と怨ずれば。正忠いとゞ本意なくて。こは物體なし。なでう母御をあしくおもひて。匿たるにて候べき。しらし給ふ如く。八重垣の方のながき病著に。貯祿竭て藥を進らするよすがもなく。わが妻にも乳はあ

れど。それも稚君は飲給はず。所詮乳人に身を賣て。些の金を調ばや。と葎戸がいふにまかして。夫婦しのび〳〵に給事すべき媒介をかたらひしが。八重垣の方はさらなり。はじめよりわが母に。この件の事を告ざるは。しばしが程なりとも。物をおもはし奉らじとて。示しあはせし夫婦が誠も。みな化となりて候ひし。と聞えしらすれば。母親は袖もて見えぬ目を拭ひ。人を恨むは老の愚痴。婦が忠義もいたづらに。その身價は調ひながら。今般の益にもたゝざりし。と告もやりなば葎戸は。悔しくもあらん歎きもせん。耳は疎くとその遺書の。聞まほしきに讀み給ひね。とくとく。といそがされ。又卷かへす水莖の。迹も涙に見えわかねど。正忠聲を高やかに。

心あわたゞしけれど。一筆遺し進らし侍り。さても兎口婆々とやらん。只今參つる事。鎌倉武士の威權あるが。この曉には。故郷へとて旅だつに。乳母を將て下らんとて。それが家隷なりける男を鄕導して。直に談合せよとぞいふなる。とにもかくにも。御身の歸り給ふをまちて。事を定んとするに。束の間も許さず。もしそのいふにまかし侍らずば。忽地事の破となりなん。けふにしあらず共一トたびは。別れ奉りなんものを。慈に見もし見られもし侍らば。いとゞ名殘のをしかりなん。老くだち給ふ母御の事。なほいたけなき千江松が事。胸くるしければ審にはまうさず。生れ出てより以來。わらはが懐ならでは睡らざりし。夜寒き今宵は。いかにあかしやすらん。健に見えても。あしき虻あり。と醫師のいひつる事を忘れ給はで。よろづのたうべものなんどに。心して勦り給へかし。灸は毎月に灼侍りつるに。今より後は怠りがちにぞあるべき。頃は神無月なれど。彼はなほ給ぎぬ一ツに侍り。綿入たるものを。綴りあはして被せんこゝろがまへに。さゝやかなる裂どもを搔あつめて。戸張せしまゝに侍り。母のなき子と憐て。もし縫刺て得させんといふ人もあらば。ともかくもして被せ給へ。野干玉の夜の鶴。子を思ふ苦しさは。大堰川よりもなほ深く。夫に別るゝ悲しさは。嵯峨野のおくの鹿よりも。なほやるせなく侍れど。何事も忠義に思ひかへて侍るかし。さて身價は十枚と定めて。殘りなく受得て侍れば。

千江松が腰に着たる。守袋に秘おき侍り。と讀くだすに。刀自はいよ〳〵耳をさし寄し。あなおぼつかな。今一遍その條を讀かへし給へといへば。正忠かさねて。

身價は十枚と定めて。殘りなく受得て侍れば。千江松が腰に着たる。守袋に秘おき侍り。これをもて八重垣のおん方に藥を進らし。もし餘あらば。稚君には。日來ほしがらせ給ふ鳩の車。母御には。久しき願にておはする。黒谷の血脈を。乞得て進らせ給へかし。遠く東路へ赴きては。天とぶ雁の翅ならで。信せんことはかりがたし。と思へば。八百日ゆく。濱の眞砂。限りなくも物くるほしくて。筆のはこびもおぼつかなきまでに。かくなん。

と讀果れば。刀自は頻りにはふり落る。涙とともに咳入りて。噫と叫びつゝ轉輾べば。正忠慌て扶け起し。心持はいかにおはする。と問ども刀自は應せず。とり携るやうにして。搔繰ながら正忠が。刀の鞆をしかと拿。閃りと拔てわれとわが。吭へぐさと突たつる。を灸所は少し外れたれば。大事の深手に濆る鮮血は泉の涌が如し。正忠は思ひもかけず。母の自害に周章し。吐嗟と抱き留れども。とゞめかねたる今般の苦痛。見るに忍びず聲をふるはし。こは何故にか自殺し給ふ。物にや狂ひ給ふらん。淺ましや悲しや。と叫びつ呼びつ身ひとつに。思ひ亂れて介抱も。とゞかぬ孝子の哀傷に。なきくたびれて瞻居たる。鈴稚丸千江松も。この景迹に駭きまどひ。あなと叫びて正忠が。左右の袂に携着。刀自は絶なんとする息の下に。やよ正忠。老耄て物に狂ひ。自害すとな思ひ給ひぞ。千江松が衣服の紐に括り着たる守袋に。葎戸が身價の。ありともしらず。河原へもて出。裳の汚を浣はんとて。推流されし十枚の金は婦が忠義も水の泡。あはれはかなき後室の。末期の益にたゝず共。むじんに捐てはわが子と婦に。ふたゝび向べき面なさに。刀に伏して稚君の介抱も後易く。わが子に忠義を盡させん。と思へばこそかくはなれ。されば葎戸がをらず

なりて。君もその子も稚きに。男の手して養育し。母さへ絆となるならば。曾子とやらんが孝ありとも。諸葛とやらんが忠ありとも。兩ながらよくせんや。凡いきとし活る物。命惜ざるはあらめざれど。長生すれば恥多し。といにしへ人のいひけんも。今わがうへに思ひしる。前世の惡業にや。死たうても得死れず。正忠夫婦が患難も。わが身なかりせばかくはあらじ。只速に迎とり。給はれかしと三年が程。讀奉りし彌陀經の。功德なければ後の世も。思ひやられて悲しけれ。とかき口說言の葉も。常なき風に誘引れて。絕なんとする玉の緒を。繫かねて正忠は。數回歎息し。君家の艱に身も瘦て。思ふに任せぬ母の事。等閑なりし反哺の孝。たのむは死出の山烏。熊野の牛王は汚すとも。主親の爲とのみ。誓ひし事もいたづらに。老少無常迅速の。理のみは僞の。なき世なりけり神無月。いとゞしぐれてわが袖の。朽ぞまさる。とうち歎ば。刀自は苦しき息を吻き。稚君は何所に坐す。孫は何所と呼びかけて。見まくほしげに搔探れど。見るもよしなき盲目の。たどりかねつゝ闇きよりくらきに歸る常世の旅。永き別も過去未來。と分つ袂に絆切れて。撲地と輾べばもろともに。よゝと泣稚兒を。正忠左右に引よして。六すぢの涙四ツの袖と。ともに五臟を絞けり。且くして目を押拭ひ稚君も千江松も。わが身と共にひとつ日に。三人の母に捨らるゝ。生別死別とかはれども。かはらぬ物は恩愛のみ。逝にし人の迷ひ給はん。われも迷へり是はさて。いかなる過世の惡報にや。忠義の爲に葹戸が煎詰たる身價は。延年不死の良藥とも。ならで流轉の海に入る。ゆくへも絕てしら浪は。よすれど歸る時しなき。母の自殺もこれゆゑと。思へば金はわが爲に。讐敵にてありけり。と悔の八千たび。百千たび。身の憂かぎりかき口說。いとゞ不覺の歎きなり。かくて正忠は。志を勵して。母の脫捨たる紙衣をとつて。千江松にうち被せ。鈴稚丸を勦り慰め。屛風引めぐらして。八重垣の方と刀自が亡骸を置し。さて近隣里人をかたらひて。その夜二ツの棺を送り。心ばかりなる追薦の佛事をいとなみて。初七日は過しつ。さらぬだに慰むかたもなき宿に。幼き主從は。母を慕ひて泣くらし。泣あかす程に。正忠いよゝせんすべなく。家をば人に售與て。些の路銀をとゝの

へ。鈴稚丸を懷にし。千江松が手を引て。東路へ旅だちにけり。そのこゝろ。葹戸が往方もしるべく。光實の在所を索て。緣由を告。是彼に談合せば。稚君を養育たつきなからずやは。と俄頃に思ひたちけれど。洛を出ていく日もあらぬに。鈴稚の咽喉に物出來て。飯粒も肚裏に納らず。乳房ならでは。とおもへど。貰ふべきよすがもなくて。日日によわりゆくに胸くるしく。藥餌に路銀も遣ひ失ひしかば。いよゝ救ふべき策もなく。いと口をしと思へども。千江松に乞兒さして。ながき冬の夜をあかしかねつゝ。山鳥の尾張路を過り。武士の矢矧の橋は渡れども。渡るにかたき世を潛びて。三河に隣る遠江の。荒磯に狎し友千鳥。なく聲細る鈴稚は。たのみすくなく見えにけり。寔に是苦中の苦。正忠が孤忠。更に比なかるべし。されば子を視ること親にしかず。臣を知ること君にあり。當初光隆。金の猫をもて。彼を購たる。亦うべならずや。

第十五套

天龍川の上に忠臣節婦に逢
富田の旅館に重忠竹川を賞

葹戸は果敢なくも。十枚の金に身を賣て。彼武夫に誘引れ。轎に扛乘せられて。ゆきとゆく程に。堀川のほとりなる。衡門の內に到りつ。こゝなん重忠の宿所にて。件の武夫は。家隷榛澤六郎なりけり。とは後にこれをしれり。このとき重忠の一子重稚は。年僅に三ツなるに。乳母なるもの俄頃に病臥し。剩鎌倉より御敎書到來して。重忠速に下向致すべきよしを命ぜらる。よつて榛澤六郎は。兎口婆々を呼びて緣由を告。はやく乳母を將て參らば。辛苦錢は乞に任すべし。といふに。兎口婆々そのこゝろを得て。艇て葹戸を汲引す。しかるにその日。重忠の內室嫩子は。洛のなごりに。淸凉寺へ參詣せしかば。途にてそのことを聞。渡月橋の邊にて。竊に乳母に參るといふ女を見るに。いと嬖くしけれど。由緖あるものゝ妻なるべく見ゆるに。彼ならば重稚に册けおくとも。よろしかりなんとて。直に榛澤に仰て。葹戸を召養さしたるなり。されば。重忠都に上りしこと。義高追討の爲なれば。敵に聞えんことを厭ひ

て。世に披露せざりけり。こゝをもて榛澤は。葹戸に主君を告名らず。さて堀川へ將て來りて。まづ彼のをうなに浴さし。髪を梳らし。新しき衣服一襲を與て。綺羅やかに裝はし。この夕より。重稚の乳母にまゐらせたり。元來葹戸は。心ざま怜悧。信ある女なれば。重稚はやく馴親み。嫩子もいと愛たきものにおぼえて。舊の乳母にも勝れりとす。憐むべし。葹戸は。八重垣の方身まかり給ひて。そが身價は良藥に。換るよしなく姑も。自殺して失ぬることは。夢だもしらざりし。その曉に旅だちて。踏もならはぬ東地へ。主の供してくだり月に。洛の山を見かへれば。嵯峨野のかたへゆく雁も。對にはなれてわれぞ泣。涙氷りて朝霜に。稚兒の寢覺を慰めつゝ。行轎に日數經て。路なほ遠つ江なる。天龍川のほとりまで來にけり。折しも十一月の上浣にて。川々は涸るゝ頃なるに。思ひの外兩三日。雨降水高ければとて。左右なく船を出さず。重忠ぜひなく富田に駕を駐て。天龍川のあくを待ぬ。浩所に。重稚俄頃に發熱して。次の日より痘瘡の氣色見えしかば。重忠は心ならずも。且く保養せんとて。なほ富田に逗留せし程に。痘瘡の日子もやうやくにたちにけり。さらば翌あさてのころは。必川を渡さんとて。從者等にもその准備をせよといふに。おの〳〵旅宿の徒然を。懶思ふなれば。歡ぶ事大かたならず。大人すらかぐの如し。況て重稚は。ながき旅寢に倦て。彼所へゆかん。其所へ伴へとてむづかるに。葹戸も嫌しかねたり。嫩子は。しば〳〵重稚の泣聲するを聞て。さてこそわが夫の。いぶせくおぼすらめ。婢ども。ゆきて慰よ。といふに悉皆こゝろ得果て。重稚のほとりへ參りつ。しばしこそありけれ。いひ慰ることなどもおなじ容なれば。ながく稚きを樂するに足らで。むづかる事ます〳〵甚し。折しもひとりの婢。慌しく走り來ていふやう目今外面にをかしき物たべの參り侍り。その打扮親子かとおぼしくて。編笠ふかくしたる男。行囊を脊負ふて。その上に。年三ツか四ツばかりなる。稚兒をかき乘し。又おなじ程なる稚子に。烏帽子めきたる頭巾を被せ。鼓を打て舞し侍るに。庭門に呼入れて。見そなはさばいと興ありなん。といふを。葹戸聞もあへず。そのものを呼び入れ給へといへば。みな群立て走り出。庭の折戸

を押開き。招き寄すれば葹戸は。羞稚をかき抱き。風あてさせじと細やかに。あくる障子のかみならぬ身は。只假初の闕窺に。多の柞の一樹たつ。霜の柱を踏わきて。父が鼓に朗詠も。訛言なれど手ぶりよく。

大底往時心總苦。就中腸斷是秋天。

と白香山は口順ど。秋よりもなほ堪がたき。北山下風烈きに。霏々と降雪は。鷺毛に似たり稚兒の。揷頭扇の手も飜み。閃りと飛て散亂す。痛しきかな鈴稚は。驛路に病て竹川の。脊になるゝ患難に。正忠は路費も竭て。千江松に舞舞さし。露命を繫ぐたつきとは。定なき世のならひにて。ならはぬ旅も東路や。驛家に宿札打たりける。秩父二郎重忠が旅館の庭に呼び入れられ。うたひつ舞つなか〳〵に。彼此人は慰れど。慰めかねし親と子が。心ぞおもひやられたる。葹戸は障子の隙より。見れば怪や物たべの。稚兒はわが子に似たり。こは訝しと思ふにぞ。胸まづ轟くを押鎭めて。と見かう見れば千江松なり。笠にて面をかくせども。紛ふべくもあらぬ。夫の脊に。負れ給ひし鈴稚はいといたう憔悴。見しには變る面影は。故こそあらめ問まほし。わが身のこゝにある事を。しらでや來つる。と悶つゝ。心の中も舞の手も。ともに亂れをうち囃す。皷の調いとせめて。奏果れば婢等は。笑壺に入りて散動たち。世わたりにはあれど。雪天に寒きも厭はで。稚きものゝよくこそしつれ。物とらせんといひかけて。皆裡に入ければ。葹戸は押拭ふ。涙見せじと微笑て。稚兒が舞の手に慰られ。重稚丸は目睡給ひぬ。潛に。臥房へ入奉らんに。驚し給ふな。といふに衆皆點頭て。間毎の襖開閣に。心してなほ奥の間へ。入相告る鐘の聲。諸行無常を。わがうへと。いざしら雪の降はえて。頤あはぬ風を寒み。庭に立在千江松は。瀟々と泣て父を見かへり。爹さまいたう寒く侍り。しろきものゝ降るになぞ。いつまでかこゝに居給ふ。とくゆき給へと引袖を。わが子の頭にうち被て。疲勞もせめ。寒くもあらん。只今御達の物給はるに。しばし待かし。といひ諭せば。脊にも又ひとり。鈴稚丸は雪より先へ。消るがごとき泣聲に。ゆり賺せどもをやみなき。吹雪は襟に吹入れて。鳥肌となる主從親子が。塒ほしげに。待わぶる。雀色

時過がてに。暮なんとすれどなほ明き。庭白妙になりにけり。浩所に葎戸は。菓子積たる折敷を携へ。さらりと開く障子の音に正忠おもはずうち仰ぐ。笠の内より面をあはし。こは吾妹子。ともいひかねて。鬘色の蔭に躱ひつ。さすがに羞る襤褸の袖に。拂へど解ぬ六ツの花。四ツになる子は眼はやく。あな母御よ。と走りより。のぼらんとすれば緣頰に。つかへる胸と胸くるしき。葎戸は外々しく。さてもうたてき稚兒や。いかに物のほしきとて。わらはを母とはなめげ也。鎌倉殿のおんおぼえめでたく。北條和田にも劣り給はぬ。重忠ぬしの嫡男。重稚丸の乳子なるに。その子に乞食さすべきか。よしなき事をいふものかな。と叱り退るは傍輩に。聞せじと思ふ親の慈悲。とは知らずして千江松は。伸上りつゝ引留る。衣の褄に袞と薫る。異奇南もたえて聞わけぬ。いはけなければ有理と。思ふに母は心よわくて。引れし隨に揮も放さず。やよ幼きものゝよく聞けかし。舞の褒美に賜する。この果子はほしからずや。花もあり紅葉もあり。いと美しきにたうべよ。といひつゝ折敷をさしつくれば。千江松は頭をうち揮。果子も餅も欲うは侍らず。母御に乳を飲してたべ。といふ聲高し。と葎戸が。心を。おくに人や聞く。洩さじとすれど袖にさへ。漏るゝはをのが涙なり。さればとて懋に。心よわくてはと思ひかへし。涙紛らす聲をふり立。憐愍かくれば馴々しく。物いひざまのけにくさよ。汚垢くその手もて。寄な着そ。と引拂へば。拳放れて仰さまに。撲地と轉びて。泣聲もたゝまくほしき雪の松。半ばは雪に埋れたり。葎戸吐嗟と走り下りて。扶起し抱寄し。吹溫むる手の甲は。熟柿に。似たる霜瘡に。剪らぬ爪さへ幼稚て。劬勞するよ。と搔揚る。産毛のまゝの項髮も。むすばぬ夢の心持して。われを忘る恩愛に。思ひ迫りて泣沈む。その一聲ぞ誠なる。正忠も忍びかねて。編笠脫捨つゝ。垣の蔭をたち出て。葎戸にいふやう。はからざる再會。歡ぶに堪たれど。身の宴しきを省れば。迭の恥なり。名告あはんも面ぶせなれど。ここにて遇は若君の命竭させ給はぬなるべし。元來夫婦離別の事は。主君の爲なれば歎くに足らねど。そなたの遺せし身價は。箇樣々々の事によつて。わが母悞て大堰川へとり落し。剩八重垣の方は。その日墓なくなり給ひ。母も又

自殺してうせ給へり。首尾は如此々々なりと。緯審に說しらし。又いふやう。かゝりしかばわが身ひとつにて。稚君と千江松を養育ては。嵯峨野に住も果がたく。そなたの行方。光實のおん在所をしらんとて。漫に彼地を旅だちたれど。生得質弱き鈴稚君。乳ばなれにて疳の虫出。道路病わづらひ給ふ程に。さらぬだに貯薄き。路銀も既に遣果し。わが兒に乞食さしながら。日に歩み夜に宿り。こゝまでは來つれども。稚君は口中に物出來給ふから。飯を押潰しなどして進らすれど。それさへ咳入りて受給はず。乳汁あらばと思へども。こは貰ふべきよすがもなし。八重垣の方世にゐまそかりし日は。そなたの乳さへ飲給はざりし稚君も。餓ては人をえらみ給はず。往來の婦を見かへりて。その懷へ指し給ふ。飢渴の責に介抱の術も竭て死を待のみ。夥の金に身を賣らし。人の乳母となしぬれば。わがものならぬ乳なりとも。今の危窮は忍がたし。義理を捐て義理に稱ふ。夫婦が信は神ぞしる。とく〳〵その乳を稚君に。進らせ給へ。と一五一十。緯をわきてぞかきロ說。葎戸は聞事毎に。思ひかけざる憂數の。丈夫の。吻がたりに。いとゞ胸のみ塞りつゝ。手の放たれぬ痞にて。涙も拭ひあへざりしが。やうやく頭を擡。わがうへには月日も照らし給はず。守袋に遺し置く。金さへ夫婦が仇となりて。母御に自害さしましたる。身の罪こそいとふかけれ。男の手して幼なき。主君とその子を介抱し。憂旅をし給へば。百折千磨の艱難を。さこそと推量して侍り。今の主君重忠ぬしは。理非明斷の良將にて。善を擧げ惡を退け。慈悲ふかくおはすれば。折をうかゞひて名告しらし。古主と夫のうへを告て。賴聞えなば。猶聞の家。再興の。便宜もこゝにありなん。と思ひながら。給事していく日もあらねば。思ふのみにていひも出さず。宣ふ如く。十枚の金にこの乳を賣ては。わが子なりとも。私には飲しがたければ。生死の際におはします。鈴稚君には何事も。思ひかゆる恩義はなし。其を憎しとて鞭れ。罪なはるゝとも厭ふべきかは。いざ葎戸が懷にて溫て進らしなん。あな痛ましや。と鈴稚を。やをら抱とり。襟かきわき。乳房を口に銜すれば。千江松はこれを見て。狷しと母に携着。なとて松には飲し給はぬ。わがものなるに。とむづかりて。抱れ給ふ鈴稚の。附

紐拿て引退るを。そはせぬものぞ。といひ諭せど。善惡もしらぬ稚兒は。なほ緣りて泣叫ぶ。左も右もはる乳を。一ツはわきてわが子にも。飲さるゝ事ならば。この煩惱はせぬぞかし。聞わきて彼果子を。たうべよ。と賺せども。只いな〳〵と蹉跎し。搔遣れば又携着を。正忠あらやかに抱き退け。こは嗚呼なる愚者かな。汝稚く共。侍の子なり。君臣上下の禮儀をしらずや。常言に。一寸の虫にも。なほ五分の魂ありといへり。わがまゝすればとてさすべき歟。といきまきて。威の拳ふり揚れば。なほ聲高く泣叫ぶ。親はこれにも心おかれて。しば〳〵見かへる障子の內より。葎戸々々と呼たつるは。傍輩の聲音なり。をいとはいへど立かねて。心せく程鈴稚は。乳のひゞきに頃日の。餓を忘れて餘念なく。絞り寄して飲給へば。千江松はいよゝ悶て。走り寄つゝ鈴稚の襟上颯で仰さまに。引かへせば。鈴稚は。乳房放てわつと泣。これや冥土の阿鼻叫喚。餓鬼道の苦みも。かくや。とばかり正忠も。とゞめかねてせんすべなく。わが子を捉て膝に引布。刀引拔胸前を。ぐさとつらぬく一トゑぐり。叫苦と魂銷稚兒より。母はわが身を刺るるおもひ。庭の白雪忽地に。血鮮に染て時ならず。散布く紅葉に彷彿たり。折しもあれ障子の內にけはひして。猫間の忠臣。竹川因幡介正忠。怨敵義高が妖鼠の術を破るべき。奇藥を投れるこそ神妙なれ。秩父重忠對面せん。と呼はれば。一度に秉銀燭の障子にうつりて白晝の如し。葎戸あはや。と立まくせしが。思ひ定めて走りも退ず。正忠はなほわろびれたる氣色なく。徐に刀を拭ひ納め。緣頰にすゝみ寄りて。前面を佶と瞻望れば。裡より障子をさつと開かし。二郎重忠野袴に行縢して。黃金作の太刀を佩。威風凜然として。端ちかく立出ばれ。右に嬢子ありて。重稚を舊の乳母に抱し。左に榛澤六郎ありて。手に銀の壺と稚兒の蔽衣をもてり。そのとき重忠は正忠に對ていふやう。姓名豫て聞及べど。おもふに勝る夫婦が忠信。絆の顚末は。彼所にありて審に聞り。しかるに正忠。鯁忠にして一子を殺せし事。人情にあらずといふ。後世の議論もあるべけれど。こは已むことを得ざるにこそ。易牙が桓公に佞媚して。其子の肉を食しめたると。年を同じうして語るべからず。嗚呼この夫にしてこの妻あり。されば千江松があへな

くも。命を隕せし事。いと憐べく惜むべしといへども。時に當ては。亦是家邦の忠死なり。われ近曾洛にあつて。義高退治の計略をめぐらし。江家の博士に就て。密に彼術を破る奇方をしれり。その方七歳未滿なる男子の痘瘡の痂を取り。又七歳未滿の男子。その心の臟の血をとつてこれに合し。猫間の重寶たる。金の猫の。眼を塗て。彼に進むれば。その術忽地破れて。再び行ふ事を得ず。かくはあれ。いと得がたき藥劑なれば。遂に望を絕たるに。時なるかな。わが子重稚。近曾痘瘡を患て。將に愈なんとす。こゝにやうやくその一藥を得たれども。生ながら幼兒の心の臟とらん事。不仁これより甚しきはなし。絕てこの奇藥。調ひがたしと思ひつるに。思ひきや。正忠今その子を殺して。破鼠の良藥成就せんとは。且金猫は。曩に爲久が。鎌倉殿に獻りしを。光實に返し與給へり。抑重忠不意も。ふかく猫間光實に賴れて。わが家に養ふこと久し。且重忠が竊に洛に上りしも。今又俄頃に鎌倉へ立歸るも。義高退治の事に預るをもつてなり。さるにても。年寒して松柏の操を知り。家衰て忠臣の志を守とは。御邊夫婦が事ぞかし。彼重稚が痘瘡の痂は。藏めてその壺にあり。それ〳〵といふに心を得て。榛澤六郎すゝみ寄。件の壺をさし出せば。正忠これを取て。莞然とうち咲み。はからさりき。光實ぬしは。重忠どのゝ庇を受て。鎌倉に在し。葎戸又その家に給事いたさんとは。設千江松が心血をもて。義高が幻術を破らば。孩兒が忠義は父に勝れり。歡びさふらへ葎戸。と勇む良人に勵され。泣じと袖を嚼締る。妻の歎は有理と。おもう心を鬼にして。正忠はかひ〳〵しく。袖搔あげて千江松が。疵口より手をさし入れ。絞り入たる壺の中に。ありと聞なる天地の雨にはあらぬ血の涙。かゝれとてしも產ざりし。親の手自子を殺し。その血を取て忠臣と。稱せらるゝ身の薄命。これも過世の惡業歟。と夫婦目と目を見あはして。緣頰に置く壺を。榛澤六郎受捧て進らすれば。重忠夥數回押戴き。小をもつて大に易ふ。千江松が非命の死は。猫間の家再興の礎なり。義高を退治せんこと。今は實に難からず。その績を賞せん爲に。葎戸は今日より。身の暇をとらする也。鈴稚の乳母となりて。夫婦忠義を竭されよ。と仁あり義ある暇の賜。葎戸聞て

膝をすゝめ。仰歡ばしく侍れども。參り仕ていく程も侍らず。身價を返し進らする。よすがなきをいかにせん。と推辭けしきに嫩子は。向よりたもちかねたりし。涙をやゝ拭ひをさめ。いな〳〵その事は心易かれ。いぬる日わが身。清涼寺の賽に。具したる下部が大堰のわたりにて。拾ひたる物ありと告しかば。堀川へ歸りて後。これを見ればゝ稚兒の衣にして。紐に着たる守袋に十枚の金あり。ぬしあらば返せかし。といひしらして。榛澤六郎に預おきたりしが。向に夫婦の物語にて。そは葹戸が身價なりと猜したり。彼金既にわが手にあれば。露ばかりも施したる恩義はあらず。しかれば頃日重稚を。養育したる報には。千江松が像見の衣に。添てとらする十枚の金。迹懇に弔てよ。と說示ばせ。榛澤癈て葹戸に。返す給に亡骸を。裏にあまる袖の露。守袋もけふは亦佛をたのむ母親の。その身價は六道錢。四ツになる子をひとり遣る。死出の山吹色見えて。移ればかはる死貌も。是見果か。と逆緣ながら。親の回向も阿彌陀佛。導き給へと念じけり。濕りがちなる夜の雪のふかき惑ひを解んとて。重忠はつと身を起し。破邪の良藥手に入りたれば。鎌倉へ走くだり。なほ光實と事を議りて。義高を討とるべし。正忠夫婦は鈴稚丸を介抱して。我從者に打雜り。潛て彼地へ來たられよ。心得たりや。と勵せば。正忠は阿と應つゝ。葹戸に注目し。禁むる涙の玉の屑。雪にも。瘠る庭の梅に。春を契るや。開運の。天龍川に時を得し實に不思議の陽報なり。

評に云。この卷殊に忠臣節婦義士孝子のうへを述て。人情を謁せり。但動すれば。文辭戲曲に類する事多し。こゝをもてその語路野なりといへども。おのづから雅致。讀者をして倦ざらしむ。且貧家の身賣。花街に趣ずして乳母とす。奇にしてます〳〵妙なり。

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷之七後編中册　終

賴豪阿闍梨恠鼠傳　卷の八〔後編下册〕

東都　曲亭主人著述
門人　魁蕾　癡批評

第十六套

丐兒月下に各志をいふ
榛澤營中に潛に客を迎ふ

文治三年の二月も。まだ三日四日といふころ。殘雪も解そめて。梅ほろぶる野ずゑの藪に。白きはすがれ紅は。二三輪にして開もそろはず。山は遠く霞て。日の沒こと遲く。水は近く流れて。柳まづ暮なんとす。林に歸る鳥は。月を戴きて友を呼び。北へとてゆく雁は。霞の網に罹るかと阽ぶまる。日沒果ては。寒さ冬よりも堪がたく。風はなほ地を吹て。馬蹄の迹ふたゝび氷るなるべし。相摸國に。諸越と呼ぶ原は。ふるき名所にて。歌どもあまたあり。ここにをる野臥りの乞兒等は。晝は彼此人の側に携て錢を乞。あるは金門さし覗きて。飯のあまれるを乞ひ。夜は樹の蔭。草のうへを臥所として。いかなる夢をか結ぶ。主ある犬には劣りたる身も。命はなほ惜きものにて。荒薦に。おく霜を防ども。孫晨が高き志には似ず。肱を枕て枕とはすれど。顏回が樂みはしらず。飯桶といふものに。飯の饐して餲せる。魚の餒て肉の破れたる。何くれとなく受納め。飽ときは懈たり。餓れば求食。彼寒苦といふ鳥の。夜も明ば巢を造らんと鳴ものから。明ればはや忘るゝに似たり。されば片岡山の旅人。臥見野の老翁がたぐひ。その後は聞えず。世に棄られて。羞をしもしらぬものどもなれば。かくても一生をおくり果べうおもふにや。いと愚なり。ここに少許引入たる小松の間に。あやしげなる草舍あり。竹をもて柱とし。薦を垂て壁として。僅にひとりを容つべ

き。末黑の萩を折敷て。臥猪の床とも見ゆるかな。さは蝸の住家得たり顏なるぞ。この徒が中にては。頭だちたるものなるべし。甲夜の程は。おの〳〵野火を燒て。餘寒を凌ぎ。圓居して。來しかたを問慰め。彼所の老嫗が物をしみなる。其所の主人がいかめしげなる。人のうへわがうへ。心のゆく隨なる物がたりして。果は魚屋の門に引捨たる。鰥目黑といふ魚の。頭つき合したるがごとく。うち臥したる蕭の隙を。漏る月影はいぶせくもあらぬにや。鼾の聲は時ならぬ。蟇の鳴音に似たるもをかし。浩所に。桐の葉の紋着たる提灯を。夥の奴隸に乘さし。野袴に長き兩刀を帶たる武士。南のかたより出來れり。この人は是別人にあらず。重忠が郎黨。榛澤六郎なり。當下榛澤は。臥たる乞兒を。と見かう見て。そと注目すれば。從者等。主の意を得て。矢庭に乞兒を引起し。提灯をさし寄せて。出よ出よ。といそがせば。乞兒等は大に驚き。こは何事ぞ。といふ聲も。寢惚て夢の心持せり。榛澤六郎微笑て。乞兒等にいふやう。汝等ふかくな駭き懼れそ。秩父どの〻仰を稟。潛に問ことありて來れり。原是私の趣意ならねば。等閑におもふべからず。そも汝等が名は。何とかいふ。亦何によつて。野臥とはなりたる。審に告しらせよ。時宜によりて。不意、幸あるべきぞ。と說示せば。衆皆畏みてついゐたり。時にひとりの乞兒。年紀は廿四五なるが。土埃に面ぐろみして。海松のごとくかき垂たる破衣に。藁の索を帶とし。頤の下。胸の上に瘡毒ふき出て。尖胸國の夷めきたるが。おそる〳〵這出てまうすやう。僕は鼻聲の布賀八と呼れて。元來鎌倉米町の商人。何がしが愛子なり。一子なれば父母の寵愛世に勝れ。鳩の車。竹の馬。よろづの弄物なんど。いへばさらなり。仙袂。團子。砂糖餅。一聲泣ときは前に列り。二聲泣ば四隣を騷がし。いふこと毎に成らざるはなし。かく甘やかに養育れて。米は飯櫃より生ものとおもひ。錢は錢箭より生ものと思ひ。四恩のおほけなきをしらず。三綱の鴻なるをもしらず。學ばすれども學ず。讀すれども讀ず。商人の家に生れて。賣買の事に疎く。おのが儘に生育程に。忠孝の道を踏たがへて。大磯がよひに。親の進退を篩果し。親族の强意見も。馬の耳に吹く風と聞ながし。色と酒とに身をうち崩すを。なほ憎し

とも思はぬにや。二親ながらゆく末を。思ひくして身も細り。墓なくなりては。一周忌も間はぬ間に。はや生れたる鄕に得住ずなりて。家さへ人に賣。うかれ出たる不孝の天罰。忽地報いし難病は。足ることしらぬ樽酒の。むかしの榮花は夢と覺て。正銘打たる薦被り。貰ふ陶の椹粔汁も。身はなきものと思へども。物を食ねば脾だゆくも。あるにかいなき嬾を。憐み給へ。とかき口說。涙に滂を啜りまぜて。いと長やかに物がたれば。榛澤聞て嘆息し。子を養ひて敎ざるは。これ親の悞なり。敎てこれを學ざるは。その身を愛せざるなり。と司馬溫公のいへるぞうべなる。世の人多くは愛に溺れ。子に敎へずして孝を求む。これ愛するに似て愛するにあらず。實はその子を棄るなり。しかはあれ。父子の道は天性なり。縱その父。父たらずとも。子はもて子たらずばあらじ。布賀八が不孝の罪。かくこそあるべけれ。といひ懲らす。その次なるは法師なり。剃てふたゝび伸たる頭の毛。枝栗に似て班なる。髯は野老に異ならず。こは色中の餓鬼大將。梵妻ぐるひ。般若湯に。師父の遺物も。檀那の布施も。遣果せし伽藍堂。更に五戒はたもたずして。只一蓋の傘に三界无安と悟を開きし。上守の鄕隨得寺の。角隣坊とぞ名告ける。これらを宗徒の草野物として。手長の愚念太。色狂人の拔太郎。空拜の四九次郎。股火の阿太郎。橋の本の川太郎。掃留捜の犬總太。虱拾の爪之介と。おの〳〵名告る來しかたの懺悔にいとゞ小夜深たり。榛澤は丐兒等が。長物語をつく〴〵聞て。奴隸にもたせし提灯の。火光にそれか是かとて。見れども索るその人に。似たるは絕てなかりしかば。呵々とうち笑ひ。揃ひも揃ひし瘦犬ども。汝等に所用はなし。活るかひなき身を唧ば。近曾求し薪刄の刀。試して見ん。と云もあへず。琫四五寸拔かくれば。呵呀と叫びてもろともに。掌を摺。寒たる足を曳。崩立たる周章は。八聲の鷄に驚きて。夜行の百鬼忽地に。銷て迹なくなるごとく。右往左往に逃失たり。なほ臥たるもあらんかとて。榛澤は彼是を見かへりつゝ。樹がくれたる草舍に。佶と目を著て。ひとりの奴隸を招きよし。密語ばこゝろを得て。次第に耳をとりかはし。點頭あふて竊ひ寄れば。杪を涉る鐘の音に。月沒果て。松風の。調も春の聲ながら。寒は更に冴まさる。草